

レ・ミゼラブル

LES MISERABLES

第二部 コゼット

青空文庫

第一編 ワーテルロー

一 ニヴェルから来る道にあるもの

一八六一年五月のある麗しい朝、一人の旅人、すなわちこの物語の著者は、ニヴェルからやってきてラ・ユルプの方へ向かつていた。彼は徒歩で、両側に並み木の並んでる石畳の広い街道を進んでいった。街道は立ち並んで大波のようになってる丘の上を曲がりくねって、あるいは高くあるいは低く続いていた。彼はもうリロアおよびボア・センニール・イザクを通り過ぎていた。西の方に、ブレーヌ・ラルーの花びんを逆さにしたような石盤^{スレート}屋根の鐘楼をながめた。ある丘の上の森を過ぎ、それから、ある別れ道の角に、旧関門第四号としてある虫の食った標柱の立つてゐる側にある、一軒の飲食店を通り過ぎた。その飲食店の正面には、「万人歓迎、素人コーヒー店、エシャボー」としてあつ

た。

その飲食店から約八分の一里ほどきたころ、彼はある小さな谷間の底に達した。街道の土堤どての中に作られたアーチの下を、一条の水が流れていた。道の一方の谷間には一面に濃緑のまばらな木立ちがあったが、道の他方では遠く牧場の方までその木立ちがひろがって、ずっとブレーヌ・ラルーの方まで不規則に延びている様はいかにもみごとだった。

そこに路傍の右手に一軒の宿屋があった。入り口には四輪の荷車があり、葎ホップの茎の大きな束や、鋤すきや、生籬いけがきのそばに積んである乾草など、そして四角な穴には石灰がけむっており、藁戸わらどの古い納屋のそばにははしが置いてあった。一人の若い娘が畑で草を取っていた。たぶんケルメス祭の野外の見世物か何かなのであろうが、大きな黄色い広告の旗がその畑の中に風にひるがえっていた。宿屋の角の所に、一群のあひるの泳いでいる池のそばに、よく石の敷いてない小道くさむらが叢くさむらの中に走っていた。旅人はその小道にはいった。

たがいちがいの煉瓦れんがの急な切阿きりずまが上についてる十五世紀式の壁に沿って百歩ばかりも行くと、彼は大きな弓形の石門の前に出た。その門は厳おびかなルイ十四世式の建築であって、直線式の拱きようき基欄干がついており、平たい二つの円形浮き彫りが両側についていた。いかめしい建物正面が門の上にそびえていた。建物正面と直角をなす一つの壁が、ほとんど門

まで接していて、そのそばに急な直角をこしらえていた。門の前の野原には三つの耙まぐわがころがっていて、その間から入り交じって種々な五月の花が咲き出ていた。門はしまっていた。その扉はこわれかかった観音開きで、さびた古い金槌かなづちがそえてあった。

太陽はうららかで、木々の枝は、風のためというよりもむしろ小鳥の巢から来るらしい静かな五月の揺らぎをしていた。一羽のりっぱな小鳥が、たぶん恋をしているのであろう、大きな木の中で夢中にさえずっていた。

門の左側の支柱の下の方の石に、冠頂石かなめいしの穴のようかなり大きい丸い穴があったので、旅人は身をかがめてそれをながめてみた。その時扉とびらが開いて一人の百姓女が出てきた。彼女は旅人を見、また彼がながめているものを認めた。

「そんな穴をあけたのはフランスの大砲の弾丸たまですよ。」と女は彼に言った。そして女はまた付けたした。

「門の上の方の釘の所にも穴がありました。あれはビスカイヤン銃の弾丸たまの穴です。ビスカイヤンは木を打ち通せなかったのです。」

「ここは何という所です。」と旅人は尋ねた。

「ウーゴモンです。」と百姓女は答えた。

旅人は立ち上がった。二、三步歩き出して、籬まがきの上から向こうをのぞきに行つた。木立ちを透かして、かなた地平線に小高い丘を認め、またその丘の上に、遠くから見ると獅子ししの形をしたある物を認めた。

彼はワートルローの戦場にきていたのである。

二 ウーゴモン

ウーゴモンこそは不吉なる場所であつた。それは障害の初まりであり、ナポレオンと称する欧州の一大伐木者がワートルローで出会つた最初の抵抗であつて、斧おのの打撃の下に現われた第一の節ふしであつた。

それは一つの城じょうざい砦ざいであつたが、今はもう一つの農家にすぎなくなっている。ウーゴモン (Hougmont) は、古代学者にとつてはむしろユゴモン (Hugomons) というのである。その邸宅は、ヴィレル修道院に第六の采地さいちを寄進したあのソムレル侯ユーゴーによつて建てられたものだつた。

旅人は戸を押し開き、玄関の古い馬車の横を通りぬけ、中庭にはいった。

その中庭で第一に彼の目についたものは、十六世紀式の門だった。すべてまわりのものはこわれ落ちてしまつて、一つの迫持らしいものをそこに止めている。記念物的なありさまは、しばしば荒廃から生まれるものである。その迫持のそばに、アンリ四世時代の様式になつた拱心石がついてるも一つの門が、壁の中に開かれていて、その向こうには果樹園の樹木が見えている。門の傍には、肥料溜、鶴嘴やシャベル、二、三の車、板石と鉄の粹滑車とのついてる古井戸、はねまわつてゐる小馬、尾を広げてゐる七面鳥、小さな鐘楼のついた礼拝堂、礼拝堂の壁にまつわつて花を開いてゐる梨の木などがある。実にこの中庭こそ、ナポレオンが占領しようと夢想してゐた所のものである。もしその一角の土地がナポレオンの占領し得る所となつてゐたならば、彼はおそらく世界を得ることができたであろう。今や数羽の鶏が嘴でほこりを散らしている。何かうなり声も聞こえる。それは齒をむき出している大きな犬で、今やイギリス軍に代わつてそこにゐるのである。

イギリス軍はそこでは実にみごとであつた。クークの率いた近衛の四個中隊は、一軍団の襲撃に対して七時間そこで持ちこたえたのである。

実測図で見るとウーゴモンは、建物や塙壁を含めて、一角を欠いた不規則な四角形を呈している。その欠けた一角の所が南門であつて、その門をねらい撃ちにできる壁でま

もられている。ウーゴモンには入り口が二つあって、一つは城の入り口をなす南門であり、も一つは農家の入り口をなす北門である。ナポレオンはウーゴモンに対して弟のゼロームをつかわした。ギーユミノ、フォア、バシユリユの三個師団はそこに殺到し、ほとんどレイユの全軍団がそこに使用されて、そして失敗した。ケレルマンの砲弾は、その勇敢な壁面に向かってほとんどうちつくされた。ボーデュアンの旅団はウーゴモンを北方より強取せんとして成らず、ソアイの旅団はその南方をわずか突入し得たのみで、それを抜くことはできなかった。

その中庭の南側には、農家が立ち並んでいる。そしてフランス軍にこわされた北門の一片が壁にかかっている。それは二本の横木に釘付けにされた四枚の板であって、その上にはなお攻撃の跡を認むることができる。

フランス軍に破られた北門は、壁から下がっていた鏡板の代わりに木片がつけられていて、中庭の奥に半ば開いている。それは、中庭の北方を囲む下は石で上は煉瓦^{れんが}の壁の中に、四角にあけられたものである。いずれの小作地^{とびら}にもあるような単純な車道門であって、粗末な板でできてゐる大きな二つの扉^{とびら}がついている。その向こうが牧場になっている。その入り口の争奪戦は猛烈なものだった。門の^{たてかまち}堅^{こんせ}框^せの上には血にまみれた手のあらゆる痕

跡^きがその後長く見えていた。ボーデュアンが戦死したのもそこであった。

戦争の嵐はなおその中庭のうちになごりをとどめ、その恐ろしい様はなおそこにありありと見え、混戦の動乱の様はなおそこに化石して残っている。あるいは生きあるいは死ぬる様が彷徨^{ほうふつ}として、昨日のことのようにも思われる。壁は揺らぎ、石は落ち、裂け目は音をたてている。穴は傷口である。傾き震えてる樹木は、逃走せんと身をもがいてるようである。

その中庭は、一八一五年には今日あるよりはもとりっぱにできていた。その後にくわされた様々な構造は、突角堡^ほや稜角^{りようかく}や凸出角^{とつ}などをなしていたものである。

イギリス軍はそこに立てこもっていた。フランス軍はそこに突入したが、ふみ止まる事ができなかったのである。礼拝堂の傍^{わき}に、ウーゴモン邸宅の唯一のなごりである城の一方の翼が、こわれかかっているというよりもむしろ腹をえぐられてるともいえるありさまで立っている。館^{やかた}は天主閣となり、礼拝堂は防舎となつた。そこで人々は互いに殄滅^{てんめつ}し合つた。フランス軍は、壁の後ろや納屋^{あなぐら}の上や窖^{くわう}の下など四方から、窓や風窓や石のすき間などを通して射撃されたので、鹿柴^{ろくさい}を持つてきて壁や敵に火を放った。霰弾^{さんだん}は火炎をもつて応戦された。

荒廃したその翼部のうちに、鉄格子のついた窓をとおして、煉瓦造りの本館のこわれた室々がのぞき見られる。イギリスの近衛兵はそれらの室に潜んでいた。螺旋形の階段は一階から屋根下まですっかり亀裂して、こわれた貝殻の内部のような観を呈している。階段は二連になっている。階段のうちに包囲されて上連に追いつめられたイギリス兵は、下連の階段を切り落としてしまった。蕁麻のうちに堆くなくなつて青い大きな板石がそのなごりである。十段ばかりはまだ壁についている。第一段の上には三又の矛の形が刻まれている。登ることのできないそれらの階段はなお承口のうちに丈夫についている。他の部分はちょうど歯のぬけた顎のようなありさまをしている。二本の古木がそこに立っている。一本は枯れてしまっている。一本は根もとに傷を受けながら、四月にまた青い芽を出す。一八一五年から再び階段の中に伸び初めたのである。

両軍は礼拝堂の中でも互いに殺戮し合った。今は再び静かになつてその内部は、異様な様を呈している。流血のあととはもはや弥撒も唱えられなくなった。けれども祭壇はなお残っている。奥の荒らい石壁によせかけた粗末な木の祭壇である。石灰乳で洗われた四つの壁、祭壇と向かい合った扉、二つの小さな弓形の窓、扉の上の大きな木製の十字架像、十字架像の上にある一束の乾草でふさいである四角な風窓、片すみの床に落ちてゐるまつた

くこわれたガラス付きの古い額縁、まずそんなありさまを礼拝堂は呈している。祭壇のそばには、十五世紀式の聖アンヌの木像が釘付けにしてある。小児イエスの頭はビスカイヤンの弾丸に飛ばされてしまった。フランス軍は一時礼拝堂を占領したが、また追ひ払われて、それに火を放った。炎はその破屋あばらやを満たし、溶炉ようろの様を呈した。扉とびらは焼け、床板は焼けた。しかし木造のキリストは焼けなかった。木像の足に火はついたが、そこでやんだ。焼け残りの黒ずんだ足が今も見えている。付近の人々の言うところによると全く奇蹟であった。首を切られた小児イエスの方は、そのキリストほど仕合わせではなかったというものである。

壁には一面に銘文がしるしてある。キリストの足の近くにはヘンクイネスという名前が読まれる。それからまた他の名前もある、リオ・マイオルのコンデ、アルマグロ（ハバナ）の侯爵および侯爵夫人。フランス人の名前もあるが、皆感嘆符のつけられているのは憤怒のしるしである。一八四九年にその壁はまた白く塗り直された。種々の国民がそこで互いに侮辱し合っていたからである。

手に斧おのをつかんでる一つの死体が拾い出されたのは、その礼拝堂の入り口においてだった。その死体は少尉ルグロであった。

礼拝堂から出てゆくと、左手に一つの井戸がある。中庭には井戸は二つある。しかしこの一方の井戸には釣瓶つるべも滑車もないのはなぜかと、人は怪しむだろう。それはもうだれも水をくむ者がいないからだ。なぜもう水をくまないのか。骸骨がいこつが中にはいっぱいはいっているからだ。

その井戸から最後に水をくんだ者は、ギーヨーム・ヴァン・キルソムという男であつた。それはウーゴモンに住んで園丁をやつていた田舎者いなかものだつた。一八一五年六月十八日に、彼の家族の者は逃げ出して森の中に隠れてしまった。

ヴィレル修道院の付近の森は、それらの散りぢりになつた不幸な人々を数日数夜かくまつた。今日でもなお、燃やされた古い木の幹などの明らかにそれと認めらるる痕跡こんせきで、叢林そうりんの奥に震えていたあわれな人々の露營の場所が察せらるる。

ギーヨーム・ヴァン・キルソムは「城の番をするため」にウーゴモンに残つて、害あなぐらの中に身を潜めていた。イギリス兵は彼を見いだした。兵士らは彼をそこから引きずり出して、剣の平打ちを食わせながら、そのおびえてる男に種々の用をさした。彼らは喉のどがかわいていた。ギーヨームは彼らに水を持つてきた。彼がその水をくんだのが、すなわちその井戸である。水を飲んだ多くの者はそこで最期を遂げた。そして多くの者に末期の水を飲まし

た井戸の方もまた、死んでしまうことになったのである。

戦後に、人々は死体を埋めるに忙しかった。死は戦勝にわずらいを与える独特の仕方を持つてゐる。死は光榮に次ぐに疫病をもつてする。熱病もまた勝利の付属物である。その井戸はごく深かったので、墳墓にされた。三百人の死体が投げ込まれた。おそらくあまりに急がれたであろう。投げ込まれた者は皆死んでいたかという、口碑は否と答える。埋没の日の夜、かすかな呼ばわる声が井戸から聞こえたそうである。

その井戸は中庭のまんなかに見捨てられている。石と煉瓦^{れんが}とで半々にできている三つの壁が屏風^{びょうぶ}の袖^{そで}のように折り曲がつて四角な櫓^{やぐら}のような形をして、その三方を取り囲んでいる。ただ一方が開いている。水をくんでいたのはそこからである。奥の壁には一種のぶかつこうな丸窓みたようなものが一つある。たぶん砲弾の穴であろう。その櫓^{やぐら}のようなものには屋根がついていたが、今はその桁^{けた}構^{がまえ}しか残っていない。右手の壁のささえの鉄は十字架の形をしている。身をかがめてのぞくと、目は煉瓦^{れんが}の深い円筒の中に吸い込まれてしまう。そこにはいっぱい暗やみがたたえている。井戸のまわりや壁の下の方は、一面に蕁麻^{いらくさ}におおわれている。

井戸の前には、あらゆるベルギーの井戸の縁石をなしているあの大きい青い板石がない。

その青い板石の代わりには一本の横木があつて、大きな骸骨^{がいこつ}に似た節くれ立つたごちごちのぶかつこうな丸太が五、六本それに寄せかけてある。釣瓶^{つるべ}も鎖も滑車もなくなっている。しかし水受けになつていた石の鉢^{はち}はなお残っている。雨水がそれにたまつていて、近くの森の小鳥が時々やつてきて水を飲んではまだ飛び去つてゆく。

その廃墟^{はいきょ}の中の一軒の農家にはなお人が住んでいる。その家の入り口は中庭に面している。その扉^{とびら}には、ゴティツク式錠前のりっぱな延板^{のべいた}のわきに、斜めにつけられた三葉わんけい^{さんえつわんけい}形の鉄の柄がある。ハンノーヴルの中尉ウィルダが農家のうちに逃げ込もうとしてその柄を握つた時に、フランスの一工兵は斧の一撃で彼の手を打ち落とした。

その家に住んでる家族の祖父というのが、昔の園丁ヴァン・キルソムであつた。彼はもうだいぶ前に死んでしまつた。半白の髪の毛の一人の女がこう言つてきかせる。「私はあの当時居合っていました。三歳でした。大きな姉はこわがつて泣いていました。私も森の中に連れてゆかれました。私は母の腕に抱かれていました。皆は地面に耳をつけて何かきいていました。私の方では大砲の音をまねて、ぼーん、ぼーんと言つていました。」

中庭の左手にある門は、前にいったとおり、果樹園に通じている。

果樹園も恐ろしい様を呈している。

それは三つの部分にわかたれている、あるいは三場にとっても言い得るであろう。第一は庭であり、第二は果樹園であり、第三は森である。その三つの部分は共通の囲いを持っている。すなわち入り口の方は城や農家の建物で、左手は籬まがき、右手は壁、そして奥も壁である。右手の壁は煉瓦造りれんがで、奥の壁は石造りである。まず第一に庭にはいつてゆく。庭は斜面になつていて、すぐり類の灌木かんぼくが植えられ、野生の植物がいっぱいはえており、切り石のおおげさな突堤で限られていて、その突堤には二重の脹れふくれのある柱の欄干がついている。それはルノートル式以前の最初のフランス式に成つた広大な庭であつたが、今日ではすっかり荒廃と荊棘いばらとに歸してしまつてゐる。欄干の柱の上には、砲弾のような丸い石がついている。今日なおその台石の上に立つてゐる四十三の欄干が数えられる。他の欄干は皆草の中にころがつている。ほとんどすべてが銃弾のかすり傷を受けてゐる。一本のこわれた欄干は折られた足のようにして欄基の上に置かれてゐる。

果樹園より低くなつてゐるその庭のうちに、軽歩兵第一連隊の六人の精兵が突入したのであつた。彼らはそこから出ることができず、穴の中の熊くまのように襲われ追窮されて、ハンノーヴルの二個中隊との対戦を甘受した。その二個中隊のうちの一個中隊はカラビーヌ銃を持つてゐた。ハンノーヴル軍はその欄干のまわりに並んで、上から射撃した。六人の精

兵らは勇敢にも二百人の敵に向かつて、ただすぐりの茂みを掩蔽^{えんぺい}として下から応戦し、十五分間ばかりささえたが皆戦死を遂げた。

数段上がってゆくと、庭から本当の果樹園のうちにはいる。その四角な数ヤードの地面のうちでは、一時間足らずのうちに千五百人の兵士がたおれた。その壁は今なお再び戦争を待つてゐるかのように見える。種々な高さの所にイギリス兵があげた三十八の銃眼がなお残っている。十六番目の銃眼の前には、イギリスの二つの花崗岩^{かこうがん}の墓が据わっている。

銃眼は南の壁にしかない。攻撃の主力はそちらからきたのである。その壁は外部は大きな生籬^{いけがき}で隠されている。フランス兵はそこにきて、ただ生籬ばかりだと思ってそれを持ち越すと、その先には障害物であり埋伏所である壁があり、その後ろにはイギリスの近衛兵がおり、一時に発火する三十八の銃眼があり、霰弾^{さんだん}と銃弾とのあらしがあつた。そしてソアイの旅団はそこで粉碎された。かくてワートルローの本舞台は初まつたのである。

けれども果樹園は占領された。はしごがなかつたので、フランス軍は爪でよじ登った。木立ちの中で白兵戦が演ぜられた。草はすべて血に染まつた。七百人のナツソーの一隊はそこで撃滅された。ケレルマンの砲兵二個中隊が壁に砲火を浴びせたので、その外部は砲弾のためにさんざんになっている。

いまやこの果樹園もやはり、五月の時を忘れないでいる。きんぽうげやひな菊も咲き、草は高く伸び、農馬は草を食い、洗たく物をかわかす毛繩は木立ちのすき間に張られて、通る人々の頭をかめさせる。その荒地を歩けば、時々もぐらの穴に足を踏み込む。草の中に、根こぎにされて横たわりながら青々と芽を出して一本の木が見らる。ブラックマン少佐がそれに寄りかかって息を引き取った。その隣の大きな木の下では、ナント勅令の廃止のおり亡命したフランスのある家族の出でドイツの將軍をしていたデュプラーが倒れた。すぐそのそばには、一本の病んだ林檎りんごの古木が、わらと粘土の繃帶ほうたいで包まれて傾いている。ほとんどすべての林檎の樹は老衰のうちに倒れかかっている。銃弾や霰弾を受けていないものは一本としてない。枯木の骸骨がいこつが果樹園の中には数多あまたある。烏が枝の間を飛んでいる。その向こうは、すみれの咲き乱れた森である。

ボーデュアンは戦死し、フォアは負傷し、火災、殺戮さつりく、惨殺、英独仏の兵士らの血は猛烈な混戦のうちに川となつて流れ、井戸は死屍しかばねをもつて満たされ、ナツソーの連隊およびブルンスウィックの連隊は全滅し、デュプラーは戦死し、ブラックマンは戦死し、イギリス近衛兵は大半殺され、フランス軍はレイユ軍団の四十個大隊中二十個大隊を大半失い、三千の兵士らはウーゴモンの破屋あばらやのうちだけできられ、突かれ、屠ほふられ、撃たれ、

焼かれてしまった。かくてすべてそれらの結果は、今日その百姓が旅人に向かって言う、「旦那、三フラン下さい、ワートルローのことを話してあげましょう！」

三 一八一五年六月十八日

物語作者の権利の一つとして過去に立ち返り、一八一五年に、しかも本書の第一部において語られた事件の初まる少し前まで、さかのぼってみよう。

一八一五年六月の十七日から十八日へかけた夜に雨が降っていなかったならば、ヨーロッパの未来は今と違っていたであろう。数滴の水の増減が、ナポレオンの運命を左右した。ワートルローをしてアウステルリッツ戦勝の結末たらしむるためには、天は少しの降雨を要したのみであって、空を横ぎる時ならぬ一片の雲は、世界を転覆てんぷくさせるに十分であった。

ワートルローの戦いはようやく十一時半にしか初まらなかった。それはブリュールに戦いに駆けつけるだけの時間を与えたのである。なぜ十一時半にしか初まらなかったかといえ、土地が湿っていたからである。砲兵の運動のために、土地が少し固まるのを待た

なければならなかった。

ナポレオンはもとより砲兵の將校であつて、その特質をそなえていた。この非凡なる將軍の根本は実に、執政内閣に対するアブールキル戰の報告中に「わが砲彈のあるものは敵兵六人を倒せり」と言わしめたあの性格であつた。彼のあらゆる戰爭の方略は砲彈のために立てられていた。ある特点に砲兵を集中させることに、彼の勝利の秘鑰ひやくはあつた。彼は敵將の戰略をあたかも一つの要塞ようさいのごとく取り扱い、そのすき間から攻撃した。霰彈さんだんをもつて敵の弱点を圧倒し、大砲をもつて戰機を處理した。彼の天才のうちには射撃法があつた。方陣を突破し、連隊を粉碎し、戰線を破り、集團を突きくずし散亂せしむることは、すべて彼にとつてはただ間斷なく撃ちに撃つことであつた、そして彼はその仕事を砲彈に任した。それは恐るべき方法であつて、それが天才に合せらるるや、この不思議なる戰いの闘士をして十五カ年間天下に無敵たらしめたのである。

一八一五年六月十八日、彼は砲数の優勢を保つていただけになおさら砲兵にまつ所が多かつた。ウェリントンが百五十九門の火砲をしか有しなかつたのに対して、ナポレオンは二百四十門を有していた。

仮りに土地がかわいていたとしてみよ。砲兵は動くことを得て、戦いは朝の六時に初ま

つていたであろう。そして午後二時には彼の勝利に帰して終わりを告げ、プロシア軍をして戦勢を変転せしむるまでには三時間を余していたであろう。

その敗北についてはナポレオンの方にいかほどの責があるであろうか？ 難破の責はその水先案内者に帰せらるるであろうか？

明らかにナポレオンは身体は弱つてはいたが、それとともにまた当時多少精神力の減退をきたしていたのであろうか。戦役の二十年は劍の鞘さやとともにその刀身をもそこない、身体とともに精神をもそこなっていたのであろうか。将帥のうちにはおぞましくも老将の面影がたたえていたのであろうか。一言にして言えば、多くの著名な史家の信じたごとく、その天才もかけ初めていたのであろうか。自己の衰弱を自ら隠すために彼は狂暴となつたのであろうか。暴挙のうちに心迷つてよろめき初めたのであろうか。將軍の身としては重大なることであるが、彼は危険をも意に介しなくなつたのであろうか。行動の巨人とも称し得べきかかる肉体的偉人らのうちには、その天才を近視ならしむる年齢があるのであろうか。思想上の天才は老年もこれを捕うるを得ず、ダンテやミケランゼロのごとき人々にとつては、老いることはすなわち生長することであるのに、ハンニバルやボナパルトのごとき人々にとつては、老いとは萎縮いしゆくすることであらうか。ナポレオンは勝利に対する直

接的知覺を失つたのであろうか。彼はもはや、暗礁を認知せず、係蹄^{わな}を察知せず、くずれかかつてる深淵の岸を弁別し得ざるに至つたのであろうか。彼は災害をかぎわけけるの能力を失つたのであろうか。昔は勝利のあらゆる途を知悉^{ちしつ}し、雷電の車上よりおごそかな指をもつてそれを指示した彼も、いまやその群がり立つた軍隊の供奉^{ぐふ}を斷崖^{だんがい}に導くほど、悲しむべき惑乱のうちにあつたのであろうか。彼は四十六歳にして既に最期の狂乱に囚われていたのであろうか。運命の巨大なるその御者も、もはや大なる猪突者^{ちよとつしゃ}に過ぎなくなつていたのであろうか？

吾人はそうは考えない。

本戦争についての彼の方略が傑出せるものであつたことは、万人の認むるところである。同盟軍の中央を直ちに突き、敵軍中に穴を明け、それを両断し、その一方のイギリス軍をハール方面にしりぞけ、他方のプロシア軍をトングル方面にしりぞけ、ウェリントンとブリューヘルとを二個の破片となし、モン・サン・ジャンを奪い、ブラッセルを占領し、かくてドイツ軍をライン河に圧迫し、イギリス軍を海中に投ぜんとしたのである。ナポレオンにとっては、すべてそれらのことがこの一戦のうちにあつた。その後のことは明白である。

いうまでもなくわれわれはここにワートルローの歴史を書かんとするのではない。われわれの語らんとする物語の基礎たるべき場面の一つがこの戦争と関係を有するのではあるが、しかしその歴史がわれわれの題目ではない。その上既にその歴史はでき上がっている、ナポレオンによつて一方の見地からと、一群の歴史の大家（ワルター・スコット、ラマルティーン、ヴォーラベル、シャラス、キネー、ティエール）によつて他の見地からと、堂々と完成されている。われわれはただそれらの歴史家をして争論するままにさしておこう。われわれはただ遠方よりの見物人であり、その平原の旅人であり、人間の肉をもつてこね返されたるその土地の上に身をかがむる探究者であり、しかも皮相をもつて事実と誤る探究者に過ぎないかも知れない。われわれは学問の名においても、多くの幻影を必ずや有するその全般の事実に立ち向かうだけの権利を有しない。一つの学説をうち立てるだけの実戦の才も戦術上の能力も有しない。われわれの見るところによれば、ただ一連の偶然事がワートルローにおいて両将帥を支配したまでである。しかしてその神秘なる被告である運命に関しては、われわれはあの素朴なる判官である民衆と同様な判断をなすのみである。

四 A

ワーテルローの戦いの明らかな觀念を得んと欲するならば、地上に横たえたAの大文字を想像すればそれで足りる。Aの左の足はニヴェルの道であり、右の足はジュナツプの道であり、両方をつなぐ横棒はオーアンからブレーヌ・ラルーへの凹路おうろである。Aの頂はモン・サン・ジャンであつて、そこにウエリントンがいる。左下の端はウーゴモンで、そこにゼローム・ボナパルトとともにレイユがいる。右下の端はラ・ベル・アリアンスで、ここにナポレオンがいる。Aの横棒が右の足と交差している点の少し下がラ・エー・サントである。横棒の中央が、ちょうど勝敗の決した要点である。あの獅子ししの像が立てられたのはそこであつて、それは期せずして近衛軍の最もりっぱなる勇武の象徴となつた。

Aの上方に二本の足と横棒との間に含まれる三角形は、モン・サン・ジャンの高地である。その高地の争奪が戦いの全局であつた。

両軍の両翼は、ジュナツプの道とニヴェルの道との左右に延びている、そしてエルロンはピクトンに對峙たいしし、レイユはヒルに對峙している。

Aの頂点の後ろ、すなわち、モン・サン・ジャンの高地の背後に、ソアーニユの森がある。

戦地そのものについては、起伏した広い地面であると想像すればよろしい。一つの高みから次の高みが見られ、そしてその起伏はしだいにモン・サン・ジャンの方へ高まってゆき、そこで森に達している。

戦場に相敵対した二個の軍隊は、二人の闘士である。それは一つの取っ組み合いである。互いに相手を投げ出さんとする。彼らは何物にでもしがみつく。藪やぶも一つの足場であり、壁の一角も肩けん牆しょうである。よるべき一軒の破屋あばらやがないためにも、一個連隊が遁走とんそうする。平地のくぼみ、地勢の変化、好都合な横道、森、低谷なども、軍隊と呼ばれるその巨大の踵くびすを止め、その退却を抑止することができる。戦場より出る者は敗者である。それゆえに、その責を帯びる長官にとつては、わずかな木の茂みをも調べ少しの土地の高低をも研究する必要がある。

両將軍は、今日ワールテルロー平原と呼ばれるそのモン・サン・ジャン平原を、細心に研究しておいた。既にその前年よりしてウエリントンは、あらかじめある大戦の準備としてそこを調べておくだけの先見の明を有していた。ゆえに六月十八日、その土地においてそしてその決戦のために、ウエリントンは有利の地位を占め、ナポレオンは不利の地位にあった。イギリス軍は上手かみてにあり、フランス軍は下手しもてにあった。

一八一五年六月十八日の^{ふつぎよう}払暁、ロツソナムの高地に双眼鏡を手にして馬上にまたがったナポレオンの風姿を、ここに描くことはおそらく蛇足^{だそく}であろう。人に示されるまでもなく、世人の皆知つているところである。ブリエンヌ士官学校の小さな帽子をかぶったその静平な横顔、その緑色の軍服、星章を隠している白い折り返しのでり、肩章を隠している灰色の外套、チョッキの下に見えている赤い^{じゆしよう}綬章の一端、皮の半ズボン、すみずみにNの花文字と鷺^がの紋とのついた紫びろうどの鞍被^{くらおお}いをつけた白馬、絹の靴足袋の上にいた乗馬靴、銀の拍車、マレンゴーに^{はいよう}佩用した剣、すべてそれらの最後の皇帝^{シーザー}たる容姿こそ、万人の想像に上るところのものであつて、ある人々からは歓呼せられ、ある人々からはきびしき目を向けらるるところのものである。

その姿は長い間^{こうよう}光耀のうちに包まれていた。それは実に、古来多くの英雄が発散して常に多少の間真實をおおい隠すあの一種の伝説的不明瞭に負うところがあつたのである。しかし今日はそれを照らす歴史と白日とが現われている。

この光は、歴史は、無慈悲なものである。それはある不思議なまた神聖なものを有していて、まったく光であり、かつまさしく光であるがゆえに、人が光輝をのみ見ていたところに陰影を投ぐることが往々にしてある。それは同一人より二つの異なつた姿をこしらえ

る。一つの姿は他の姿を難じ、その罪を問う。専制君主の暗黒は將帥の光彩と争う。かくて諸民衆の評価のうちにより真実なる尺度が存するのである。侵されたるバビロンはアレクサンデルの価値を減じ、束縛されたるローマはシーザーの価値を減じ、破壊されたるエルサレムはチツスの価値を減損する。暴君自身もやがて暴虐を被る。おのれの姿を止むる暗黒を後に残してゆくことは、人にとって一つの不幸である。

五 戦争の暗雲

この戦いの最初の局面は世人のあまねく知るところである。両軍ともその発端は、不安な不確かなもので、躊躇^{ちゆうちゆう}せしめ恐れをいだかしむるものであつた。しかしフランス軍の方よりもイギリス軍の方がなおさらそうであつた。

雨は終夜降りとおした。地面はそのどしや降りにこねかえされていた。水は鉢^{はち}にたまつたように平原の窪地^{くぼち}にここかしこたまっていた。ある所では輜重車^{しちようしゃ}は車軸まで泥水につかつた。馬の腹帯は泥水をしたたらしていた。もし密集した輜重の雑踏のためまき散らされた小麦や裸麦が、轍^{わだち}を埋めて車輪の下敷きにならなかつたならば、いっさいの運動は、

ことにパプロットの方の谷間の中の運動は、不可能であつたろう。

事は初まるのが遅かつた。前に説明したとおりナポレオンは、その全砲兵を拳銃のごとく手中に握り、戦地のここかしこねらいを定めるのを常としていたので、馬に引かれた砲兵隊が自由に動き回り駆け回り得るまで待つことにしたのである。それには太陽がのぼって地をかわかさなければならなかつた。しかし太陽の出るのは遅かつた。こんどはアウステルリッツのようにすぐにはゆかなかつた。最初の大砲の一発が響いた時、イギリスの將軍コルヴィルは時計をながめて、十一時三十五分であることを確かめた。

戦闘は猛烈に初まつた。おそらく皇帝が望んでたより以上猛烈に、ウーゴモンに対するフランス軍の左翼によつて開始された。同時にナポレオンは、ラ・エー・サントに向かつてキオー旅団を投げつけながら敵の中央を攻撃し、ネーはパプロットによつてイギリス軍の左翼に向かつてフランス軍の右翼を突進させた。

ウーゴモンに対する攻撃は多少佯撃であつた。ウエリントンをそこに引きつけて左翼に牽制せんとするのが、その計画であつた。もしイギリスの近衛の四個中隊と勇敢なベルギーのペルポンシエル師団とが頑強に陣地を維持し得なかつたならば、その計画は成功していただであらう。がウエリントンはそこに赴援せずして、全援兵としてただ近衛の

他の四個中隊とブルンスウィックの一隊とだけをつかわずに止めておくことができたのである。

パプロットに対するフランス軍右翼の攻撃は真剣なものであった。イギリス軍の左翼を敗走せしめ、ブラッセルからの道を断ち切り、あるいはきたるべきプロシア軍の通路をさえぎり、モン・サン・ジャンを強取し、ウエリントンをウーゴモン方面にしりぞけ、それよりブレーヌ・ラルー方面にしりぞけ、更にハール方面に追うこと、それは最も確実なことであつた。ただ二、三の事件を外にしては、その攻撃は成功した。パプロットは占領され、ラ・エー・サントは奪取された。

ここに特記すべき一事がある。イギリスの歩兵のうちには、ことにケンプトの旅団のうちには、多くの新兵がいた。それらの若い兵士らは、フランスの恐るべき歩兵に対してきわめて勇敢であつた。彼らは無経験のためかえつて大胆にやってのけた。ことにみごとな散兵戦を行なつた。散兵戦における兵士は、多少各自に開放されて、いわば自ら自分の指揮官となるものである。それらの新兵は、フランス兵に似寄つたある巧妙さと勇猛さとを現わした。その未熟な歩兵は活気を有していた。しかしそれはウエリントンのあまり喜ばないところであつた。

ラ・エー・サントの占領後、戦いは混乱をきたした。

その日の戦いには、正午から四時までまったく朦朧たる中間があった。戦いの中心はほとんど不明で、混戦の雲霧につつまれていた。薄暮の色さえそれに加わった。うち見やれば、その靄の中には広漠たるうねりがあり、眩きばかりの幻影があり、今日ほとんど知られない当時の軍需品があつて、炎のような真紅の毛帽、揺らめいている提囊、十字の負い皮、擲弾用の弾薬盒、驃騎兵の外套、多くのひだのある赤い長靴、絢総で飾つた重々しい軍帽、緋色のイギリス歩兵と黒ずんだブルンスウィックの歩兵との混合、肩章の代わりに輪をなした白い大きなモールを上膊につけてるイギリス兵、銅の帯金と赤い飾毛とのついた長めの皮の兜をかぶつてゐるハンノーヴルの輕騎兵、膝を露わにし弁慶縞の外套を着てるスコットランド兵、フランス擲弾兵の大きな白いゲートル、それは実に戦術的戦線ではなくて、画幅中の光景であり、サルヴァートル・ローザの喜ぶところのものであつて、グリボーヴァルの求むるところのものではなかった。（訳者注 前者は十七世紀イタリーの画家、後者は十八世紀フランスの戦術家）

多少の暴風雨的擾乱は常に戦いに交じるものである、ある暗澹たるもの、ある天意的なるものが。各歴史家はそれらの混戦のうちに勝手な筋道を立ててみる。しかし將軍ら

の策略のいかんにかかわらず、群がり立つた軍勢の衝突は測るべからざる反発を起こすものである。実戦においては両指揮官の二つの計画は互いに交差し互いに妨げる。戦場のある地点はある他の地点よりも多くの兵士をのみつくす、あたかも多少柔軟な地面はそこに注がる水を多少早く吸い取るがごときものである。かかる場所には予期以上の多数の兵士を注がなければならぬ。意外の損失をきたす。戦線は糸のごとく浮動し曲折し、血潮の川は盲目的に流れ、前線は波動し、出入する連隊はあるいは岬みさきをなしあるいは湾をなし、その暗礁は互いに先へ先へと移動し、歩兵がいた所には砲兵が到着し、砲兵がいた所には騎兵が馳はせつけ、あらゆる隊伍は煙のごとくである。そこに何かがいたと思つて求むればはや消え失せている。一時の霽間はれまはすぐに移つてゆく。陰暗なひだは一進一退する。黄泉よみの風は、それらの悲壮な群集を吹き送り吹き返し、吹きふくらし吹き散らす。およそ混戦とは何物であるか。一つの擺動はいどうである。数学的な不動の図面はただ一瞬のことを説明し得るのみで、一日のことは語り得ない。一つの戦争を描かんがためには、その筆致のうちに混沌こんとんたるものを有する力強い画家を要する。かくてレンブラントはヴァン・デル・モイレンにまさる。ヴァン・デル・モイレンは、正午のことについては正確であるが、午後三時においては真より遠ざかる。幾何学は誤りをきたし、ただ颶風ぐふうのみが真を伝える。

それはポリープに対して異説を立てしむるの権利をフォアールに与えるところのものである。なおつけ加えて言えば、戦いには局部戦に化するある瞬間が常にある。かかる瞬間においては、戦いは個々に分かれ、無数の細部に分散する。その細部はナポレオン自身の言葉をかりて言えば、「軍隊の歴史によりもむしろ各連隊の伝記に属する」ところのものである。もとよりそういう場合においても、歴史家はそれを摘要するの権利を持っている。しかし彼はその戦闘の主要な輪郭をつかみ得るのみである。そしてまた、いかに忠実なる叙述家といえども、戦いと称せらるるその恐るべき暗雲の形を完全に描き出すことはできないものである。

以上のことは、いかなる大戦闘についても真実であるが、ことにワーテルローにはいっそう適用し得べきものである。

さはあれ、午後になって、ある瞬間に至って、戦いの勢いは明らかになってきた。

六 午後四時

四時ごろには、イギリス軍は危険な状態にあった。オレンジ大侯は中央を指揮し、ヒル

は右翼を、ピクトンは左翼を指揮していた。豪胆熱狂なオレンジ大侯はオランダ・ベルギーの連合兵に向かつて叫んでいた「ナツソー！ ブルンスウィック！ 断じて退くな！」ヒルは弱つてウエリントンの方へよりかかつてきた。ピクトンは戦死した。イギリス軍がフランス軍の第百五連隊の軍旗を奪つたと同時に、イギリス軍のピクトン將軍は弾丸に頭を貫かれて戦死を遂げたのだつた。ウエリントンにとっては、戦いは二つの支持点を持っていた、すなわち、ウーゴモンとラ・エー・サントと。しかるに、ウーゴモンはなおさえてはいたが焼かれており、ラ・エー・サントは既に奪われていた。そこを防いでいたドイツの一隊は、生き残つた者わずかに四十二人で、將校に至つては五人を除くのほか、皆戦死し、あるいは捕虜になつていた。その農家のうちだけで三千の兵士が屠^{ほふ}られていた。イギリス一流の拳闘家で無敵と称せられていた近衛の一軍^{ぐんそう}曹も、そこでフランスのある少年鼓手のために殺されていた。ベーリングは撃退され、アルテンはなぎ払われていた。数多の軍旗は失われていた。そのうちには、アルテン師団のものもあり、ドウー・ポン家のある大侯がささげていたルネブルグ隊のもあつた。灰色のスコットランド兵ももはや残つていなかった。ポンソンビーの大なる竜騎兵も壊滅していた。その勇敢な竜騎兵は、ブローの槍騎兵とトラヴェールの胸甲騎兵とのために敗走させられたのだつた。その千二

百騎のうち残ったものは六百で、ハミルトンは負傷し、メーターは戦死して、三人の中佐ちゆう二人もうち落とされたのだった。ポンソンビーも七つの槍やりを被つてたおれていた。ゴルドンもマーシユも戦死していた。第五と第六との両師団は粉碎やぶされていた。

ウーゴモンは危うく、ラ・エー・サントは奪われ、今はただ中央の一節ひとふしが残つてゐた。その一節はなお支持されていて、ウエリントンはそこに兵員を増加した。彼はそこに、メルブ・ブレーヌにいたヒルを呼び、ブレーヌ・ラルーにいたシャッセを呼び寄せた。

イギリス軍のその中央は、少し中くぼみの形になっていて、兵員は密集し、強固に陣を固めていた。それはモン・サン・ジャンの高地を占めていて、背後に村落を控え、前には当時かなり険しかった斜面を持っていた。そして堅固な石造の家屋を後ろに負っていた。その建物は当時ニヴェルの領有であつて、道路の交差点しるしの標になっており、十六世紀式の建築で、砲弾もそれに対してはただはね返るのみで破壊し得なかつたほど頑丈がんじょうにできていた。高地の周囲には、イギリス軍はここかしこに生籬いけがきを切り倒し、山さんざしの間に砲眼をこしらえ、木の枝の間に砲口を差し入れ、荊棘いばらのうちに銃眼をあけていた。その砲兵は茂みの下に潜められていた。その奸黠かんかつなる工事は、もとよりいかなる係蹄わなをも許す戦

争ではとがむべきことではないが、いかにも巧みになされていたので、敵の砲座を偵察せんため午前九時に皇帝からつかわされたアクソーもまったく気づかず、立ち帰ってナポレオンに報告したところは、ただ、ニヴェルおよびジュナツプから行く両道をさえぎっている二つの防寨ぼうさいのほかには、何らの障害もないというのであった。ちょうど畑の作物が高く伸びている時期であつて、高地の縁には、ケンプト旅団の一隊第九十五連隊が、カラビ―又銃を帯びて高い麦の間に伏してゐるのだつた。

かく安全にかつ守りを固くして、イギリス・オランダ軍の中央は好地位に置かれていた。その陣地の危険はただソーアーニユの森であつた。その森は当時戦場に接していて、グレナンデルとボアフオールとの二つの池で仕切られていた。そこに退くとすれば軍隊の隊伍は乱れるに違いなかつた。連隊は直ちに分散をきたすに違いなかつた。砲兵は沼の中に進退を失うに違いなかつた。もとより異議を立てる者もあつたが、多くの専門家の意見によれば、退却はそこでは潰走かいそうに終わるのほかはなかつたであらう。

ウエリントンは、シャッセの一個旅団を右翼から抜きウインケの一個旅団を左翼から抜き、それを中央に加え、次にクリントンの師団をも加えた。そしてそれら手中のイギリス軍、ハルケットの数個連隊、ミツチェルの旅団、メートランドの近衛軍、などの主力にな

お支持隊として、ブルンスウィックの歩兵、ナツソーの徴集兵、キエルマンゼーゲのハンノーヴル兵、およびオンプテータのドイツ兵などを加えた。それで彼は二十六個大隊を提げていたのである。シヤラスが言ったように、右翼は中央の背後に立て直された。莫大ばくだいな砲兵隊は、今日いわゆる「ワーテルローの博物館」があるあの場所に、土囊どのかうで隠されていた。ウェリントンはなおその上、ソマーセットの近衛竜騎兵千四百騎をあるくぼ地に有していた。それは世の定評に恥じない勇敢なるイギリス騎兵の半分であつた。ポンソンビーは粉碎されたが、ソマーセットは残つていたのである。

一度完備すればほとんど一つの角面堡ほともなるべきその砲兵隊は、ごく低い堀へいの後ろに配置され、砂囊さのかうの被覆と大なる土堤とで急速におおわれた。しかしその工事は全部済んではいなかった。それは柵さくを施すだけの時間がなかつたのである。

ウェリントンは不安ではあつたがなお平然として馬にまたがり、モン・サン・ジャンの古い風車小屋の少し前方、榆にれの木の下に、終日同じ姿勢で立つていた。その風車小屋は今もなお残っているが、榆にれの木の方は、物のわからぬあるイギリスの心酔家が、その後二百フランで買い取り、切り倒して持つてしまったのである。ウェリントンはそこに、冷然たる勇気をもつて立ちつくしていた。砲弾は雨と降りきたつた。副官のゴルドンは彼

のそばで倒れた。ヒル卿は破裂する榴弾りゅうだんをさしながら言った。「閣下、閣下の示教せらるるところは何でありますか。もし戦死せらるる場合にはいかなる命令をあとに残されますか？」「私のとおりせよということだ、」とウエリントンは答えた。彼はまたクリントンに簡単に言った、「最後の一人までここにふみ止まれ。」戦いは明らかに不利になってきた。ウエリントンはタラヴェラやヴィットーリアやサラマンクなどの昔の戦友たる部下に叫んでいた、「諸子よ！　いかで退却をなし得るか。古よりのイギリスを考えてみよう！」

四時ごろ、イギリスの戦線は後方に動き出した。と突然、高地の頂には砲兵と狙撃兵そげきへいとのほか何も見えなくなった。その他のものは姿を消した。全連隊は、フランスの榴弾たんぼと砲弾とに追われて、後方深く退いた。そこにはモン・サン・ジャンの田圃道たんぼが今日もなお横切っている。後退運動が起こされ、イギリス戦線の正面は取り払われ、ウエリントンも退いた。「退却を始めた！」とナポレオンは叫んだ。

七　上機嫌きげんのナポレオン

皇帝は病氣にかかつていて馬上では局所に苦痛を感じて困難ではあったが、かつてその日ほど上機嫌じょうきげんなことはなかった。心情を発露することのないその顔つきも、朝から微笑をたたえていた。大理石の面をかぶったようなその深い魂も、一八一五年六月十八日には何ということもなく光り輝いていた。アウステルリッツにおいて陰鬱いんうつであったその人も、ワーテルローにおいては快活であった。宿命の偉人はかかる矛盾を示すものである。われわれ人間の喜びは影にすぎない。最上の微笑は神のものである。

シーザーは笑いポンペイウスは泣く、とフルミナトリックス軍の兵士らは言った。しかし今度はポンペイウスは泣くべき運命ではなかったのである。がシーザーが笑っていたのは確かだった。

早くも前夜の一時に、荒天と降雨との中をベルトランとともに、ロツソム付近の丘陵を馬上で検分しながら、フリシュモンよりブレーヌ・ラルーに至る地平線を輝かすイギリス軍の篝火かがりびの長い一線を見て満足し、ワーテルローの平原の上に日を期して定めておいた運命は万事自分の意のままになつてるように、彼には思えたのであった。彼は馬を止め、しばらくそこにじっとたたずんで、電光をながめ雷鳴を聞いていた。そしてその運命の人が次の神秘的な言葉を影のうちに投げけるのが聞かれた、「われわれは一致している。」しか

しナポレオンは誤っていたのである。両者はもはや一致してはいなかった。

彼はその夜一睡もしなかったのである。その夜も各瞬間は彼に喜びの情を与えた。彼は前哨ぜんしょうの全線を見回つて、あちこちに立ち止まつては騎哨に言葉をかけた。二時半にウーゴモンウーゴモンの森の近くに、彼は一縦隊の行進する足音を聞いた。一時彼はそれをウエリントンの退却であると思つた。彼はベルトランに言つた。「あれは撤退するイギリス軍の後衛だ、オステンドに到着した六千のイギリス兵をわしは捕虜にしてみせよう。」彼は豁達かつたつに口をきいた。三月一日上陸（訳者注 エルバ島よりフランスへの）の際、ジュアン湾の

熱狂してゐる農夫を元帥にさし示しながら、「おいベルトラン、既にかしこに援兵がいる、」と叫んだ時のような活気を彼は再び示した。そして今六月十七日から十八日へかけた夜、彼はウエリントンをあざけていた。「小癩な彼イギリス人に少し思い知らしてやろう、」とナポレオンは言つた。雨は激しくなり、皇帝が語つてゐる間雷鳴はとどろいていた。

午前三時半に、彼の一つの空想は失われた。偵察につかわされた将校らは、敵が何らの運動もしていないことを報告した。何物も動いてはいなかった。陣營の一つの篝火かがりびも消されてはいなかった。イギリスの軍隊は眠つていた。地上は寂として音もなく、ただ空のみが荒れていた。四時に、一人の農夫が斥候騎兵によつて彼の所へ連れられてきた。その

農夫は、イギリスのある騎兵旅団が、たぶんヴィヴァイアンの旅団であろうが、最左翼としてオーアンの村に陣地を占めに行くのの案内者となったのである。五時に、二人のベルギーの脱走兵がきて彼に告げたところでは、彼らは自分の連隊からぬけ出してきたのであって、イギリス軍は戦いを期しているということだった。ナポレオンは叫んだ。「ますますよい。わしはあいつらを退けるよりも打ち敗つてやりたいのだ。」

朝になつて、フランスノアの道の曲がり角になつてゐる土堤^{どて}の上で、彼は泥の中に馬からおり立つて、料理場のテーブルと百姓の椅子^{いす}とをロツソム^{ロツソム}の農家から持つてこさせ、一束のわらを下に敷いてそこに腰を掛け、テーブルの上に戦場の地図をひろげて、そしてスールトに言つた、「みごとな将棋盤だ！」

夜来の雨のために、兵站部^{へいたんぶ}はこね回された道路に足を取られて朝になつてしか到着することができなかった。兵士らは眠りもせず物も食わずに雨にぬれていた。それでもナポレオンは快活にネーに叫んだ、「十中の九はわれわれのものだ。」八時に皇帝の食事が運ばれた。彼はそこに多くの將軍らを招いた。食事をしながら人々は、前々日ウエリントンがブラッセルのリチモンド公爵夫人の家の舞踏会に行つていたことを話した。すると、大司教めいた顔つきのあらあらしい武人であるスールトは言つた、「舞踏会は今日だ。」皇

帝は、「ウエリントンも陛下のおいでを待つてゐるほどばかりでもありませんまい」と言うネーを揶揄した。その上揶揄は彼の平素のことであつた。彼は好んで諧謔を弄した、とフルーリー・ド・シャブローンは言つてゐる。彼の性格の根本は快活な気分であつた、とグルーゴーは言つてゐる。巧妙なというよりもむしろばかげた揶揄に彼は富んでいた、とバンジヤマン・コンスタンは言つてゐる。巨人のかかる快活は力説するの勞に価するものである。その擲弾兵を「敵愾兵」と呼んだのも彼であつた。彼は彼らの耳をつねり、その髻を引つ張つた。皇帝はわれわれにいたずらばかりなされた、というのは彼らの一人の言葉である。エルバ島よりフランスへの秘密な航海中、二月二十七日海上において、フランスの軍艦ゼフィールはナポレオンが隠れてゐたアンコンスタン号に出会つて、ナポレオンの消息を尋ねると、エルバ島に彼がはやらした蜂のついた白と鶏頭色との帽章を当時なおその帽子につけてゐた皇帝は、笑いながらラツパを取つて自分で答えた、「皇帝は丈夫だ。」

そういう冗談をする者は、事変に驚かない。ナポレオンはワートルローの朝食の間にしばしばその諧謔を弄した。食事の後、彼は十五分ばかり考え込んだ。それから、二人の將軍はわら束の上に腰掛け、手にペンを持ち膝に紙をひろげた、そして皇帝は彼らに戦闘序列を書き取らせた。

九時に、梯隊^{ていたい}をなし五列縦隊で行進していたフランス軍は展開して、師団は二列横隊となり、砲兵は旅団の間に置かれ、軍楽隊は太鼓の音とラッパの響きとで行進曲を奏して先頭に立ち、見渡す限り力強く広漠として勇み立ち、軍帽とサーベルと銃剣との海と化し去った。その時皇帝は興奮して二度くり返し叫んだ、「素敵！ 素敵！」

九時から十時半までの間に、信じられないほどの早さではあるが、全軍は戦線につき、六線に並び、皇帝の言葉をかりれば「六個のVの形」を取った。戦線の前面が整って数瞬の後、混戦に先立つ動乱の初めの深い静寂の最中に、命令によってエルロンとレイユと口ボーとの三軍団から抜かれ、ニヴェルの道のジュナツプの道との交差点であるモン・サン・ジャンを砲撃して戦争を開始する役目を帯びていた十二斤砲^{きん}の三個砲兵中隊が、ついに展開するのを見て、皇帝はアクソーの肩をたたいて言った、「どうだ将軍、二十四人のきれいな娘が。」

モン・サン・ジャンの村を奪取すれば、直ちにそこに防寨^{ぼうさい}を施すことに定められていた第一軍団の工兵中隊が前を通る時、戦いの結果に確信ある彼は微笑をもってそれを励ました。かく静穏な彼は、ただ尊大な憐憫^{れんぴん}の一語をもらした。すなわち、左手に、今日大きな墳墓があるあの場所に、灰色のみごとなスコットランド兵がそのりっぱな馬とともに

集まっているのを見て、彼は言った、「惜しいものだ。」

それから彼は馬にまたがり、ロツソナムの前方に赴き、ジュナツプからブラッセルへ通ずる道の右手にある小高い狭い芝地を觀戦地として選んだ。それは戦闘中の彼の第二の佇よりつじよ立所であつた。

第三の佇立所は、午後七時ラ・ベル・アリアンスとラ・エー・サントとの中間のそれであつて、恐るべき場所であつた。現今なお存しているかなり高い丘であつて、その後方には平地の斜面に近衛兵が集められていた。丘のまわりには、砲弾が道路の舗石しきいしの上にはねかえつて、ナポレオンの所までも達した。ブリエンヌの時と同じく、彼の頭上には弾丸やビスカイヤン銃弾が鳴り響いた。彼の馬の足が立っていたほとんど同じ場所から、その後、腐食した砲弾や古い剣の刃や錆びついて形を失つた銃弾などが拾い出された、錆びくれものが。数年前のことだが、まだ火薬のはいったままの六十斤破裂弾きんがそこから掘り出された。ただその信管は弾丸と平面にこわれていた。この最後の佇立所において、一人の輕騎兵の鞍くらにゆわいつけられ、霰弾さんだんの連発さんだんごとに後ろを向いてその背後に身を隠そうとしている、驚怖し敵意をいだいてる田舎者いなかものの案内者ラコストに向かつて、皇帝は言つた、「ばかめ！ 恥辱だぞ、背中を打たれて死ぬつもりか。」今これらのことを物語っている著者自らも、その丘の柔かい斜面の砂を掘りながら、四十六年間の酸化の

ためにぼろぼろになった破裂弾の口金の残り、彼の指の中にすいかずらの茎のように握りつぶされた古い鉄片の残りとを、見いだしたのである。

ナポレオンとウエリントンとの会戦の場所である種々の勾配^{こうばい}をなした平地の起伏は、

人の知るとおり、一八一五年六月十八日は今日大いにそのありさまを異にしている。その災厄^{さいやく}の場所から、すべて記念となるものを人々は奪い去ってしまった、実際の形態はそこなわれたのである。そしてその歴史も面目を失って、もはやそこに痕跡^{こんせき}を認め難くなっている。その地に光栄を与えたために、人々はその地のありさまを変えてしまった。

二年後にウエリントンは再びワーテルローを見て叫んだ、「私の戦場は形が変えられてしまった。」今日獅子^{しし}の像の立っている大きな土盛りのある場所には、その当時一つの丘があつてニヴェルの道の方へは上れるくらいの傾斜で低くなっていたが、ジュナツプの道路の方ではほとんど断崖^{だんがい}をなしていた。その断崖の高さは、ジュナツプからブラッセルへ行く道をはさんで二つの大きな墳墓の丘の高さによって、今日なお測ることができる。

その一つはイギリス兵の墓であつて左手にあり、も一つはドイツ兵のであつて右手にある。フランス兵の墓はない。フランスにとつては、その平原すべてが墓地である。高さ百五十尺周囲半マイルの塚を築くに使われた何千車という土のおかげで、今日モン・サン・ジャ

ンの高地にはゆるやかな坂で上ってゆくことができる。しかし戦いの当時その高地は、こ
とにラ・エー・サントの方面において、きわめて險阻で上るに困難であった。その勾配は
そこでは非常に急だったので、イギリスの砲兵隊は下の方に、戦闘の中心地である谷合の
底にある百姓家を見ることができないほどだった。一八一五年六月十八日には、雨のため
にその險しさはいつそう増し、泥^{でい}、泥^{ねい}、泥^み、泥^みのためにその登^{とう}攀^{はん}は、いつそう困難になり、単に
よじのぼるばかりでなく泥^み、泥^みに足を取られまでした。高地の上に沿って、遠くから見たの
では気づかれない一種の溝^{みぞ}が走っていた。

その溝はいったい何であつたか？ それを言ってみれば次のようなわけである。ブレー
ヌ・ラルーはベルギーの一つの村であり、オーアンもやはりその一つの村である。そして
二つとも土地の起伏の間に隠れ、約一里半ばかりの道で相通じている。その道は高低不規
則な平原を横切っていて、しばしば畝^{あぜ}溝^{みぞ}のようになって丘の間をつきぬけているので、
所々で峡谷をなしている。一八一五年にも今日と同じく、その道はジュナツプの街道とニ
ヴェルの街道との間でモン・サン・ジャンの高地の上を貫いていた。ただ、今日ではその
平地の面と同じ高さになっているが、当時は凹^{くぼ}い道であつた。記念の塚を築くためにその
両方の斜面は切り取られてしまったのである。その道は、今日もそうだが、昔も大部分は

塹壕^{ざんごう}の形をしていた。それも時としては約十二尺もあろうというほど深い塹壕であつて、そのあまり急な斜面の土は驟雨^{しゅうう}のために所々くずれ落ち、ことに冬にははなはだしかった。種々の事變までも生じた。ブレーヌ・ラルーの入り口の方では非常に狭かつたので、一人の通行人が馬車に押しつぶされてしまったほどである。墓地のそばに立つてゐる石の十字架はそれを示すものであつて、それによると、死者の名前はブラツセルの商人ベルナル・ド・ブリー氏であり、その事變が起こつたのは一六三七年二月である。（碑銘は次のとおりである——最善最大なる神へ、ここにおいてブラツセルの商人ベルナル・ド・ブリー氏は一六三七年二月〇「不明」日不幸にも馬車にひき殺されぬ。）またその道はモン・サン・ジャンの高地の上ではきわめて深かつたので、マティユー・ニケーズという百姓が一七八三年に土手くずれのため圧死したほどである。も一つの石の十字架にやはりそのことがしるしてあつた。しかしその石はそこが開拓される時になくなってしまい、くつがえされた土台石だけが今日なお、ラ・エー・サントとモン・サン・ジャンの農家との間の道路の左手の芝生^{しばふ}の坂の上に残つて見えている。

戦いの日、モン・サン・ジャンの高地の縁^{わだち}にあつて、断崖^{だんがい}の上にある溝であり、地面の中に隠された轍^{わだち}であり、何物もそれと気取^{けど}らせる物のないその凹路^{おうろ}は、少しも目につか

なかったのである、言い換えれば恐るべきものだったのである。

八 皇帝案内者ラコストに問う

さてワートルローの朝、ナポレオンは満足であつた。

それも道理だつた。彼によつて立てられた作戦計画は、前に述べたとおり、實際驚嘆すべきものであつた。

一度戦端が開かるや、種々の変転はナポレオンの眼前に起こつた。ウーゴモンの抵抗。ラ・エー・サントの頑強。ボーデュアンの戦死。戦闘力を失つたフォア。ソアイの旅団が粉碎された意外の城壁。爆発管も火薬囊のうも用意していなかつたギーユミノの不運な軽率。砲兵隊が泥でいねい、いねいに足を取られたこと。護衛のない十五門の砲がある凹路おうろでアクスブリッジのために転覆されたこと。イギリス戦線に落下させた破裂弾も、雨のために湿つた土の中にはいり込んで泥を爆発させるだけで、撥泥機と化して去つてしまつて、効果の少なかつたこと。ブレーヌ・ラルー方面のピレーの威嚇運動いかくが無効に終わったこと。十五個中隊の騎兵のほとんど全部が損失したこと。イギリス軍の右翼の動揺も少なく、左翼もあまり破れ

なかつたこと。第一軍団の四個師団を梯隊にせずして密集させたネーの意外なまちがい。そのため正面二百人あての二十七列の深さの密集部隊が霰弾さんだんを浴びせられたこと。その集団の中に恐るべき穴が砲弾によつてあけられたこと。襲撃縦隊の隊伍のとのわなかつたこと。その側面に突然現われた横射砲兵隊。危地に陥つたブルジョアとドンズローとデュリュット。撃退されたキオー。工芸大学校出の俊猛ヴィユー中尉が、ラ・エー・サントの門を斧おので打ち破つた時に、ジュナツプからブラッセルへ行く道の曲がり角をさえぎつてゐるイギリス軍の防塞から発した俯瞰銃火ふかんのために負傷したこと。マルコンネの師団が、歩兵と騎兵とに挟撃きようげきされ、麦畑の中でベストとバックからねらい撃ちにされ、ポンソンビーになぎ払われたこと。その七門の砲は進退窮まつたこと。エルロン伯の攻撃に対してサククス・ワイマール大侯がフリシユモンとスモーアンとを維持したこと。第百五連隊の軍旗は奪われ、第四十五連隊の軍旗も奪われたこと。ワーヴルとプランスノアとの間の道を偵察していた三百人の軽騎兵の斥候遊動隊によつて捕えられた、一人の黒服のプロシア驃騎兵。その捕虜の告げた不安な事から。グルーシーの遅延。ウーゴモンの果樹園の中で一時間足らずのうちに殺された千五百人。なおそれより短時間の間にラ・エー・サント付近でたおれた千八百人。それらの激越な事変は戦陣の雲霧のごとくナポレオンの眼前を

過ぎ去ったが、ほとんど彼の目を乱すことなく、その泰然自若たるおごそかな顔を少しも曇らせなかった。ナポレオンは戦闘を凝視することになれていた。彼は局部の悲痛なできごとを一々加算しはしなかった。個々の数字は、その総計たる勝利を与えさえするならば、さまで重大なことではなかった。その初端がいかに錯乱しようとも、彼はそれに驚きはしなかった。すべては自分の手中にあり、終局は自分のものであると、彼は信じていたのである。彼はすべてに超然たる自信を有していて、機を待つことを知っていた。そして天運を自己と同地位に置いていた。彼は運命に向かって言うかのように言った、「汝の勝手にもできないだろう。」

半ば光と影とのうちにあつてナポレオンは、幸運のうちに保護され災厄さいやくを許されてるように感じていた。あらゆる事件は自分の不利をもたささないということ、あるいはむしろ自分に加担してくれるということを、彼は知っていた、少なくとも知っていると信じていた。実に古代の不死身ふじみにも等しいものを持っているということ。

しかしながら、過去にベレジナ、ライプチヒ、およびフォンテーヌブルーなどのことを有する以上は、ワートルローとても安心はできないはずである。一つの人知れぬひんしゆく聲こゑが、天の奥に見えている。

ウエリントンが退却し出した時、ナポレオンはおどりが上った。彼は突然、モン・サン・ジャンの高地が引き払われ、イギリス軍の正面が姿を消したのを認めた。その敵軍は再び集合したのではあるが、とにかく姿を隠したのだった。皇帝は半ば鎧よろいの上に立ち上がった。勝利の輝きはその目に上った。

ウエリントンはソアーニユの森に圧迫され破られる。それはイギリスがフランスのために止めを刺とどされることであつた。クレシー、ポアティエ、マルプラケ、ラミリーなどの敗戦の復讐ふくしゅうがなされることであつた。マレンゴの勇士（訳者注 ナポレオン）がアザンクールの恥をそそぐことであつた。

皇帝はその時、恐ろしいその変転を考えながら、最後に今一度双眼鏡をもつて戦場の四方を見回した。後ろには銃を立てた近衛兵の一隊が、敬虔けいけんな目つきで下から彼を仰ぎ見ていた。彼は考えていた。傾斜を調べ、坂を注意し、木の茂みや、麦畑や、小道などをよく観測し、また一々小藪こやぶまでも数えてるらしかった。二つの大道のイギリス軍の防寨ぼうさいを、二つの大きな鹿砦ろくさいを、彼はことにじつとながめた。一つはラ・エー・サントの上にジュナップから行く道にある防寨で、イギリスの全砲兵中から残つて戦場の底を俯瞰ふかんしてる二門の大砲で守られていた。も一つはニヴェルからゆく道にある防寨で、シャッセ旅団のオ

ランダ兵の銃剣がひらめいていた。彼はその防寨の近くに、ブレーヌ・ラルーの方へゆく横道の角にある白塗りの聖ニコラの古い礼拝堂を認めた。彼は身をかがめて、案内者ラストに小聲で話しかけた。案内者は頭を横に振った。おそらく当てにはならないものであったろう。

皇帝はまた身を起こして考え込んだ。

ウエリントンは退却したのである。もはやその退却を壊滅に終わらせるだけの問題であった。

ナポレオンはにわかにふり向いて、戦勝の報告をさせるためパリへ急使を全速力でつかわした。

ナポレオンは雷電をも発し得る天才の一人だった。

彼はいまやその雷電の一撃を見いだした。

彼はモン・サン・ジャンの高地を奪取することを、ミローの胸甲騎兵に命じた。

九 意外事

その数は三千五百、四分の一里の前面にひろがり、偉大な馬にまたがった巨人らであった。中隊にわかつて二十六個、そして後方には援護として、ルフエーヴル・デヌーエツトの師団、精鋭なる憲兵百六人、近衛輕騎兵千百九十七人、および近衛槍騎兵八百八十人が控えていた。彼らは装毛のない兜をかぶり、練鉄の胸甲をつけ、皮袋にはいった鞍馬用ピストルと長剣とをつけていた。その朝九時に、ラツパが鳴り全樂隊が帝国の運護らなむを吹奏するにつれ、彼らが密集縦列をなしてやつてき、その砲兵中隊の一個を側面にし他の一個を中央にして、ジュナツプ街道とフリシュモンとの間に二列横隊に展開し、強力なる第二線の戦闘位置についた時、全軍は彼らの威風を嘆賞したものだ。その第二線はナポレオンがいかに巧みに配置したもので、左側にはケレルマンの胸甲騎兵を有し、右端にはミローの胸甲騎兵を有し、いわば鉄の両翼をそなえたがようだった。

副官ベルナルは彼等に皇帝の命令を伝えた。ネーは剣を抜いて先頭に立った。偉大な騎兵隊は動き出した。

恐るべき光景が現われた。

それらの騎兵は、剣を高く上げ、軍旗を風にひるがえし、ラツパを吹き鳴らし、師団ごと縦列を作り、ただ一人のごとく同一な運動の下に整然として、城壁をつき破る青銅の

撞角のごとくまっしぐらに、ラ・ベル・アリアンスの丘を駆けおり、既に幾多の兵士の倒れてる恐るべき窪地くぼちに飛び込み、戦雲のうちに姿を消したが、再びその影から出て、谷間の向こうに現われ、常に密集して、頭上に破裂する霰弾さんだんの雲をついて、モン・サン・ジャン高地の恐ろしい泥濘でいねいの急坂を駆け上って行つた。猛烈に堂々と自若として駆け上つていった。小銃の音、大砲の響きの合間にその巨大なる馬蹄ばていの響きは聞かれた。二個師団であつて二個の縦列をなしていた、ヴァティエの師団は右に、ドロールの師団は左に。遠くからながむると、あたかも高地の頂の方へ巨大なる二個の鋼鉄の毒蛇どくじやがはい上がつてゆくがようだった。それは一つの神変のごとくに戦場を横断していった。

かくのごとき光景は、重騎兵によつてモスコヴァの大角面堡ほが占領された時いらい、かつて見られない所であつた。ミュラーはもはやいなかったが、ネーは再びそこにいた。あたかもその集団は一つの怪物となりただ一つの魂を有するがようだった。各中隊は環状をなした水蛭みずびるの群れのごとく波動しふくれ上がつていた。広漠たる戦雲の所々の断れ目からその姿が見られた。甲かつちゆう 青と叫喚と剣との交錯、大砲とラツパの響きのうちに馬背のすさまじい跳躍、整然たる恐るべき騷擾そうじよう、その上に多頭蛇の鱗うろこのごとき彼等の胸甲。かかる物語はあたかも現今と異なる時代に属するかの観がある。これに似寄つた光景は

たしか古代のオルフェウスの叙事詩中に出ている。そこには、人面馬体をそなえてオリンポスの山を乗り越えた、不死身ふじみの壮大なる恐るべきタイタン族、サントールいにし、古えのイパントロープ、すなわち神にして獣なるあの怪物のことが、語られている。

不思議にも同数であったが、二十六個大隊のイギリス兵がそれらの二十六個騎兵中隊を迎え撃たんとしていた。高地の頂の後ろに、掩蔽えんぺいされた砲座の影に、イギリス歩兵は二個大隊ずつ十三の方陣を作り、第一線に七個方陣、第二線に六個方陣をそなえて二線に陣を立て、銃床を肩にあて、まさにきたらんとするものをねらい撃ちにせんとして、静かに鳴りをひそめて身動きもせずに待ち受けていた。彼らには胸甲騎兵の姿が見えず、胸甲騎兵にも彼らの姿が見えなかった。彼らはただ人馬の潮の駆け上がって来る響きに耳を澄ましていた。その三千騎のしだいに高まる響きを、大速歩の馬の交互に均斉した蹄ひづめの音を、甲冑かっちゅうの鳴る音を、剣の響きを、そして一種の荒々しい大きな息吹いぶきの音を聞いていた。恐るべき一瞬の静寂が来ると、次に忽然こっぜんとして、剣を高くふりかざし、腕の長い一列が高地の頂に現われ、兜かぶととラツパと軍旗と、それから灰色の髯ひげをはやした三千の頭が「皇帝万歳！」を叫びながら現われた。すべてそれらの騎兵は今や高地の上に出現し、あたかも地震の襲いきたったがようだった。

と突然に、惨憺^{さんたん}たる光景を呈した。イギリス軍の左方、フランス軍の方からいえば右方に当たつて、胸甲騎兵の縦列の先頭は恐るべき叫びをあげて立ち上がった。方陣をも大砲をも殲滅^{せんめつ}せんとする狂猛と疾駆とに駆られ熱狂して高地の頂点に達した胸甲騎兵は、彼らとイギリス兵との間に一つの溝^{みぞ}を、一つの墓穴を見いだしたのである。それはオーアンからの凹路^{おうろ}であつた。

それこそ恐怖すべき瞬間だつた。峡谷が、意外にも、馬の足下に断崖^{だんがい}をなし、両断崖の間に二尋^{ひろ}の深さをなし、口を開いてそこに待ち受けていた。その中に第二列は第一列を突き落とし、第三列は第二列を突き落とした。馬は立ち上がり、後方におどり、仰向^{あおもむけ}に倒れ、空中に四足をはねまわし、騎兵を振り落とし押しつぶした。もはや退却の方法はない。全縦隊は既に発射された弾丸に等しかった。イギリス軍を粉碎せんための力は、かえつてフランス軍を粉碎した。苛酷な峡谷は自ら満たさずんばやまない。人馬もろともそこまにころげ込んで、互いに圧殺しながらその深淵のうちに一塊の肉片と化してしまつた。そしてその墓穴が生きた人をもつて満たされた時、その上を踏み越えて他の者は通りすぎた。デュボアの旅団のほとんど三分の一はその深淵のうちに落ちてしまつた。

それが敗戦のはじまりであつた。

土地の言い伝えによれば、もちろん誇張されてはいようが、二千の馬と千五百人の人とがオーアンの凹路おうちろの中に埋められたという。その数にはもとより、戦闘の翌日そこに投げ込まれた他の死骸しかいのすべてをも算入したものであろう。

ついでに一言しておくが、一時間以前に単独攻撃をしながらルネブルグ隊の軍旗を奪ったのは、かかる難関に遭遇したデュボアの旅団であつた。

ナポレオンは、ミローの胸甲騎兵をしてその襲撃を行なわしめる前に、その土地をよく観測した。しかし凹路を認めることができなかった。それは高地の表面に一筋のしわをも見せていなかったのである。けれども、ニヴェルの街道との交差角を示している小さな白い礼拝堂から気づいて注意を呼び起こされ、彼は案内人のラコストに、おそらく障害物の有無についてであつたろうが、何か聞きただした。案内人は否と答えたのである。一人の百姓の頭の一振りからナポレオンの破滅は生じきたったとも言ひ得るであらう。

その他の災いがなお続いて起こりきたることになった。

しかしナポレオンはその戦いに勝利を得ることが可能であつたろうか？ 吾人ごじんは否と答える。何ゆえに？ 敵がウエリントンであつたがためか、またはブリュールヘルであつたがためか？ いや。それは実に神の意こころであつたからである。

ボナパルトがワートルローの勝利者となる、それはもはや十九世紀の原則に合っていない。ナポレオンがもはや地位を占めることのできぬ他の多くの事実が生じかかっていた。ナポレオンに対して快からぬ世運の意志は既に疾とくに宣言されていた。

この巨人の倒るべき時機はきたっていた。

人類の運命のうちにおけるこの一人の過度の重さは、平衡を乱していた。この個人はあのれ一個で、一団の天下の衆人よりもいつそうの重みを有していた。ただ一個の頭の中へ過剰に集中された人類の全活力、一人の頭脳へ集められた全世界、もしそれが持続したならば文化の破滅をきたしたであろう。いまや乱すべからざる最高の公明は、考慮をめぐらすべき時機に立ち至っていた。物質上の秩序におけると同じく精神上の秩序においても規定の重力関係があつて、その関係の基礎となるべき原則および要素は、おそらく不満の声を発していたであろう。煙る血潮、みちあふれた墳墓、涙にくれてる母親、それらは恐るべき論告者である。地にしてあまりに重き荷に苦しむ時には、神秘なる呻しんぎんの声が影のうちより発し、無限の深みにまでも達する。

ナポレオンは既に無窮なるもののうちにおいて告発され、その墜落は決定されていた。彼は神のわずらいとなっていた。

ワーテルローは一個の戦闘ではない。それは世界の方向転換である。

十 モン・サン・ジャンの高地

峡谷と同時に砲列が現われた。

六十門の砲と十三の方陣とはねらい撃ちに胸甲騎兵らの上に雷火を浴びせかけた。勇猛なるドロール将軍はそのイギリスの砲列に挙手の礼をしてみせた。

イギリスのすべての騎馬砲兵は、方陣の中に駆け込んでいた。胸甲騎兵らは足を止めるひまさえもなかった。凹路おつろの災厄さいやくは彼らの大半を失わせたが、彼らの勇気を減じさせることはできなかった。彼らはその数を減ずればますます勇気を増す類たぐいの勇士であった。ただヴァティエの縦隊のみがその災厄を受けたのだった。ネーはあたかも陷穽かんせいを予感したがごとくドロールの縦隊を左方にめぐるしたため、それは全部到着していた。

胸甲騎兵らはイギリスの方陣の上におどりかかった。

手綱をゆるめ、剣を口にくわえ、ピストルを手にして、全速力の突進、それが襲撃の様であった。

戦闘の中には、精神が人間を固めて兵士を立像たらしめ、全身の肉を花崗岩^{かこうがん}たらしむるほどの瞬間がある。イギリスの軍隊は、狂猛に襲撃されながら、たじろぎもしなかった。その時こそ、恐怖すべき光景になった。

イギリスの各方陣の全正面は同時に攻撃された。狂うがごとき旋風は彼らを取りまいた。しかしその冷然たる歩兵は何らの反応をも起こさなかった。第一列は膝を折り敷いて胸甲騎兵を銃剣の上に迎え、第二列は彼らに銃火を浴びせた。第二列の背後には砲兵が大砲に弾丸をこめ、方陣の前面は開き、霰弾^{さんだん}の噴出をやり過ぎ、そしてまた口を閉じた。胸甲騎兵らはそれに応ずるに蹂躪^{じゅうりふ}をもつてした。彼らの偉大なる馬は立ち上がり、戦列をまたぎ越し、銃剣の上をおどり越え、そしてそれらの生きたる四壁のうちに巨大な体躯^{たいいく}を横たえた。砲弾は胸甲騎兵らの中に穴をあけ、胸甲騎兵らは方陣の中に穴をあけた。隊列は馬に粉碎されて形をなくした。銃剣は人馬の腹部を貫通した。かくておそらく他に見るを得ない異様な殺傷を現出した。方陣はその狂暴な騎兵によって破損されたが、崩壊せずには縮小した。無尽蔵の霰弾は攻撃軍のまんなかに破裂した。その戦闘の光景は凄惨^{せいさん}をきわめた。方陣はもはや隊伍ではなくて噴火口であった。胸甲騎兵はもはや騎兵隊ではなくて暴風雨であつた。各方陣は雲霧に襲われた火山であり、溶岩^{ようがん}は雷電と争闘した。

右端の方陣は、掩蔽物えんぺいぶつがなく最も露出していたので、衝突の初めに早くもほとんど全滅をきたした。それはハイランドの第七十五連隊でできていた。中央にあった風笛ふうてきの吹奏者は、周囲で戦友らが殲滅せんめつされる間に、故郷の森や湖水を思い浮かべた憂鬱ゆううつな目を呆然ぼうぜんとして伏せ、太鼓の上に腰をかけ、腕に風笛をかかえ、故郷の山間の歌を奏していた。それらのスコットランドの兵らは、あたかもギリシャ人らがアルゴスのことを思い起こしながら死んだように、ベン・ロジアンのことを思いながら死ぬのであった。一人の胸甲騎兵の剣は、風笛とそれを抱えてる腕とを打ち落とし、歌手を殺しながらその歌の音を止めさせた。

胸甲騎兵らは峡谷の災害に数を減ぜられて、比較的少数でありながら、そこでほとんどイギリス軍の全部と渡り合った。しかし彼らはその数を補うに十人分の働きをもっていた。そのうちにハンノーヴル兵の数隊はたわみ初めた。ウェリントンはその様を見た、そして手の中の騎兵を思いついた。もしナポレオンが同じ時に手中の歩兵を思いついていたならば、彼は勝利を得ていたであろう。その失念は彼の取り返しのかね大過であった。

襲撃を加えていた胸甲騎兵らは、突然襲撃を被ったのを感じた。イギリス騎兵は彼らの背後に迫っていた。前には方陣があり、後ろにはソマーセットがあつた。ソマーセットは

千四百の近衛竜騎兵を率いていた。また彼は右にドイツの軽騎兵を指揮してるドルンベルグを有し、左にはベルギーのカラビーヌ騎兵を指揮してるトリップを有していた。胸甲騎兵は歩兵と騎兵とから前後左右より攻撃され、四方に敵対しなければならなかった。しかもそれが何であろう。彼らは旋風であった。その勇氣は筆紙のつくし難いところとなった。その上、彼らは背後にもたえず鳴り響く砲門を受けていた。それらの退くを知らぬ勇者の背後を傷つけんがためには、それまでにしなければならなかったのである。彼らの胸甲の一つは、ビスカイヤン銃弾で左の肩胛骨けんこうこつあたりに穴を明けられたのが、いわゆるワートルローの博物館という陳列品のうちに今日存している。

かくのごときフランスの勇士に対しては、かくのごときイギリス兵を要したのであった。それはもはや混戦ではなかった。陰影であり、狂乱であり、精神と勇氣との熱狂的な憤怒であり、稲妻のごとき剣の颯風さふうであった。たちまちにして千四百の近衛竜騎兵は八百になされてしまった。その中佐フーラーは戦死した。ネーはルフェーヴル・デヌーエットの槍騎兵と軽騎兵とを引きつれて駆けつけてきた。モン・サン・ジャンの高地は、奪取され、奪還され、また奪取された。胸甲騎兵は騎兵の方をすてて歩兵の方へ立ち直った。あるいはなおよく言えば、その恐るべき群集は互いにつかみ合って一団となっていたのである。

方陣はなおさえていた。十二回の突撃がなされた。ネーはその乗馬を殺されること四回に及んだ。胸甲騎兵の半ばは高地の上にたおれた。その戦鬪は二時間にわたった。

イギリス軍はそのためにはなはだしく動揺した。もし胸甲騎兵らが凹路おうろの災厄さいやくのために最初の突撃力が弱められていなかったならば、彼らは敵の中央を撃破し勝利を決定していたろうとは万人の疑わないところである。その非凡なる騎兵は、タラヴェラおよびバダホースの戦いに臨んだことのあるクリントンをして色を失わしめた。四分の三まで打ち負かされたウエリントンすらも、さすがに賛嘆あっぱれの声を発した。彼は半ば口のうちで言った、

「天晴あっぱれ！」

胸甲騎兵らは、十三の方陣の中七つを殲滅せんめつし、六十門の砲をあるいは奪取しあるいは破壊し、イギリスの連隊旗六個を奪って、それを三人の胸甲騎兵と三人の近衛軽騎兵とがラ・ベル・アリアンスの農家の前にいる皇帝のもとに運んで行った。

ウエリントンの地位は險悪になっていた。その異常な戦いは、あたかもたけり立つた二人の手負いの勇士の間における決鬪たたかのようだった。互いに闘たたかいなお抵抗しながら、その血潮をすべて失いつつある。両者のいずれが第一に倒れるであろうか。

高地の鬪争は引き続いた。

どのくらいまで胸甲騎兵らはつき進んでいたか？ だれもそれを語ることはできないであろう。ただ確実なことといえば、戦いの翌日、モン・サン・ジャンの馬車の積み荷計量台の素建すだての中に、すなわち、ニヴェルとジュナツプとラ・ユルプとブラッセルとの四つの道が会って交差している所に、一人の胸甲騎兵とその馬とのたおれてるのが発見されたことだった。その騎兵はイギリスの戦線を突破したのだった。その死骸しがいを引き起こした人々の一人は、現になおモン・サン・ジャンに住んでいる。彼の名はドアーズと言って、当時十八歳だったのである。

ウエリントンは運の傾いてきたのを感じた。危機は迫っていた。

胸甲騎兵らは敵の中央を突破し得なかったという意味では成功しなかった。その高地は皆の有であり、まただれの有でもなかった。そして要するに、大部分はなおイギリス軍の手中にあった。ウエリントンは村と一番高い平地とを有していた。ネーは高地の縁と斜面とをしか有していなかった。両方ともここを墳墓の地と根をおろしてるかのようなようだった。

しかしイギリス軍の衰弱はもはや回復すべからざるもののように見えた。その軍隊の出血は恐るべきものだった。左翼のケンプトは援兵を求めた。「一兵もない、そこで戦死せよ！」とウエリントンは答えた。それとほとんど同時に両軍の疲憊ひはいを語る珍しい一致であ

るが、ネーもナポレオンに歩兵を求めてきた。ナポレオンは叫んだ、「歩兵！どこから手に入れてくれというのか、わしに歩兵をこしらえよとでもいうのか？」

けれども、イギリス軍の方がいつそう悩んでいた。鉄の鎧よろいと鋼鉄の胸当てとをつけたその偉大な騎兵隊の狂猛な圧力は、歩兵を押しつぶした。軍旗のまわりに立っている数人の兵が、一個連隊の位置を示してるものもあつた。そういう一隊はもはや大尉あるいは中尉によつて指揮されてるのみだつた。ラ・エー・サントにおいて既に痛手を被つてるアルテンの師団は、ほとんど全滅していた。ヴァン・クルーツエ旅団の勇敢なベルギー兵は、ニヴェルの道に沿つた麦畑のうちに莫ばくだい大な死しかばね屍を横たえていた。一八一一年にはスペインにおいてフランス軍に交じつてウエリントンと戦い、今一八一五年にはイギリス軍と結んでナポレオンと戦つていたオランダの擲弾兵てきだんへいらは、ほとんど生き残つたものがなかつた。将校の損失はなおいちじるしかった。翌日自分の片脚を葬つたアクスブリツヂ卿は、もう膝を砕かれていた。その胸甲騎兵の戦闘においてフランス軍の方では、ドロール、レリティエ、コルベール、ドノプ、トラヴェール、およびブランカールらが戦闘力を失つていたのに対し、イギリス軍の方では、アルテンは負傷し、バーンは負傷し、デランシーは戦死し、ヴァン・メルレンは戦死し、オンプテータは戦死し、ウエリントンの幕僚は大半

戦死していた。かくしてその流血を比較する時には、イギリスの方がはなはだしかった。近衛歩兵の第二連隊は五人の中佐と四人の大尉と三人の旗手とを失っていた。歩兵第三十連隊の第一大隊は二十六人の将校と百十二人の兵卒とを失っていた。ハイランド兵第七十九連隊では、二十四人の将校が負傷し、十八人の将校が戦死し、四百五十人の兵士が戦死していた。クンベルランドのハンノーヴル驃騎兵^{ひようきへい}は、後に裁かれて罷免^{ひめん}されることになった連隊長ハツケを頭として、全連隊が混戦の前に手綱をめぐらして、ソアーニユの森の中に逃げ込み、ブラッセルに至るまで壊走^{かいそう}の余波を及ぼした。輜重車^{しちようしゃ}、彈藥車^{だんりく}、行李^{しや}車^{しや}、負傷兵をいっぱい積んだ車などは、フランス軍がそこに足場を得て森に近よつて来るのを見て、先を争つて森に逃げ込んだ。フランス騎兵になぎ払われたオランダ兵は、「あぶないぞ！」と叫んでいた。ヴェール・クークーからグレナンデルに至るまで、ブラッセルの方面へ約二里の距離にわたつて、ただ一面に逃亡兵のみであつた事は、今に生きている実見者らの語るところである。その恐慌は非常なものであつて、マリーヌにいたコンデ大侯とガンにいたルイ十八世とにまでもおよんだ。モン・サン・ジャンの農家のうちに建てられた野戦病院の背後に梯隊^{ていたい}をなしていたわずかな予備隊と、左翼を防いでいたヴィヴァイアンとヴァンドルールとの二個旅団を除くのほか、ウエリントンはもはや騎兵を

有しなかった。多くの砲門は破壊されて横たわっていた。それらの事実は一シールンによって告白されたところである。プリングルはその災滅を誇張して、イギリス・オランダの軍隊は三万四千になされたときまで言っている。鉄石大公ウエリントンはそれでもなお自若としていた、しかしその唇は青ざめていた。^{くちびる}イギリスの参謀部に従って観戦していたオーストリアの軍事監ヴァンチエントとスペインの軍事監アラヴァとは、大公の敗北と思っていた。五時に、ウエリントンは時計を出してみた、そして次の憂鬱^{ゆううつ}な言葉がつぶやかれるのが聞かれた、「ブリュールヘルが来るか、夜が来るか！」

ちやうどその頃であつた、銃剣の遠い一線が、フリシュモンの方に当たつて高地の上にひらめき出した。

ここにおいて、この巨大なる活劇に変転が起こつた。

十一 ナポレオンに不運にしてブユーローに幸運なる案内者

ナポレオンの痛ましい誤算は世の知るところである。いたずらに待ちあぐめられたグルーシーと、不意に現われきたつたブリュールヘル。生命^{いのち}にあらで死がやってきたのである。

運命はかくのごとく流転する。世界の帝王の王座が待たれていたのに、セント・ヘレナが見えてきた。

ブリュールヘルの副官ブーローの案内人となっていた牧者の少年が、森林から進出するのにはフランスノアの下手しもてからよりもフリシユモンの上手かみてからすることゝを、もし彼に勧めていたならば、十九世紀の形勢はおそらく現今と異なっていたであろう。ナポレオンはワテルローの戦いに勝ったであろう。フランスノアの下手しもて以外の道によって進んだならば、プロシア軍は到底砲兵を通すことのできない谷間に出て、ブーローは到着し得なかったであろう。

もし一時間も遅延していたなら、プロシアのムツフリング將軍も言ったごとく、ブリュールヘルはもはやウエリントンがそこに支持してるのを見いださなかったであろう。「戦いは敗れていた」であろう。

もはやブーローが到着しなければならぬ時間であったことは、人の皆察するところである。その上彼はもうよほど遅延していたのである。彼はディオーン・ル・モンに露営していたのであつて、ふつぎよう 払 暁より出発していた。しかし道路は通行に困難をきわめ、各師団は泥濘でいねいの中に足を取られた。砲車は轍わだちの中に轂こしきの所までも没した。その上、ワーヴル

の狭い橋でデール河を越さなければならなかった。そしてまたその橋に通ずる街路^{まち}にはフランス軍が火を放っていた。砲兵の弾薬車と行李車^{こうり}とは、焼けつつある軒並みの間を通ることができなくて、鎮火するまで待たなければならなかった。ブーローの前衛がまだシャペル・サン・ランベールに着かない前に、既に正午になっていた。

ワーテルローの戦いは、二時間早く初められていたならば、午後四時には終わっていたはずで、ブリュールは既にナポレオンによつて勝利をあげられた戦場に到来することになったであろう。われわれ人間の眼界を逸するあの無窮なるものにのみ順応してゐる広大なる偶然事は、すべてかくのごときものである。

正午ごろ早くも皇帝は、望遠鏡をもつてまつききに、はるか地平線の一点にある物を認めて、それに注意を集めた。彼は言った、「彼方に雲らしいものが見えるが、どうも軍隊らしい。」それから彼はダルマシー公に尋ねた、「スールト、あのシャペル・サン・ランベールの方に見えるものを君は何と思う？」元帥は双眼鏡をその方へ向けて答えた、「四、五千の軍勢です、陛下。グルーシーに違いありません。」それはなお遠く靄^{もや}の中にあつて動かなかつた。すべての幕僚の双眼鏡は皇帝のさし示すその「雲」を見きわめようとした。ある者は言った、「佇^{ちよりつ}立してゐる縦隊である。」また多くの者は言った、「樹木である。」

ただその雲はじつと動かないでいることだけは事実であつた。皇帝はドモンの輕騎兵の一隊をさいて、その不明な一点の方へ偵察につかわした。

ブューローは實際動いていなかった。彼の前衛はきわめて薄弱であつて、何事もなし得なかつたのである。彼は本隊を待つていなければならなかつた。そしてまた、戦線にはいる前に兵力を集中せよとの命令を受けていた。しかし五時に、ウェリントンの危険を見て取つて、ブリューヘルはブューローに攻撃の命令を下し、次の著名な言葉を發した、「イギリス軍に息をつかせなければいけない。」

それから間もなく、ロステイン、ヒレル、ハツケ、リツセルらの各師団は、ロボーの軍団の前面に展開し、プロシアのウィルヘルム大侯の騎兵はパリスの森から現われ、ブランスノアは火炎に包まれた。そしてプロシアの砲弾は、ナポレオンの背後に予備として控えていた近衛兵の列中まで雨とそそぎ初めた。

十二 近衛兵

その後のことは人の知るとおりである。第三の軍勢の突入、戦闘の壊裂、にわかにとど

ろく八十六門の砲、ブユーローとともに到着したピルヒ一世、ブリューヘル自ら率いたツイーテンの騎兵、押し返されたフランス軍、オーアンの高地から掃蕩そうとうされたマルコンネ、パプロットから駆逐されたデュリュット、退却するドンズローとキオー、半側面より攻撃されたロボー、援護を失ったフランス各連隊の上に薄暮に落ちかかってきた新戦鬭、攻勢を取って進んできたイギリス軍の全線、フランス軍のうちに開けられた大きな穴、互いに相助くるイギリスとプロシアとの霰弾さんだん、殲滅戦せんめつせん、正面の惨劇、側面の惨劇、その恐るべき崩壊の下に戦線に立つ近衛兵。

近衛兵らはまさに戦死の期の迫つてゐるのを感じるや、「皇帝万歳！」を叫んだ。ついにその喊声かんせいにまで破裂した彼らの苦悶くもんほど人を感動せしむるものは、およそ歴史を通じて存しない。

その日空は終日曇つていた。しかし突然その瞬間に、晩の八時であつたが、地平線の雲が切れて、ニヴェルの道の楡にれの木立ちを通して、没しゆく太陽の赤いものすごい広い光を地上に送った。その太陽もアウステルリッツにおいてはのぼるのが見られたのであつたが、近衛の各隊は、その終局のために各將軍によって指揮されていた。フリアン、ミシエル、ロゲー、アルレー、マレー、ポレー・ド・モルヴァン、皆そこわしにいた。驚おどろの大きな記章を

つけた近衛擲弾兵^{てきだんへい}の高い帽子が、一様に列を正し肅々としておごそかに、その混戦の靄^{もや}のうちに現われた時、敵軍すらもフランスに対する畏敬の念を覚えた。あたかも二十有余の戦勝は翼をひろげて戦場に入りきたったかの觀があつて、勝利者たる敵軍も敗者たる心地がして後ろに退つた^{さが}。しかしウエリントンは叫んだ、「起て、近衛兵、正確にねえ！」籬^{まがき}の後ろに伏していたイギリス近衛兵の赤い連隊は立ち上がった。しのつくばかりの霰弾は、フランスの驚の勇士のまわりに風にひるがえつて三色旗に雨注した。全軍は殺到し、無比の殺戮^{さつりく}が初まつた。皇帝の近衛兵らは、周囲に退却してゆく軍隊を、そして敗北の広漠たる動揺を、影のうちに感じた。皇帝万歳！ の声が、逃げろ！ の叫びに代わつたのを、彼らは聞いた。そしてその逃亡を後ろにしながら、一步ごとにますます雷撃を受け、ますます戦死しながら、前進を続けた。一人の遼^{しゅんじゅん}巡する者もなく、一人の怯懦^{きようだ}な者もいなかった。その軍勢のうちにおいては、一兵卒といえども將軍と同じく英雄であつた。自ら滅亡の淵^{ふち}に身を投ずることを避けた者は一人もなかった。

熱狂したネーは、死に甘んずるの偉大さをもつて、その颶風^{ぐふう}のうちにあらゆる打撃に身をさらした。そこで彼の五度目の乗馬は倒れた。汗にまみれ、目は炎を発し、口角には泡^{あわ}を立て、軍服のボタンは取れ、一方の肩章は敵の近衛騎兵の剣に打たれて半ば切れ、大驚

の記章は弾丸にへこみ、全身血にまみれ、泥にまみれ、天^{あつぱれ}晴な武者振りをもつて、手には折れた剣を握り、そして言った、「戦場においてフランスの元帥はいかなる死に様をするか、きたつて見よ！」しかしそれも甲斐^{かい}なくして、彼は死ななかつた。彼は獐^{どう}猛^{もう}であり、また憤激していた。彼はドルーエ・デルロンに問いを投げた、「君は死に行かないのか、おい！」兵士らをつかみにして粉碎しつつある砲弾のうちに彼は叫んだ、「そして俺にあたる弾丸はないのか！ おお、イギリスの砲弾は皆俺の腹の中にはいつてこい！」不運なるネーよ、汝はフランスの弾丸に打たれんがために取り置かれていたのである！

（訳者注 彼はナポレオンの転覆後王党のために銃殺されたのである）

十三 破滅

近衛兵の背後に起こつた壊走は痛ましいものであつた。

軍隊はにわか四方から、ウーゴモン、ラ・エー・サント、パプロット、フランスノアなどから同時に退いてきた。裏切り者！ という叫びに次いで、逃げろ！ という叫びが起こつた。壊乱する軍隊は雪崩^{なだれ}のごときものである。すべてはたわみ、裂け、砕け、流れ、

ころがり、倒れ、押し合い、先を争い、急転する。異常なる崩壊である。ネーは一馬を借りてその上に飛び乗り、帽子もなく、えり飾りもなく、剣もなく、ブラッセルからの道路をさえぎって、イギリス軍とフランス軍とを同時に食い止めた。彼は軍隊を押し止めんとつとめ、呼びかけ、怒号し、壊走かいそうのうちにつつ立った。しかし軍勢はあふれて彼をのり越えてゆく。兵士らは「ネー元帥万歳！」を叫びながら彼から逃げてゆく。デュリュットデュリュットの二個連隊は驚駭きょうがいして右往左往し、ドイツ槍騎兵の剣とケンプト、ベスト、バック、ライラントの各旅団の銃火との間に、あたかもはね返されてるようだった。混戦の最悪なるものはすなわち壊走である。戦友も逃げんがためには互いに殺し合う。騎兵隊と歩兵隊とは互いにぶつかって碎け散乱する。戦いの大いなる泡あわである。一端のロボーと他端のレイユとはともにその波のうちに押し流された。ナポレオンは近衛兵の残兵をもつて城壁としようとしたが無効であった。彼はいたずらに手もとの騎兵数個中隊を最後の努力のうちに失ってしまった。キオーはヴィヴァイアンの前に退き、ケレルマンはヴァンデロイルの前に退き、ロボーはビューローの前に退き、モーランはピルヒの前に退き、ドモンとシュベルヴィックはプロシアのウィルヘルム大侯の前に退いた。皇帝の騎兵隊を率いて突撃したギイヨーは、イギリス竜騎兵の足下に倒れた。ナポレオンは逃走兵のうちを駆け回って、

彼らに説き、促がし、威嚇し、切願した。その朝皇帝万歳を叫んだすべての口は、今はただ茫然とうち開いてるのみだった。彼らはほとんど皇帝をも見知らないがようだった。

新たにやってきたプロシアの騎兵は、突進し、疾駆し、なぎ払い、切りまくり、粉碎し、殺戮し、殲滅せんとした。馬は飛び出し、大砲はそこに残された。輜重兵らは弾薬

車から馬をはずし、その馬を奪つて逃走した。行李車は四つの車輪を上にして転覆し、道をふさいだ。ためにまたそこで多くの虐殺を起こさした。人々は互いに押しつぶし、踏み蹂り、死せる者をも生ける者をも乗り越して走つた。腕と腕とはつかみ合つた。狂気の群集は、道路を、小道を、橋を、平野を、丘を、谷を、森を満たし、四万の兵士の逃亡はそれをふさいだ。叫喚の声、絶望の声、麦畑の中に投げ込まれた背囊と銃、わずかに剣によつて切り開かれる通路、もはや戦友もなく将校もなく將軍もなく、ただ名状すべからざる恐怖のみだった。ツイーテンは思うがままにフランス軍をなぎ立てた。獅子は子鹿と化していた。かくのごときがその逃走の光景であつた。

ジュナツプにおいて、立ち直り、対抗し、敵を阻止せんと、人々は努めた。ロボーは三百の兵を集めた。村の入り口には防塞が施された。しかしながら、プロシアの霰弾の第一の連発によつて、全軍は再び敗走をはじめ、ロボーは捕虜になつた。今日なお、ジュ

ナツプにはいる数分前の所、道の右側にある煉瓦の破屋の古い破風に、その霰弾の連発の跡が刻まれてるのが見られる。プロシア軍はジュナツプに突入した。かくもすみやかに勝利を得たことに彼らは憤激していたに違いない。追撃は猛烈であつた。ブリューヘルは敵を殲滅するように命じた。ロゲーは、フランスの全擲弾兵を死をもつて威嚇して、各自に一人のプロシア兵の捕虜をつれきたらしめんとする、痛むべき実例を残していた。しかし今やブリューヘルはロゲーにもまさつて残虐であつた。年少近衛兵の將軍デュエムは、ジュナツプのある宿屋の門口に追いつめられ、死の部下ともいうべき一輕騎兵に劍を差し出すと、輕騎兵はその劍を取つてその捕虜を刺した。戦勝は敗北者を虐殺することによつて完成された。しかし吾人は歴史なるがゆえに、吾人をして処罰的に言わしむれば、老ブリューヘルは自らおのれの名を汚した。かくてその残虐は災害をなお大ならしめた。絶望的の壞走は、ジュナツプを過ぎ、レ・カトル・ブラを過ぎ、ゴスリーを過ぎ、フラ―ヌを過ぎ、シャールロアを過ぎ、テュアンを過ぎ、そして国境に至つてようやく止まつた。悲しいかな、いかなる者がそのように逃亡したのであるか？ それは実にあの大陸軍であつたのである。

有史いらい、かつて見なかつた最高の勇武の、その惑乱、その恐慌、その滅落、それは

ゆえなくして起こったことであろうか？ いや。上帝の巨大なる手の影はワーテルローの上に落とされていたのである。それは運命の一日であつた。人間以上の力がその日を現出せしめたのであつた。それゆえに、彼らの頭も恐怖のうちに屈したのである。それゆえに、彼らの偉大なる魂も剣をすてて降つたのである。全欧州を征服した人々も一敗地に塗れて、何ら言葉を発する術もなく、何らなすべき術もなく、ただ影のうちに恐ろしきもののあるのを感じた。それは運命のしからしむるところであつた。その日、人類の前景は変じた。ワーテルローは十九世紀の肱金である。その偉人の消滅は、一大世紀の出現に必要であつた。人の左右し得ざるある者がそれを支配した。英雄らの恐慌はそれで説明せらるる。ワーテルローの戦いのうちには、雲霧以上のものがあつた。流星のごときものがあつた。神が通過したもうたのである。

夜の幕のおりる頃、ジュナツプの近くの野の中で、ベルナルとベルトランとは、考えるにふけた荒々しい不気味な一人の男の外套の裾をとらえて引き止めた。その男はそこまですで壊走の波に押し流されてきて、馬から地上におり立ち、馬の手綱を小脇にはさみ、昏迷した目つきをして、ただ一人ワーテルローの方へ引き返さんとしていたのである。それはなお前進せんと試みてるナポレオンであつた。崩壊した夢想をなお夢みてる偉大なる夢中

遊行者であつた。

十四 最後の方陣

近衛兵の数個の方陣は、流れの中の巖のごとくに、壊走の中にふみ止まつて、夜になるまで支持していた。夜はきたり、また死もきた。彼らはその二重の暗黒を待っていた。その包囲のうちに泰然と身を任した。各連隊は互いに孤立し、四方に寸断されてる全軍との連絡はなく、各自に最後を遂げていった。その最後の戦鬪をなさんがために彼らは、あるいはロツソムムの高地の上に、あるいはモン・サン・ジャンの平地の中に、陣地を占めていた。見捨てられ、打ち敗られ、恐るべき様をしたそれら陰惨な方陣は、そこに驚くべき臨終を遂げた。ユルム、ヴァグラン、イエナ、フリーランは、そのうちで戦死を遂げた。まだ薄明りの晩の九時ごろ、モン・サン・ジャンの高地の裾に、なおその方陣の一つが残っていた。そのいたましい谷間のうちに、さきには胸甲騎兵らがよじのぼり今はイギリス兵の集団に満たされているその坂の麓に、勝ちほこった敵砲兵が集中する砲火の下に、弾丸の恐るべき雨注の下に、その方陣は戦っていた。それはまだ無名の一将校カンブロン

又によつて指揮されていた。敵弾の斉発ごとに、方陣はその兵数を減じ、しかもなお応戦していた。絶えずその四壁を縮小しながら、霰弾さんだんに応答するに銃火をもつてした。逃走兵らは息を切らして時々立ち止まりながら、しだいに弱りゆくその陰惨な雷鳴のごとき響きを、遠くからやみのうちに聞いたのだつた。

その一隊がもはや一握りの兵数にすぎなくなつた時、その軍旗がもはや一片のぼろにすぎなくなつた時、弾丸たまを打ちつくした彼らの銃がもはや棒切れにすぎなくなつた時、うずたかい死骸しがいの数かもはや生き残つた集団よりも多くなつた時、その莊嚴ひんしなる瀕死の勇者のまわりにはある聖なる恐怖が勝利者らのうちに萌きざして、イギリスの砲兵は息をつきながら沈黙した。がそれは一種の猶予にすぎなかつた。それらの勇士のまわりには、幻影の蝟いしゆ集うするがごとく、騎馬の兵士の影像、大砲の黒い半面、車輪や砲架を透かして見える白い空などが取り巻いていた。戦いの底の雲霧のうちに英雄らがいつも瞥べっけん見する死の巨大なる頭は、彼らの上に進み出て彼らを見つめていた。彼らは大砲の装弾せらるる音を薄明りの影のうちに聞くことができた。夜のうちに虎とらの目のごとくひらめく火繩ひなわは、彼らの頭のまわりに円を描き、イギリスの砲列のすべての火繩桿ひなわかんは大砲に近づけられた。その時、感動してそれらの勇士の上に最後の一瞬を押し止めて、一人のイギリスの將軍は、ある者

はそれをコルビールであつたといい、ある者はメートランドであつたといっているが、彼らに向かつて叫んだ、「勇敢なるフランス兵ら、降伏せよ！」カンブロンヌは答えた、「糞ッ！」

十五 カンブロンヌ

フランスの読者は作者から尊敬されることを欲するであろうから、おそらくフランス人がかつて発し得た最もりっぱな言葉を、ここにくり返してはいけなかも知れない。歴史中に崇高なものを立証することは禁制である。

しかし吾人は、危険と災禍を顧みずして、その禁制をも犯したのである。

ゆえにあえて吾人は言う。それらの巨人らのうちに、なお一人のタイタン族が、カンブロンヌがいたのである。

あの言葉を発して、次に死する！ それ以上に偉大なることがあるか。なぜならば、死を欲することはすなわち実際に死することである、そして、砲撃されながらもなお彼は生き残ったとはいえ、それは彼の罪ではないのである。（訳者注 実際は彼はなお戦死せ

ずして捕虜になった）

ワーテルローの戦いに勝利を得た者は、敗北したナポレオンでもなく、四時に退却し五時に絶望に陥ったウエリントンでもなく、自ら戦闘に加わらなかつたブリューヘルでもない。ワーテルローの戦いに勝利を得た者は、彼カンブロンヌである。

おのれを殺さんとする雷電をかくのごとき言葉で打ちひしぐことは、すなわち勝利を得ることである。

破滅に向かつてその答えをなし、運命に向かつてその言を発し、後にできる獅子像^{しし}に対^{おうろ}してそういう基礎を与え、前夜の雨やウーゴモンの陰險な城壁やオーアンの凹路^{おうろ}やグルーシーの遅延やブリューヘルの到来などに対してその抗弁をなげつけ、墳墓のうちにあつてあざわらい、あたかも人々の倒れたらん後にもなおつつ立ち、欧州列強同盟を二音のうちに溺^{おぼ}らし、既にシーザーらに知られていたその厠^{かわや}を諸国王にささげ（訳者注 糞ッ！の一語参考）、フランスの光輝をそこに交じえながら最低の一語を最上の一語となし、肉食日火曜日をもつて傲然^{ごうぜん}とワーテルローの幕を閉じ、レオニダスに補うにラブレール（訳者注 十六世紀フランスの物語作者にして辛辣なる皮肉諷刺に秀ず）をもつてし、ほとんど口にし難い極端なる一言のうちにその勝利を約言し、陣地を失つてしかも歴史を勝ち得、

その殺戮さつりくの後になお敵をあざわらうべきものたらしむる、それは実に広大なることではないか。

それは雷電に加えたる侮辱である。それはアイスキロスの壮大さにまで達する。

カンブロンヌの一語はある破裂を感じさせる。それは輕侮のための胸の破裂であり、充滿くもんせる苦悶くもんの爆発である。だれが勝利を得たか？ ウェリントンか、いや、ブリューヘルなくんば彼は敗れていたのである。しからばブリューヘルか、いや。ウェリントンが初めに戦つていなかったならば、彼も終局を完まっうすることはできなかったはずである。彼カンブロンヌ、その最終にきたった一人、その世に知られざる戦士、その全戦闘中の極微なる一人は、そこに一つの虚構があるのを、破滅のうちに二重ににがにがしい虚構があるのを感じる。そして彼がその憤激に破裂する時、人々は彼に愚弄ぐろうを与える、生命を！ いかにして激怒せざるを得るか？

彼らはそこにいる、欧州のすべての国王らが、幸福なる將軍らが、雷電をはためかすジュピテルらが。彼らは十万の勝ちほこった兵士を有している、そしてその十万の後方には更に百万の兵士を。火繩には火がつけられて大砲は口を開いている。彼らは足下に近衛軍と大陸軍とを踏みにじっている。彼らは既にナポレオンを粉碎したところである。そして

もはやカンブロンヌが一人残っているのみである。手向かうものとはもはやその一個の蛆虫うじむしのみである。が彼は手向かう。そして彼は剣をさがすがごとくに一語をさがす。彼には生唾なまつばが湧く。そしてその生唾こそ彼の求むる一語である。その異常なしかも下らない勝利の前に、その優勝者なき勝利の前に、この絶望の男はすつくと立つ。彼はその雄大に圧倒さるるが、しかもその虚無をみる。そして彼はその上に痰たんを吐きかけるのみでは足れりとしな。数と力と物質との優勢の圧迫の下に、彼は心に一つの言葉を、糞くそを見いだす。くり返して言う。それを叫び、それをなし、それを見いだすこと、それは実に勝利者となることである。

大審判の精神は、危急の瞬間にこの無名の男の中に入りきたった。あたかもルー・ジュ・ド・リールがマルセイエーズ（訳者注 フランスの国歌）を見いだしたがごとくに、高きより来る息吹いぶきの幻によつて、カンブロンヌはワーテルローの言葉を見いだした。聖なる颶風ぐふうの一息は飛びきたつてその二人を貫通し、二人は慄然りっぜんと身を震わし、そして一人は最上の歌を歌い、一人は恐るべき叫びを発する。タイタンの軽侮のごときその一言を、カンブロンヌはただに帝国の名において全欧州に投げつけるのみではない。それではあまりに足りないであろう。彼はそれを革命の名において過去に投げつける。人はそれを聞いて、

巨人の古い魂がカンブロンヌのうちにあるのを認める。語るはダントンであり怒号するはクレベルであるかのようなのである。

カンブロンヌの一言に、イギリス人の声は答えた、「打て！」砲列は火炎を発し、丘は震動し、それらのすべての青銅の口からは最後の恐ろしい霰弾さんだんの噴出がほとばしり、地平を出る月の光にほの白く見える広い煙はまき上がった。そして煙が散じた時には、そこにはもはや何物も残っていなかった。恐るべき残兵らは殲滅せんめつされていた。近衛は全滅していた。生きたる角面堡ほの四壁はそこに横たわり、ただ死骸の間にそこそこにあるうごめきがようやくに見らるるのみだった。かくのごとくして、ローマの軍団よりも偉大なフランスの近衛諸連隊は、雨と血潮とに湿った地上に、陰惨な麦畑の中に、モン・サン・ジャンにおいて消滅したのである。いまやその場所を、ニヴェルの郵便馬車を御しているジョゼフが、朝の四時に、口笛を吹きつつ愉快げに馬を鞭むちうって通るのである。

十六 指揮官へは何程の報酬を与うべきか

ワートルローの戦いは一つの謎なぞである。勝利者にとっても敗北者にとっても、それは等

しく模糊^{もこ}たるものである。ナポレオンにとつては、それは一つの恐慌であつた。（終局を告げたる一戦、終了したる一日、救われたる誤れる方略、翌日のたしかなりし大成功、すべては恐慌をきたせる恐怖の一瞬によりて失われぬ。——ナポレオン、セント・ヘレナの口述。）そしてブリューヘルはそこに砲火を見たばかりであり、ウエリントンは少しも理解するところなかつた。報告を見てみるがよい。作戦日誌は曖^{あい}昧^{まい}であり、記述は混乱をきわめている。後者は口の中でつぶやき、前者はともっている。ジョミニはワーテルローの戦いを四つの時間にわけている。ムツフリングはそれを三段の変化に区分している。シヤラスのみがただ一人、ある点については吾人^{ごじん}は彼と異なつた見解を有しはするが、とにかく鋭い眼光をもつて、聖なる運命と争う人間の才力のその破滅の特相をつかんでいる。他のすべての史家はある眩惑^{げんわく}を感じ、その眩惑のうちに摸索している。実際それは、閃^{せん}々たる一日、軍国の崩壊である。そして諸国王らが啞然^{あぜん}たるまに、すべての王国をまき込み、武力の失墜と戦役の覆没とを導いた。

超人間的必然性の印せられたるその事変のうちには、人間の与える所は何もない。

ワーテルローをウエリントンより奪いブリューヘルより奪うことは、イギリスおよびドイツより何かを奪うことになるであらうか？ いや。光輝あるイギリスもいかめしきドイ

ツも、ワートルローの問題においては取るに足りない。幸いなるかな、民衆は痛ましき剣^{けん}戟^{けん}の暴挙の外にあつて偉大なることを得る。ドイツもイギリスもまたフランスも、剣の鞘^{さや}のうちに保たれてはいない。ワートルローがただいたずらなる剣の響きにすぎないその時代において、ドイツはブリューヘルの上にゲートを有し、イギリスはウエリントンの上にバイロンを有する。広大なる思潮の洶^{きよう}湧^{よう}は十九世紀に固有のものであり、そしてその曙^{あけぼの}のうちに、イギリスとドイツとは壮麗な光輝を有する。彼らはその思想するところによつて壮大なのである。彼らが文化にもたらした一般水準の啓発高揚こそ、彼らが内包していたものである。彼ら自らが源であつて、一つの事件が源ではない。十九世紀における彼らの強大は、その源をワートルローに有するものではない。ある戦勝の後に急速なる生長を遂ぐるものは、ただ野蛮な民衆のみである。それは暴風雨のために溢^{いっ}漲^{ちよう}した水流の一時の浮誇にすぎない。開化せる民衆はことに現代においては一将帥の幸運不運によつて地位を上下するものではない。人類のうちにおける該民衆の特有の重みは、単なる戦闘以上の何物かに由来するものである。幸いにも、その名誉、その威厳、その光明、その才能は、あの山師たる英雄や勝利者らが戦争と称する投機^{さかい}にかけることを得る骰子^{さい}の目ではない。往々にして、戦勝を失いつつ進歩を得、光榮少なくて自由多く、太鼓が黙して理

性が語ることがある。それは実に負くるが勝ちの勝負である。ゆえに、双方ともいずれについて冷ややかにワーテルローのことを語ろう。偶然のものは偶然に返し、神のものは神に返そう。かくして、およそワーテルローは何であるか？ 一つの勝利であるか？ いや。僥倖ぎようこうなる骰子の目にすぎない。

ヨーロツパによつて得られフランスによつて払われたる骰子の賭金かけきんである。

そこに獅子ししの像を建てるまでになることは、わけもないことだったのである。

ワーテルローは、その上、史上最も不思議な会戦である。ナポレオンとウエリントン、彼らは互いに敵ではなくて、両極端である。対偶アンチテーゼを好む神も、かつてこれほどはな

だしい対照とこれほど異様な対置とをこさしめたことはない。一方には、精確、予測、幾

何か、用心、確實にされたる退却、節約されたる予備兵、執拗しつようなる冷静、乱すべからざる

方式、地形を利用したる戦術、各隊を平衡せしむる戦術、繩墨じようぼく式の殺戮さつりく、時計を手

にして規定されたる戦い、任意行動のいつさいの禁止、古い古典的の勇氣、絶対の正整。

他方には、直感、察知、軍事的驚異、超人的本能、炎のいちべつ一瞥、驚わしのごとき目つきと雷電

のごとき打撃とのいい知れぬある物、傲然ごうぜんたる慄ひようかん悍かんさのうちにおける驚くべき技能、

深奥なる魂のあらゆる不可思議、運命との連結、召喚されていわば服従を強いられたる川

や野や森や丘、戦場を虐待するまでに立ち至る専制者、戦略に交じえられたる天運を増大せしめつつしかも乱しつつそれに対する信念。ウエリントンは戦いのバレーム（訳者注 有名なる計算数学者）であり、ナポレオンは戦いのミケランゼロであった。そしてこのたびは天才は計算に負かされたのである。

双方ともだれかを待っていたのである。それに成功したのは、正確なる計算家の方であった。ナポレオンはグルーシーを待っていたが、彼はこなかった。ウエリントンはブリュールヘルを待っていたが、彼はやってきた。

ウエリントンは、讐^{あだ}を返さんとして立つた古典的戦法そのものである。ボナパルトはその光栄の初めにおいて、イタリーにて古典的戦法に邂逅^{かいこう}し、みごとにそれをうち破った。年老いた鴟^{ふくろう}梟^{たか}は年若き鷹^{たか}の前に逃走した。旧戦術はただに撃破されたのみでなく、また侮辱された。その二十六歳のコルシカの青年はいったい何者であったか？　すべてをおのれの向こうに回しておのれの方には何もなく、糧食も弾薬も大砲も靴もなく、ほとんど軍隊もなく、大集団に対してわずかに一握りの兵員をもつてし、同盟したる全欧州に向かつて飛びかかり、そしてほとんど不可能のうちに絶対の勝利を占めたるその赫々^{かくかく}たる初心者^{かくかく}は、いったい何を意味したか？　ほとんど息をもつかず、同じ一群の兵士より成る道具

を手にして、アルヴィンツイーに加うるにボーリユーくつがえを覆し、ボーリユーに加うるにウルムゼルを覆し、ウルムゼルに加うるにメラスを覆し、メラスに加うるにマツクを覆して、相次いでドイツ皇帝の五軍を粉碎したその雷電のごとき狂人は、いったいどこから出てきたのか？ 恒星の鉄面皮を有するその戦いの新参者は、いったい何者であつたか？ 陸軍のアカデミー派は、逃走しながら彼を破門した。かくて、新武断派に対する旧武断派の癒いし難き遺恨、火炎の剣に対する正統のサーベルの医いし難き遺恨、天才に対する定型者の医し難き遺恨が生まれた。そして一八一五年六月十八日、その遺恨は最後の一言を得た。ロデイ、モンテベロ、モンテノツテ、マンチュア、マレンゴー、アルコラなどの下にそれは一語をしるした。ワーテルローと。多衆の喜ぶところの凡庸の勝利である。運命はその皮肉に同意したのである。衰運においてナポレオンは、おのれの前にこんどは年少ウルムゼルを見いだした。

実際一人のウルムゼルを得んには、ただウエリントンの頭髮を白く染めれば足りる。

ワーテルローは、第二流の将帥によって勝たれたる第一流の戦いである。

ワーテルローの戦いにおいて賞賛しなければならないものは、イギリスであり、イギリスの強きょうじん韌、イギリスの決意、イギリスの血である。イギリスがそこにおいて有したみ

ごとなものは、もしかく言うことがイギリスにとって不快でないならば、それはイギリス自身である。その将帥にあらずしてその軍隊である。

不思議に忘恩なるウエリントンは、バサースト卿に贈った書簡のうちにおいて、彼の軍隊、一八一五年六月十八日に戦った軍隊は、「軽蔑すべき軍隊」であつたと述べている。ワートルローの田野の下に埋もれているあの陰惨なるつみ重なつた骸骨どもは、それを何と思うであらうか？

イギリスはウエリントンに対してあまりに謙譲であつた。ウエリントンをかく偉大ならしむることは、イギリスを微小ならしむることである。ウエリントンはただ普通の一英雄に過ぎない。あの灰色のスコットランド兵、あの近衛騎兵、あのメートランドおよびミッチェルの連隊、あのパックおよびケンプトの歩兵、あのポンソンビーおよびソマーセットの騎兵、霰弾さんだんの下に風笛を奏していたあのハイランド兵、あのライラントの大隊、エスリングおよびリヴォリの戦いいろいろの老練なる軍勢に対抗したるあのほとんど銃の操法をも知らなかつた全くの新参兵、彼らこそ偉大なのである。ウエリントンは頑固がんこであり、そこに彼の価値はあつた。そして吾人ごじんはそれをけなすものではない。しかし彼の歩兵や騎兵の些少さししょうといえども彼と同じく堅固だったのである。鉄石大公に恥じない鉄石兵士である。

吾人は吾人のすべての賞揚を、イギリス兵士に、イギリス民衆に与える。もし戦勝記念標があるならば、それはイギリスのものである。ワーテルローの円柱塔にして、もし一人の顔貌の代わりに一民衆の像を雲間に高く上ぐるならば、それはいつそう正当なものとなるであろう。

しかしこの偉大なるイギリスは、吾人のここに述べるところのものを怒るであろう。彼はなお、かの一六八八年およびフランスの一七八九年の両革命後においても、封建的の幻を有している。彼はなお世襲制および階級制を信じている。強大と光栄において他にすぐれたるその民衆は、民衆としてでなく国民として自尊している。民衆でありながら、しかも好んで服従し、頭として一人の君主を戴いたている。労働者は甘んじて軽侮され、兵士は甘んじて鞭打むちたれる。人の記憶することく、インケルマンの戦いにおいて、一人の軍曹がたしかに全軍を救ったと思われることがあったが、彼はラグラン卿からその名を述べらるることができなかった。イギリスの陸軍階級制は、将校以下の者はいかなる英雄をも、これを報告中にしるすことを許さないのである。

さてワーテルローのごとき種類の会戦において、何物よりも特に吾人ごじんの感嘆するところのものは、偶然が示した驚くべき巧妙さである。夜の雨、ウーゴモンの城壁、オーアンの

凹路おうろ、大砲の音をも耳にしなかったグルーシー、ナポレオンを欺いた案内者、ブユーローを正当に導いた案内者、すべてそれらの異変はみごとに導き出されたのである。

なお全体としてこれを言えば、ワートルローには戦いというよりむしろ殺戮さつりくがあつた。

ワートルローは、あらゆる大戦のうちにおいて、兵士の数に比して最も狭小な正面を有する戦いである。ナポレオンは四分の三里の正面、ウエリントンは半里の正面、しかも双方とも各 七万二千の兵士。その密集よりあの殺戮が到来した。

次の計算がなされ、次の比例が立てられた。兵員の損失——アウステルリッツにおいて、フランス軍百分の十四、ロシア軍百分の三十、オーストリア軍百分の四十四。ワグラムにおいて、フランス軍百分の十三、オーストリア軍百分の十四。モスコヴァにおいて、フランス軍百分の三十七、ロシア軍百分の四十四。バウツェンにおいて、フランス軍百分の十三、ロシア・プロシア軍百分の十四。ワートルローにおいて、フランス軍百分の五十六、連合軍百分の三十一。ワートルローについての合計、百分の四十一。十四万四千の兵士に、六万の戦死者。

ワートルローの平野は今日、人間の虚心平気な踏み台たる地面に固有の平静さを保っている、そして他の平原と何ら異なつた点を有しない。

けれども夜には、一種の幻の靄^{もや}が立ち上る。もしだれか旅客にして、そこを漫步し目を定め耳を澄まし、あのいたましきフリッツピの平原（訳者注 昔アントニウスとオクタヴィアヌスとがブルツスとカシウスとを敗ったマケドニアの平原）に対するヴィルギリウスのごとくに黙想するならば、そこに起こった大破滅の幻覺にとらえらるるであろう。恐ろしき六月十八日の様はよみがえつてき、人工の記念の丘は消え、何かのその獅子^{しし}の像も消散し、戦場はまざまざと現われて来る。歩兵の列は平原のうちにうねり、狂うがごとく疾駆する騎兵の列は地平を過ぎる。心乱れたその瞑^{めい}想^{そう}の旅客は見る、サーベルのひらめきを、銃剣の火花を、破烈弾の火災を、雷電の驚くべき交錯^{こうさく}を。また彼は聞く、墳墓^{てきだん}の底の瀕死^{あえ}の喘ぎのごとくに、幻の戦いの漠たる叫喊^{きようかん}の響きを。あの物影は擲^{てき}弾^{だん}兵^{へい}、あの微光は胸甲騎兵、あの骸骨^{がいこつ}はナポレオン、あの骸骨はウエリントン。それらはもはや幻ではあるが、しかもなお互いに衝突し戦っている。谿^{けい}谷^{こく}は赤くいろどられ樹木は震え、雲間にまで狂暴なものがひろがり、そして暗夜のうちに、モン・サン・ジャン、ウーゴモン、フリシュモン、パプロット、プランスノアなど、すべてそれらの凶暴な高地は茫^{ぼう}乎^こと現われきたって、その上には、互いに殲滅^{せんめつ}し合う幽鬼の旋風が荒れ狂っている。

十七 ワーテルローは祝すべきか

世には少しもワーテルローを憎まないきわめて敬すべき自由主義の一派がある。しかし吾人^{ごじん}はその仲間ではない。吾人に取つては、ワーテルローは単に自由の惘然^{ぼうぜん}自失した一時期を画するものに過ぎない。かくのごとき驚よりかくのごとき卵が生れるとは、それこそ正しく意外事である。

ワーテルローは、これを問題の最高見地よりみるならば、ことさらに反革命的の勝利である。それはフランスに対抗するヨーロッパであり、パリーに対抗するペテルブルグとベルリンとウインとである。進取に対抗する現状維持^{スタチュ・クオ}であり、一八一五年三月二十日を通じて攻撃されたる一七八九年七月十四日であり（訳者注 前者はナポレオンのエルバ島よりパリーへ帰着の日、後者はフランス大革命の初端バステイーユ牢獄破壊の日）フランスの制御すべからざる騒乱に対する諸君主政体の戦闘準備である。既に二十六年前から爆発しているその広大な民衆を消滅し尽すこと、それがその夢想であつた。それは、ブルンスウィック家、ナツソー家、ロマノフ家、ホーヘンツォルレルン家、ハプスブルグ家などと、ブルボン家との連衡である。しかしワーテルローはその背に神法をになっている。

帝国が専制的であつたがゆえに、それに代わつた王国が事物の自然の反動として無理にも自由的でなければならなかつたことは、真実である。そして勝利者らのいたく遺憾としたことではあつたが、余儀ない立憲制がワーテルローから出てきたことも、真実である。革命は真に敗らるることのできないものだからである。そしてそれは天意的なもので絶対に決定的なものであるがゆえに、常に再現し来るからである。すなわち、ワーテルローの前においては、古き諸王位を覆^{くつがえ}したボナパルトのうちに、そしてワーテルローの後においては、憲法に同意し服従したルイ十八世のうちに現われた。ボナパルトは平等を表明するに不平等を用いて、ナポリの王位に一御者を据え、スエーデンの王位に一軍曹を据えた。ルイ十八世はサン・トールアンにおいて人権尊重の宣言に署名した。もし革命の何たるやを解せんと欲するならば、それを「進歩」と呼んでみるがいい。そしてもし進歩の何たるやを解せんと欲するならば、それを「明日」と呼んでみるがいい。明日は必ずや明日の仕事をなす、しかもそれを既に今日よりなしている。明日は不思議にも常にその目的とするところに達する。一個の兵士にすぎなかつたフォアをして一個の弁舌家たらしむるのに、明日はウエリントンを使用する。フォアはウーゴモンにて倒れ、再び演壇に立ち上がる（訳者注 彼はウーゴモンに負傷したがその後ナポレオンの没落後代議士として熱弁を振つた）。

かくのごとく進歩は振る舞う。その職工にとつては一つとしていたずらな道具はない。彼は常に一糸乱さず、アルプスをまたいだあの男を、またエリゼー小父^{おじ}というあのよろめきつつゆく善良な老病者を（訳者注 ナポレオンとルイ十八世）、自己の聖なる仕事に適合させる。彼は脚気病者をも征服者をも等しく利用する、外部には征服者を、内部には脚気病者を。ワートルローは、剣による欧州諸王位の崩壊を突然止めさせながら、他の方面において革命の事業を継続させるの結果をしかきたさしめなかった。軍人の時代は去つて、思想家の世となつた。ワートルローが引き止めんと欲した世紀は、その上をふみ越えて、自己の道が続けた。その不祥なる勝利は、自由のために打ち負かされた。

これを要するに、そしてまた確かに、ワートルローにおいて勝利を得たところのもの、ウエリントンの背後にほえんだところのもの、人の言うところではフランスの元帥杖をもこめてヨーロッパの元帥杖を彼にもたらしたところのもの、獅子^{しし}の塚を築くために骸^{がいこ}骨の満ちた土の車を楽しげにひいたところのもの、その台石に一八一五年六月十八日という日付を揚々としたところのもの、壊走兵^{かいそうへい}をなぎ払うブリューヘルを励ましたところのもの、モン・サン・ジャンの高地の上から獲物をねらうようにフランスの上にのしかかつてきたところのもの、それは反革命であつた。分割という破廉恥なる言葉をつぶや

く反革命であつた。しかもパリーに到着して彼は目近かに噴火口を見た。彼はその灰が
おのれの足を焼くのを感じた。そして意見を変えた。彼は再び憲法という不完全な試みに立
ち戻つた。

吾人^{ごじん}をして、ワーテルローの中に、ただワーテルローの中にあるもののみを見せしめよ。
自ら求められたる自由はそこには少しもない。反革命は自ら欲せずして自由主義となつた、
とともにまた、それに同じき現象によつて、ナポレオンも自ら欲せずして革命家となつ
た。一八一五年六月十八日、馬上のロベスピエールは落馬させられたのである。

十八 神法再び力を振るう

執政官制^{ディクテーター}の終焉^{しゅうえん}。ヨーロッパの全様式は瓦解^{がかい}した。

帝国は、あたかも死滅しゆくローマ帝国のそれのごとき暗黒のうちに倒れた。暗黒時代
におけるがごとく、人は再び深淵を見た。ただ一八一五年の暗黒時代は、これをその通称
によつて反革命と呼ぶべきであるが、息が短く直ちに息を切らして、間もなくやんでしま
つた。滅びた帝国は、うち明けて言えば、人々から泣かれた、しかも勇壮なる人々の目に

よつて泣かれた。もし光榮にして劍の笏のうちに存するならば、帝国は光榮そのものであった。それは暴政の与え得るすべての光耀を地上にひろげた、陰惨なる光耀を、いな、なお言わん、暗黒なる光耀を。真の白日に比較すれば、それは夜である。しかもその夜の消滅は、日食のごとき印象を与えた。

ルイ十八世は再びパリーにはいった。七月八日の円舞踏は三月二十日の熱狂を消した。

コルシカ人という言葉はベアルン人という言葉の対照となった。チュイルリー宮殿の丸屋根の旗は白旗となった。亡命者が王位にのぼった。ハルトウエルの櫓のテーブルは、ルイ十四世式の百合花模様の肱掛椅子の前に据えられた。人々はブルーヴィーヌやフオートノアなど（訳者注 昔フランス王によつて得られた戦勝の地）のことを昨日の事のように語り、アウステルリッツは既に老朽ちてしまった。教会と王位とは、おごそかに親愛の情を結んだ。十九世紀の社会安寧の最も動かし難き一形式が、フランスおよび大陸の上に建てられた。ヨーロッパは白い帽章をつけた。トレスタイヨン（訳者注 過激王党の首領の一人）は世に高名となった。オルセー河岸の兵營の正面に太陽を象った石の光線のうちには、多頭制に劣らずの箴言が再び現われた。皇帝親衛兵のいた所には今は赤服の近衛兵がいた。カルーゼルの凱旋門は、卑劣に得られた戦勝の名前におおわれ、それらの新流行に困ら

され、おそらくマレンゴーやアルコラの戦勝の名前に多少恥じてか、アングレーム公の像によってわずかに難局をきりぬけた。一七九三年の恐るべき共同墓地となったマドレーヌの墓場は、ルイ十六世およびマリ・アントアネットの遺骨がその塵ちりにまみれていたもので、いまや大理石や碧へきぎよく玉みそを着せられた。ヴァンセンヌの溝の中には一基の墓碑が地上に現われて、ナポレオンが帝冠をいただいた同じ月にアングアン公が銃殺されたのであることを、今更に思い起こさしめた。その死のまぢかで戴冠たいかんしき式をあげさせた法王ピウス七世は、その即位を祝福したときのごとく平静にその転覆を祝福した。シエンブルンには、ローマ王と呼ぶのものはばかられるわずか四歳の小さな人影があった。そして、すべてそれらのことは成し遂げられ、それらの王は再び王位につき、全ヨーロッパの首長は籠の中に入られ、旧制度は新制度となり、地上のあらゆる影と光とは、その地位を変えたのである。それはただある夏の日の午後、一人の牧人が森の中で一人のプロシア人に向かって、「こちらからおいでなさい、あちらからはだめです！」と言ったからである（訳者注 ワーテルローにおけるブーローの案内者のこと参照）。

この一八一五年は、一種の悩ましい四月の月であった。不健康にして有毒な古い現実は、新しい装いをこらした。欺瞞ぎまんは一七八九年をめとり、神法は一つの憲法の下に隠れ、擬制

は立憲となり、特権や妄信^{もうしん}や底意は、胸に抱きしめられたる第十四条（訳者注 憲法第十四条——王は国家の最上首長にして、陸海軍を統率し、宣戦を布告し、平和、同盟、通商上の条約を締結し、官吏を任免し、法律の適用と国家の安寧とのために、必要なる規定および命令を発す）とともに、自由主義で表面を糊塗^{こと}した。それは蛇^{へび}の脱皮であつた。人間はナポレオンによつて同時に大きくされ、また小さくされていた。理想はその燦^{さん}爛^{らん}たる物質の世において、空想という妙な名前をもらつていた。未来を嘲^{ちやうろう}弄^{ろう}したのは偉人の重大な軽率である。さはれ、砲弾にさらされながらその砲手を深く愛していた民衆らは彼をさがし求めた。どこに彼はいるか？ 彼は何をなしているか？ マレンゴーおよびワートルローに臨んだ一人の老廃兵に向かつて、ある通行人は言った、ナポレオンは死んだと。するとその兵士は叫んだ、「あの人が死んだと！ 君はいつたい、あの人をよく知ってるか？」人々の想像は転覆された彼を神に祭り上げていた。ヨーロッパの奥底はワートルローの後に暗黒になつた。ナポレオンの消滅によつて、ある巨大な空虚が長く残されたのである。

諸国王らはその空虚の中に身を据えた。旧ヨーロッパはその機に乗じて復古した。神^{サント}・同^{・アリアン}盟は作られた。しかしワートルローの災なる戦場はそれに先立つてベル・アリア

ンスと叫んだではないか（訳者注　ワーテルローの一地名であるが、またその文字は美しき同盟という意味を有する）。

この建て直されたる旧ヨーロッパに對峙し對抗して、一つの新しきフランスのひな形は描かれた。皇帝によつて嘲弄ちやうろうされた未来は現出してきた。それは額ひたいに自由という星をつけていた。新しき時代の熱烈な目はその方へ向けられた。ただ不思議なことには、人々はその未来なる「自由」と、その過去なるナポレオンとに、同時に心を奪われた。敗北は敗者を大ならしめていたのである。転覆したボナパルトは、つつ立つてるナポレオンよりもいつそう高いように思われた。勝利を得た者らも恐れをいだいた。イギリスはハドソン・ロウをして彼の番をさせ、フランスはモンシユニユをして彼の様子をうかがわした。胸に組んだ彼の両腕は、諸王位の不安となった。アレキサンドル皇帝は彼を「予が不眠」と名づけた。かかる恐怖は、彼がおのれのうちに有していた広大なる革命よりきたったのである。それこそボナパルト式自由主義を説明するものであり、それを許さしむるところのものである。その幻影は旧世界に戦慄せんりつを与えた。諸国王は、はるか水平線のかたにセント・ヘレナの巖いわおを有して、不安げに国政を統すべた。

ナポレオンがロングウッドの住居において臨終の苦悶けみを閲しつつある間に、ワーテルロ

一の平野に倒れた六万の人々は静かに腐乱してゆき、彼らの平和のあるものは世界にひろがっていった。それをウイン会議は一八一五年の条約となし、それをヨーロッパは復古と名づけた。

ワテルローがいかなるものであったかは、おおよそ右のとおりである。

しかしそれも無窮なるものに対しては何のかわりがある？ そのすべての暴風雨、そのすべての雲霧、その戦い、次にその平和、そのすべての影、それも広大なる日の輝きを一瞬たりとも乱すことはできなかった。その目の前においては、草の葉より葉へとはう油虫も、ノートル・ダーム寺院の塔の鐘楼より鐘楼へと飛ぶ驚^{わし}も、なんら選ぶところはないのである。

十九 戦場の夜

さて再びあの不運なる戦場に立ち戻ってみよう。実はそれがこの物語に必要なのである。一八一五年六月十八日の夜は満月であった。その月の光は、ブリューヘルの寧^{どうもう}猛な追撃に便宜を与え、逃走兵のゆくえを照らし出し、その不幸な集団を熱狂せるプロシア騎兵

の蹂躪じゅうりんにまかせ、虐殺を助長せしめた。大破滅のうちには往々にして、かかる悲愴ひそうな夜の助けを伴うものである。

最後の砲撃がなされた後、モン・サン・ジャンの平原には人影もなかった。

イギリス軍はフランス軍の陣營を占領した。敗者の床に眠ることは戦勝の慣例的なしるしである。彼らはロツソムロツソムの彼方に露營を張った。プロシア軍は壊走かいそう者の後を追って前進を続けた。ウエリントンはワーテルローの村に行つて、バサースト卿への報告をしたためた。

かく汝働けども、そは汝自らのためにはあらずという格言（訳者注 他人の功を横取りする場合に言う）を、もし実際に適用し得るならば、それはまさしくこのワーテルローの村に対してであろう。ワーテルローの村はただ手をこまぬいて、戦地をへだたる半里の所にあつた。モン・サン・ジャンは砲撃され、ウーゴモンは焼かれ、パプロットは焼かれ、プランスノアは焼かれ、ラ・エー・サントは強襲され、ラ・ベル・アリアンスは二人の勝利者の抱擁するのを見た。しかしそれらの名前はほとんど世に知られないで、戦いにも働かなかつたワーテルローがすべての名誉をになつてゐる。

われわれは戦争に媚こびる者ではない。機会あらばその真相を告げ知らしてやろうとする

者である。戦争に恐るべき美の存することを、われわれは隠さずに述べてきた。しかしまた多少の醜惡も存することを認めなければならない。その最もはなはだしい醜惡の一つは、戦勝ののち直ちに死者のこうむる略奪である。戦いに次いで来る曙は常に、裸体の屍かばねの上に明けゆくものである。

そういうことをなす者はだれであるか。かく戦勝を汚す者はだれであるか。勝利のポケットの中に差し入れらるるそのひそやかな醜い手はいかなるものであるか。光榮の背後にひそんで仕事をなすそれらの掏摸すりは何者であるか。ある哲學者らは、なかんずくヴォルテールは、それはまさしく光榮をもたらしたその人々であると断言する。彼らは言う、それはその人々にほかならない、代わりの者はいないのである、立っている者らが、倒れてる者らを略奪するのである。昼間の英雄は、夜には吸血鬼となる。要するに、おのれの殺した死骸が所持するものを多少略奪することは、まさしく正当の権利であると。しかしながら、われわれはそれを信じない。月桂樹げっけいじゆの枝を折り取ることと死人の靴を盗むこととは、同一人の手には不可能事であるようにわれわれは思う。

ただ一つ確かなことは、普通勝利者の後に盗人が来るということである。しかしながら、兵士は、ことに近代の兵士は、この問題の外に置きたいものである。

あらゆる軍隊は一つの尾を持っている。その者どもこそ、まさしく責むべきである。蝙蝠^このごとき者ども、半ば盗賊であり半ば従僕である者ども、戦争と呼ばれる薄明りが産み出す各種の蝙蝠、少しも戦うことをしない軍服の案山子^{かがし}、作病者、恐るべき跛者、時としては女房どもとともに小さな車にのって歩きながら酒を密売しそれをまた盗み歩くもぐり商人、将校らに案内者たらんと申し出る乞食^{こじき}、風来者の従卒、かつさらい、それらの者どもを、行進中の軍隊は昔——われわれは現代のことを言ってるのではない——うしろに引き連れていた。専門語ではそれをうまくも「遅留兵」と呼んだものである。その者どもについての責任は、どの軍隊にもどの国民にもなかったのである。彼らはイタリー語を話してドイツ軍に従い、フランス語を話してイギリス軍に従うたぐいの奴らである。フェルヴァック侯爵が、むちやなピカルデー語のために欺かれてフランス人だと思い込み、チエリゾラの勝利の夜、同じ戦場にて暗殺され略奪されたのも、かかる惨めな奴らの一人、フランス語を話すスペイン人の一遅留兵のためにであつた。略奪から賤夫^{せんぶ}が生まれる。敵によつて糧を得よという賤しむべき格言は、この種の癩病^{らいびょう}やみを作り出した。それをおすにはただ厳酷な規律あるのみである。だが往々、およそ名実伴わぬ高名の人がいるものである。某々の將軍は實際えらいには違いないが、何ゆえにかくも人望があつたのか、

その理由がわからぬこともしばしばある。テューレンヌは略奪を許したので兵卒どもに賞揚された。悪事の黙許は親切の一部である。テューレンヌはバラティナの地を兵火と流血とにまみらしめたほど親切であつた。軍隊の後方における略奪者の多寡はその司令官の苛酷に反比例することは、人の見たところである。オーシュおよびマルソー両將軍には少しも遅留兵がなかつた。ウエリントンにはそれが少ししかなかった。この点について、われわれは喜んで彼に公平なる賛辞を呈するものである。

それでもなお六月十八日から十九日へかけての夜、死人は続々略奪をこうむつた。ウエリントンは厳格であつた。現行を見い出したならば直ちに銃殺すべしとの命令を下した。しかし劫奪は執拗であつた。戦場の片すみに銃火のひらめいてる間に盗人らは他の片すみにおいて略奪した。

月の光はその平原の上にものごく落ちていた。

真夜中ごろ、オーアンの凹路の方に当たつて、一人の男が徘徊していた、というよりも、むしろはい回っていた。その様子から見ると、前にその特質を述べておいたあの遅留兵の一人で、イギリス人でもなく、フランス人でもなく、農夫でもなく、兵士でもなく、人間というよりもむしろ死屍食い鬼であつて、死人の臭いに誘われてき、窃盗をも勝利

と心得、ワーテルローを荒らしにやってきたものらしかった。外套に似た広上衣をまとい、不安げなまた不敵な様子で、前方に進んだり後を振り向いたりしていた。いったいその男は何者であつたか？ おそらく昼よりも夜の方が彼については多くを知っていたであろう。彼は囊ふくろは持つていなかったが、まさしく上衣の下には大きなポケットがあつたに違いない。時々彼は立ち止まって、だれかに見られてはしないかを見きわめるかのようにあたりの平原を見回し、突然身をかがめ、地面にある黙々として動かない何かをかき回し、それからまた立ち上がつては姿を隠した。その忍び行くさま、その態度、そのすばしこい不思議な手つきなどは、ノルマンディーの古い伝説にアルーと呼ばれてる魔墟はいきよに住む薄暮の悪鬼を思わせるのだつた。

ある種の夜の水鳥は、沼地の中でそのような姿をしていることがある。

もしその夜の靄もやをじつと透かし見たならば、ニヴェルの大道の上にモン・サン・ジャンからブレーヌ・ラルーへ行く道の角の所に立つて一軒の破屋あばらやのうしろに隠れたようにして、瀝青チヤンを塗つた柳編みの屋根のついてる一種の従軍行商人の小さな車のようなものが止まつていて、轡くつわをつけたまま蓐麻いらくさを食つてゐる飢えたやせ馬がそれにつけられていて、その車の中には、そこに積んである箱や包みの上にすわっている女らしい人影があるのが、

はるかに認め得られたであろう。おそらくその車と平野を徘徊^{はいかい}してるあの男との間には、何かの關係があつたかも知れない。

夜は澄み渡つていた。中天には一片の雲もない。地上は血潮で赤く染んでいようと、聞せず焉^{えん}として月は白く澄んでゐる。空の無關心がそこにある。平野のうちには、霰^{さん}彈^{だん}のために折られた樹木の枝がただ皮だけでぶら下がっていて、夜風に静かにゆらめいていた。微風が、ほとんど一つの息吹^{いぶ}きが、灌^{かん}木^{ぼく}の茂みをそよがしていた。鬼の飛び去るのに似よつた震えが、草むらの中にはあつた。

イギリスの陣營の巡察や巡邏^{しゅんら}の兵士らのゆききする足音が、ぼんやり遠くに聞こえていた。

ウーゴモンとラ・エー・サントとはなお燃えていた。一つは西に一つは東に二つの大きな火炎を上げ、地平線の丘陵の上に広く半円に広がつてゐるイギリス軍の野營の火が、その間を糸のように連結してゐて、両端に紅宝玉をつけた紅玉^{ルビー}の首環^{くびわ}が広げられてゐるかのようだった。

われわれは既にオーアンの道の災害を述べておいた。幾多の勇士にとってその死はいかなるものであつたらうか。それを思えば心もおびえざるを得ない。

もし何が恐るべきかと言えば、もし夢にもまさる現実があるとすれば、それはおそらくこういうことであろう。生き、太陽を見、雄々しい力に身にあふれ、健康と喜びとを有し、勇ましく笑い、前途のまばゆきばかりの光榮に向かつて突進し、胸には呼吸する肺を感じ、鼓動する心臓を感じ、推理し語り考え希い愛する意志を感じ、母を持ち、妻を持ち、子供を持ち、光明を有し、そして突然に、声を立てる間もなく、またたくひまに、深淵のうちにおちいり、倒れ、ころがり、押しつぶし、押しつぶされ、麦の穂や花や木の葉や枝をながめ、しかも何物にもつかまることができず、今はサーベルも無益だと感じ、下には人間がおり、上には馬がおり、いたずらに身を脱せんとあがき、暗黒のうちに骨は打ち折られ、眼球の飛び出るほど踵でけられ、狂うがごとく馬の蹄にかじりつき、息はつまり、うなり、身をねじり、その下積みになつていて、そして自ら言う、「先刻まで私は生きていたのだ！」

その痛ましい災害の最期の苦悶が聞こえていたその場所も、今はすべてひっそりと静まり返つていた。凹路の断崖は、ぎつしり積み重ねられた馬と騎兵とでいっぱいになつてた。恐ろしいもつれであつた。もはやそこには斜面もなかった。死骸はその凹路を平地と水平にし、柵にきれいにはかられた麦のようにその縁と平らになつていた。上部は死骸の

堆積^{たいせき}、下の方は血潮の川。それが一八一五年六月十八日の夜におけるその道路のありさまであった。血はニヴェルの大道の上まで流れてきて、その大道をふさいでいる鹿柴^{ろくさい}の前に大きな池をなしてあふれていた。その場所は今でもなお指摘することができる。しかし胸甲騎兵らを覆没したのは、読者の記憶するところであろうが、反対の方のジュナツプの大道の方面においてであった。死骸^{しかい}の積み重なった厚さは、凹路^{おうろ}の深さに比例していた。凹路が浅くなっていて、ドロールの師団が通った中央の方面では、死骸の層も薄くなっていた。

前にちよつと描いておいたあの夜の徘徊者^{はいかいしゃ}は、その方面へ行っていた。彼はその広大なる墳墓を方々さがし回った。じつとながめ回した。嫌悪^{けんお}すべき死人検閲をでもするかのようにして通つていった。彼は足を血に浸して歩いていった。

突然、彼は立ち止まった。

彼の前数歩の所に、凹路の中に、死骸の堆積^{たいせき}がつきえている所に、それらの人と馬との折り重なった下から指を広げた一本の手が出ていて、月の光に照らされていた。

その手には何か光るものが指についていた。金の指輪であった。

男は身をかがめ、ちよつとそこにうずくまった。そして彼が再び身を起こした時は、差

し出てる手にはもう指輪がなくなっていた。

男はきつぱり立ち上がったのではなかった。物におびえたようなすごい態度をして、死人の堆積の方に背を向け、ひざまずいたまま地平線をすかし見ながら、地についた両の食指に上体をもたして、頭だけを凹路の縁から出しているかがっていた。狼の四本足も、ある種の行ないには便宜なものである。

それから、彼は心を決して立ち上がった。

その時、彼はぎくりとした。うしろからだれかにつかまれてるようだった。

彼はふり向いて見た。それは先刻の開いていた手であつて、指を閉じながら、彼の上衣の裾をつかんでいた。

普通の人ならばこわがるところだった。がその男は笑い出した。

「なんだ、」と彼は言った、「死人じゃないか。憲兵よりはまだお化けの方がいいや。」
するうちにその手は力つきて彼を放した。人の努力も墓の中ではすぐに尽きるものである。

「ははあ、」と男は言った、「この死人め、まだ生きてるのかな。一つ見てやろう。」
彼は再び身をかがめ、死人の堆積をかき回し、邪魔になるものを押しのけ、その手を

つかみ、その腕をとり、頭を引き上げ、身体を引き出し、そしてしばらくするうちに、もう生命のない、あるいは少なくとも気を失つてゐる一人の男を、凹路おうちろの影の方へ引きずつて行つた。それは一人の胸甲騎兵であつて、将校であり、しかも相当の階級のものらしくつた。大きな金の肩章が胸甲の下からのぞいてゐた。もう兜かぶとは失つてゐた。ひどいサーベルの傷が顔についていて、顔一面血だらけだつた。しかし顔のほか、手足は無事らしかつた。そして、もしここに仕合わせという語が使えるならば、仕合わせにも、多くの死骸が彼の上に丸屋根をこしらえたようなふうになつていて、押しつぶされることを免れてゐた。目はもう閉じてゐた。

彼はその胸甲の上に、レジオン・ドンヌールの銀の十字章をつけてゐた。

男はその勲章をもぎ取り、上衣の下の洞穴の底へ押し込んでしまつた。

その後で、彼は将校の内ぶところを探つてみて、そこに時計を探りあてて、それを取り上げた。それからチョッキを探つて、そこに金入れを見いだして、それを自分のポケットにねじ込んだ。

その死にかかつた将校に男がそこまで手をかけてやった時、将校は目を開いた。

「ありがとう。」と彼は弱々しく言つた。

男の取り扱い方の荒々しさと、夜の冷氣と、自由に吸い込まれた空氣とは、彼を瀕死^{ひんし}の境から引き戻したのだった。

男は返事をしなかった。頭を上げた。人の足音が平原の中に聞こえていた、たぶん巡察の兵士が近づいて来るのであったろう。

将校は低くつぶやいた、その声のうちには死の苦しみがこもっていた。

「どちらが勝ったか？」

「イギリスの方です。」と男は答えた。

将校は言った。

「僕のポケットの中をさがしてみてくれ。金入れと時計があるはずだ。それをあげよう。」
もうそれは取られていたのである。

男は言われた通りのことをするまねをした、そして言った。

「何もありません。」

「だれか盗んだな。」と将校は言った。「残念だ。君にあげるんだったが。」
巡察兵の足音はしだいにはつきりしてきた。

「人がきます。」と男は立ち去ろうとするような身振りをして言った。

将校はようよう腕を持ち上げて男を引き止めた。

「君は僕の生命を救ってくれたのだ。何という名前だ？」

男は急いで低声に答えた。

「私はあなたと同じようにフランス軍にっていた者です。もうお別れしなければなりません。もしかまったら銃殺されるばかりです。私はあなたの生命を救ってあげた。あとは自分で何とかして下さい。」

「君の階級は何だ。」

「軍曹です。」

「名前は何というんだ。」

「テナルデイエです。」

「僕はその名前を忘れまい。」と将校は言った。「そして君も僕の名前を覚えていてくれ。僕はポンメルシーというんだ。」

第二編 軍艦オリオン

一 二四六〇一号より九四三〇号となる

ジャン・ヴァルジャンは再び捕えられていた。

その痛ましい詳細は、ここに長たらく述べられない方を読者はかえって好むだろう。われわれはただ当時の新聞紙に掲げられた次の二つの小記事を写すに止めておこう。それはあの驚くべき事変がモントルイユ・スジュール・メールに起こってから数カ月後のものである。

この二つの記事は、やや概括的なものである。人の記憶するとおり、その頃にはまだガゼット・デ・トリブヌー（法廷日報）はなかったのである。

第一の記事はドラポー・ブラン紙ので、一八二三年七月二十五日のものである。

——パ・ド・カレー郡において最近かなり異常な一事件が起こった。マドレーヌ氏と呼ばれる他県の一人の男が、その地方の古来の工業である くろまがいたま 黒擬玉 および黒ガラス玉の製造を、新しい製法によつて数年来再興していた。彼はそれによつて、自分の財産を作り、かつその地方を富ました。その功績のために彼は市長に選ばれていた。しかるに警察では、該マドレーヌ氏は実はジャン・ヴァルジャンという男であり、一七九六年 せつとう 窃盗のために処刑された前科者で、かつ監視違反の者であることを発見した。かくて、ジャン・ヴァルジャンは再び徒刑場に投ぜられた。逮捕さる前に彼は、ラフィット銀行に預けていた約五十万以上の金をうまく引き出したらしい形跡がある。もとよりその金は、彼が自分の商売によつてきわめて正当に得たものとのことである。ジャン・ヴァルジャンがツーロンの徒刑場に投ぜられてிரらい、その金がどこに隠されているか発見せらるることはできなかった。

第二の記事はジュールナル・ド・パリー紙のであるが、前のよりやや詳しく、日付は同じである。

——ジャン・ヴァルジャンという一人の放免徒刑囚が、最近ヴァール県の重罪裁判所に出庭した。その前後の事情は人の注意をひくに足るものであった。その悪漢は巧みに警察の目をのがれ、名前を変え、北部のある小都市で市長となるまでに成功した。彼はその都市にかなり顕著な一商業を興したのであった。しかし檢察官の不撓なる熱心のために、彼はついに仮面をはがれて逮捕された。一人の醜業婦の妾があつたが、彼が逮捕さるとき驚きのあまり死んだ。悪漢は異常な^{りよりよく}脅力を有していて脱走することを得たが、脱走後三、四日にして、警察は再びパリにおいて彼を捕えた。ちようど首府からモンフェルメイユ村（セーヌ・エ・オーズ県）へ通う小馬車に乗つた時においてであつた。しかし彼はその三、四日の自由な間に、ある著名な銀行に預けていた莫大な金額を手にすることを得た由である。その金額は約六、七十万フランだという。告訴状によれば、彼はその金をだれにも知られぬひそかな場所に隠匿したらしい、そして何びともそれを見いだすことはできなかったそうである。それはともかくとして、そのジャン・ヴァルジャンなる者は最近ヴァール県の重罪裁判に回された。約八年前、大道にて子供をおびやかし、その所持品を盗んだという罪名によつて

である。子供というのは、諸方を渡り歩くあの正直なる少年らの一人であつて、フェルネーの総主教が不朽なる詩に歌つたごとく彼らは、

「サヴォアより年ごとに来る。

軽やかにその手は拭^{ぬぐ}う

煤^{すす}に満ちたる長き管を。」

その盗賊は自ら少しも弁護をしなかつた。そして検事の巧妙流麗な弁論によつて、その強盗には共犯者があつたこと、およびジャン・ヴァルジャンは南部の盗賊団の一人であつたことが、立証せられた。その結果、ジャン・ヴァルジャンは有罪を宣せられ、死刑の判決を受けた。犯人は上告することを拒んだ。しかし国王は無限の寛容をもつて、その刑を減じて無期徒刑に変えられた。それでジャン・ヴァルジャンは、直ちにツーロンの徒刑場に送られた。

ジャン・ヴァルジャンがモントルイユ・スジュール・メールにおいて宗教上の勤めを欠かさなかつたことは、人々の記憶にあつた。で、ある新聞は、なかなずくコンステイチュシオンネル紙のごときは、その換刑をもつて僧侶派の勝利だとした。

ジャン・ヴァルジャンは徒刑場においてその番号が変わった。彼は九四三〇号と呼ばれた。

それからなお、再び立ち戻らないようにと、ここに次のことを付言しておきたい。すなわち、モントルイユ・スユール・メールの繁栄はマドレーヌ氏とともに消滅してしまった。惑乱と^{しゅんじゅん}逡巡とのあの夜に彼が予見したことは、すべて事実となって現われた。彼がいなくなったことは、果して魂のなくなったに等しかった。彼の失墜後モントルイユ・スユール・メールには、大人物の転覆後に起こる利己的な分配が行なわれた。それは実に、人類の共同村において毎日ひそかに行なわれつつある栄華の必然の分割である。しかし史上にただ一回記載されたのは、単にあの有名なるアレキサンドル大王の歿後に起こったからである。将軍らが国王の冠を^{いただ}戴き、小頭らが自ら工場主となる。羨望的な競争が現われて来る。いまやマドレーヌ氏の大きな工場は閉ざされ、その建物は荒廃に帰し、職工らは分散してしまった。ある者はその地を去り、ある者はその職業を去った。それ以来、すべては大となるよりもむしろ小となり、善を事とするよりもむしろ利得を事とするようになった。もはや中心となるものがなく、到る所に競争があり、いら立ちがあった。マドレーヌ氏はすべてを支配し導いていたが、一度彼が失墜するや、各人は私利にのみ^{きゆうきゆう}汲々とし

て、組織的精神は競争心と変じ、懇篤こんとくのふうは苛酷と変じ、すべての者に対する創立者の慈愛は各人相互の怨恨えんこんに変わった。マドレーヌ氏の結んだ糸目は乱れて切れてしまった。人々はその方法をごまかし、製品を粗悪にし、信用をなくした。販路はせばまり、注文は減少した。職工の賃金は低下し、工場は業をやめ、破産が到来した。もはや貧しい者らに対する助けもなくなってしまった。いつさいのものが消滅した。

国家の方でも、どこかに何ぴとかがいなくなったのを感じてきた。重罪裁判所がマドレーヌ氏とジャン・ヴァルジャンとは同一人であることを判定して徒刑場を肥してから、四年もたたないうちに、モントルイユ・スユール・メールの郡においては収税の費用が倍加した。そしてド・ヴィレール氏は、一八二七年二月にそのことを国会で述べている。

二 二行の悪魔の詩が読まるる場所

さて、話を進める前に、ちょうどその頃モンフェルメイユに起こった不思議な一事を少しく述べておきたい。それは検察官のある推測といくらか符合する点を有しているようでもある。

モンフェルメイユの地方には、ごく古くからのある迷信があった。パリー近くきやらのその地方にかかる一般に信じられた迷信があることは、ちょうどシベリアに伽羅きやらの名木があるように意外なことで、そのためにいつそう珍しがられ尊重されていた。人間はすべて珍しいものを尊重するものである。ところでモンフェルメイユの迷信というのは次のようなものであった。大昔から悪魔は宝を隠すために森を選んだということが人々に信じられている。夕暮れのころ、森の奥の方で、ある黒い男に出会うことがよくあるものだ、女たちは言っている。その男は、荷車引きか木こりのような顔つきをして、木靴をはき、麻の上衣とズボンとをつけているが、普通の帽子のかわりに頭の上に二本の大きな角があるので、それと見わけられるのだそうである。なるほどそういうものがあればよく見わけられるはずである。その男は普通はいつも穴を掘っている。そして彼に出会った場合には、三つの方法がある。第一は、彼に近寄って行つて話しかけることである。すると実は一人の百姓にすぎないことがわかる。姿が黒く見えたのは夕暮れのせいであつて、何も穴を掘っているのではなく牛の草を刈つてるのであり、角と思つたのも実は背中に負っている草搔かきである。第二の方法は、その男を遠くからな

がめていて、彼が穴を掘りそれをまた埋めて立ち去ってゆくまで待っていて、それから穴の所へ早く走ってゆき、それを掘り返し、黒い男が隠したはずの「宝」を取って来るのである。しかしそうすると、一月たつて死んでしまう。次に第三の方法は、その黒い男に話しかけもせず、見向きもせず、足にまかして逃げ出すことである。しかしそうすると、一年たつて死んでしまう。

右の三つの方法とも皆それぞれ不幸をきたすのであるが、第二の方法は、たとい一カ月でも宝を所有することができるので、いくらか他のにまさるものだから、最も普通に取られる方法である。それでいかなる機会にも誘惑される大胆な男どもは、その黒い男の掘った穴をあばいて悪魔の宝を盗もうとしたことがしばしばあったそうである。しかしあまり大した仕事にもならないらしい。少なくとも、伝説の語るところによれば、またことに、トリフォンというまやかしのノルマンディーの悪僧が残している野蛮なラテン語の謎めいた詩の二句を信ずるなら、それはいつこうくだらない仕事らしい。そのトリフォンという牧師は、ルアンの近くのサン・ジョルジュ・ド・ボシエルヴィルの修道院に埋められたが、その墓からはただ墓かえるが生じたのみだった。

が、とにかく人々は非常な努力をする。そういう穴は通例きわめて深い。汗を流し、か

き回し、夜通し骨を折る。夜のうちにしてしまわなければならないのである。シャツは汗にぬれ、蝟燭ろうそくは燃え尽き、鶴嘴つるはしを痛め、そしてついに穴の底まで掘り進み、その「宝」に手をつけてみると、さて何が見つかるう、悪魔の宝などというものが何であろう。一枚の銅貨、時には銀貨、それから石くれ、骸骨がいこつ、血まみれの死体、あるいは紙入れの中の紙片のように四つにたたまれた幽霊、あるいは何にもないこともある。不遠慮な物好きな者らにトリフォンの詩が語つてきかせるようなものにすぎない。

彼は掘り薄暗き穴に隠すなり、

銅貨銀貨石片死骸妖怪ようかい、あるいは無を。

今日ではなおそのほかに、あるいは弾丸と火薬箱や、あるいは手垢あかのついた赤茶けた古いカルタなど、確かに悪魔どもの使つたらしい品物がそこに見いだされるだろう。トリフォンはこの終わりの二品をあげていない、彼は十二世紀の人なのである。そして悪魔も、ロージャー・ベーコンより前に火薬を発明し、シャルル六世より前にカルタを発明するだけの知力を、持っていなかったものと見える。

その上、もしそれらのカルタを弄もてあそぼうものなら、すっかりうち負けて取られてしまう覚悟がある。そしてまた箱の中の火薬には、鉄砲をその所有者の顔に向かって発射させる特性がある。

ところで、放免囚徒ジャン・ヴァルジャンが数日間の逃走の間にモンフェルメイユ付近をうろついたらしく検察官はにらんだのであるが、その時期の後間もなく、ブーラトリユエルというある年取った道路工夫が森の中で「おかしなふうをしている」のが、モンフェルメイユの村の人たちの目についた。ブーラトリユエルはかつて徒刑場にはいつていた者であるとその地方では信じられていた。彼は警察の監視の下に置かれていた、そしてどこにも仕事が見つからなかったので、政府の方でガンニーからランニーまでの横道の道路工夫として安い給料で使っていた。

ブーラトリユエルはその地方の人々から蔑視べっしされていた。彼はばか丁寧で、あまり身を卑下へいげしていて、だれにでもすぐに帽子を取っておじぎをし、憲兵らの前では震えながら愛想笑いをし、たぶん盗賊団の仲間にはいつているのだろうと人から言われており、夕方などは森陰にひそんで人を待伏せしていると疑われていた。ただ人間らしい取りえとしては、酒飲みであるということくらいであった。

人々の目についたのは次のようなことであつた。

近頃いつもブラトリユエルは、道路に砂利を敷いて手入れをする仕事をごく早めに切り上げ、鶴^{つるはし}嘴を持つて森の中にはいつてゆくのだつた。夕方など、最も人けの少ない伐木地や最も寂寞^{せきばく}たる茂みの中などで、時々穴を掘ったりして何かさがし回つてゐるような彼に、出会うことがよくあつた。そこを通りかかった女たちは、初めそれをベルゼブル（訳者注 新約聖書にある悪鬼の頭）だとさえ思つたが、よく見るとブラトリユエルであつた。それでも彼女らは心が安まらなかつた。しかるにブラトリユエルはそういうふうに人に出会うことを非常にいやがつてゐるらしかつた。明らかに彼は人に見られるのを避けようとしていた、そして彼の仕業のうちに何か秘密があるのは明らかだつた。

村ではいろいろなことが言われた。「きつと悪魔が現われたに違いない。ブラトリユエルはそれを見てさがしているのだ。なるほどあの男なら魔王の金をまき上げるくらいのことはいかりかねない。」ヴォルテール流の者らはつけ加えた。「ブラトリユエルが悪魔を捕えるか、悪魔がブラトリユエルを捕えるかだ。」年老いた女たちは幾度も十字を切つた。

そのうちにブラトリユエルは森の中の仕事をやめてしまった。彼は道路工夫の仕事を

また几帳面^{きちようめん}にやり出した。人々の噂^{うわさ}も他のことに向いていった。

けれども中にはまだ好奇心をいだいていて、おそらくそれには、伝説の荒唐無稽^{こうとうむけい}な宝物ではなく、悪魔の手形よりはもつとまじめな、もつと実的な獲物があつて、道路工夫はきつとその秘密を半ば嗅^かぎ出したのだろう、と思つてゐる者もあつた。そして最も「氣をやんでいた」者は、小学校の先生と飲食店の主人テナルデイエとであつた。テナルデイエはだれとでも交わるのをきらわないで、ブラトリユエルとも知り合ひだつた。

「あの男は徒刑場にいたことがあるはずだ。」とテナルデイエは言つた。「だからいったいどんな奴^{やつ}がやつてきたのか、どんな奴がやつて来るか、わかつたもんじやない。」

ある晩小学校の先生が言うには、昔だったらブラトリユエルが森の中で何をするつもりであつたか官憲の方で調査したはずである、そしてあいつも何とかしゃべらなければならなかつただろう、必要によつては拷問にかけられることもあつたろう、で結局ブラトリユエルはたとえば水責めの拷問にはたえきれなくて白状したかも知れない。するとテナルデイエは言つた、「ひとつ酒責めにしてみましょうや。」

彼らは手段を講じて、その老道路工夫に酒を飲ました。しかしブラトリユエルは酒をたくさん飲んで、口はあまりきかなかつた。彼は大酒家の喉^{のど}と裁判官の用心さとを、いか

にも巧みにまたみごとな割合にあわせ用いた。けれどもしつこく問いただして、彼の口からもれた曖昧^{あいまい}な二、三の言葉をいつしよに繋ぎ^{つな}合^なわしてみ、結局テナルデイエと先生とは次のことを探り得たと思った。

ブラトリユエルはある朝、夜の明け方に、仕事に出かけて行くと、森の片すみの藪^{やぶ}の下にくわと鶴嘴^{つるはし}とを見出し出して驚いたらしい。それはちやうど隠されたようにして置いてあつた。けれども彼は、それをたぶん水くみ爺さんのシー・フルのくわと鶴嘴とであろうと思つて、別に氣にも留めなかつたらしい。けれどもその日の夕方、彼はある大木の後ろに身を隠して先方の目をのがれながら、「全くその辺の者ではないが彼ブラトリユエルがよく知つてゐる一人の男」が、道路から森の最も深い方へはいつてゆくのを見たらしい。テナルデイエはそれを翻訳して「徒刑場の仲間の一人」だとした。ブラトリユエルは頑固^{がんこ}にその名前を言うことを拒んだのである。その男は、大きな箱かあるいは小さな鞆^{かばん}みたような何か四角な包みを持つていた。ブラトリユエルは驚いた。それでも「その男」の跡をつけてみようという考えを起こしはしたが、それも七、八分過ぎてからであつたらしい。彼は機を失していた。男は既に木立ちの茂みへはいってしまひ、あたりは夜になつていて、ブラトリユエルは男を見つけることができなかった。そこで彼は森の入り口を

番してみようと決心した。「月が出ていた。」二、三時間後に、ブーラトリユエルはその男が森から出て来るのを見た。しかしもう小さな靴は持つていず、鶴嘴とくわを持つていた。ブーラトリユエルは男をやり過ぎた。近づいてみようという考えは起こさなかった。なぜなら、彼はその男が自分よりも三倍も力がある上に鶴嘴を持つていることを考えたからである。もしその男が自分を見て取り、また自分から見て取られたことを知ったなら、きつと自分を打ち殺すかも知れないと思つたからである。二人の古い仲間がふいに出会つた場合の感情としては恐ろしいことである。しかしそのくわと鶴嘴とは、ブーラトリユエルにとつては一道の光明であつた。彼はその朝見た藪^{やぶ}の所へ駆けて行つた。するとそこにはもうくわも鶴嘴もなかった。それから見ると、男は森の中にはいり込み、鶴嘴で穴を掘り、箱を隠し、くわで穴を再び埋めたものと、彼は断定した。しかるにその箱は、人間の死体を入れるにはあまり小さかつたので、金がいってゐたものであらう。それで彼は搜索をはじめた。彼は森の中を方々さがし回り尋ね歩いた。新しく土地が掘り返されたように見える所はどこでも掘つてみた。しかしすべてむだに終わった。

彼は何も「掘りあて」なかつたのである。モンフェルメイユではもうだれもそのことを念頭に置かなかつた。ただ二、三人の人のいいおしやべりな女たちは言った。「ガンニー

の道路工夫の爺さんがただでそんな大騒ぎをするものですか。きっと悪魔がきたのですよ。
」

三 鉄槌の一撃に壊るる足鎖の細工

同じ一八二三年の十月の末に、ツーロンの住民は、軍艦オリオン号が大暴風雨に会った後、損所を修理するために入港してくるのを見た。このオリオン号というのは、後にはブレストで練習艦として用いられたが、当時は地中海艦隊のうちに編入されていたものである。

その艦は、荒れた海のためにひどく損^{いた}んでいたが、港にはいつて来るとすこぶる偉観であつた。どういう旗を掲げていたかは今記憶にないが、その旗のために港からは規定の十一発の礼砲が放たれ、その一発ごとに艦からも答礼砲が返されたため、つごう二十二発の大砲が発せられた。およそ大砲の連発のうちには種々な意味がこめられていたのである。王国および軍国の礼儀、騒然たる儀礼の交換、礼式の信号、海上と砲台との儀式、毎日すべての要塞^{ようさい}および軍艦から迎えられる日の出と日没、港の開始と閉塞、その他種々のもの

のが。文明社会は、各地において毎二十四時間ごとに、無益な大砲を十五万発も発射している。一発を六フランとすれば、一日に九十万フランが、一年に三億フランが、煙となるわけである。そしてそれもただ一部の項目だけでそうである。その間に一方では、貧しい人々は飢えている。

一八二三年は、復古政府が「スペイン戦争時代」と呼んだ年である。

その戦争一つのうちには、多くの事変が含まっており、多くの特殊な事がらが混入していた。ブルボン家にとって重大な家系問題。フランス王家がマドリッドの王家を援助し保護して、いわゆる本家の勤めを尽したこと。北方の諸政府に隷属^{れいぞく}従^{ぞく}していつそう煩^{わづ}雑^{ざつ}をきたした、フランスの国民的伝統への表面上の復帰。アングレーム公が、自由派の空想的な虐政と争っていた宗教裁判所の実際的な古来からの虐政を、いつもの穏和な様子にも似ず堂々たる態度をもって抑制して、自由派の諸新聞からアンデュジャールの英雄と呼ばれたこと。サン・キュロット（反短ズボン派——過激共和党）がデスカミザドス（反シャツ派）の名の下に復活して、有爵未亡人らに恐慌をきたさしめたこと。王政が無政府制と緋名^{あだな}された進歩に対して障害となったこと。一七八九年の革命の理論が底深く浸潤せんとする途中で、にわかに中断されたこと。フランスの革命思想を親しく見た全欧州

の警戒の聲が世界中に響き渡っていったこと。総司令官フランス王子と相並んで、後にシヤール・アルベールと言われたカリニャン大侯が、義勇兵として擲弾兵の赤い絨毛の肩章をつけて、民衆を圧伏せんとする諸国王らの企てに加入したこと。帝国時代の兵士らは再び戦場についたが、八年間の休息の後をうけて既に老衰して元氣なく、また白い帽章をつけていたこと。三十年前コブレンツにおいて白旗が打ち振られたように（訳者注 革命時代王党の亡命者らが一軍を編成したことを言う）三色旗が勇壮なる一群のフランス人によって外国において打ち振られたこと。フランスの軍隊に混入した僧侶ら。銃劍によって抑圧された自由と新時代との精神。砲弾の下に屈伏された主義。その精神によってなしたところのものをその武器によって破壊するフランス。これに加うるに、売られたる敵の将帥らと、逡巡する兵士らと、数百万の金によって包囲された都市。あたかも不意を襲われて占領された火坑におけるがごとく、軍事上の危険の皆無としかも爆発の可能。流血も少なく、得られたる名誉も少なく、ある者には恥辱があり、何者にも光榮がなかったこと。かくのごときが実に、ルイ十四世の後裔たる諸大侯によってなされ、ナポレオンの下より輩出した諸將軍によって導かれたこの戦争の実状であった。この戦争はもはや、あの大戦役をもまたあの大政策をも思い起こさしめない悲しき運命を荷っていた。

軍事上の二、三の事蹟は眞摯しんしなものであり、なかなづくトロカデロの占領はみごとな武勲であつた。しかし畢ひつきよう竟するに、吾人ごじんはくり返して言うが、本戦争のラツパは亀裂のはいつた音をしか出さなかつた。その全体は曖昧模糊あいまいもことしていた。その似而非戦勝えせの名前を受くるに、フランスが困惑を感じたことは、史眼に照らして正当である。防御の任を帯びたスペインのある將軍らは、明らかにあまりにたやすく屈伏したらしい。その戦勝は見る人の心を買収の想像を起こさせる。勝利を得たというよりもむしろ將軍らを買ひ得たかの觀がある。そして戦いに勝つた兵士らは屈辱を負つて国へ歸つた。軍旗のひだのうちにフランス銀行の文字を読み得る所には、戦争の光輝は薄らぐ。

サラゴサの城壁が頭上に恐ろしく倒れかかる下にあつてなお泰然たるを得た一八〇八年の兵士らは、一八二三年には、諸要塞ようさいのたやすい開城に対して眉をしかめ、パラフォス將軍（訳者注 一八〇八年にサラゴサを護つたスペインの勇將）を惜しみはじめた。おのれの前にバレストロスを有するよりも、むしろロストプシンを有するを好むのがフランス人の氣質である（訳者注 前者は当時の敵の將軍、後者はナポレオンのロシア侵入の時モスコを焼き払つたロシアの將軍）。

なおいっそう重大にしてここに力説するが適當である他の一見地より見るならば、この

戦争は実に、フランスにおいて軍国的精神を傷つけながら、他方には民主的精神を激怒せしめたのである。それは一つの隷属を贏^かち得んとする企図であつた。この戦役においては、民主制の子孫たるフランス兵士の目的は、他人に課すべき軛^{くびき}の獲得であつた。忌むべき矛盾である。フランスは諸民衆を窒息せしめんがためにではなく、反対にそれを覺醒^{かくせい}せしめんがために作られてるのである。一七九二年以後欧州のあらゆる革命は実はフランス革命の一分子である。自由の精神はフランスより放射している。それは太陽のごとく煌々^{こうこう}たる事実である。それを見ざる者は盲者なり！ とはボナパルト自身の言葉である。

一八二三年の戦争は、健氣^{けんけい}なるスペイン国民への加害であり、従つて同時にフランス革命への加害であつた。その恐るべき暴行を犯したところのものはフランスであつた、しかもそれは暴力をもつてであつた。なぜなれば、独立戦争を外にしては、すべて軍隊がなすところのものは暴力をもつてなされるものであるから。絶対服従という言葉はそれをさし示すものである。軍隊というものは、結合の不思議な傑作であつて、多くの無力の合計より力が生じてくる。人道によつてなされ、人道に対抗してなされ、人道をふみつけにしてなされる戦争なるものは、かくして初めて説明し得らるる。

ブルボン家の人々について言うならば、一八二三年の戦役は彼らにとっては致命的な

ものであった。彼らはこの戦いをもつて成功であるとした。そして圧迫をもつて一つの思想を屏^{へい}息^{そく}せしむることにいかなる危険があるかを少しも見なかった。浅慮なる彼らは謬^び見^{ゆうけん}をいだいて、罪に対する非常なる鈍感をあたかも力の一要素でもあるかのようにおのが館^{やかた}のうちに導き入れた。待伏陰謀の精神は彼らの政策のうちにはいつてきた。一八三〇年（訳者注 七月革命の年）は一八二三年に芽を出した。スペイン戦争は彼らの評議会において、武力断行と神法に対する冒険とを弁護する論拠となった。フランスはスペインに専制君主をうち立てながら、自国内に専制君主をよくうち立てるを得た。両者は兵士の服従を国民の同意と誤認するの恐るべき誤りに陥った。そのような安心は王位を失わせるに至るものである。毒樹の陰には眠るべからず、軍隊の影に隠れて眠るべからずである。さてオリオン号に立ち戻つてみよう。

ちようど総司令官大侯に指揮された軍隊が出動している間、一艦隊は地中海を游^{ゆう}弋^{よく}していた。そして前述のとおり、その艦隊に属していたオリオン号は荒海に損^{いた}んでツーロン港に帰つてきたのである。

港のうちに現われる軍艦は、何かしら群集を引きつけ群集の心を奪うものである。なぜなら、それは一種の偉大さをもっているものであるから、そして群集は偉大なるものを好

むものであるから。

戦闘艦は人間の脳力と自然の力との最も壯観なる争闘の一つである。

戦闘艦は最も重きものと最も軽きものから同時に組み立てられている。なぜならばそれは、物質の三形体たる固体液体および気体に同時に對抗し、その三つと戦わなければならぬからである。海底の岩石をつかむためには十一本の鉄の爪を有し、雲間の風をとらえるためには胡蝶こちょうよりも多くの翼と触角とを有している。その息は巨大なるラツパからのように百二十の砲門からいで、誇らかに雷電に対しても答え返す。大洋はその波濤はとうの恐るべき一律さのうちに彼を迷わさんとするけれども、彼はその心を、羅針盤らしんばんを有している、それに助言されて常に北を教わる。暗夜にはその照燈が星の光を補う。かくして彼は、風に対しては索繩なわと帆布とを有し、水に対しては木材を、岩に対しては鉄と銅と鉛とを、やみに対しては光を、広漠に対しては磁針を有している。

全体として一つの戦闘艦を形造っているその巨大なる構造のおおよその概念を得んと欲するならば、ブレストかツーロンの港の七階の高さほどもある屋根のついたドックの一つにはいつてみれば十分であろう。そこでは建造中の船が、いわばガラスびんの中にでもはいつているように見える。あの巨大なる梁はりは帆桁ほげたである、あの目の届く限り長く地上に横

たわっている大きな木の円柱は^{ほばしろ}大櫓である。船^{せんそう}艙の中の根本から雲間の梢^{こずえ}までそれを測ってみると、長さ六十^{ひろ}尋を算し、根本の直径三尺に余る。イギリス船の大櫓は、喫水^{きつすい}線^{せん}上二百十七尺の高さに及ぶものがある。昔の船は麻綱を使っていたが、今では鉄鎖を用いている。百門の砲を載せる船の鎖を積み重ねただけでも、高さ四尺長さ二十尺幅八尺の山ができる。そしてその船一隻を造るために何程の木材が必要であるかといえ、三千方メートルにもおよぶのである。森が一つ海に浮かんでいるのにも等しい。

そしてしかも、読者はよく注意せらるるがいい、ここにいるのは四十年前の軍艦、一帆船のことについてである。当時まだ生まれ出たばかりであつた蒸汽力はその後、軍艦と称せらるるこの怪物に新しい奇蹟をつけ加えたのである。現今においては、たとえば、スクリューのついた折衷式軍艦は、表面三千メートル平方の帆と二千五百馬力の釜^{かま}とによつて動かされる、驚くべき機械である（訳者注 原書の出版は一八六二年なることを読者は記憶せられたい）。

それらの驚くべき新発見については言うも愚かなことであるが、クリストフ・コロンプスやルイテルの昔の船も、人間の偉大なる傑作の一つである。あたかも無限がその息吹^{いぶ}きに無尽蔵であるがごとくにそれも力において無尽蔵であり、その帆には風を蔵し、広漠と

して窮まりなき波濤はとうのうちにも正確なる方向を失わず、浮かびつつかつ主宰するのである。しかれども一度時きたらば、一陣の颶風ぐふうはその長さ六十尺の帆桁くすをもわら屑くずのごとくに砕き、烈風はその高さ四百尺のマストをも藺いのごとくに折り曲げ、その万斤の重さの錨いかりも鮫さめの顎中の漁夫の釣り針のごとくに怒濤の口の中にねじ曲げられ、その巨大な大砲の発する咆哮ほうこうも颶風のため哀れにいたずらに空虚と暗夜とのうちに運び去られ、その全威力と全威風も更に大なる威力と威風とのうちにのみ去られ終わるのである。

広大なる威力が展開されるたびごとに、ついにはそれも非常なる微弱さに終わりゆくべき運命であるにかかわらず、人間はいつも夢想にふけらせられる。かくして海港においては、それらの戦いと航海との驚くべき機械のまわりに、自らなぜかをもよく知らないで多くの好奇ものずきな人々が集まって来るのである。

で毎日朝から夕方まで、ツーロン港の海岸や埠頭ふとうや堤防などの上には、ひまな人々やパリーでいわゆるやじ馬など、オリオン号を見るよりほかに用のない多くの人がいつぱいになつていた。

オリオン号は既に長い前から損いたんでいた。方々への航海中に、貝殻の厚い層が喫水部きつすいぶに付着して、速力の半ばを減じていた。で前年はドックにはいつてその貝殻を除かれ、そ

してまた海に出て行つたのである。しかしその掃除のために喫水部の釘が損じていた。バ
レアール島の沖では、船腹がゆるんで穴が開いた、そして当時船体の内部は鉄板でおおわ
れていなかったもので、水が漏り初めた。そこへ激しい彼岸嵐に襲われて、左舷の船嘴と一
舷窓とがこわれ、前檣の索棒が損んだ。そしてそれらの損所のためにまたツーロン港
にはいつてきたのである。

オリオン号は造船工廠の近くに停泊していた。そしてなお艤装したまま修繕されて
いた。船体は右舷では少しも損んでいなかった。しかしいつもやられるとおりに、張り板
はそこここはがされていて、船内に空気を通す用に供されていた。

さてある日の朝、オリオン号をながめていた群集は一事変を目撃した。

船員らはちょうど帆を張っていた。すると、右舷の大三角帆の上端をとらえる役目の水
夫が身体の平均を失った。彼はよろめいた。それを見て、造船工廠の海岸に集まっていた
群集は叫び声を上げた。頭をまつさきにして水夫は帆桁をぐるりと回りながら、逆様に深
海に向かって両手をひろげた。その途中で彼は下がっている綱を片手でつかみ、次に両手
でつかんで、そこにうまくぶら下がった。海は彼の下に目を回すような深さにたたえてい
た。彼の墜落の勢いのために、綱はぶらんこのように激しく動揺した。水夫はその綱の一

端に揺り動かされて、ちょうど石投げひもの先につけた石のようであつた。

彼を助けにゆくには恐るべき危険を冒さなければならなかつた。水夫らは皆新たに徴発されて働いてる沿岸の漁夫であつて、あえてその危険を冒そうとする者は一人もなかつた。そのうちに不運な水夫は弱つてきた。遠いので顔にその苦悩は認められなかつたが、しだいに力弱つてゆくことは手足にそれと認められた。両腕は見るも恐ろしいほど引つ張られていた。再びよじ上ろうとする努力は、ぶら下がつた綱の動揺をいたずらに増すばかりだつた。彼は力を失うのを恐れて声も立てなかつた。もはや彼が綱を離す瞬間を待つばかりだつた。そして人々は彼が落ちてゆくのを見まいとして各瞬間ごとに顔をそむけた。綱の一端、一片の棒、一本の木の枝、それが生命それ自身であるような場合があるものである。そして、生あるものが熟した果実のようにそれから離れて落ちるのを見るのは、実に恐ろしいことである。

その時突然山猫ねこのような捷さはやで一人の男が船具をよじ上つてゆくのが見られた。その男は赤い着物を着ていた。徒刑囚である。緑の帽子をかぶっていた。無期徒刑囚である。櫓しの上ようろに達すると、一陣の風がその帽子を吹き飛ばして、白髪しの頭が見られた。青年ではない。

實際船の中で徒刑労役として働いていた一人の囚人が、その事變が起これるとすぐに当直士官の所へ駆けてゆき、船員らが躊躇ちゆうちょし惑とっている中に、すべての水夫らが震えしり込みしているうちに、彼はただ一人、生命を賭して水夫を救いに行くことを許してくれるように士官に願った。士官の許しの首肯を見て、彼は足の鉄輪についていた鎖を鉄槌つちの一撃でうちこわし、それから一筋の縄を持って、檣ぼしちの綱具のうちに上っていったのである。いかにたやすくその足鎖がこわれたかには、その瞬間だれも気がつかなかった。人々がそのことを思い浮かべたのはずっと後のことだった。

またたくまに彼は帆桁の上に達した。彼は数秒の間立ち止まって、帆桁を目で見計らつてゐるしかつた。そのうちにも風は綱の先端の水夫を吹き動かして、見物している人々にはその数秒が数世紀の長い時間ほどにも思われた。ついに囚人は目を空に上げ、そして一歩ふみ出した。群集は息をついた。見ると、彼は帆桁の上を走っていった。その先端に達するや、彼は持っていた綱の端をそこにゆわえ、他の端を下にたらし、それから両手でその綱を伝つており初めた。ここにおいて人々の心痛は名状すべからざるものとなった。いまや深淵しんえんの上にぶらさがっているのは一人ではなく、二人となったのである。

いわば蜘蛛くもが蠅はえを捕えにきたようなものであつた。ただその場合、蜘蛛は死をでなく生

を持ちきたつたのである。数万の視線はその二人の上に据えられた。一言の叫びをも言葉をも発する者はなく、皆一様に身を竦すくめながら眉根まゆねを寄せていた。人々の口は呼吸をも押し止め、あたかも二人の不幸なる男を揺すつてゐる風に少しの息をも加えまいと気づかつてゐるかのようだった。

そのうちに囚人は水夫の近くに身を下げることができた。危うい時間であつた。いま一分も遅ければ、その水夫は疲れ切つて絶望し、深淵のうちに身を落とすところだった。囚人は一方の手で縄に身をささえながら、他方の手で水夫をその縄でしかと繋つなぎとめた。見ると、ついに彼は帆桁の上にまたよじ上り、水夫を引き上げてしまった。彼はそこでちよつと力を回復させるために水夫を抱きとめ、それから彼を小腋こわきに抱え、帆桁の上を横木の所まで歩いてゆき、そこから更に檣しやうろ檣までいつて、そこで彼を仲間の人々の手に渡した。その時群集は喝かつさい采した。老看守のうちには涙を流す者もいた。女たちは海岸の上で相抱いた。一種の感きわまつた興奮した声で「あの男を許してやれ！」と異口同音に叫ぶのが聞こえた。

そのうちにも彼の方は、また労役に従事するために、義務として直ちにそこからおり初めた。早く下に着くために、彼は綱具のうちをすべりおり、それから下の帆桁の上を走り

出した。人々の目は彼のあとを追った。ところがある瞬間に、人々ははつと恐れた。疲れたのかまたは目が回ったのか、彼はちよつと躊躇ちゆうちよしそしてよろめいたようだった。と突然、群集は高い叫び声をあげた。囚人は海中に落ちたのである。

その墜落は危険であつた。軍艦アルゼジラス号がちようどオリオン号と相並んで停泊していた、そしてあわれな徒刑囚はその間に落ちたのだつた。彼は両艦のいずれかの船底にまき込まれる恐れがあつた。四人の男が急いでボートに飛び乗った。群集は彼らに声援した。心痛は人々の心のうちにまた新たになつた。男は水面に浮き上がらなかつた。あたかも石油樽たるの中に落ち込んだがように、一波も立てずに海中に消え失せてしまった。人々は水中を探り、また潜もぐつてみた。しかし無益であつた。夕方まで搜索は続けられた。けれども死体さえも見つからなかつた。

翌日、ツーロンの新聞は次の数行を掲げた。

一八二三年十一月十七日——昨日、オリオン号の甲板で労役に従事していた一囚徒は、一人の水夫を救助して帰り来る時、海中に墜落して溺死できしした。死体は発見されなかつた。察するところ、造船工廠の先端の杭くいの間にからまったものであらう。その男

の在監番号は九四三〇号で、ジャン・ヴァルジャンという名前である。

第三編 死者への約束の履行

一 モンフェルメイユの飲料水問題

モンフェルメイユは、リヴリーとシエルとの間に位し、ウールクとマルヌ両河をへだてている高台の南端にある。今日ではかなり大きな町で、一年中白堊はくあの別荘で飾られ、日曜日には花やかな市人で飾られるが、一八二三年には、まだ今日ほど多くの白塗りの家もなく、また満足げな市人もいなかった。それはただ森の中の一村落にすぎなかった。ただそこここに二三の近世ふうな別墅べっしょなどがあつて、その堂々たる構えや、よじれた鉄欄のついている露台や、閉ざされたまっ白な板戸の上に色ガラスの種々な緑色が浮いて見える長い窓などで、それと見分けられていた。それでもやはりモンフェルメイユは一つの村落にすぎなかった。引退した呉服商や別荘暮らしの人たちなども、まだこの地を見出ししていな

かつたのである。それは平和なうるわしい場所であつて、いずれへの往還にも当たつていなかった。豊富な気やすい田舎生活いなかせいかつを安価で送ることができていた。ただ土地が高いので水が不自由であつた。

かなり遠くまで水を取りに行かなければならなかつた。ガンニーの方に面した村の一端では、森の中にある多くの美しい池から水をくんでいた。教会堂をとり囲んでシエルの方に面した他の一端では、シエルへ行く道の側に村から約十五分もかかる山腹にある小さな泉まで行かなければ、いっさい飲料水は得られなかつた。

それでどの家でも、水を得ることはかなり骨の折れる仕事であつた。大きな家、上流階級、テナルデイエの飲食店もそのうちにはいるのであるが、それらの家では一ひと桶おけについて一リールずつで水を買っていた。水くみを職業としているのは一人の老人であつて、村の水くみの仕事で一日に八スーばかり得ていた。けれどもその老人は夏には七時まで、冬には五時までしか働かなかつた。それで一度夜になると、一階の窓の戸がしまる頃になると、飲水を絶やした家では、自分でくみにゆくか、または水なしで我慢するかしなければならなかつた。

おそらく読者も忘れないでいるに違いないあのあわれな娘、小さなコゼット、彼女が非

常に恐れていたのはそのことであつた。読者の思い起こすとおり、コゼットは二つのことでテナルディエの者らに有用であつた。彼らは母親から金をしぼり取るとともに、また子供をこき使っていたのである。それで、前の数編に述べておいたような理由で、母親の方から全く金がなくなつた時にも、テナルディエの者らはコゼットを家に置いていた。彼女は下女の代わりにされていたのである。水の入用な時にそれをくみに走って行くのは、下女としての彼女であつた。晩に泉の所まで行くことは考えても身震いがするほど恐れていた娘は、家の中に決して水を絶やさないように非常に注意していた。

一八二三年のクリスマスは、モンフェルメイユでは特にぎやかだつた。その冬の初めも至つて温和で、まだ氷結もしなければ、雪も降らなかつた。香具師^{やし}らがパリーからやってきて、村長の許しで村の大きな通りに仮小屋を建て、また行商人の一隊も同じく許しを得て、教会堂の広場からブーランゼーの小路まで露店を建てつらねた。たぶん読者も記憶しているであろうが、そのブーランゼーの小路にテナルディエの飲食店はあつたのである。そんなことで、宿屋や飲食店などはいっぱいになり、静かな田舎^{いなか}は楽しくにぎやかに活氣だつた。なおまた忠実なる史家としてわれわれは、ここにつけ加えておかなければならぬ一事がある。すなわち広場の上に並んだ見世物のうちに、一つの動物小屋があつた。そ

の中で、身にはぼろをつけてどこからやってきたともわからないきたない道化者らが、この一八二三年にモンフェルメイユの百姓どもに、あの恐ろしいブラジルの禿鷹はげたかの標本を一つ見せていた。それは王室博物館にも一八四五年まではなかったもので、目には三色の記事がついてるものだった。博物学者はその鳥をカラカラ・ポリポルスと呼んでいると記憶する。それはアピシデの部門にはいるもので、禿鷹類に属するものである。村に引退しているボナパルト派の人のいい老兵士らが数人、その鳥を熱心にながめていた。その三色の記事の目は、この動物小屋のために、ありがたい神様の御手で特別になされた他に見られない図であると、道化者どもは説き立てていた。

そのクリスマス晩に、テナルディエ飲食店の天井の低い広間の中では、馬方うまかたや行商人など数人の男が、四、五の燭台しよくだいのまわりに陣取って酒を飲んでいた。その広間はどこの居酒屋いざかやにも見られるようなもので、食卓、錫すずの瓶かめ、酒壺さけびん、それから酒を飲んでる男や、煙草たばこをふかしてる男、中はうす暗くて、しかも騒然たる音を立てていた。けれども一八二三年という年には、特にいちじるしく市民階級の間に流行してきた二つの物があつた。すなわち万華鏡カレードスコープと木目模様もくめもようのブリキのランプとである。この広間にもその二つがテーブルの上にのつていた。そしてテナルディエの上かみさんは、明るく燃え立った火の前であ

ぶられてる夕食のごちそうの番をしており、亭主の方は、客たちと酒を飲みながら政治を論じていた。

スペイン戦争やアングレーム公を中心にした政治談のほか、なお地方的の種々な事がらに関する談笑もあった。次のような言葉も聞かれた。

「ナンテールやスレーヌの方では葡萄酒ぶどうしゅがえらくできたぜ。十樽じゅうたるくらいかと思つて

ると十二樽もあるんだ。圧搾器のために液汁しるが多く取れたんだ。——だが葡萄酒はまだ熟しちやいかなかったろうじゃねえか。——なにあちらじゃ、熟すまで置きやしねえ。熟してから採ったんじやあ葡萄酒は春になるとねばつちまわあ。——それじゃあ薄い葡萄酒だね。

——そうとも、この辺にできるのよりもつと薄いや。とにかく葡萄酒は青いうちに採るに限るぜ。」

その他種々の話。

それからまた粉屋はこんなことを言っていた。

「俺おれたちは袋の中のものに責任を負えるかい。たくさんひきうすの穀類がはいってるのを、一々より分けておられるものじゃねえ。ただ挽白ひきうすの中につき込むばかりだ。どくむぎ、あたますぎ、なでしこむぎ、はとまめ、やはずえんどう、たいま、いぬすぎな、そのほかいろん

なものはいってやがるんだ。またばかに石の多い麦やつがあるのは言うまでもねえ。とりわけブルターニユ麦はひでえや。俺はブルターニユ麦をひくなあ全くごめんだ。釘くぎのある梁はりを鋸でひくのがいやだというが、もつといやなもんだ。そんな下等な麦で、どんな粉ができるもんか。それなのに粉の苦情ばかり言つてやがる。言う方が無理なんだ。粉が悪いつたつて何も俺たちのせいじゃねえんだ。」

窓と窓の中ほどのところには、一人の草刈り人夫が地主といつしよに食卓について、春になすべき牧場の仕事の賃金を相談されていたが、彼はこんなことを言つていた。

「草がぬれるなあ悪ありません。刈りよくなるだけでさあ。露はいいですよ、旦那だんな。だがそれはとにかく、あの草は、まだ若いんで刈りにくいですよ。柔らかいうちはどうもおかま鎌の下になつてかないませんからね。」

その他種々。

コゼットはいつものとおり、料理場のテーブルの横木に、暖炉に近い所に腰掛けていた。彼女はぼろの着物を着て、素足のまま木靴をはき、そして炉の火の光でテナルディエの娘らのために、毛糸の靴足袋を編んでいた。一匹の小さな子猫が椅子いすの下で戯れていた。二人の子供のあざやかな笑い興ずる声が隣の室から聞こえていた。それはエポニーヌとアゼ

ルマであつた。

暖炉のすみには、一本の皮の鞭が釘に下がっていた。

時とすると、家のどこかにいるごく小さな子供の泣き声が、酒場の騒ぎの間に聞こえてきた。先年の冬テナルディエの上さんがもうけた男の児である。「どうしたんだろう、あまり寒いから子供ができたのかも知れない、」などと上さんは言っていた。もう今では三歳余りになっていた。彼女はその子供を育ててはいたが、少しもかわいがっていなかった。子供の激しい泣き声があまりうるさくなると、亭主は言った、「子供が泣いてる、行つてみてやれよ。」すると母親はいつも答えた、「構うもんですか！ 私はくさくさしちまう。」そして顧みもされない子供は、暗やみの中に泣き続けるのだった。

二 二人に関する完稿

読者は本書において、テナルディエ夫婦についてはその横顔しか見ていない。が今や、二人のまわりを回って、前後左右からながむべき時となった。

亭主の方はちょうど五十の坂を越したばかりであつた。女房の方は四十台になっていた。

四十といえは男の五十に当たる。それで二人の間に年齢の不釣り合いはなかったわけである。

背が高く、金髪で、あから顔で、脂ぎつて、肥満して、角張つて、ばかに大きく、そしてすばしこいテナルデイエの上さんを、読者はたぶん彼女が初めて舞台に現われて以来記憶しているであろう。前に言つておいたとおり彼女は、市場をのさばり歩く野蛮な大女の仲間に属していた。家の中のことはすべて一人でやつた、寢所をこしらえ、室を片付け、洗濯をし、料理をし、雨の日も天気の日も、何でも手当たりしだいにやつてのけた。そして唯一の下女としてはコゼットがいた、象に使われてる一匹の小鼠みたいなコゼットが。彼女の声の響きには、家中のものが、窓ガラスも道具も人間もみな震え上がった。赤痣で凸凹の大きい顔は、網杓子に似ていた。髻まではえていた。まったく市場の人夫の理想的な型で、ただ女の着物を着てるだけであつた。そのどなる声は素敵なものだった。胡桃をも一打にたたき割るといつて自慢していた。小説を読んだので時とすると、その食人鬼のような姿の下から変に洒落女の様子が現われて来ることがあつたが、それがなかったら、女だと言ってもだれも本当にしなかったかも知れない。まず娼婦が土方女に接木してできたというくらいのところだった。口をきいてるのを聞くと憲兵かとも思われ、酒

を飲んでるところを見ると馬方^{うまかた}かとも思われ、コゼットをこき使つてるところを見ると鬼婆^{おにばば}とも思われるほどだった。休息してる時には、齒が一本口からのぞき出ていた。

亭主のテナルディエの方は、背の低い、やせた、色の青い、角張った、骨張った、微弱な、見たところ病氣らしいが実はすこぶる頑健^{がんけん}な男であつた。彼のまやかしはまず第一にそういう身体つきから初まつていた。いつも用心深くにやにやしていて、ほとんどだれにでも丁寧であり、一文の錢をもくれてやらぬ乞食^{こじき}にさえ丁寧であつた。目つきは鼪^{いたち}のようであつて、顔つきは文人のようなふうをしていた。ドリーユ師（訳者注　好んで双六などをやつてる男を歌つた詩人）の描いた人物などに似通つたところが多かつた。よく馬方などといつしよに酒を飲んで氣取つていた。だれも彼を酔わせることはできなかった。いつも大きな煙管^{きせる}で煙草^{たばこ}をふかしていた。広い仕事着をつけて、その下に古い黒服を着込んでいた。文学に興味があり、また唯物主義の味方である、と自称していた。何でも自分の説をささえるためにしばしば口にする二、三の名前があつた。それはヴォルテールとレーナルとパルニーと、それから妙なことだが、聖アウグスチヌスとであつた。自分は「一つの哲学」を持つていると断言していた。が少なくとも、非常なまやかし者で、尻学者^{けつがくしゃ}であつた。哲学者をもじつて尻学者と称し得らるるくらいの男はざらにあるものである。また

読者は記憶しているであろうが、彼は軍隊にはいつていたことがあると自称していた。彼がすこぶる大げさに吹聴するところによると、彼はワートルローにおいて輕騎兵の第六とか第九とかの連隊の軍曹であつて、プロシア驃騎兵ひようきへいの一中隊に一人で立向かい、霰弾さんだんの雨下する中に、「重傷を負った一將軍」を身をもつておおい、その生命を救つたそうである。壁にかかつている真紅な看板と、「ワートルローの軍曹の旅籠屋はたごや」というその地方の呼び名とは、それから由来したのである。彼は自由主義者で、古典派で、またボナパルト派であつた。彼はシャン・ダジュール（訳者注 フランスの追放者歸休兵らによって當時アメリカに建てられていた植民地）に金を出していた。村人の話では、彼は牧師になるために學問をしたそうであつた。

われわれの信ずるところによれば、彼はただ宿屋になるためにオランダで學問をしただけのことである。そして混合式の惡党である彼は、その変通性によって、フランドルではあるリール生まれのフランドル人となり、パリーではフランス人となり、ブラッセルではベルギー人となつて、うまく二つの國境をまたいで歩いてゐた。彼のいわゆるワートルローの武勇については、読者の既に知るとおりである。いうまでもなく彼はそれを誇張して話してゐたのである。變転、彷徨ほうこう、冒險、それが彼の一生のおもなでき事であつた。内

心の分裂は生活の不統一をきたす。宜^{むべ}なるかな、一八一五年六月十八日の騒乱の時に当たつてテナルデイエは、あの酒保兼盗人の仲間にはいつていた。それら一群の者どもは前に述べたとおり、戦場をうろつき、ある者には酒を売りつけ、ある者からは所持品を略奪し、男も女も子供も一家族一つになつて、変なびつこの車にのり、本能的に勝利軍の方へくつき、進撃する軍隊のあとについて彷徨するのである。そういう戦争に参加して、自称するごとくいくらか「錢^{ぜに}を儲^{もう}け」て、それから彼はモンフェルメイユにきて飲食店を開いたのであつた。

その錢^{ぜに}なるものも、死骸をまいた畑から収穫時にうまく刈り取つた、金入れ、時計、金の指輪、銀の十字勲章、などにすぎなくて、大した金高にもならなかつた。そしてそれだけでは、飲食店になつたその従軍商人を長くささえることはできなかつたのである。

テナルデイエの身振りのうちには何となく直線的なものがあつて、きつぱりと口をきく時には軍人らしい趣となり、十字を切る時には神学校生徒らしい趣となつた。話が上手で、学者と思われることもあつた。けれども、小学校の先生は彼の「言葉^{ことば}尻^{しり}の誂^{なま}り」に気がついた。彼は旅客への勘定書を書くことに妙を得ていた。けれども、なれた目で見ると往々つづりの誤りが見い出された。彼は狡猾^{こうかつ}で、強欲で、なまけ者で、しかも利口であつ

た。彼は下女どもをも輕蔑しなかった。そのために女房の方では下女を置かなくなった。この大女は至つて嫉妬しつと深かった。彼女には、そのやせた黄色い小男がだれからでも惚ほれそうに思えたのである。

テナルデイエは特に瞞まん着ちやく者で落ち着いた男であつて、まあ穩やかな方の惡党であつた。けれどもそれは最も性質たちのよくないやつである、なぜなら偽善が交じつてくるからである。

かといつて、テナルデイエとても女房のように怒氣を現わす場合がないわけではない。ただそれはきわめてまれであつた。そしてそういう時には、彼は人間全体を憎んでゐた。自分のうちに憎惡ぞうおの深い釜を持つてゐるようだった。絶えず復讐ふくしゅうの念をいだいていて、自分に落ちかかつてきたことはすべて目の前のものの罪に歸し、生涯しょうがいの失意破綻はたん災難のすべてを正当な不平のうちにいつもだれにでもなげつけようとしているかのようだった。すべてのうつ積した感情が心のうちに起こつてきて、口と目から沸き立つて来るかのようなうだつた。そして恐るべき様子になるのであつた。そういう彼の激怒に出會つた人こそ災難である！

その他種々な性質のほかにテナルデイエはまた、注意深く、見通しがきき、場合によつ

ては無口だつたり饒舌^{じょうぜつ}だつたりして、いつもきわめて聡明^{そうめい}だった。望遠鏡をのぞく
になれた船乗りのような目つきを持っていた。彼は一種の政略家であつた。

その飲食店に初めてやってきた者はだれでも、テナルデイエの^{かみ}上さんを見て、「あれが
この家の主人だな」と思うのだつた。しかしそれはまちがっていた。いな、彼女は一家の
主婦でさえもなかつた。主人でありまた主婦であるのは、亭主の方であつた。女房の方は
仕事をした、そして亭主の方はその方針を定めた。彼は一種の目に見えない絶えざる磁石
のような働きによつてすべてを指導していた。一言で、また時には一つの手まねで、もう
十分だつた。怪物のような女房はそれに従つた。女房はただなぜとなく、亭主を特殊な主
権的な者のように感じていた。彼女は自己一流の徳操を持っていた。何かのことに「主人
テナルデイエ」と意見が合わぬことはあつても、いな、実際そういうことはあり得ないこ
とではあつたがまあそう仮定するとしても、彼女は決して何事に限らず人前で亭主をやり
こめることをしなかつたであらう。しばしば女がやりたがるあの過ち、法廷風な言葉でい
わゆる「夫の尊厳を汚す」というような過ちを、彼女は決して「他人の前で」犯すことは
しなかつたであらう。彼らの同意はその結果悪事ばかりを産み出すものではあつたが、テ
ナルデイエの女房が自分の夫に服従してゐる趣のうちには、ある静観的なものがあつた。大

声とでつぷりした肉体とを持つている山のような女は、小柄な専制君主の指一本の下に動いていた。それは、その低劣な可笑^{おか}しな一面からのぞいてみたる普遍的な偉大な事実、精神に対する物質の尊敬、そのものであった。ある醜惡も、永遠の美という深淵のうちにその存在の理由を持つていることがあるものである。テナルデイエのうちにはある不可解なものがあつた。彼がその女房の上に絶対の力を有することは、そこからきたのである。ある時は、彼女は彼を燃えている蠟燭^{ろうそく}のようにうちながめ、またある時は、彼を恐ろしい爪のように感じていた。

彼女は恐るべき動物で、自分の子供をしか愛せず、自分の夫をしか恐れていなかった。彼女はただ哺乳^{ほにゅうどうぶつ}動物であるから母親になつたまでである。その上、彼女の母親としての情愛もただ自分の女の児に對してだけで、いづれ後に述べるであろうが、男の児にまでは広がらなかつた。それから亭主の方ではただ一つの考えしか持つていなかった。すなわち金持ちになるということ。

しかし彼はその点には成功しなかつた。その偉大なる才能に足るだけの舞台がなかつたのである。テナルデイエはモンフェルメイユにおいて零落しつゝあつた。もし零落ということが無財産にも可能であるならば、これがスウイスかピレネー地方でもあつたら、こ

の無一文の男も百万長者になったかも知れない。しかし宿屋の亭主では一向うだつがあらぬ。

もとよりここでは、宿屋の亭主という言葉は狭い意味に使ったのであって、全般にわたつてのことではない。

この一八二三年には、テナルデイエは督促の激しい千五百フランばかりの債務を負つていて、それに心を悩ましていた。

いかに運命に酷遇されようとテナルデイエは、最もよく、最も深く、また最も近代的に、ある一事を了解していた。一事というのはすなわち、野蛮人のうちでは一つの徳義であり、文明人のうちでは一つの商品である、あの歓待ということであつた。それからまた彼は巧みな密猟者で、小銃の上手なことは評判になつていた。彼は一種の冷ややかな静かな笑ひ方を持っていたが、その笑ひがまた特に危険なものであつた。

宿屋の主人としての彼の意見は、時として稲妻のように口からほとぼしり出た。彼は専門的な金言を持つていて、それを女房の頭にたたきこんでいた。ある日彼は低い声で激しく彼女に言つた。「宿屋の主人たる者がなすべきことは、つぎのようなことだ。やつてきた者にはだれにでも、食物と休息と燈火あかりと火ときたない毛布と女中と蚤のと世辞笑いとを売

りつけることだ。通りがかりの者を引きとどめ、小さい財布ならそれをはたかせ、大きい財布ならうまく軽くしてやり、一家族の旅客なら丁寧に泊めてやり、男からつかみ取り、女からむしり取り、子供からはぎ取ることだ。あけた窓、しめた窓、暖炉のすみ、ひしかけ 肘掛椅子、普通の椅子、床しょうぎ、腰掛け、羽蒲団はねぶとん、綿蒲団、藁蒲団わらぶとん、何にでもきまつた金をかけておくことだ。鏡に映った影でも、それがどれだけ鏡をすりへらすかを見ておいて、ちゃんと金をかけておくことだ。そのほかどんな下らないものにも、客に金を払わせ、客の犬が食う蠅はえの代までも出させることだ！」

この夫婦は、狡猾と熱中とがいつしよに結婚したようなものだった。忌むべき恐ろしい一対であつた。

亭主の方が種々計画をめぐらしてゐる間に、女房の方では、目の前にいるわけでもない債権者のことなんかは考えず、昨日のことも明日のことも気にかけず、ただ現在のことばかりに熱中して日を暮らしていた。

そういうのが二人の人物であつた。コゼットは彼らの間にあって、二重の圧迫を受け、うす 白に挽かれると同時に釘くぎ抜きではさまれてゐる者のようなありさまだった。夫婦の者は各自異なつたやり方を持っていた。コゼットはぶたれた、それは女房の方であつた。コゼッ

トは冬も素足で歩いた、それは亭主の方であつた。

コゼットは、梯子段はしごだんを上りおりし、洗濯せんたくをし、ふき掃除そうじをし、駆けまわり飛びまわり、息を切らし、重い荷物を動かし、虚弱な身体にもかかわらず荒らい仕事をしていた。少しの慈悲もかけられなかつた。残忍な主婦と非道な主人とであつた。テナルデイエの飲食店はあたかも蜘蛛くもの巣のようなもので、コゼットはそれにかまつて震えていた。理想的な迫害は、その奸悪かんあくな家庭によつて実現されていた。あたかも蜘蛛に仕えてる蠅のようでありさまだつた。

あわれな娘は、何事をも忍んで黙っていた。

世の少女にして未だ小さく裸のままなる人生の曙あけぼのより、かくのごとくにして大人のうちに置かるる時、神の膝ひざを離れたばかりの彼女らの心のうちには、およそいかなることが起こるであらうか。

三 人には酒を要し馬には水を要す

四人の新しい旅客が到着していた。

コゼットは悲しげに物を考えていた。彼女はまだ八歳にしかなくていなかったが、種々な苦しい目に会ったので、あたかも年取った女のような痛ましい様子で考えにふけるのだった。

彼女の眼瞼^{まぶた}は、テナルデイエの上^{かみ}さんに打たれたので黒くなっていた。そのために上さんは時々こんなことを言っていた、「目の上に汚点^{しみ}なんかこしらえてさ、何て醜い児だろう！」

コゼットは考えていた、もう夜になっている、まっくらな夜になっている、ふいにやってきたお客の室^{へや}の水差しやびんには間に合わせに水を入れなければならないし、水槽^{みずぶね}にはもう水がなくなってしまうている。

ただ少し彼女が安堵^{あんど}したことに、テナルデイエの家ではだれもあまり水を飲まなかった。喉^{のど}の渇^{かわ}いた人たちがいないというわけでもなかったが、その渇きは水甕^{みずがめ}よりもむしろ酒びんをほしがるような類^{たぐ}いのものだった。酒杯の並んでる中で一杯の水を求める者は、皆の人から野蛮人と見なされる恐れがあったのである。けれどもコゼットが身を震わすような時もあった。テナルデイエの上さんは竈^{かまど}の上に煮立つてるスープ鍋^{なべ}の蓋^{ふた}を取って見、それからコップを手にして、急いで水槽の所へ行った。彼女はその差口^{さしぐち}を回した。娘は

頭をもたげて彼女の様子をじつと見守っていた。少しの水がたらたらと差し口から流れて、コップに半分ばかりたまった。「おや、」と彼女は言った、「もう水がない！」それから彼女はちよつと口をつぐんだ。娘は息もつかなかった。

「いいさ、」と上さんは半分ばかりになったコップを見ながら言った、「これで間に合うだろう。」

でコゼットはまた仕事にかかった。けれども十五、六分ばかりの間は、心臓が大きな毬まりのようになつて胸の中に踊つてゐるような気がした。

そういうふうにして過ぎ去つていく時間を数えながら、彼女は早く明日の朝になればいいがと思つていた。

酒を飲んでいた一人の男が、時々表をながめては大きな声を出した。「釜の中みてえにまつくらだ！」あるいはまた、「今ごろ提ちようちん灯なしに外を歩けるなあ猫ねこぐらいのもんだ！」それを聞いてコゼットは震えた。

突然、この宿屋に泊まつてゐる行商人の一人がはいつてきた、そして荒々しい声で言った。「私の馬には水をくれなかつたんだな。」

「やつてありますとも。」とテナルディエの上さんは言った。

「いやお上さん、やってないんだ。」と商人はまた言った。

コゼットはテーブルの下から出てきた。

「いえやりましたよ！」と彼女は言った。「馬は飲みましたよ。桶おけ一杯みんな飲みましたよ。この私の水を持って行って、馬に口をききながらやったんですもの。」

それは本当ではなかった。コゼットは嘘うそを言っていた。

「この女郎めづう こぶし、拳ぐれえなちつぽけなくせに、山のような大きな嘘うそをつきやがる。」と商人は叫んだ。「馬は水を飲んでいないんだ、鼻つたらしめ！ 水を飲んでいない時には息を吹く癖があるんだ。俺はよく知ってるんだ。」

コゼットは言い張った。そして心配のために声をからして聞きとれないくらいの声でつけ加えた。

「そして大変よく飲んだんですよ。」

「なんだって、」と商人は怒って言った、「そんなことがあるもんか。俺の馬に水をやるんだ。ぐずぐず言うない！」

コゼットはまたテーブルの下にはいりこんだ。

「ほんとにそうですとも。」とテナルディエの上さんは言った。「馬に水をやってないな

ら、やらなければいけません。」

それから彼女はまわりを見回した。

「そしてまた、あの畜生めどこへ行つた？」

彼女は身をかがめて、テールの向こうの端に、酒を飲んでる人たちのほとんど足の下にうずくまつてるコゼットを見つけたした。

「出てこないか。」と上さんは叫んだ。

コゼットは隠れていたその穴から出てきた。上さんは言った。

「この碌ろくでなしめ、馬に水をおやりしたら。」

「でもお上さん、」とコゼットは弱々しく言った、「水がありませんもの。」

上さんは表の戸を押し開いた。

「ではくみに行つてくるさ！」

コゼットは頭をたれた、そして暖炉のすみに行つて、からの桶おけを取り上げた。

その桶は彼女の身体よりも大きく、中にすわつても楽なくらいであつた。

上さんは竈かまどの所へ戻り、スー・鍋の中のものを木の匙さしでしゃくつて、味をみながら、ぶつぶつ言つていた。

「水は泉に行けばいくらでもある。あんな性の悪い児ったらありはしない。ああこの玉たまね葱ねぎはよせばよかった。」

それから彼女は引き出しの中をかき回した。そこには貨幣だの胡椒こしょうだの大にんにく蒜にんにくだのがはいつていた。

「ちよいと、おたふく、」と彼女はつけ加えた、「帰りにパン屋で大きいパンを一つ買っておいで。そら、十五スーだよ。」

コゼットは胸掛けの横に小さなポケットを一つ持っていた。彼女は物も言わずにその銀貨を取って、ポケットの中に入れた。

それから彼女は、手に桶を下げ、開いている戸を前にして、じつと立っていた。だれか助けにきてくれる人を待つてゐるがようだった。

「行つといでつたら！」とテナルデイエの上さんは叫んだ。

コゼットは出て行つた。戸は閉ざされた。

四 人形の登場

露店の列が教会堂の所からテナルデイエの宿屋の所までひろがっていたことは読者の記憶するところであろう。町の人たちがやがて夜中の弥撒^{ミサ}のためにそこを通るので、それらの露店は、紙でこしらえた漏斗形の台の中にともされた蠟燭^{ろうそく}の光で明るく照らされていた、そして、その時テナルデイエの家の食卓についていたモンフェルメイユの小学校の先生が言ったとおり、「幻燈のようなありさま」を呈していた。その代わり、空には一点の星影も見えなかった。

それらの露店の一番端のものは、ちょうどテナルデイエの家の入り口と向かい合いに建てられていて、金ぴかのもやガラスのもやブリキ製のきれいなものなどで輝いてる玩具^{おもちゃ}具屋だった。その玩具棚の一番前の棚には、白い布^{きれ}のふとんの上に高さ二尺もあろうという大きな人形が一つすえられていた。人形は薔薇色^{ばらいろ}の紗^{しや}の着物を着、頭には金色の麦の穂をつけ、本物の髪毛がついていて、目には珙瑯^{ほうろう}が入れてあった。通りがかりの十歳以下の子供は、その珍しい人形にびつくりして終日その前に引きつけられていたが、それを子供に買ってやるだけ金を持ったぜいたくな母親は、モンフェルメイユにはいなかったのである。エポニーヌとアゼルマとは何時間もそれに見とれていた、そしてまた実際コゼツトまでがそつとそれをのぞきに行つたほどである。

桶おけを手にとって外に出たコゼットは、非常に陰うつでかつがっかりしていたけれど、それでもその素敵な人形の方へ目をあげないではおられなかった。彼女はその人形を自ら奥様と呼んでいた。あわれな彼女はその前に化石したように立ち止まった。彼女はその時までそれをまぢかに見たことがなかったのである。彼女にはその店全体が、宮殿のように思えた。そして人形はもう一つの人形ではなくて幻影であつた。それは喜悦こゝろと光耀こうようと富貴と幸福とであつて、陰惨な冷たい辛苦のうちに深く閉ざされていたこの不幸なる少女にとつては、夢のような光彩のうちに浮かんで見えた。コゼットは子供らしい無邪気なまた悲しい知恵をしぼつて、自分と人形とを距へだてている深淵を測つてみた。女王かまた少なくとも王女でなければあのような「もの」を手にすることはできまいと思つた。彼女はその薔薇らゐろ色のきれいな着物やそのなめらかな美しい髪毛をながめた、そして考えた、「あの人形はどんなにか仕合わせだろう！」彼女はその幻のような露店から目を離すことができなかった。見れば見るほどそれに眩惑げんわくされた。あたかも樂園ようせいを見るような気がした。その大きい人形の後ろには幾つも他の人形があつて、それが妖精や精霊のように思われた。店の奥を行ききしている商人は、何だか天の父でもあるかのように思われた。

そして心を奪われてるうちに、彼女はすべてを忘れ、言いつかつた用事までも忘れてし

まっていた。と突然、テナルデイエの上さんの荒々しい声が彼女を現実の世界に呼び寄せた。「おや、ばか娘、まだ行かなかったのか。待つといで、私が出ていくから。そこで何をしてんだ。このお化けめ、おゆきつたら！」

上さんはちらと外をのぞいて、心を奪われて立つてゐるコゼットの姿を見つけたのだった。コゼットは桶おけを持って、できるだけ大急ぎで逃げ出した。

五 少女ただ一人

テナルデイエの宿屋は村のうちに教会堂に近い方の部分にあつたので、コゼットはシエルに面した方の森の中の泉に水をくみに行かなければならなかつた。

彼女はもう他の店は一軒ものぞいて見なかつた。そしてブーランゼーの小路から教会堂の近くまで行く間は、露店の燈火あかりが道を照らしていたが、やがて一番終わりの店の燈火も見えなくなつてしまつた。あわれな娘は暗やみのうちにあつて、その中をつき進んだ。あ一種の恐怖にとらえられていたので、歩きながら桶おけの柄を力限り動かしていた。それから出る音が彼女の道連れであつた。

進めば進むほどやみはますます濃くなつていった。道には一人の人もいなかった。がただ一人の女に出会った。その女は彼女の通りすぎるのを見てふり返り、立ち止まって口の中でつぶやいた。「いったいあの子はどこへ行くんだろう？　まるで化け物のようだが。」そのうちに女はそれがコゼットであることに気づいた。「まあ、」と女は言った、「雲ひばり雀娘むすめだったのか！」

そのようにしてコゼットは、シエルの方に面したモンフェルメイユの村はずれの曲がりくねった人ひと気のない小路の入り乱れた中を通つて行つた。そして道の両側に人家やまたは壁だけでもある間は、かなり元氣に進んでいった。時々彼女は、鎧戸よろいどのすき間から蠟燭ろうそくの光がもれるのを見た。それは光明であり生命であつて、そこには人がいたのである。彼女はそれに安堵あんどすることができた。けれども、先へ行くに従つて彼女の歩みはほとんど機械的に遅くなつていった。最後の人家の角を通り過ぎた時、コゼットは立ち止まった。最後の露店の所からそこまで行くのも、既に困難なことだったが、今やその最後の人家から先へ行くことは、ほとんど不可能だった。彼女は桶おけを地面に置き、髪の中に手を差し入れて、静かに頭をかき初めた。怖おじ恐れて決断に迷つてゐる子供によく見る態度である。もうそこはモンフェルメイユの村ではなく、野の中だった。暗い寂しいひろがりがある。彼女の前

にあった。彼女はその暗黒を絶望の目で見やった。そこには一つの人影もなく、獣の姿があり、またおそらく化け物の姿もあった。彼女はじつと透かし見た。草の中を歩き回る獣の足音が聞こえた。樹木の間をうろついている化け物の姿がはつきり見えた。その時彼女はまた桶の柄えを手に取り上げた。恐怖は彼女を大胆になしたのである。「かまやしない！」と彼女は言った、「水はなかったと言つてやろう。」そして彼女は覚悟して、またモンフェルメイユの村の中に戻つて行つた。

百歩ばかり引き返すと、彼女はまた立ち止まって、頭をかき初めた。こんどはテナルディエの上かみさんの姿が見えてきた。その恐ろしい姿は、山犬のような口をして、目は怒りに燃え立っていた。娘は自分の前と後ろとを悲しい目つきで見やった。どうしたらいいだろう？　どうなるだろう？　どちらへ行つたものだろう？　前にはテナルディエの上さんの姿があり、後ろには夜と森とのいろんな化け物がいた。がついに彼女はテナルディエの上さんの姿の前から後にしぎつた。彼女はまた泉へ行く道を取つて、走り出した。走りながら、モンフェルメイユの村を出て、走りながら森の中にはいり、もう何にもながめず、何にも耳を貸さなかった。息が切れた時ようやくよく走るのをやめたが、なお続けて進んだ。無我夢中でただ前へと進んでいった。

走りながらも彼女は泣きなくなっていた。

森の夜の震えが全く彼女をとり囲んでしまった。彼女はもう何にも考えなかった。何にも見なかった。広漠たる夜がその少女に顔を面していた。一方はいつさいの影、一方は**びよう**眇たる一原子にすぎなかった。

森の縁から泉まではわずか七八分の距離であつた。コゼットはしばしば昼間通つたことがあるので、その道をよく知っていた。で不思議にも道に迷いはしなかった。本能の一部が残つていて、彼女を**ばくぜん**漠然と導いたのである。その間彼女は、右にも左にも目を向けなかった、木の枝の間や**やぶ**藪の中に何かが出てきはしないかと恐れたので。そして彼女は泉の所へ達した。

それは赤土交じりの地面に水で掘られた深さ二尺ばかりの天然の狭い水たまりであつた。まわりには**こけ**苔がはえ、アンリ四世のえり飾りと呼ばれる長い**しま**縞のある草が茂り、また幾つかの大きな石が**し**舗いてあつた。一条の水が、静かなささやかな音を立ててそこから流れ出ていた。

コゼットは息をつく間も待たなかった。まっくらだったけれど、彼女はその泉にはきなれていたのである。いつも身のささえにする泉の上にさし出た若い**かし**櫟の木を、暗やみのう

ちに左手で探つて、その一本の枝を見つけ、それにつかまって身をかがめ、桶おけを水の中につけた。その時彼女は非常に気がたかぶっていて、平素の三倍も力が出ていた。しかるにそうして身をかがめてるうちに、胸掛けのポケットの中のを泉に落としたのは気がつかなかつた。十五スー銀貨は水の中に落ちた。コゼットはそれを見もしなければ、その落ちる音をも耳にしなかつた。彼女はほとんど一杯になった桶を引き上げて、それを草の上に置いた。

それをしてしまうと、彼女はすっかり疲れ切つたのを感じた。すぐにも立ち去りたかつたけれど、桶に水をくむことにあまり骨折つたので、もう一步も踏み出す力がなかつた。仕方なしにそこにすわつてしまつた。草の上に身を落として、そのままじつとうずくまつた。

彼女は目を閉じた。それからまた目を開いた。なぜか自分でもわからなかつたが、他に仕様もなかつたのである。

彼女のそばには、桶の中に揺られてる水が輪を描いて、それがブリキの蛇へびのように見えていた。

頭の上には煙の壁のような広い黒雲が空をおおうていた。暗やみの陰惨な面が漠然ぼくぜんと

娘の上におおいかぶさっていた。

木星は彼方かなたの空に沈みゆくとしていた。

娘は途方にくれた目をあげて、名も知らぬその大きな星をながめ、そして恐ろしくなつた。実際その遊星は、その時地平線のごく近くにあって、たなびいた深い靄もやを透かしてみると、恐ろしい赤い色に見えていた。そしてまた変に赤く染められた靄は、その星をいっそう大きく見せていた。ちようどまつかかな傷口のようなさまだつた。

寒い風が平野の上を渡っていた。森はまっくらで木の葉のそよぎもなく、夏の間の漠然たるさわやかな明るみもなかった。大きな枝が恐ろしくつき出ていた。やせた変な形の藪やぶが木立ちの薄い所で音を立てていた。高い叢くさむらは北風の下に針のようにうごめいていた。蕁い麻らぐさはよじれ合つて、餌食えじきを求めている爪をそなえた長い腕のようだった。枯れた雑草が風に吹かれてすみやかにわきを飛んでいったが、何か追っかけてくるものを恐れて逃げてゆくがようだった。どこを見ても、ただ広漠こうばくたる痛ましいありさまだつた。

暗黒は人の心を惑わすものである。人には光が必要である。だれでも昼に相反するものの中に身を投ずる者は、心をしめつけられる思いがする。目に暗黒を見る時、精神は惑わしを見る。日食のうち、夜のうち、文目あやめもわかたぬ暗がりのうちには、最も強い人々にと

つてさえ不安がある。夜ただ一人森の中を歩いて戦慄せんりつしない者はない。影と木立ち、二つの恐ろしい密層。現実の幻がそのおぼろなる深みのうちに現われてくる。想像にも及ばないものが、スペクトルのごとき明るさで数歩前の所に浮き出してくる。眠れる花の悪夢のごときある漠然ぼくぜんたる捕捉すべからざるものが、空間のうちにあるいは自分の頭のうちに浮かんでくるのが見える。地平線には恐ろしい姿のものがいる。まっ黒な大きい空洞くうどうの気が胸にはいつてくる。自分の後ろが恐ろしくなつてふり返りたくなる。夜の空虚、荒々しい姿になつた事物、進むに従つて消散する黙々たる物の横顔、髪をふり乱したようなまっくらなもの、いら立つた叢くさむら、青白い水たまり、滅亡と悲愁との反映、沈黙の広大な墓場、実際にいるかも知れない見も知らぬ変化へんげ、傾いている不思議な木の枝、恐ろしい樹木の胴体、震えている長い雑草の茎、そういうものに対してはだれも身を護る術がない。いかに大胆なる者も、身を震わさぬ者はなく、苦悩の身に迫るのを覚えないう者はない。あたかも自分の心が影ととけ合つてゐるかのよう、人はある嫌悪けんおすべきものを感じる。そしてかく心の底まで暗黒に浸されることは、ことに子供にとっては名状すべからざる陰惨の氣を与うるものである。

森は天の黙示である。そして小さな靈魂の翼の羽ばたきも、その奇怪な森の円天井の下

にあつては、臨終の苦悶くもんの音を発する。

何を感じているのかコゼットは自分でもよくわからなかったが、ただ自然の広大な暗黒からつかまれてるような気がした。彼女をとらえているものはや単に恐怖のみではなかった。恐怖よりもなお恐ろしい何かであつた。彼女は震え上がった。彼女を心の底まで凍らしたその戦慄はいかに異常なものであつたか、それを言い現わすには言葉も到底および難い。彼女の目は凶暴になつていた。彼女は翌日もきつと、また同じ頃にそこに戻つてこないではおれないだろうというような気がしていた。

その時一種の本能から、その訳のわからないしかし恐ろしい不思議な状態からのがれるために、彼女は大きい声で、一、二、三、四、と十まで数え初めた。そしてそれが終わるとまた初めからくり返した。そのために彼女はようやく周囲の事がらの本当のありさまを感じることができた。水をくむ時にぬらした手に寒さを感じた。彼女は立ち上がった。するとまた恐ろしくなつてきた。おさえることのできない自然の恐怖の念がまた襲つてきた。彼女はもうただ一つの考えきり持たなかつた。逃げ出すこと。森を通りぬけ、野を横ぎり、人家のある所まで、窓のある所まで、火のともった蠟燭ろうそくのある所まで、足にまかして逃げのびること。前にある桶おけが彼女の目についた。彼女は非常にテナルデイエの上さんを恐こわれ

がつていたので、水の桶をすてて逃げ出すことはなしかねた。彼女は両手に桶の柄をつかんだ。そしてようやくのことですれを持ち上げた。

そのようにして彼女は十歩余り進んだが、桶は水がいっぱい重かったので、それをまた地面におろさなければならなかった。彼女はちよつと息をついた。それからまた桶を持ち上げて、再び歩き出したが、こんどは前よりも少し長く歩いた。けれどもやはり立ち止まらなければならなかった。しばらく休んだ後にまた歩き出した。前の方に身をかがめて、頭をたれて、老人のようにして歩いた。桶の重さは、彼女のやせた腕を引っ張り硬^{こわ}ばらした。鉄の柄は、彼女の小さなぬれた手を麻痺^{まひ}させ凍えさしてしまった。時々彼女は立ち止まらなければならなかった。そして立ち止まるたびごとに、桶からこぼれる冷たい水は彼女の露^{あら}わな脛^{はぎ}の上に流れた。そしてそれも、森の奥で、夜中に、冬に、人の目を遠く離れた所においてだった。そして彼女はわずか八歳の子供だった。その悲しいありさまをながめていたのは、その時ただ神のみであった。

そしてまたきつと彼女の母も、ああ！

なぜかなれば、墳墓の中で死者の目を開かしめるようなことも世にはあるものである。彼女は一種の痛ましい噎^{しわが}れた音を立てて息をしていた。すすりなきがこみ上げてきて喉^{のど}

がつまりそうだった。けれど泣くこともなし得なかった。それほど彼女は、遠くにいてもテナルデイエの上さんを恐^{こわ}がっていた。テナルデイエの上さんがいつも目の前にいるように考えるのは、彼女の習慣となっていた。

彼女はそんなふうで道をはかどることができなかった。彼女は少しずつ進んでいた。立ち止まる時間を少なくし、そのあいだあいだをできるだけ長く歩こうと、いくらつとめてもだめだった。こんなふうではモンフェルメイユまで戻るには一時間以上もかかるだろう、そしてテナルデイエの上さんに打たれるだろう、と考えては心を痛めた。そしてその心痛は、夜ただ一人で森の中にいるという恐怖の情に交じっていた。もうすっかり疲れ切っていたのに、まだ森から出ていかなかった。そして、かねて見知っている古い栗^{くり}の木の下まで来た時、よく休むために最後に一度少し長く立ち止まった。それから全力をよび起こして、桶を取り、元氣を出して歩きだした。けれども絶望的なあわれな少女は、思わず声を立てないではおれなかった。「おう神様！ 神様！」

その時、彼女はにわかに桶^{おけ}が少しも重くないのを感じた。非常に大きいように思われた一つの手が、桶の柄をつかんで勢いよくそれを持ち上げたのだった。彼女は頭を上げた。まっすぐにつき立った黒い大きな姿が、暗やみの中を彼女と並んで歩いていた。それは彼

女の後ろからやってきた一人の男で、その近づいて来る足音を彼女は少しも耳にしなかったのである。男は一言も口をきかないで、彼女の持つてゐる桶おけの柄に手をかけていた。人生のいかなるできごとにも相応ずる本能もある。少女は別に恐怖を感じなかった。

六 ブーラトリユエルの明敏を証するもの

一八二三年のその同じクリスマス日の午後、パリーのオピタル大通りの最も寂しい所を、かなり長い間一人の男がうろついていた。その男は住宅をさがしてゐるような様子であつて、サン・マルソー郭外のその荒廃した片すみにある最も質素な人家の前に好んで足を止めてゐるようだった。

果してその男が、その寂しい町に部屋を一つ借りたことは、後に述べるとしよう。

その男は、服装みなりから見ても人柄から見ても、高等乞食こじきとでも称し得るような型タイプをそなえていた、すなわち非常な見窄みすぼらしさとともにまた非常な清潔さを。そういう一致はあまり見られないものであつて、きわめて貧しい者に対する敬意ときわめてりっぱな者に対する敬意と、二重の敬意を心ある人々に起こさせるものである。彼はごく古いがよくブラシを

かけた丸い帽子をかぶり、粗末な石黄色の布地きれじのすっかり糸目まですり切れてしまったフロック型の上衣をつけていた。その当時黄色の服はちつとも変ではなかったのである。ごく古い型のポケット付きのチョッキ、膝ひざの所は灰色になつてゐる黒い短ズボン、黒い毛糸の靴下、銅の留め金がついてゐる厚皮の短靴。何だか亡命の旅から歸つてきた良家の古い家庭教師といった姿である。そのまつ白な髪や、しわよつた額ひたいや、青白い脣くちびるや、生の疲れと倦け怠んたいとが現われてゐる顔つきなどを見ると、もう六十歳のずっと上であるように思われた。けれども、ゆつくりではあるがしっかりした歩き方や、あらゆる動作に現われてゐる特別な元氣などを見ると、五十歳にもなつていないかと思われた。顔のしわは程よくついていて、注意して見る者にはいい感じを与えるようだった。脣くちびるは妙な襞ひだをこしらえて引きしまつていて、厳酷そうであつたが、実は謙讓であつた。その目つきの奥には、何ともいえない悲しげな清澄さがあつた。左手には、ハンカチでくくつた小さな包みを持ち、右手には、どこかの籬まがきからでも切り取つてきたような杖らしいものをついていた。その杖は多少念入りにこしらえられていて、あまりぶかつこうなほどではなかった。節はみなうまく利用されていて、珊瑚さんごまがいの赤蠟せきろうの杖頭がついていた。一本の棒にすぎなかったが、ちよつと見たところはりつぱなステッキのようだった。

その大通りは人通りの少ない所で、ことに冬はそうだった。けれどもその男は、別に目立つほどでもないが、通行人を求めるよりもむしろ避けてるようであった。

そのころ国王ルイ十八世は、ほとんど毎日のようにシヨアジー・ル・ロアに行っていた。そこは彼の好きな遊歩地の一つであった。たいていいつも二時ごろには、国王の馬車と騎馬の行列とが大駆けでオピタル大通りを通るのが見られた。

それは、その辺に住む貧しい人々にとっては懷中時計や柱時計の代用をしていた。彼らは言った、「もう二時になる、チュイルリー宮殿へお帰りだから。」

そして駆けつけて来る者もあれば、そこに立ち並ぶ者もあった。なぜなら、国王の通御は常に人を騒がせるものであるから。その上、ルイ十八世の出入は、パリーの町々にある影響を与えていた。その通過はすみやかではあったが、しかし堂々たるものであった。不具の王は馬の大駆けを好んでいた。自ら歩くことはできなかったが、走ることが好きだった。蹙^{いざり}なる彼は、好んで馬を急速に駆けさせた。拔劍^{まも}のうちに護られて、落ち着きたいかめしい顔をして通っていった。戸口には大きな百合^{ゆり}の茎が描かれすっかり金箔^{きんぱく}をかぶせられた、彼のどっしりした四輪箱馬車は、騒がしい音を立てて走った。ちらと見るまにもうそれは通りすぎていた。馬車の奥の右のすみに、白繻子^{しろじゆす}でできてるボタンじめの褥^{しとね}の

上に、しっかりした大きな赤ら顔、王鳥式に新しく白粉^{おしろい}をぬった額、高慢ないかつい鋭い目、文人のような微笑、市民服の上にゆらめいている絢綵^{よりふさ}の二つの大きな肩章、トアゾン・ドール章とサン・ルイ勲章とレジオン・ドンヌール勲章とサン・テスプリ騎士団の銀章、大きな腹、大きな青綬章、そういうものが見られた。それが王であつた。パリーの外では、白い鳥の羽のついた帽子を、イギリスふうの大きなゲートルを巻いた膝^{ひざ}頭^{がしら}にのせていたが、市内にはいつてくると、その帽子を頭にかぶり、会釈もあまりしなかつた。彼は冷然と人民をながめ、人民の方でも冷然と彼を見上げた。彼が初めてサン・マルソーの方面に姿を見せた時、彼の成功といつてはただ、その郭外の一人の男が次の言葉を仲間と言つたことばかりだつた。「あの大きな男がこんどの政府だよ。」

ところで、その国王がいつもきまつて同じ時刻に通ることは、今ではオピタル大通りの毎日の事件となつていた。

黄色いフロックを着てうろついてたあの男は、明らかにその辺の者ではなく、またたぶんパリーの者でもなかつたろう。なぜなら、彼はこの国王通御のことを少しも知つていなかったから。二時に、銀モールをつけた近衛騎兵の一隊に取り巻かれた王の馬車が、サルペトリエール救済院の角を曲がつてその大通りに現われた時、彼は驚いたようで、ほと

んど恐れをさえいだいたように見えた。ちょうどその歩道には彼のほかだれもいなかった。彼は急いである家壁の角に身を避けた。それでも彼はアヴレ公の目をのがれることができなかった。アヴレ公はその日護衛の騎兵の隊長として、王と向かい合つて馬車の中にすわつていた。彼は陛下に言つた、「向こうにあまり人相のよくない男がいます。」国王の通路を警戒していた警官らも同じくその男を認めた。そのうちの一人は彼を追跡せよとの命令を受けた。しかし男は、その郭外の寂しい小路のうちに身を隠した。そして日の光が薄らぎかけていたので、警官は彼の姿を見失つてしまった。そのことは、國務大臣で警視總監のアングレー伯爵へその日の夕方差し出された報告のうちに書いてあつた。

黄色いフロックの男は、警官をまいてしまった時、足を早めたが、もう追跡されてはいないことを確かめるためにたびたび返つてながめた。四時十五分に、すなわち全く日が暮れた時に、彼はポルト・サン・マルタン劇場の前を通つた。その日の芝居は二人の囚人というのであつた。劇場の反照燈に照らされたその看板が彼の目を引いた。彼は早く歩いていたにもかかわらず、立ち止まつてそれを読んだ。それからじきに彼はプランシェツトの袋町にゆき、プラ・デタンという家にはいつて行つた。当時そこにランニー行きの馬車の立て場があつた。馬車は四時半に出発することになっていた。馬はもうつけられてお

り、旅客らは御者に呼ばれて、馬車の高い鉄のはしごを大急ぎで登っていた。

男は尋ねた。

「席がありますか。」

「一つあります。私のそばの御者台の所ですが。」と御者は言った。

「それを願ひましょう。」

「お乗りなさい。」

けれども出かける前に、御者はその客の賤しいみなりと小さな荷物とをじろりと見やつて、金を先に払わした。

「ランニーまでですか。」と御者は尋ねた。

「そうです。」と男は答えた。

彼はランニーまでの馬車賃を払った。

一同は出発した。市門を出た時、御者は話をしようとしたが、男は一、二言の短い答えを返すだけであつた。御者は仕方なしに、口笛吹いたり馬をしかり飛ばしたりした。

御者は外套がいとうに身を包んだ。非常に寒かった。けれども男はそれを気にもしていないようだった。そのようにしてグールネーを過ぎ、ヌイイー・スュール・マルヌを過ぎた。

晩の六時頃にはシエルに着いた。御者は馬を休ませるために、国立修道院の古い建物のうちにあつた駅宿の前で馬車を止めた。

「私はここでおる。」と男は言つた。

彼は包みと杖とを取つて、馬車から飛びおりた。

間もなく彼の姿は見えなくなつた。

彼は宿屋にはいつたのではなかつた。

数分後に馬車がまたランニーに向かつて進み出した時、彼の姿はシエルの大通りにも見えなかつた。

御者は馬車の中の乗客たちの方へふり向いて言つた。

「今の男はこの辺の者じゃありませんよ。私は見たこともないから。一スーの金もなさそうな様子だったが、金のことなんかは考えてもいないと見える。ランニーまでの金を払っておきながらシエルまできておりてしまった。もうすっかり夜で、家はみなしまつてゐるに、あの男は宿屋にはいりもせず、また姿も見えません。地の中へでもぐり込んだんでしよう。」

が男は地の中へもぐり込んだのではなかつた。彼はやみの中を急いでシエルの大通りを

大またに歩いてゆき、それから教会堂の所まで行く前に左へ曲がって、モンフェルメイユに通ずる村道を進んで行つた。あたかもその辺の地理には明るく、また前にもきたことがあるものようだった。

彼は足早にその村道を歩いて行つた。ガンニーからランニーへ行く古い並木道との交差点まで達した時、数人の通行人がやつて来る足音が聞こえた。彼はすばやく溝みぞの中に身を隠して、その人たちが遠ざかるのを待った。がもとよりそんな用心はほとんど無用なことだった。前に述べておいたとおり、まっくらな十二月の夜だったのである。空にはかろうじて二、三の星影が見えるきりだった。

ちやうどその辺から丘へのぼり道になっていた。男はモンフェルメイユへ行く道にははいらなかった。右へ曲がって、野を横ぎり、大またに森の中へはいって行つた。

森の中まで来ると、彼は足をゆるめて、一步一步進みながら樹木を一々注意深くながめはじめた。ただ彼一人が知っている秘密な道をさがして、それをたどつてゐるかのようであった。時としては、道に迷つたようで心を決しかねて立ち止まることもあった。ついに彼はようように道を探つて、あるうち開けた所に達した。そこにはほの白い大きな石がつみ重ねてあつた。彼は勢いよくそれらの石の方へ進んでゆき、あたかも検閲するかのよう

夜の靄^{もや}を透かして注意深くそれらを調べた。植物の疣^{いぼ}である瘤^{こぶ}がいつぱいできて一本の
大木が、その石の山から数歩の所にあつた。男はその木の所へ行つて、その幹の皮を手で
なで回した。ちようどその疣を一々見調べて数えようとしてるがようだった。

それは秦^{とねりこ}皮の木であつたが、それと向き合つて一本の栗の木が立っていた。皮がはが
れたために弱つていて、繃^{ほうたい}帯として亜鉛の板が打ち付けてあつた。男は爪先で伸び上
つて、その亜鉛の板にさわつてみた。

それから彼は、その木と石の山との間の地面をしばらく足で踏んでみた。あたかも土地
が新しく掘り返されはしなかつたかを確かめてるようだった。

それがすむと、彼は方向を定めて森の中を歩き出した。

コゼットが出会つたのはすなわちその男であつた。

茂みの中をモンフェルメイユの方へ進んでいくと、彼は小さな人影を認めたのだつた。
その人影はため息をつきながら動いていて、ある荷物^{もの}を地面に置いてはまたそれを取り上
げ、そしてまた進み始めるのだつた。近寄つてみると、大きな水^{みづ}桶^{おけ}を持ったごく小さな
子供であることがわかつた。すると男は子供の所へ行つて、無言のまま桶の柄を持つてや
つたのである。

七 コゼット暗中に未知の人と並ぶ

前に言つたとおり、コゼットはこわがらなかつた。

男は彼女に言葉をかけた。重々しい低音であつた。

「これはお前さんにはあまり重すぎるようだね。」

コゼットは頭をあげて、そして答えた。

「ええ。」

「貸してごらんな。」と男は言つた。「私が持つていつてあげよう。」

コゼットは桶おけを離れた。男は彼女と並んで歩き出した。

「なるほどずいぶん重い。」と彼は口の中で言つた。それからつけ加えた。

「お前さんはいくつになる？」

「八つ。」

「そしてこんなものを持つて遠くからきたのかね。」

「森の中の泉から。」

「そしてこれから行く所は遠いのかね。」

「ここから十五分ばかり。」

男はちよつと口をつぐんだが、やがてふいに言った。

「でお母さんがいないんだね。」

「知りません。」と子供は答えた。

男が何か言おうとする間もなく彼女はつけ加えた。

「いないでしょう。ほかの人はみなお母さんを持つてゐるけれど、私は持つていないの。」
そしてちよつと黙つたあとで、彼女はまた言った。

「私には一度もお母さんはなかつたようなの。」

男は立ち止まつて、桶おけを地面におろし、身をかがめて、子供の両肩に手を置き、暗やみの中にその姿をながめその顔を見ようとした。

コゼットのやせた弱々しい顔が、空の薄ら明りの中にぼんやり浮き出して見えた。

「お前さんは何という名前だい。」と男は言った。

「コゼット。」

男はあたかも電気に打たれたようであつた。彼はなお彼女をよく見、それから両手をそ

の肩からはずし、桶を取り、そして歩き出した。

間もなく彼は尋ねた。

「お前さんはどこに住んでるんだい。」

「モンフェルメイユよ、おじさんは知ってるかどうか……」

「これからそこへ行くんだね。」

「ええ。」

彼はなおちよつと言葉を切つたが、また言い出した。

「いったいだれが今時分森のままで水をくみにやらしたんだい。」

「テナルデイエのお上^{かみ}さんなの。」

男はまた尋ねた。できるだけ平気な声を装おうとしてるらしかったが、それでも不思議な震えがその中にもつていた。

「テナルデイエのお上さんというのは何をしてるんだい。」

「うちのお上さんよ。」と子供は言った。「宿屋をやってるの。」

「宿屋？」と男は言った。「では私は今晚そこへ行って泊まろう。案内しておくれ。」

「そこへ行ってるのよ。」と子供は言った。

男はかなり早く歩いた。がコゼットはたやすくついて行つた。もう疲れも感じなかった。時々彼女は目をあげて、言い難い一種の安心と信頼とで彼を見上げた。かつて彼女は神と
いうものに心を向けることも祈りをすることも教わつていなかった。けれども今、希望と
喜悦とに似た何かを心のうちに感じ、天の方へさし上つてゆく何かを心のうちに感じた。
数分過ぎ去つた。男は言つた。

「テナルディエの上さんのうちには女中はいないのかね。」

「いません。」

「お前さん一人なのか。」

「ええ。」

それからまた言葉が途切れた。コゼットは口を開いた。

「でも娘は二人あります。」

「何という娘だい。」

「ポニーヌとゼルマっていうの。」

テナルディエの上さんが好きな小説的な二人の名前を、彼女はそんなふうにつづめて呼んでいたのである。

「ポニーヌとゼルマというのは、どういう人たちだい。」

「テナルディエのお上さんのお嬢さんなの。まあその娘よ。」

「そして何をしてる、その人たちは。」

「そりやいろいろなものを持つてるの、」と子供は言った、「美しい人形やら、金^{きん}のついたものやら、いろいろなものがあるの。遊んでおもしろがってるの。」

「一日中？」

「ええ」

「そしてお前さんは？」

「私は、働いてるの。」

「一日中？」

子供は大きな目をあげた。夜で見えはしなかったが、それには涙が宿っていた。子供は静かに答えた。

「そうよ。」

ちよつと黙った後に彼女は言い続けた。

「時々、用がすんでから、いいって言われる時には、私も遊ぶことがあるの。」

「どうして遊ぶ？」

「勝手なことをして。何でもさしてくれれます。けれど私は玩具おもちゃをあまり持っていないの。ポニーヌとゼルマは私に人形を貸してくれませんか。私はただ鉛の小さな剣を一つ持つてゐるきりなの、これくらいの長さの。」

子供は自分の小指を出して見せた。

「切れないんだらう。」

「切れるわ、」と子供は言った、「菜っ葉だの蠅はえの頭なんか切れるわ。」

二人は村に達した。コゼットは見知らぬ男を案内して通りを歩いていった。彼らはパン屋の前を通った。けれどもコゼットは買つてゆくべきパンのことを忘れていた。男はもういろいろなことを尋ねるのをやめて、陰鬱いんうつに黙り込んでいた。それでも教会堂の所を通りすぎて、露天の店が並んでるのを見ると、コゼットに尋ねた。

「おや、市場だね。」

「いいえ、クリスマスよ。」

彼らが宿屋に近づいた時、コゼットはおずおずと男の腕につかまった。

「小父さん。」

「なんだい？」

「家の近くにきました。」

「それで？」

「これから私に桶おけを持たして下さいな。」

「なぜ？」

「ほかの人に桶を持つてもらってるのが見つかるとお上さんに打たれるから。」

男は彼女に桶を渡した。それからすぐに二人は、宿屋の戸口の所にきた。

八 貧富不明の男を泊むる不快

コゼットはわれ知らず、玩具屋おもちゃやの店に並べてある大きな人形の方をじろりとながめた。それから家の戸をたたいた。戸は開かれて、テナルデイエの上さんが手に蠟燭ろうそくを持って出てきた。

「ああお前か、この乞食娘こじきむすめが！ 何だってこんなに長くかかったんだ。どっかで遊んでいたんだろう。」

「お上さん、」とコゼットは身体じゅう震え上がって言った、「あの方が泊めてもらいた
いってきています。」

上さんは、宿屋の主人がいつでもするように、邪慳じゃけんな顔つきをすぐに和らげた。そして
新来の客の方をむさぼるようにながめた。

「あなたですか。」と彼女は言った。

「さようです。」と男は答えながら、帽子に手をあてた。

金のある旅客はそんな丁寧なことはいらないものである。その身振りをながめ、またその
男の服装と荷物とを見て取って、テナルディエの上さんの愛想顔はまた慳貪けんどんになった。

彼女は冷ややかに言った。

「おはいりなさい、お爺さんじい。」

「お爺さん」は中にはいった。上さんはまたじろりと彼の姿をながめ、すっかりすり切れ
たフロックと破れかかった帽子とに特に目をとめ、それから、頭をつんとあげ鼻頭にしわ
を寄せ、まばたきをして、亭主の意向をさぐった。亭主はやはり馬方らといっしよに飲ん
でいたが、ちらと人さし指を動かしてそれに答えた。そういう場合、それはふくらした脣
とともに、「一文なしだ」という意味であつた。それを見て上さんは叫んだ。

「お前さん、大変お気の毒だが、室^{へや}があいてませんよ。」

「どこでもいいから泊めて下さい、」と男は言った、「物置きでも、廐^{うまや}でもよろしいです。一室分の代は払いますから。」

「四十スーですよ。」

「四十スー。承知しました。」

「そんならよござんす。」

「四十スーだと！」と一人の馬方が上さんに低くささやいた。「普通は二十スーじゃないか。」

「あの男には四十スーだよ。」と上さんは同じく低く答えた。「それより安くちや貧乏人は泊められない。」

「そのとおりだ。」と亭主も静かに口を添えた。「あんな男を泊めると沽券^{こけん}を落とすからね。」

その間に男は、腰掛けの上に包みと杖とを置き、一つのテーブルに向かって席についた。コゼットは急いでそこに葡萄酒^{ぶどうしゅ}の瓶^{びん}と杯とを並べた。水桶^{みずおけ}を言いつけた商人はそれを自分で馬の所へ持つて行つた。コゼットはまた料理場のテーブルの下のいつもの場所にも

どつて、編み物を初めた。

男は杯にぶどう酒を注いで脣を浸したかと思うと、すぐに異様な注意でコゼットをなぐめだした。

コゼットは醜くかった。しかし、楽しい生活をしていたら恐らくきれいだったかも知れない。その小さな陰鬱いんうつな顔つきは既に前に述べておいた。がなお言えば、彼女はやせて青ざめていた。もうすぐ八歳になろうとするのに、ようやく六歳ぐらいにしか見えなかった。くぼんで一種の深い影をたたえている大きな目は、多くの涙を流したためにほとんどその光を失っていた。脣くちびるのすみには、囚人や重病人などに見らるるような不絶の苦しみからきた曲線ができていた。両手は、母親がかつて推察したとおり「凍傷にくずれて」いた。その時ちようど彼女を照らしていた火のために、骨立った角々かどかどが浮き出して、やせてるのが特に目立っていた。いつも寒さに震えていたので、両膝をきっちり押しつけ合う癖がついていた。着物は破れ裂けて、夏にはかわいそうに思われ、冬には恐ろしく思われた。身につけているのは、穴のあいた麻布ばかりで、一片の毛織りの布もなかった。所々に肌はだがのぞいていて、そのどこにも青い斑点はんでんや黒い斑点が見えていた。それはテナルディエの上さんに打たれた跡であつた。露あらわな両脛りようすねは赤くかじかんでほっそりしていた。鎖

骨の上が深くくぼんでいるのを見ると、かわいそうで涙がこぼれるほどだった。彼女の全身、その歩き方、その態度、声の調子、一言いっては息を引く様、その目つき、その沈黙、そのちよつとした身振り、それらはただ一つの思いを現わし示していた、すなわち恐怖を。恐怖の念が彼女の全身に現われていた。いわばそれにおおわれてるがようだった。恐怖のために彼女は、両脇ひじを腰につけ、踵かかとを裾着すそぎの下に引つ込ませ、できるだけ小さくちぢこまり、ようやく生きるだけの息をついていた。そしてその恐怖の様子はほとんど彼女の身体の癖となっていて、いつも同じようで、ただその度がしだいに高まってゆくだけであつた。その瞳ひとみの底には驚いたような影があつて、恐怖の念が見えていた。

そういう恐怖の念が強くコゼットを支配していたので、彼女は今帰つてきて、着物がぬれていたにもかかわらず、火の所へ行つてそれをかわかそうともせず、そのまま黙つて仕事を初めたのだった。

八歳のその小娘の目つきは、普通はいかにも陰鬱いんうつで、時にはいかにも悲壮であつて、どうかすると、白痴かあるいは悪魔にでもなるのではないかと思われるほどだった。

前に言つたとおり、彼女はかつて祈祷きとうの何たるやを知らず、またかつて教会堂に足をふみ入れたこともなかった。「どうしてそんな閑ひまがあるものか、」とテナルデイエの上さん

は言っていた。

黄色いフロックの男は、コゼットから目を離さなかった。
突然テナルディエの上さんは叫んだ。

「そうそう、パンは？」

コゼットは、お上さんが高い声を出す時にいつもするように、すぐにテーブルの下から出てきた。

彼女はすっかりパンのことを忘れていた。それで、絶えずおびえてる子供特有の方便を持ち出して、嘘^{うそ}を言った。

「お上さん、パン屋はしまっていましたの。」

「戸をたたけばいいじゃないか。」

「たたきました。」

「そして？」

「だれもあけてくれません。」

「本当か嘘^{うそ}か明日^{あした}になればわかるさ。」とお上さんは言った。

「もし嘘だったらひどい目にあわしてやる。それから十五スーの銀貨をお返し。」

コゼットは胸掛けのポケットに手を差し入れて、まっさおになった。十五スー銀貨はそこにはいつていなかった。

「これ！ 私の言うことが聞こえないのか。」と上さんは言った。

コゼットはポケットを裏返した、が何もなかった。あの金はいったいどうなったのであろう？ 不幸な娘は口をきくこともできなかった。石のように固くなってしまった。

「お前はあの十五スー銀貨をなくしたのかい。」と上さんは声を荒らげた。「それとも盗むつもりか。」

それとともに彼女は、暖炉の所に下っている鞭むちの方へ腕を伸ばした。

その恐ろしい身振りを見て、コゼットは初めてようやく叫んだ。

「ごめんなさい、お上さん、お上さん、もうしませんから。」

上さんは鞭を取りおろした。

その間に黄色いフロックの男は、だれも気付かぬうちにチョッキの隠しの中を探った。もとより他の旅客らは、酒を飲んだりカルタをしたりして、ほかのことにはいつさい注意を向けていなかったのである。

コゼットはもだえて暖炉のすみに縮こまり、半ば露わな小さな手足を引っ込めて隠そう

とした。上さんは鞭の手を上げた。

「ちよつと、お上さん。」と男は言った。「先ほどその娘さんの胸掛けのポケットから何か落ちてころがつてきましたよ。たぶんそれじゃありませんか。」

と同時に彼は身をかがめて、床ゆかの上をさがすようなふうをした。

「それ、ここにありました。」と彼は身を起こしながら言った。

そして彼は一片の銀貨を上さんに差し出した。

「そう、これです。」と彼女は言った。

実はそれではなかったのである。それは二十スー銀貨だった。けれども上さんはそれで得をすると思つた。彼女は銀貨をポケットに入れて、ただ恐ろしい目つきを娘の上に投げつけた。「またこんなことをすると承知しないよ。」

コゼットは、上さんのいわゆる「彼女の巢」の中に戻った。そして見知らないその旅客をじつと見つめた彼女の大きい目には、これまでかつてなかったような表情が浮かんできた。それはまだ無邪気な驚きの情にすぎなかったが、あつけにとられた一種の信賴の情が交じっていた。

「ところで、夕御飯はどうします。」と上さんは旅客に尋ねた。

彼は答えなかった。深く何かに思いふけつてゐるようだった。

「いったい何という男だろう。」と上さんは口の中でつぶやいた。「ひどい貧乏人と見える。夕食の代も持っていない。宿錢だけでも払えるかしら。でもまあよく床に落ちてた金を盗もうとしなかったものだ。」

そのうちに一つの扉とびらがあいて、エポニーヌとアゼルマとがはいってきた。

二人とも全くきれいな小娘であつた。田舎娘いなかむすめというよりもむしろ町娘と言いたいくらいで、かわいらしかつた。一人は艶々つやつやと栗色の髪を束ね、一人は長く編んだ髪を背中に

下げて、二人とも活発で、身ぎれいで、肥つて、生々いきいきとして、丈夫そうで、見る目も心地よいほどだった。暖かそうに着込んでいたが、そのたくさん重ねた着物も、母親の手ぎ

わで着付けの美をそこなわないようにされていた。冬の装いも春のすがすがしさを消さないようにつくろつてあつた。二人は光り輝いていた。その上二人は自由気ままだった。その

服装みなりや、快活さや、騒ぎ回つてゐる様子のうちには、皆から大事に奉られてゐる様が現われ

ていた。二人がはいつてきた時テナルディエの上さんは、鍾愛しょうあいの情に満ちたわざと小言を言うような調子で言つた、「ああお前たちもここに來たのかえ！」

それから一人ずつ膝ひざに引き寄せて、髪の毛をなでつけてやり、リボンを結び直してやり、

そして母親特有の優しい仕方て手を離して言った。「ほんとにふしだらな人たちだね。」

二人は暖炉のすみに行つてすわった。人形を一つ持つていて、それを膝の上にひねくり回しながら、うれしそうにささやき合つていた。時々コゼットは編み物から目を上げて、二人が遊んでるのを悲しそうな様子でながめた。

エポニーヌとアゼルマとはコゼットの方へは目もくれなかった。コゼットは二人にとつては犬も同様だった。それから三人の小娘は、皆の年齢を合わしても二十四にしかならなかったが、既に大人の社会のありさまをすべて現わしていた。一方に羨望と、他方に輕蔑と。

テナルデイエの娘の人形は、もうよほど色あせ古ぼけて方々こわれてはいたが、それでもなおコゼットにはりつぱなもののように思われた。彼女は人形というものを、すべての子供によくわかる言い方をすれば本当の人形というものを、生まれてまだ一度も持ったことがなかったのである。

室^{へや}の中を行ったり来たりしていたテナルデイエの上さんは、コゼットがぼんやりして仕事もしないで、二人の娘の遊ぶのを見入っているのを、ふと見て取った。

「ああこれ！」と彼女は叫んだ。「それで仕事をしてるのか。覚えておいで、鞭^{むち}で打つて

でも働かしてやるから。」

見なれぬ旅客は、椅子にすわったまま上さんの方へふり向いた。

「お上さん、」と彼はおずおずしたようなふうで、ほほえみながら言った、「まあ遊ばしておやりなさい。」

もしそういうことが、夕食の時に一片の焼き肉を食い二本のぶどう酒を傾け、ひどい貧乏人の様子をしていない旅客から言われたのであつたら、一つの命令と同様な力になったかも知れない。けれども、そんな帽子をかぶった男が希望を申し出たり、そんなフロツクを着た男が意志を表白したりすることは、テナルデイエの上さんには許すべからざることのように思えたのだつた。彼女は慳^{けん}貪^{どん}に言葉を返した。

「仕事をさせないわけにはいきません。物を食べますからね。何もさせないで食わしておくことはできませんよ。」

「いったい何をこしらえさしてるのですか。」と男はやさしい声で言った。その調子は、彼の乞食^{こじき}のような服装と人夫のような肩幅とに妙な対照をなしていた。

上さんは答えてやった。

「靴下ですよ。私の娘どもの靴下です。もうたいてい無くなつてしまつて、間もなく跣^{はだし}足

にならなくてはならないところですからね。」

男はコゼットのまっかになつてゐるかわいそうな足をながめた、そして言った。

「どれくらいかかったらあの娘はその靴下を仕上げますか。」

「まだ三四日はたつぷりかかるでしょうよ、なまけものだから。」

「そしてその一足の靴下ができ上がったらいくらくらいになるんです。」

上さんは軽蔑の目でじろりと男を見た。

「安くみても三十スーくらいですね。」

「ではそれを五フランで売ってくれませんか。」と男は言った。

「なんだ！」とそれをきいていた一人の馬方が太い笑いを立てながら叫んだ、「五フランだと。べらぼうな、鉄砲玉五つだと！」

亭主のテナルディエももう口を出すべき時だと思った。

「よろしゅうござんす。そういうことがしてみたいんなら、その靴下一足を、五フランで差し上げましょう。お客のおっしゃることはことわるわけにいきませんからな。」

「すぐに金を払って頂きましょう。」と上さんはいつもの簡単確実なやり方で言った。

「ではその靴下を買いますよ。」と男は答えた。そしてポケットから五フランの貨幣を取

り出してテーブルの上に置きながら、つけ加えて言った。「代を払いますよ。」
それから彼はコゼットの方へ向いた。

「もうお前さんの仕事は私のものだ。勝手に遊びよ。」

馬方は五フランの貨幣に驚いて、杯をすててやって行つた。

「いやほんとだ！」と彼はその貨幣をしらべながら叫んだ。「本物の大きいやつだ、贗造に
じゃないや。」

テナルデイエはそこに近づいていつて、黙つてその金をポケットに納めた。
上さんは一言もなかった。彼女は唇を^{くちびる}かんで、顔には憎悪^{ぞうお}の表情を浮べた。

でもコゼットは震えていた。そして思いきつて尋ねてみた。

「お上さん、本当ですか。遊んでもいいんですか。」

「お遊び！」と上さんは恐ろしい声で言つた。

「ありがとうございます、お上さん。」とコゼットは言つた。

そして口ではテナルデイエの上さんに礼を言いながら、彼女の小さな心は旅客に礼を言
つていた。

テナルデイエはまた酒をのみ初めた。女房は彼の耳にささやいた。

「あの黄色い着物の男はいったい何者でしょう。」

「わしは大金持ちがあんなフロックを着てるのを見たことがある。」とテナルディエはおごそかに答えた。

コゼットは編み物をそこにほうり出した。けれどもその場所からは出てこなかった。コゼットはいつでもできるだけ身を動かさないようにしていた。彼女は自分の後ろの箱から、古いぼろと小さな鉛の剣とを取り出した。

エポニーヌとアゼルマとは、あたりに起こったことに少しの注意も払っていなかった。二人はちやうどきわめて大事なことを初めたところだった。猫をとらえたのである。人形は下にほうり出してしまっていた。そして年上の方のエポニーヌは、猫が泣きもがくのもかまわずに、赤や青の布きれやぼろでそれに着物をきせようとしていた。その大変なむずかしい仕事をやりながら、妹に子供特有のやさしいみごとな言葉で話しかけていた。そういう言葉の優しさは胡蝶こちょうの真の輝きにも似たもので、つかもうとすれば遠くに逃げ去るものである。

「ねえ、この人形の方があれよりよっぽどおもしろいわよ。動いたり、泣いたりして、あたたかいのよ。ねえ、これで遊びましょう。これは私の小さな娘よ。私は奥様よ。私があ

なたの所へ行くと、あなたがこの娘を見るの。そのうちあなたは髯ひげを見つけてびっくりするのよ。それからあなたは、耳を見つけ出し、こんどはまた尾しっぽを見つけて出して、びっくりするのよ。そしてあなたは私に言うの、あらまあ！ って。すると私が言うの、ええ奥さん、これが私の小さな娘ですよ、今時の小さな娘はみんなこうですよ。」

アゼルマは感心してエポニーヌの言葉を聞いていた。

一方では酒を飲んでいた連中が、卑猥ひわいな歌を歌い出して、家が揺れるほど笑い興じていた。テナルデイエは彼らをおだて、彼らに調子を合わせていた。

小鳥が何でも巢をこしらえてしまうように、子供はどんなものをも人形にしてしまうものである。エポニーヌとアゼルマとが猫に着物をきせてる間に、コゼットの方では剣に着物を着せていた。それをしてしまうと彼女はそれを腕に抱えて、寝つかせるために静かに歌を歌った。

人形は女の児が一番欲しがるものの一つで、また同時にその最もかわいい本能を示すものの一つである。世話をやき、下衣を着せ、飾り立て、着物を着せ、また着物をぬがしたり着せたりし、言いきかせたり、少しは小言こことを言ったり、揺りゆす、かわいがり、寝せつけ、そしてそれを生きてるもののように考える、それらのことのうちに女の未来が含まれてい

る。夢想したりしやべつたりしながら、小さな衣装や産着うぶぎを作りながら、小さな長衣や胴着や下着をこしらえながら、子供は若い娘になり、若い娘は大きな娘となり、大きな娘は人妻となるのである。そして最初に産む子供は、最後の人形となるのである。

人形を持たない小娘は、子供のない婦人と同じく不幸で、また同じく不自然なものである。

だから、コゼットは剣を人形となしていた。

テナルディエの上さんは、黄色い着物の男に近寄ってみた。「家の人の言うとおりだ、」と彼女は考えた、「これはラフィットさんかも知れない。金持ちのうちにはおかしい人もあるものだから。」

彼女はその男のテーブルの所へ行つて脇ひじをかけた。

「旦那だんな……」と彼女は言った。

その旦那という言葉に、男はふり向いた。上さんはそれまで彼を、お前さんとかお爺さんとか呼んでいたのだった。

「あの、旦那、」と彼女はやさしそうな様子をして言った。その様子は彼女の邪慳じゃけんな様子よりもなおいっそう嫌味いやみなものであった。「私はあの児を遊ばしてやりたいのですよ。」

決してそれを不承知ではありません。一度くらいはよろしいんですとも、旦那が御親切に言つて下さいますから。でもあの児は何にも持たないのです。仕事をさせないわけには参りませんのです。」

「それではあなたの児ではないのですか、あの娘は。」と男は尋ねた。

「いいえどうしまして旦那。あのようにして慈善のために引き取つてやつてる貧乏な児です。ばかな児なんですよ。頭の中には水でもはいつているんでしょう。御覧のとおり大きな頭をしています。私どももできるだけのことはしてやつてるのですが、何分にも私どもは貧乏ですからね。いくら国もとの方へ手紙を出しましても、もう六月^{むつき}というものの返事もありません。きつと母親も死んだに違いありません。」

「ああ！」と男は言つて、何か考えに沈み込んでしまった。

「その母親というのも大した者ではありません。」と上さんはつけ加えた。「子供を捨てていつたくらいなんですから。」

そういう会話の間、コゼットは自分のことを話されてるのだとある本能から感じたらしく、テナルデイエの上さんから目を離さなかった。彼女はぼんやりきいていた、そして時々二、三言聞き取つていた。

そのうちに酒を飲んでた連中はたいい酔っ払って、以前にも増した陽気さで下等な歌をくり返し歌っていた。聖母や小児イエスなどが出て来る道化た卑猥な歌だった。テナルデイエの上さんまでが、その仲間に加わって笑い騒いだ。コゼットは例のテーブルの下で火を見つめていた。その目には火が赤くうつっていた。彼女はそれから自分がこしらえた赤ん坊をまた揺り初めた。そうしながら低い声で歌っていた。「お母さん死んだ、お母さん死んだ、お母さん死んだ！」

黄色い着物の「大金持ち」は、上さんがまたうるさく勧めるので、ついに食事を取ることにした。

「何を差し上げましょう。」

「パンとチーズ。」と男は言った。

「なんだ、これはてつきり乞食に違いない。」と上さんはまた考えた。

酔っ払いの連中はなお歌を続けており、テーブルの下の娘もまた自分の歌を歌っていた。とにわかにはコゼットは歌をやめた。テナルデイエの娘たちの人形が、猫のためにほうり出されて、料理場のテーブルから数歩の所にころがってるのを、彼女はふり返って認めたのだった。

すると彼女は、自分の心を十分満たさなかったその着物をきせた剣をすてて、静かに室^{へや}の中を見回した。テナルディエの上さんは亭主に何か小声で話しながら金を数えていた。

エポニーヌとアゼルマとは猫を玩具^{おもちゃ}にしていた。旅客らは食ったり飲んだり歌ったりしていた。だれもこちらを見る者はなかった。彼女はその機をのがさなかった。膝と手とでテーブルの下からはい出して、だれも見えないことをも一度確かめて、それから急に人形の所まではついていってそれをつかんだ。そしてすぐに自分の場所に戻り、そこにすわって身動きもしないで、ただ腕に抱いた人形を自分の影に隠そうとするように身をかがめた。本当の人形を持つて遊ぶという幸福はめったに知らないことだったので、彼女は今快樂ともいえるほど非常な喜びを感じたのだった。

だれも彼女を見る者はなかった、ただ粗末な食物をゆるゆると食べてるあの旅客のほかは。

コゼットの喜びはおよそ十五分間ばかり続いた。

けれども、非常に注意はしていたものの、コゼットは人形の片足が出ていることに気づかなかつた、そして暖炉の火がその足をはつきり照らし出していることに。影の所から出てるその薔薇^{ばらいろ}色の輝いた足が、突然アゼルマの目についた。彼女はエポニーヌに言った。

「あら！ 姉さん！」

二人の娘は遊びをやめて呆然^{ぼうぜん}とした。コゼットが大胆にも人形を取っている！

エポニーヌは立ち上がって、猫を持ったまま母親の所へ行って、その裾を引っ張った。

「うるさいね！」と母親は言った。「どうしようというんだよ。」

「お母さん、まあごらんよ！」と子供は言った。

そして彼女はコゼットをさし示した。

コゼットの方は人形を持つてゐることに有頂天^{うちようてん}になって、もう何にも見も聞きもしなかった。

テナルディエの上さんの顔には特殊な表情が浮かんだ。それはこの世の恐ろしさと下らなさといつしよになつた表情で、いわゆる毒婦と称する型の表情だった。

こんどは、自尊心が傷けられたので彼女の憤怒はいっそう激しくなった。コゼットはあらゆる制限を越えていたのである。「お嬢さんたち」の人形に手をつけていたのである。

一人の百姓が皇子の大青^{だいせい}綬章^{じゆうしょう}に手をつけた所を見るロシア女帝の顔も、おそらくそれと等しいありさまを呈するかも知れなかった。

彼女は憤怒にかれた声をしばって叫んだ。

「コゼット！」

コゼットは大地が足の下で震動したかのように震え上がった。そしてふり返った。

「コゼット！」と上さんはくり返した。

コゼットは人形を取り、恭敬と絶望との様子でそれを静かに下に置いた。それからお人形から目を離さないで、両手を組み合わせた。そしてそれくらいの年頃の子供には言うも恐ろしいことではあるが、その両手をねじり合わせた。それから、その日の種々な恐ろしいこと、森の中に行つたことや、水の一杯な桶おけの重かつたことや、金をなくしたことや、鞭むちをつきつけられたことや、テナルデイエの上さんの口から聞いた恐ろしい言葉など、そんなことに会つてもまだ出てこなかったものが今彼女から出てきた、すなわち涙が。彼女はすすり泣きを初めた。

その間にあの旅客は立ち上がっていた。

「どうしたのです。」と彼は上さんに言った。

「わかりませんか。」と上さんは言つて、コゼットの足下に横たわつてゐる罪証物件を指で差し示した。

「で、あれがどうしたのです。」と男は言つた。

「あの乞食娘こじきむすめが、家の子供の人形に手をつけたんです。」と上さんは答えた。

「それでこんな騒ぎですか！」と男は言った。「あの児が人形で遊んだのがどうしたというんです。」

「あのきたない手で触さわったんです、」と上さんは言い続けた、「あの身震いが出るほどきたない手で。」

するとコゼットは更に激しくすすり泣いた。

「静かにしないか！」と上さんは叫んだ。

男はまっすぐに表の戸口の方へゆき、それを開いて出て行つた。

彼が出て行くと、上さんはその間に乗じて、テーブルの下のコゼットをひどくけりつけた。そのため娘は大声を上げた。

戸はまた開かれた。素敵な人形を両手にかかえて男はそこに現われた。その人形の話は前に言っておいたとおりで、村の子供たちが朝からながめ入っていたものである。男は人形をコゼットの前にすえて言った。

「さあ、これがお前さんのだ。」

彼はここにきて一時間以上にもなるが、その間何やら考えこみながらも、あの玩具屋おもちゃや

の店がランプや蠟燭ろうそくの光でまぶしいほどに照らされて、その宿屋のガラス戸越しにイリユミネーションのように見えているのを、ぼんやり見て取っていたものと思われる。

コゼットは目を上げた。男が人形を持って自分の方へやって来るのを、太陽が近づいて来るのを見るようにしてながめた。これがお前さんのだという異常な言葉を彼女は聞いた。彼女はその男をながめ、人形をながめ、それからそろそろと後退あとしりぞりをして、テーブルの下したの壁のすみに深く隠れてしまった。

彼女はもう泣きもしなければ、声も立てなかった。じつと息までもつめてるような様子だった。

テナルディエの上さんと、エポニーヌとアゼルマとは、みなそこに立ちすくんでしまった。酒を飲んでた連中までもその手を休めた。室へやの中は厳肅な沈黙に満たされた。

上さんは石のようになって黙ったまま、また推測をはじめた。「この爺じいさんはいったい何者だろう。貧乏人かしら、大金持ちかしら。きつとその両方かも知れない、と言えばまあ泥坊だが。」

亭主のテナルディエの顔には、意味ありげなしわが寄った。強い本能がその全獣力をもつて現われる時に人間の顔の上に寄ってくるしわである。亭主は人形と旅客とをかわるが

わる見比べた。彼はあたかも金袋でもかぎ出したかのようにその男をかぎ分けてるようだった。もつともそれはほんの一瞬の間であつた。彼は女房の方へ近づいて、低くささやいた。

「あの品は少なくとも三十フランはする。ばかなまねをしちやいけねえ。あの男の前に膝を下げろよ。」

下等な性質と無邪気な性質とはただ一つの共通点を持っている。すなわち、直ちに掌を返すがごとき点を。

「さあコゼットや。」とテナルディエの上さんはやさしくしたつもりの声で言った。けれどもそれは意地悪女の酸^すっぱい蜜^{みつ}から成つてる声だった。「人形をいたただかないのかい。」

コゼットは思いきつて穴から出てきた。

「コゼット、」とテナルディエも甘やかすような声で言った、「旦那^{だんな}が人形を下さるんだ。ただけよ。その人形はお前んだ。」

コゼットは一種の驚^{きようがい}駭^{がい}の情をもつて、そのみごとな人形をながめた。その顔はなお涙にまみれていたが、その目は曙^{あけぼの}の空のように、喜悦の言い難い輝きに満ちてきた。その時彼女は、「娘よお前はフランスの皇后さまだ、」と突然言われでもしたような感情を覚

えていた。

もしその人形にさわりでもしたら、そこから雷でも飛び出しはすまいか、というような
かみなり
気持が彼女はした。

それはある点まで実際のことだった。なぜなら、もしそうしたらテナルデイエの上さんが自分をしかりつけはすまいか、また自分を打ちはすまいか、と彼女は考えたのである。けれども人形に引きつけられる力の方が強かった。彼女はついにその方へ寄って行った。そして上さんの方へふり向いて、こわごわつぶやいた。

「よろしいんでしょうか、お上さん。」

その時の彼女の同時に絶望と恐怖と歓喜とのこもった様子は、いかなる文字をもつてしても書き現わすことはできないものだった。

「いいとも！」と上さんは言った。「お前んだよ。旦那がお前に下さるんだから。」

「本当なの、小父さん。」とコゼットは言った。「本当なの、私んですか、この奥様は。」

男の目には涙があふれてるらしかった。彼は感情の高潮に達していて、涙を流さないために口もきけないような状態にあるかと思われた。彼はただコゼットにうなずいてみせて、その「奥様」の手をコゼットの小さな手に握らしてやった。

コゼットは急に手を引つ込めた、あたかも奥様の手が彼女の手を焼いたかのように。そして床の上を見つめた。なおその時彼女がひどく舌をつき出したことをも、われわれはつけ加えざるを得ない。それから彼女は突然向き直つて、ひしと人形をつかんだ。

「私はこれにカトリーヌという名をつけよう。」と彼女は言った。

コゼットのぼろの着物が、人形のリボンと薔薇色のぱつとしたモスリンとに並んで押しつけられてるのはすこぶる異様な様であつた。

「お上さん、」と彼女はまた言った、「これを椅子の上に置いてもうようございますか。」

「ああいいよ。」と上さんは答えた。

こんどはエポニーヌとアゼルマとがコゼットをうらやましそうに見ていた。

コゼットはカトリーヌを椅子の上に置いた。それから自分はその前の地面にすわつて、じつと見入っている様子で黙つたまま身動きもしなかつた。

「さあお遊び、コゼット。」と男は言った。

「ええ遊んでるのよ。」と娘は答えた。

天からコゼットの所へつかわされた者のような、その見ず知らずの不思議な男を、テナルデイエの上さんはそのとき世に最も憎むべき者のように思った。けれども自分をおさえ

なければならなかった。彼女は何事にも夫をまねようとしていたので、仮面をかぶることにはよくなれていたが、それでもその時の感情にはほとんどたえ難いものがあつた。彼女は急いで自分の娘たちを寢床に追いやった。それからコゼットをも寝かそうとその黄色い着物の男に許可を願つた。今日は大変疲れていますからなどと母親らしい様子でつけ加えた。でコゼットは、両腕にカトリヌを抱いて寝に行つた。

上さんは時々、室の向こうの端の亭主の所へ行つた。心を安めるためにと自ら言つていた。彼女は亭主とちよつと言葉をかわした。それは大声に言えないだけいつそういら立つたものだつた。

「あの糞爺め！ どういう腹なんだろう。ここにやってきて私どもの邪魔をするなんて！ あの小さな餓鬼を遊ばしたがったり、人形をやったり、それも、四十スーの値打ちもない犬女郎に四十フランもする人形をやったりしてさ！ も少ししたら、ベリーの御妃にでも言うように、陛下なんて言い出すかも知れない。正氣の沙汰か、氣が狂つたのか、あの変な老耄めが。」

「なぜかつて、わかつてるじゃないか。」とテナルデイエは答え返した。「なあに、それが奴にはおもしろいんだ！ お前にはあの兎が働くのがおもしろいように、奴にはあの兎

が遊ぶのがおもしろいのさ。それはあの男の権利だ。客となりやあ、金さえ出せば何でも勝手にできるんだからな。あの爺じいさんが慈善家だったとしても、それがお前にどうしたというわけはないじゃねえか。もしばか者だったとしたところで、お前に関係したことじゃねえ。何もお前が口を出すことはねえや。向こうには金があるんだからな。」

亭主としての言葉、宿屋の主人としての理論、それはいずれも抗弁を許さないところのものであった。

男はテーブルの上に肱ひじをついて、また何か考え込んだような様子をしていた。商人や馬方などすべての他の旅客らは、少し遠くに身をさけて、もう歌も歌わなかった。彼らは一種の畏敬いけいの念をもつて男を遠くからながめていた。あんな見すばらしい着物をつけながら、平気で大きい貨幣をポケットから引き出し、木靴きくつをはいた小婢こおんなに大きな人形を奢おごつてやるその男は、確かに素敵なまた恐ろしい爺じいさんに違いなかった。

かくて数時間すぎ去った。夜半の弥撒ミサもとなえられ、夜食も終わり、酒飲みの連中も立ち去ってしまい、酒場の戸も閉ざされ、その天井の低い広間にも人がいなくなり、火も消えてしまったが、不思議な男はなお同じ席に同じ姿勢でじっとしていた。時々彼は身をもたして肱ひじを右左と変えていた。ただそれだけであった。コゼットが去ってからもう一

言も口をきかなかった。

テナルデイエ夫婦だけが、作法と好奇心とからその広間に残っていた。「夜通しあんなふうになっているつもりかしら、」と女房はつぶやいた。午前の二時が鳴った時、彼女はついに閉口して亭主に言った。「私はもう寝ますよ。好きなようになさるがいいわ。」亭主は片すみのテーブルにすわって、蠟燭ろうそくをつけ、クーリエ・フランセー紙を読み初めた。そういうふうにして一時間余りたった。あつぱれな亭主は少なくとも三度くらいはくり返してクーリエ・フランセー紙をその日付けから印刷者の名前まで読み返したが、男は身を動かさずともしなかった。

テナルデイエは身体を動かし、咳せきをし、唾つばを吐き、鼻をかみ、椅子いすをがたがたいわしたが、それでも男は身動きもしなかった。「眠ってるのかしら、」とテナルデイエは考えた。が男は眠ってるのではなかった。しかし何物も彼の心呼びさますことはできなかった。ついにテナルデイエは帽子をぬぎ、静かに近寄ってゆき、思い切って彼に言ってみた。

「旦那だんな、お休みになりませんか。」

寝ませんかという言葉でも彼にはじゅうぶんな親しいものに思われたかも知れなかった。休むという言葉にはぜいたくの気味があつて、敬意が含まれてるのだった。それらの言葉

は翌朝の勘定書の数字を大きくする不思議な驚くべき性質を持っているのである。寝る室^{へや}が二十スーなら、休む室は二十フランするのである。

「やあ、なるほど。」と男は言った。「廐^{うまや}はどこにありますか。」

「旦那、」とテナルデイエは微笑を浮かべて言った、「御案内いたしましょう。」

亭主は蠟燭^{ろうそく}をとり、男は包みと杖とを取った。そして亭主は彼を二階の室に導いた。特別にりっぱな室で、マホガニー製の家具が備えてあり、船型寝台と赤いキヤラコ^{とばり}の帷^{とばり}とがついていた。

「これはいったい何ですか。」と旅客は言った。

「私どもの結婚の時の室でございます。」と主人は言った。「今では私ども二人は他の室に寝るようにしています。一年に三四度しかだれもはいらないのです。」

「私には廐でも同じだったのに。」と男は無造作に言った。

テナルデイエはそのあまり愛想のない言葉を耳にしなかったようなふうをした。

彼は暖炉の上に出て新しい二本の蠟燭に火をともした。炉の中にはかなりよく火が燃えていた。

暖炉棚の上にはガラス器の中に、銀糸とオレンジの花とのついた女の帽子が一つあった。

「そしてこれは、何ですか。」と男は言った。

「旦那、それは家内が結婚の時の帽子でございます。」とテナルデイエは答えた。

旅客はそれをながめたが、「ではあの怪物にも処女の時代があつたのかな、」とでもいうような目つきだった。

だがテナルデイエは嘘を言つたのである。その家を借りて飲食店にしようとした時から、^{へや}室は今のとおりであつた。彼はそれらの家具やオレンジの花の中古の帽子などを買ひ取つた。それによつて「自分の配偶者」には優雅な光がそうこになり、そうしておけばこの家もイギリス人のいわゆるりっぱな体面をそなえることになる、彼は考えたのであつた。旅客がふり返つた時には、亭主はもうそこにいなかった。テナルデイエは翌朝うまく金をしぼり取つてやるつもりその男には不遠慮な親しい待遇をしないがよいと思つて、あいつもせずひそかに逃げ出してしまつたのである。

亭主は自分の室に退いた。女房は床^{とこ}についていたが、眠つてはいなかった。亭主の足音が聞こえた時彼女はふり向いて言つた。

「私^{あした}明日になったらコゼットをたたき出してしまいますよ。」

テナルデイエは冷ややかに答えた。

「そうか。」

彼らはその他の言葉をかわさなかった。やがて蠟燭ろうそくは消された。

旅客の方では、室の片すみに杖と包みとを置いた。亭主が出て行くと、脇掛椅子ひしかけいすにすわってしばらく考え込んだ。それから靴をぬぎ、蠟燭の一本を手に取り一本を吹き消し、扉とびらを押し開き、何かをさがすようなふうであたりを目を配りながら室を出て行つた。廊下を通つて階段の所へ達した。そこで、子供の息のようなきわめて静かな小さな音を耳にした。その音に引かれて彼は、階段の下に作られてる——というよりもむしろ階段でできてる一種の三角形の押し入れみたいな所へやつてきた。それは階段の下のすき間にすぎなかった。そこに、古かごや古びんなどの間に、ほこりや蜘蛛くもの巣などの中に、一つの寢床があつた。もつとも寢床と言つても、穴があいて中の藁わらが見えている蒲団ふとんと、下まで見通せるほど穴だらけの掛け物とにすぎなかった。敷き布もなかった。そして、それだけのものが床石ゆかいしの上にじかに置かれていた。その寢床の中に、コゼットが眠っていた。

男はそこに近づいて、彼女をながめた。

コゼットは深く眠っていた。着物もきたままだった。冬には、なるべく寒くないように着物もぬがないで眠るのであつた。

彼女はしつかと人形を抱きしめていた。人形の大きく開かれた目はやみの中に光っていた。時々彼女は目をさましかかっているように大きなため息をもらしては、ほとんど瘵^{けいれん}攣^{れん}に人形を腕に抱きしめた。寢床のそばにはただ片方の木靴^{きぐつ}があった。

コゼットの寝てる物置き^{もの置き}のそばに一つの扉^{とびら}が開いたままになっていて、そこからかなり広い薄暗い室^{へや}が見えていた。男はそこにはいつて行つた。奥の方に、一つのガラス戸を通して、一對の小さなまつ白な寢床が見えていた。アゼルマとエポニーヌとの寢床であつた。その向こうに柳の枝でできた帷^{とばり}なしの揺籃^{ゆりかご}が半ば見えていた。中には、その晩、始終泣き通しにしていた小さい男の児が眠つていた。

男はその室がテナルディエ夫婦の寝てる室に続いていることを察した。そして引き返さうとした時、彼の目はその暖炉の上に落ちた。それはよく宿屋に見受けられる大きなやつで、火がある時でもきまつてごくわずかであつて、見ても寒そうに思われるものだった。今その暖炉には、火もなければ灰さえもなかった。けれども男の注意を引くものがそこにあつた。それはかわいらしいかつこうの大小二つの子供靴だった。クリスマススの晩暖炉の中に履物^{はきもの}を置いておいて、親切なお爺^{じい}さんがりっぱな贈物を持ってきてくれるのを暗やみのうちに待つという、あのおもしろい古くからの子供の習慣を、彼はその時思い出した。

エポニーヌとアゼルマとはそのことを忘れないで、めいめい自分の靴を片方ずつ暖炉の中に置いていたのである。

男は身をかがめてのぞいてみた。

親切なお爺さんは、すなわち母親は、既にやってきたと見えて、両方の靴の中にはそれぞれ、新しいりっぱな十スー銀貨が光っていた。

男は立ち上がって去ろうとした。その時彼は、炉の奥の方の暗いすみっこの影に、も一つ何かあるのを認めた。よく見るとそれは木靴だった。ぶかつこうな醜い木靴で、半ばこわれかかっている、かわいた泥と灰とにまみれていた。コゼットの木靴だった。コゼットはいくらだまされても決して気を落とさない子供心のいじらしい信頼で、暖炉の中に自分も木靴を置いたのであった。

絶望のほかは何事も知らなかった子供のうちにもなお残っているその希望こそ、崇高なまた優しいものではないか。

その木靴の中には何にもはいつていなかった。

男は胴着の中をさぐり、身をかがめ、コゼットの木靴の中にルイ金貨を一つ入れた。それから彼は抜き足して自分の室へ^{へや}戻った。

九 テナルデイエの策略

翌朝少なくとも夜明けより二時間ぐらい前に、テナルデイエは酒場の天井の低い広間で
蠟燭ろうそくの傍わきにすわって、手にペンを執り、黄色いフロックの旅客への請求書をしたため
いた。

女房はそばに立ちながら半ば彼の上に身をかがめて、ペンの跡をたどっていた。彼らは
一言も言葉をかわさなかった。一方は、深く考え込んでおり、一方は、人の頭から驚くべ
きものが出現してくるのを見るおりのあの敬けい虔けんな嘆賞の念に満たされていた。家の中に
はただ一つの物音がしていた。それは雲雀ひばりむすめ娘が階段を掃除する音だった。

およそ十五分もたってから、いくらかの添削をした後、テナルデイエは次の傑作をこし
らえ上げた。

一 号室様への請求書

一、夕食

三フラン

一、室代	十フラン
一、蠟燭代	五フラン
一、炭代	四フラン
一、雑用	一フラン
合計	二十三フラン

右の書き付けのうち雑用というのはまちがって難用と書いてあった。

「二十三フラン！」と女房は多少躊躇ちゆうちよの色を浮かべながら感心して叫んだ。

あらゆる大芸術家のように、テナルディエはそれでもなお満足してはいなかった。

「なあに！」と彼は言った。

それはあたかも、ウイン会議においてフランスの賠償金額を定めてるカスルリーグのよ
うな調子だった。

「なるほどそうね。それぐらいは相当さ。」と女房は自分の娘たちの面前で男がコゼット
に人形を与えたことを考えながらつぶやいた。「それで当たりまえよ。けれどあまり多
すぎるようね。払うまいとしやしないかしら。」

テナルデイエは冷ややかに笑った。そして言った。

「いや払うよ。」

その笑いは、信頼と権威とを明示するものだ。そんなふうにして言われることはきつとそのとおりになるに違いなかった。で女房も言い張らなかった。彼女はテーブルを並べはじめ、亭主は室の中を^{へや}あちこち歩き回った。ややあつて彼はまたつけ加えて言った。

「こつちは千五百フランの借りがあるんだからな。」

彼は暖炉のすみに行つて腰をかけ、両足をあたたかい灰の上に差し出して考え込んだ。

「ねえ、」と女房は言った、「今日はどうあつてもコゼットをたたき出しますよ、よござんすか。あの畜生め！ 人形を持つてゐる所を見ると、私はむかむかしてくる。彼奴を^{あいつ}これから一日でも家に置いとくくらいなら、ルイ十八世のお妃に^{きさき}でもなつた方がまだましだ。」

テナルデイエはパイプに火をつけ、煙を吹きながらそれに答えた。

「お前から勘定書をあの男に渡してくれ。」

そして彼は室^{へや}から出て行つた。

彼が出てゆくや否や、旅客がはいつてきた。

テナルデイエはすぐに客の後ろにまた現われて、女房にだけ見えるようにして半分開い

た扉とびらの所にじつと立ち止まった。

黄色い着物の旅客は、杖と包みとを手に持っていた。

「まあこんなにお早く！」と上さんは言った。「もうお発たちですか。」

そう言いながら彼女は、具合悪そうに勘定書を両手のうちにひねくつて、爪つめで折り目をつけていた。その冷酷な顔には、珍ひきようしく卑怯と懸念との影が見えていた。

どう見ても「貧乏人」としか思われない男にそんな書き付けを出すことが、彼女には何だか不安に思われたのである。

旅客は何かに心を奪われてぼんやりしてるようだった。彼は答えた。

「ええ、もう発たちます。」

「旦那だんなは、」と上さんは言った、「モンフェルメイユに用がおりではないんですか？」

「いや、ただ通りかかったのです。それだけです。……そして、」と彼はつけ加えた、

「勘定は？」

上さんは何とも答えないで、折り畳んだ書き付けを彼に差し出した。

男はそれをひろげてながめた。しかし明らかに彼の注意は他の方へ向いてるらしかった。

「お上さん、」と彼は言った、「この土地では繁はんじよう昌しょうしますかね。」

「どうにか旦那。」と上さんは答えながら、男が別に何とも言わないのでぼんやりしてしまつた。

彼女は悲しそうな嘆くような調子で続けて言つた。

「どうも、不景気でございますよ。それにこの辺にはお金持ちがありません。田舎なものですからねえ。時々旦那のような金のある慈悲深い方がおいで下さいませんではね。入費も多うございますし、まああの小娘を食わしておくのだつてたいいではございません。」

「どの娘ですか。」

「あの、御存じの小娘でございますよ、コゼットという。この辺では皆さんにアルーエツト（訳者注 ひばり娘の意）と言われていますが。」

「ああなるほど。」と男は言つた。

上さんは続けた。

「百姓つてなんてばかなんでございましょう、そんな綽名あだななんかをつけて。あの児は雲雀ひばりというよりか蝙蝠こうもりによけい似ていますのに。ねえ旦那、私どもは人様に慈善をお願いすることなんかいたしません、自分で慈善をするだけの力はございません。一向もうけは

ありませんのに、出すことばかり多いんで。營業税、消費税、戸の税、窓の税、付加税なんて！ 政府から大変な金を取られますからねえ。それに私には自分の娘どもがいるんですから、他人の子供を育てなければならぬというわけもありますんです。」

男はつとめて平気を装って口を開いたが、その声はなお震えを帯びていた。

「ではその厄介者を連れていつてあげましょうか。」

「だれを、コゼットでございますか。」

「そうです。」

上さんの赤い激しい顔は醜い喜びの表情に輝いた。

「まあ旦那^{だんな}、御親切な旦那！ あれを引き受けて、引き取って、連れてって、持ってって下さいまし、砂糖づけにして、松露煮にして、飲むなり食うなりして下さいまし。まあ恵みぶかい聖母様、天の神様、何てありがたいことでございますよう。」

「ではそうしましょう。」

「本当ですか、連れてって下さいますか。」

「連れてゆきます。」

「あのすぐに？」

「すぐにです。呼んで下さい。」

「コゼット！」と上さんは叫んだ。

「ですが、」と男は言つた、「勘定は払わなければなりません。いくらですか。」

彼は勘定書を一目見たが、驚きの様子をおさえることはできなかった。

「二十三フラン！」

彼は上さんをながめて、また繰り返した。

「二十三フラン！」

そう繰り返した言葉の調子のうちには、一方に驚きと他方には疑惑がこもっていた。

ちよつと間があつたので上さんはその打撃に應ずることができた。彼女はしかと答えた。

「さようでございます。二十三フランです。」

男はテーブルの上に五フランの貨幣を五つ置いた。

「娘をつれておいでなさい。」と彼は言つた。

その時テナルディエは室のまんなかへ出てきて、そして言つた。

「旦那の勘定は二十六スーでいい。」

「二十六スー！」と女房は叫んだ。

「室代が二十スー、」とテナルデイエは冷ややかに言った、「そして夕食が六スー。娘のことについては少し旦那に話がある。席をはずしてくれ。」

女房はその意外な知恵のひらめきを見てすっかり参ってしまった。千両役者が舞台に現われたような気がした。そして一言も返さないで、室から出て行った。

二人だけになると、テナルデイエは客に椅子をすすめた。客は腰をおろした。テナルデイエは立っていた。そして彼の顔は、人の好き^よそうな質朴らしい特殊な表情を浮かべた。

「旦那、」と彼は言った、「まあお聞き下さい。私はまったくあの児がかわいいんです。」男は彼をじつと見つめた。

「どの児です？」

テナルデイエは続けて言った。

「妙なもんですよ、心をひかれるなんて。おや、この金はどうしました。まあこれはお納め下さい。で私はその娘がかわいいいでしてね。」

「いったいだれのことです。」と男は尋ねた。

「なに、うちのコゼットですよ。旦那^{だんな}はあれを連れてってやろうとおっしゃるんでしょう。そこで、正直なところを申し上げると、まあ旦那がりっぱな方だということと同じくらい本

当のことを申せばですな、実は私はそれに不同意なんです。あの児がいないと物足りませんでね。ごく小さい時分から育てましたんでね。それは金もかかりますし、よくないところもありますし、私どもに金はありませんし、実際のところ、あれの病気にはただ一度で四百フラン余りの薬代も払ったことがあります。が、神様のためと思えば少しぐらいはしてやらなければなりません。父親も母親もありませんので、私が手一つで育て上げました。私とてあの児に食わせ、また自分で食うだけのパンは持っております。実際私はあの児を大事にしています。まあ人情が出てきたんですな。私はばか者で、一向理屈はわかりません。がただかわいいんです。家内は活発な方ですが、やはりかわいがっています。ごらんのとおり、自分たちの児のようにしています。あれが家の中でしゃべくってるのが楽しみです。でして。」

男はなお彼をじつとながめていた。彼は続けた。

「失礼ではございますが旦那、通りがかりの人に自分の児をこうして渡してしまう者もありますまい。私の申すところも、もつともでございますよう。そこで、旦那はお金持ちで、お見受けしたところごくりっぱな方で、それがあの児のためになるかどうかなどと申すのではありませんが、それでもよく事情はわかっていませんではね。おわかりでもありまし

ようが、まああれをやるとしまして、かりに私情を犠牲にしますとしてもですな、あれがどこへ行くかぐらいは知りたいではありませんか。見失いたかありませんよ。どこにいるかぐらいは知っていて、時々は会いにも行きましようし、またあの児も、育て親があつて自分を見ていてくれるということを知るといわけです。世間にはずいぶん思いがけないことも起こりますからね。私は旦那の名前さえ存じませんし、あれを連れてゆかれますとしたら、あああのアルーエツトはいつたいどこへ行つたんだろうと、私はただ嘆息するほかはありませんからね。何かちよつとした書き物でも、まあいわば通行券なりと、それを拝見して置きたいと思いますが。」

男はいわば相手の本心の底までも貫くような目つきでじつと彼をながめながら、おごりかな確乎^{かつこ}たる調子で答えた。

「テナルディエ君、パリーから五里くらい離れるのに通行券を持つてくる者はいません。コゼットを連れて行くと言つたら連れてゆくだけのことです、それだけです。私の名前も私の住所も、またコゼットがどこへ行くかも、君に知らせる必要はありません。私はあの児を生^{しょうがい}涯^{がい}再び君に会わせまいというつもりです。私はあの児の縄^{なわ}を解いてやって、逃がそうということです。それでどうですか。承知ですかそれとも不承知ですか。」

悪魔や妖鬼ようきなどが何かのしるしで自分よりまさった神のいることを知るように、テナルデイエは相手がなかなか手ごわいことをさとした。それはほとんど直覺だった。彼はそれを明確れいりな機敏さでさとした。前夜、馬方らと酒をのみながら、煙草たばこをふかしながら、卑猥ひわいな歌を歌いながら、彼は猫のように覗うかがい数学家のように研究して、始終その見なれぬ男を観察していたのである。彼は同時に自分のためと楽しみと本能とから男を窺うかがい、あたかも金で頼まれたかのように偵察ていさつしていたのである。そしてその黄色い上衣の男の一挙手一投足はことごとく彼の目をのがれなかった。男がコゼットに対する興味を明らかに示さない前から、テナルデイエは既にそのことを見破っていた。その老人の奥深い目つきが絶えずコゼットの方へ向けらるるのを見て取っていた。何ゆえにそう興味を持つのだろうか？ いったい何者だろう？ 金入れにはいっぱい金を持ちながら、何ゆえにああ見すばらしい服装なりをしているのだろうか？ そういう問題を彼は自ら提出しながら、解決ができず、いら立っていた。彼はそのことを夜通し考えた。あの男はコゼットの父親であるわけはない。では祖父でもあろうか？ それならばなぜすぐに名乗らないのであろうか？ 権利がある者は、すぐにそれを示すはずである。あの男は明らかにコゼットに対しては何らの権利も持っていないに違いない。するといったい何者だろう？ テナルデイエはどう推測

していいかわからなくなってしまった。彼はすべてを垣間見たが、ついに何物もはつきり見付け得なかった。とはいふものの、その男にあれこれとしゃべり立てながら、これには何か秘密があるし、男は身分を隠したがっているのだなと思つて、彼は自分の強味を感じた。ところが男の明晰確乎たる返答に出会つて、その不思議な男はただ不思議なばかりで何らとらうべきところがないのを見た時、彼は自分の弱味を感じた。彼は少しもそういうことを予期していなかった。彼の推測はことごとく破れてしまった。彼はあらゆる考えを集中してみた。そして一瞬間、考慮をめぐらした。彼は一見して前後の事情を判断し得るような人物であつた。で今や単刀直入に事を運ぶ場合であると考えた。他人の目にはわからなくともそれと察し得らるる危急な場合に大將軍らが決行することを、彼はついに断行した。彼は砲門を隠した幕をにわかに引き払つた。

「旦那、」と彼は言つた、「私は千五百フランいただきたいんです。」

男は脇のポケットから黒皮の古い紙入れを出し、それを開き、紙幣を三枚引き出して、テーブルの上に置いた。それから、その紙幣の上を大きな親指で押さえて、亭主に言つた。「コゼットをお呼びなさい。」

さてそういうことが行なわれてる間に、コゼットは何をしていたか？

その朝コゼットは目をさますと、木靴の所へ走って行った。彼女はそこに金貨を見いだした。それはナポレオン金貨ではなく、王政復古のごく新しい二十フラン金貨であつて、表には月桂冠げっけいかんの代わりに、プロシア式の小さな辮髪べんぱつが刻んであつた。コゼットは目くらむような気がした。彼女の運命は彼女を眩惑し初めた。彼女は金貨がどういふものであるか知らなかつた。まだ一度も金貨を見たことがなかつた。彼女はそれを感じて、ように急いでポケットの中に隠した。けれどもまさしく自分のものであることを感じていた。だれがそれを自分にくれたかをも察さしていた。一種の恐ろしさに満ちた喜びを感じていた。彼女は満足であつた。がことに惘然ぼうぜんとしていた。かくもりっぱな美しい品々は、現実のものとは思えなかつた。人形は彼女をこわがらせ、金貨は彼女をこわがらした。彼女はそれらの驚くべきものの前に何となく身を震わした。ただあの見知らぬ男だけが彼女をこわがらせなかつた。いな、かえつて彼女の心を落ち着けさせた。既に前夜から、驚きのうちにまた眠りのうちに、彼女はその小さな子供心にも、年取つた貧乏な悲しげな様子をしながら金持ちで慈悲深いその男のことを、考えまわしていた。その老人に森の中で出会つてから、すべてが一変したように彼女には思われた。空飛ぶ一羽の小さな燕つばめよりもなお不仕合わせなコゼットは、母の影に翼の下に身を隠すということがどんなものであるか、

かつて知らなかった。五年この方、すなわち彼女の記憶にある限りにおいて、あわれな小娘の彼女はたえず震えおののいていた。いつも不幸の鋭い寒風の下に裸でさらされていたところが今、彼女は身に着物をまとったような心地がした。以前は彼女の心は凍えていたが、今は暖くなっていた。彼女はもうテナルデイエの上さんをそう恐れはしなかった。もうただ一人ではなかった。だれかがそこにいてくれた。

彼女はきまった朝の仕事に急いで取りかかった。自分の身につけてるルイ金貨の方へ、前夜十五スー銀貨を落とした同じ胸掛けのポケットにはいつてるルイ金貨の方へ、しきりに気を取られた。彼女はあえてそれに手は触れなかった。けれども、五分間もじっとそれのことを考えてることがあった、あえて言わなければならぬが、舌をだらりと出したまま。階段を掃除しながらも、手を休めてそこにじっとたらずみ、箒のこともまた何もかも世の中のことを忘れてしまつて、自分のポケットの底に輝いてるその星を心で見つめた。そういうふうにして考え込んでる時だった。テナルデイエの上さんが彼女の所へやってきた。

亭主の言いつけで彼女はコゼットをさがしにきたのであった。不思議にも彼女は打ちもしなければなりつけもしなかった。

「コゼット、」と彼女はほとんどやさしく言った、「すぐにおいで。」

間もなくコゼットは天井の低い広間にはいつてきた。

見知らぬ男は、携えていた包みを取り上げて、それを解いた。中には、小さな毛織りの長衣、胸掛け、綿麻の下着、裾着、肩掛け、毛糸の靴下、靴、すべて八歳の小娘に要するいつさいの衣装がはいっていた。みな色は黒であった。

「さあお前、」と男は言った、「これを持って行つてすぐに着ておいでなさい。」

日が出ようとする頃、戸をあけ初めたモンフェルメイユの人々は、見すばらしい服装なをした老人が、腕に薔薇色ばらいろの大きな人形を抱えた喪服の小娘の手を引いて、パリー通りを歩いてゆくを見た。彼らはリヴリーの方へ進んで行つた。

それはあの旅客とコゼットであった。

だれもその男を知つてゐる者はなかった。またコゼットも今はぼろを着ていなかったもので、多くの者はそれと気づかなかつた。

コゼットはそこを立ち去りつつあつた。だれとともに？ 自分でもそれを知らなかった。どこへ向かつて？ 自分でもそれを知らなかった。ただ彼女の知つていたことは、今や自分はテナルデイエの飲食店をあとにしているということのみだつた。だれも彼女に別れを

告げようとするものもいなかった。また彼女もだれに別れを告げようとも思わなかった。憎み憎まれたその家から彼女は出て行つた。

あわれなやさしき娘よ、その心はこれまでただ圧迫をのみ受けていたのである！

コゼットは大きな目を開いて、大空をうちながめながらしつかりした足取りで歩いていた。彼女は新しい胸掛けのポケットにルイ金貨を入れていた。時々身をかがめてはちらとそれをのぞき込み、それから老人を見上げた。彼女はあたかも神様の近くにでもいるような心地がした。

十 最善を求むる者は時に最悪に会う

テナルデイエの女房はいつものとおり亭主のなすままに任しておいた。彼女は何か大事を予期していた。男とコゼットとが立ち去った時、テナルデイエは十五分余りもじっとしていたが、やがて女房をわきに呼んで、千五百フランを見せた。

「それだけですか！」と彼女は言つた。

二人が家を持つていらい、彼女が亭主の仕事に批評がましい口を出したのは、それが初

めてだった。

それはみごとに的に当たった。

「なるほど、お前の言うとおりだ。」と亭主は言った。「ばかをやった。帽子を取つてくれ。」

彼は三枚の紙幣を折つてポケットにつつ込み、大急ぎで出て行つた。しかし彼は方向をまちがえて、初め右の方へ行つた。それから近所の者に尋ねて本当の方向を知つた。アルーエツトと男とはリヴリーの方へ行くのが見られたそうである。彼はその言葉に従い、独語しながら大またに進んで行つた。

「あの男は黄色い着物を着てるがまさしく大金持ちだ。俺はばかだった。初めに二十スー出し、それから五フラン、それから五十フラン、それから千五百フラン、それも無造作に出してしまった。一万五千フランでも出したかも知れない。だが追つつけるだろう。」

それからまた、子供のために前から用意してきた着物の包み、それが不思議だった。それには何か秘密があるに相違なかった。秘密をつかんでおいて手放すということがあるものではない。金持ちの秘密は金を含んだ海綿と同じだ。それをしぼってやらなければいけない。そういう考えが彼の脳裏に渦巻いた。「俺は^{おれ}ばかだった、」と彼は独語した。

モンフェルメイユを出て、リヴリーへ行く道が曲がってる所まで行くと、その先は高原の上に続いているのが遠くまで見渡される。で彼はそこまで行ったら、男と娘との姿が見えるものと考えた。それで目の届く限り見渡してみたが、何にも見えなかった。彼はまた人に尋ねてみた。そうこうするうちに時間を失っていた。通りがかりの人々の言葉では、彼がさがしてる男と子供とはガンニーに面した森の方へ行ったということだった。彼はその方向へ急いだ。

二人は彼より先に出かけていた。しかし子供の足は遅い。そして彼は早く歩いていた。その上その辺の地理に彼は詳しかった。

突然彼は立ち止まって、額をたたいた。あたかも大事なことを忘れていて引き返そうとしてる者のようだった。

「銃を持って来るんだった！」と彼は思った。

テナルディエは二重の性格を持つてゐる男だった。そういう男はしばしば、だれも気づかぬうちに人々の間を通りぬけ、まただれにも認められずに姿を隠してしまうものである。なぜなら、そのただ一方面だけをしか見せないようにできているから。多くの者は、そういうふうにして半ば影に潜んで生活するようになってゐる。平和な普通の場合にはテナル

デイエは、正直な商人、善良な市民——である、とは言えないが——となるに足るだけのものを持つていた。と同時にまたある場合になると、底の性質をもたげさせるようなある事件が起こると、悪党たるに足るだけのものを持つていた。彼は底に怪物を蔵した商人であつた。彼が生活してゐる家の片すみには、悪魔が時々うずくまつて、自分が作つたその醜い傑作の前に思いにふけたに違いない。

ちよつと躊躇ちゆうちよした後、彼は考えた。

「ええ、ぐずぐずしてゐるうちには逃げてしまふ！」

そして彼はまっすぐに大急ぎで進んでいった。あたかも鷓鴣しやこの群れをかぎつけた狐きつねのようびんしょうに敏捷びんしょうに、ほとんど確信があるような様子で。

果して、池の所を通りすぎ、ベルヴュー並み木道の右手にある広い粗林を斜めに横ぎつて、シエル修道院の昔の水道の覆おほいとなつてほとんど丘を取り巻いてゐる芝生しばふの小道まで達した時、彼は一つの帽子が藪やぶの上から見えてゐるのを認めた。彼がいろんな憶測をなげかけた帽子で、あの男の帽子だつた。藪は低かつた。テナルデイエは男とコゼットがそこにすわつてゐるのを見て取つた。コゼットの方は小さいので見えなかつたが、人形の頭が見えていた。

テナルデイエの見当はまちがわなかった。男は実際そこにすわってコゼットを少し休ま
していたのである。テナルデイエは藪をまわって、追いかけてきたその二人の目の前に突
然現われた。

「ごめん下さい。」と彼は息を切らしながら言った。

「ここに旦那だんなの千五百フランを持つて参りました。」

そう言いながら彼は、三枚の紙幣を男の前に差し出した。

男は目をあげた。

「それはいったいどういうわけですか。」

テナルデイエは丁寧に戻事をした。

「旦那、コゼットを返していただきたいと申すのです。」

コゼットは身を震わして、男にひしと寄りすがつた。

男はテナルデイエの目の中をのぞき込みながら、一語一語ゆっくりと答えた。

「君がコゼットを、返してもらいたいのですと？」

「はい旦那だんな、返していただきましょう。こういうわけなんです。私はよく考えてみました。

実際私は旦那に娘をお渡しする権利はありませんのです。私は正直な人間ですからな。こ

の娘は私のものではなく、その母親のもです。私にこの娘を預けたのは母親ですから、母親にだけしか渡すことはできません。母親は死んでるではないかと旦那はおっしゃるでしょう。ごもつともです。で私はこの場合、この人に子供を渡してくれといったような、何か母親の署名した書き付けを持って参った人にしか、子供を渡すことはできませんのです。明瞭なことです。」

男は何とも答えないでポケットの中を探った。テナルデイエは紙幣のはいつてる紙入れがまた出てくるのを見た。

テナルデイエはうれしさにぞつとした。

「うまいぞ！」と彼は考えた、「一つ談判をしてやろう。俺を買収するつもりだな。」

紙入れを開く前に、旅客はあたりを見まわした。まったく寂寞^{せきばく}たる場所だった。森の中にも谷合いにも一つの人影も見えなかった。男は紙入れを開いた。そして中から、テナルデイエが待っていた一つかみの紙幣ではなく、一枚の小さな紙片を取り出した。男はそれを開いて、テナルデイエの前につきつけて言った。

「道理^{もつとも}です。これを読んでもらいましょう。」

テナルデイエは紙片を取り上げて読んだ。

モントルイユ・スүүл・メールにて、一八二三年三月二十五日

テナルデイエ殿

この人へコゼットを御渡し下されたく候

種々の入費は皆支払うべく候

謹みてご挨拶あいさつ申し上げます候

ファンティヌ

「君はこの署名を覚えていましたよね。」と男は言った。

それはいかにもファンティヌの署名だった。テナルデイエはそれを認めた。

もう何ら抗弁の余地はなかった。彼は二重の激しい憤懣ふんまんの情を感じた、望んでいた買収をあきらめなければならぬ憤懣と、取りひしがれた憤懣と。男は続けて言った。

「その書き付けは娘を渡したしるしとして納めておいてかまいません。」

テナルデイエは整然と引きさがった。

「この署名は巧みに似せてある。」と彼は口の中でつぶやいた。「まあ仕方がない。」

それから彼は絶望的な努力を試みた。

「旦那、」と彼は言った、「よろしゅうござんす。あなたがその人ですから。しかし『種々の入費』を払っていただかなければなりません。だいの金額になります。」

男はすつくと立ち上がった。そしてすり切れた袖そでについてる塵ちりを指先で払いながら言った。

「テナルデイエ君、この正月に母親は百二十フラン君に借りがあると行ってました。ところが君は二月に五百フランの覚え書きを送ってきて、二月の末に三百フランと三月の初めに三百フラン受け取っている。その時から九カ月たっているのです、約束どおり月に十五フランとして百三十五フランになるわけです。ところが君は前に百フランよけいに受け取っているから、残りの金は三十五フランになるわけです。それに対して先刻私は千五百フラン払ってあげた。」

テナルデイエの気持ちは、ちょうど狼おおかみが係蹄わなにかかってその鉄の歯で押さえつけられた時のようなものだった。

「この畜生、何者だろう？」と彼は考えた。

その時彼は狼と同様のことをした。彼は飛び上がった。大胆な態度は前に一度成功したのだった。

「名前もわからない旦那、」とこんどは丁寧なやり方をすてて決然と彼は言った、「私はコゼットを連れて帰るまでです。さもなければ三千フランいただきますでしょう。」

男は静かに言った。

「さあおいで、コゼット。」

彼は左手にコゼットの手を取り、右手で地に置いていた杖を拾い上げた。

テナルディエはその杖がいかに大きいことと、あたりが寂寞せきばくとしてることを認めた。

二人が立ち去ってゆく時、男の前かがみがちな広い肩とその大きな拳こぶしとを、テナルディエはながめた。

それから彼の目は、自分自身を顧みて、自分の細い腕とやせた手との上に落ちた。「俺

は実際ばかだった、」と彼は考えた、「銃も持たずにさ。猟にきたわけなのに！」

それでも彼はなお獲物を逃がそうとしなかった。

「どこへ行くか見届けてやれ。」と彼は言った。そして遠くから二人の跡をつけ初めた。

彼の手には二つのものが残っていた、ファンティーヌの署名した紙片のにがにがしと、千五百フランの多少の慰謝と。

男はコゼットを連れて、リヴリーとボンデイーの方へ行つた。頭をたれゆるやかに足を運んで、何か考え続けてるような、また悲しげな様子だった。冬のために森は透かし見らるるようになっていたので、テナルデイエはかなり後ろの方に遠くにいたがなお二人の姿を見失わなかった。時々男はふり返つて、跡をつけられてはしないかをながめた。突然彼はテナルデイエを見つけた。彼はにわかによゼットとともに深い木立ちの中にはいった。そして二人の姿は見えなくなつてしまつた。「悪魔め！」とテナルデイエは言つた。そして足を早めた。

木立ちが込んでいたので、彼は二人に近寄らなければならなかつた。男は最も茂みの深い所に達した時、ふり返つてみた。テナルデイエは木の枝の間に姿を隠そうとしたがだめだった。男の目につかざるを得なかつた。男は不安な一瞥^{いちべつ}を彼に与え、それから頭を振つて、また歩き出した。テナルデイエはまたその跡をつけた。そして彼らは二、三百歩ばかり進んだ。と突然、男はまたふり向いた。彼はテナルデイエを認めた。そしてこんどはきわめてすごい顔をしてじつとにらめた。でテナルデイエも、それ以上行つたとて「無益」

であると考えた。彼はあとへ引き返した。

十一 九四三〇号再び現われコゼットその籤くじを引く

ジャン・ヴァルジャンは死んだのではなかった。

海へ落ちた時、いな、むしろ自ら海に身を投じた時、彼は前に述べたとおり鎖から解かれていた。彼は水中をくぐって停泊中のある船の下まで泳ぎついた。一いっそう艘の小舟がその船につないであつた。彼は晩まで小舟の中に隠れていることができた。夜になって再び泳ぎ出し、ブロン岬みさきから程遠からぬ海岸に達した。金は持っていたので、着物を手に入れることができた。バラギエの付近に一軒の居酒屋があつて、その当時脱獄囚のために着物を売っていた。非常に儲もうかる商売だそうである。それからジャン・ヴァルジャンは、法律の目と社会の掟おきてとをのがれんとするすべての悲しい脱走人らがなすとおりの、人知れぬ曲がりくねった道程を取った。ボーセの近くのプラドーに最初の隠れ場所を見出した。それから上アルプ県にはいつて、ブリアンソンの近くのグラン・ヴィヤールの方面へ進んだ。探り探りの不安な逃走で、分かれ道などは全く不明な土竜もぐらの穴のような道程だった。後にな

つて彼の逃走の跡は多少見い出された、すなわち、エーン県ではシヴリユーの土地、両ピレネー県ではシャヴァイユ村の近くのグランジュ・ド・ドームクと言われているアコンの片すみ、それからペリグーの付近ではシャペル・ゴナゲー区のブリユニー。そして最後にパリーにはいった。それから彼がモンフェルメイユへきたのは読者の既に見たところである。

パリーへきてからの第一の仕事は、七、八歳の小娘のために喪服をあがな購うことであり、次に住居を求めることであつた。それが済んで、彼はモンフェルメイユへおもむ赴いた。

読者の知るとおり、彼はこの前の逃走の時すでに、モンフェルメイユかまたはその付近にひそかな旅をしたのだつた。官憲もそのことはうすうす知っていた。

けれども今や彼は死んだと思われていた。そのために彼をおおい隠してるやみはいつそう深くなつていた。パリーで彼は、自分のことを掲載してる新聞を一つ手に入れた。彼はそれで安心を覚え、あたかも実際に死んだような平和を覚えた。

テナルディエ夫婦の爪牙からそうがコゼットを救い出した日の夕方、ジャン・ヴァルジャンは再びパリーにはいった。夕暮れの頃コゼットとともにモンソーの市門からはいった。その市門の所でほうばしや幌馬車に乗り、天文台の前の広場まで行つた。そこで馬車をおりて、御者に

金を払い、コゼットの手を引いて、二人で暗夜の中をウールシーヌとグラシエールの両郭に隣している人氣のない街路を通つて、オピタル大通りの方へ進んで行つた。

コゼットにとつては、その日は感動の多い異様な一日であつた。寂しい飲食店で買ったパンとチーズとを籬まがきの影で食べたこともあつた。たびたび馬車を代えたり、しばらくは徒歩で行つたりした。彼女は少しも不平をこぼさなかつた。けれどもだいぶ疲れていた。歩きながらしだいに彼女が手を引っぱるようになるので、ジャン・ヴァルジャンもそれに気がついた。彼はコゼットを背中におぶつた。コゼットは人形のカトリーンを手につつま、頭をジャン・ヴァルジャンの肩につけて、そのまま眠つてしまつた。

第四編 ゴルボー屋敷

一 ゴルボー氏

今から四十年ばかり前のことである。一人でぶらりと歩き回って、サルペートリエールの奥深い裏通りへはいって行き、大通りをイタリー市門の方まで進んで行くと、ついにもうパリーの町も尽きたと思われるような一郭に達するのであった。そこは、通行人があるところを見ると僻地^{へきち}でもなく、人家や街路があるところを見ると田舎でもなく、田舎の街道のように通りには轍^{わだち}の跡があり、草が茂つているところを見ると町でもなく、人家がごく高いところを見ると村でもなかった。ではいったいどういう所なのか？ 人が住んでいるがだれの姿も見えない場所であり、ひっそりとしてはいるがやはりだれがいる場所であった。それは大都市の一並み木街であり、パリーの一街路ではあるが、夜は森の中よ

りもいつそう恐ろしく、昼は墓場よりもいつそう陰気だった。

それはマルシエ・オー・シュヴオー（馬市場）という古い一郭であった。

その馬市場のこわれかかった四つの壁の向こうまで進んでゆき、プティー・パンキエ街をたどり、高い壁で囲まれた菜園を右手に過ぎ、大きな海^{うみだぬき}狸の巢に似たタン皮の束が立つてゐる牧場の所を通り、木片や鋸^{のこぎりくず}屑や鉋^{かんなくず}屑などが山となつてその上には大きな犬がほえており、また木材がいつぱい並べてある庭の所を通り、しめきつたまつ黒な小門がついていて春には花を開く苔^{こけ}でおおわれてる長い低いこわれかけた壁の所を通り、貼札を禁ずと大きい字が書いてある朽ちはてたない土蔵の壁の所を通つてゆくと、ついにヴィーニュ・サン・マルセル街の角^{かど}まで行けるのであった。その辺はあまり人に知られてない所だった。そこにある一つの工場のそばには、両方の庭にはさまれて、当時一軒の破屋があつた。それは外から見ると百姓家くらいの小ささだったが、実際は大会堂ほどの大きさをしていた。側面の切阿^{きりづま}で通りに面していて、そのために外観の狭小をきたしているのだった。ほとんど家の全体は通りから隠れていた。ただ戸口と一つの窓とが見えるきりだった。

その破屋は二階建てだった。

それをよくながめる時、第一に不思議な点は、戸口は単なる破屋の戸口らしい粗末なものにすぎないのに、窓の方は、それがもし荒ら石の壁の中にあけられてるのではなく切り石の中にでもこしらえられてたら、りっぱな邸宅の窓としても恥ずかしからぬほどのものだった。

戸口はただ腐食した木の板でできていて、その板はいい加減に四角に割った薪まきのような横木で無造作に止めてあった。戸口はすぐに急な階段に続いていた。階段は段が高く、白塗りで泥と塵ちりとにまみれ、戸口と同じ幅になっていて、表の通りから見ると、梯子はしごのようにまっすぐに上っていつて二つの壁の間に暗がりに消えていた。戸口がついてるぶざまな壁口の上の方は、狭い薄板で張られ、その薄板のまんなかに三角形の小窓があげられていて、戸口がしめらるる時には軒窓ともなり小窓口ともなっていた。戸口の内側には、インキに浸した二筆ふたふでで五二という数字が書いてあり、薄板の上方には同じ筆で五〇という数字が書きなぐつてあった。全くどちらが本当かわからなかった。いったい何番地なのか？戸口の上からは五十番地と言うし、戸口の中からは反対して、いや五十二番地と言う。三角形の小窓には、塵にまみれた何かのぼろが旗のように掛かっていた。

窓は大きくて、高さも十分であり、鎧戸よろいどもあり大きな窓ガラスの框かまちもついていた。た

だそれらの大きなガラスには種々な割れ目があつて、器用に紙で張つて隠してあるので、またかえつて目立っていた。鎧戸は留め金がはずれぐらゐらしてゐるので、家の者を保護するといふよりもむしろ下を通る人々に不安を与えていた。日よけの横木が所々取れていて、そこには板が縦に無造作に打ち付けてあつた。それで初めは鎧戸だったものが、ついには板戸となつたありさまである。

時勢遅れのようなその戸口とこわれてはいるが相当なその窓とがかく同じ家に見えることは、ちやうど不似合いな二人の乞食こじきを見るようなもので、二人はいつしよに並んで歩いてはいるが、同じようなぼろのうちにも各異つた顔つきをしていて、一人は元來の乞食であるが、一人は元一個の紳士であつたらしく思えるようなものだった。

階段は建物の一部に通じていて、そこはきわめて広く、ちやうど納屋を住宅にしたものようだった。建物の中には腸のように廊下が続いていて、それから左右に種々な大きさの部屋らしいものがあつたが、それもようやく住まえるだけのもので、部屋というよりむしろ小屋といった形である。それらの室へやは周囲の空地に面していた。そしてどれも皆薄暗く、荒々しく、ほの白く、陰鬱いんうつで、墓場とびらのようだった。すき間が屋根にあつたり扉とびらにあつたりするので、それを通して冷たい光線が落ちてきたり凍るような寒風が吹き込んでき

たりした。そのどうか住宅らしい建物のうちでおもしろいみごとな一つの点は、蜘蛛くもの巣の大きいことであつた。

入り口の戸の左手に、大通りに面して身長くらいの高さの所に、塗りつぶした軒窓が一つあつて、四角なくぼみをこしらえて、通りがかりの子供らが投げ込んでいった石がいっぱいはいっていた。

この建物の一部は近頃こわされてしまった。けれども今日なお残つてるものを見ても、昔のありさまが察せられる。その全部の建物は、まだほとんど百年の上にはなるまい。百年といえ、教会堂ではまだ青年であるが、人家ではもう老年である。人間の住居は人の短命にあやかり、神の住居は神の永生にあやかるものらしい。

郵便配達夫はその破屋を、五十・五十二番地と呼んでいた。けれどもその一郭では、ゴルボー屋敷という名前で知られていた。

この呼び名の由来は次のとおりである。

本草学者が雑草を集めるように種々な逸話をかき集め、記憶のうちに下らない日付を針で止めることばかりをやつてゐる些事さじ収集家らは、前世紀一七七〇年頃、コルボーにルナールというシャートレー裁判所付きの二人の検事が、パリにいたことを知っているはずで

ある。ラ・フォンテーヌの物語にある鳥からす（コルボー）と狐きつね（ルナール）との名前である。いかにも法曹界ほうそうかいの冷笑ひやかしの種となるに適していた。そして間もなく、変なもじりの詩句が、法廷の廊下にひろがっていった。

コルボー先生は記録に棲とまりて、

差し押さえ物件を啣くわえていたりぬ。

ルナール先生はにひに惹ひかれて、

次のごとくに話をしかけぬ。

「やあ今日は！」……云々うんぬん。

（訳者注 ラ・フォンテーヌの物語の初めを参考までに書き下す——鳥先生は木の上にとまって、くちばしにチーズをくわえていた。狐先生はそれにひに惹かれて、こんな言葉を彼にかけた。「やあ今日は……云々」）

二人の律義りちぎな法律家は、そういう冷評を苦にし、自分の後ろからどつと起る笑声に少なからず威厳を傷つけられて、名前を変えようと決心し、ついに思い切って国王に請願し

た。ちょうど一方には法王の特派公使と他方にはラ・ローシュ・エーモン枢機官とが、二人ともうやうやしくひざまずき、陛下の御前において、床から起きてきた御寵愛ちようあいのデユ・パリー夫人のあらわな両足に各自上靴をおはかせ申したその日に、請願書は国王ルイ十五世に差し出された。笑っていられた国王はそれをみてなお笑われて、心地よく二人の司教の方から二人の検事の方へ向かわれ、その二人の法官の名前をある程度まで許してやられた。で国王の允許いんきよをもつて、ゴルボー氏は名前に濁点を付してゴルボーと名乗ることができた。またルナール氏は、プの字を頭につけて、プルナールと名乗ることができたが、前者ほど仕合わせでなかったというのは、第二の名前も第一のとはほとんど似たりよつたりだったからである。

ところでその辺の言い伝えによれば、そのゴルボー氏がオピタル大通り五十・五十二番地の破屋の所有者であつたそうである。あのりっぱな窓をこしらえさしたのも彼自身であつたとか。

そういうわけでその破屋は、ゴルボー屋敷という名前をもらっていた。

五十・五十二番地の家のすぐ前には、オピタル大通りの並み木の間に半ば枯れかかった大きな榆にれの木が一本立っていた。家のほとんど正面に、ゴブラン市門の街路が開けていた。

その街路には当時人家もなく、舗石しきいしもなく、季節によって緑になったり泥をかぶったりする醜い樹木が植えられていて、パリーの外郭の壁にまっすぐに通じていた。硫酸にの匂いにおがそばの工場の屋根から息をついて吹き出ていた。

市門はすぐ近かった。一八二三年には外郭の壁もまだ残っていた。

その市門は人の心に痛ましい幻を与えるものであった。それはビセートルへ行く道であった。帝政および王政復古の時代に死刑囚らが刑執行の日に、パリーへはいつてきたのは、そこからであった。一八二九年ごろにあのいわゆる「フォンテーヌブルー市門」の殺人事件が行なわれたのも、そこにおいてであった。それは実際不思議な事件で、官憲もその犯人らを発見することができず、全く不明に終わった惨劇で、ついに解決を得なかった恐ろしい謎なぞであった。それから数歩進むと、あの不吉なクルールバルブ街になって、そこではあたかもメロドラマの中に見るようにユルバックがイヴリーの羊飼いの女を雷鳴のうちに刺し殺したのであった。なお数歩進むと、サン・ジャック市門の所の頭を切られたいやな楡の木立ちの所に達する。あの博愛者らが断頭台を隠すに用いた所であり、死刑の前にたじろぎながら堂々とそれを廃することも、厳としてそれを継続することもあえてできなかった商人や市民などの階級の、陋劣ろうれつ不名誉なる刑場であった。

今より三十七年前に、常に恐ろしいほど宿命的なそのサン・ジャックの広場を外にして、この陰うつなオピタル大通りのうちの最も陰鬱いんうつな所といえ、五十・五十二番地の破屋のある今日でもあまり人の好まぬその一隅ぐうであつた。

町家はその後約二十五年も後にならなければそこには建て初められなかつた。当時そこはきわめて陰惨な場所であつた。前に述べたような惨劇を思い起こさせる上に、丸屋根の見えるサルペトリエール救済院とすぐ柵さくが近くにあるピセートル救済院との間にはさまつてゐることが感ぜられた、すなわち女の狂人と男の狂人との間にあることが。目の届く限りただ、屠牛場とぎゅうや市の外壁や、所々に兵營や僧院に見るような工場の正面などがあるばかりだつた。どちらを見ても、板小屋や白堊塗はくあり、喪布のような古い黒壁や経帷子きようかたびらのような新しい白壁。どちらをながめても、平行した並木、直線的な築塀あや、平面的な建物、冷やかな長い線とわびしい直角。土地の高低もなければ、建築の彩あやもなく、一つの壁さひだえもない。全景が氷のようで規則的で醜みにくかつた。およそ均シンメトリー斉あやほど人の心をしめつけるものはない。均斉はすなわち倦怠けんたいであり、倦怠はすなわち悲愁の根本である。絶望は欠伸あくびをする。苦悩の地獄よりもなお恐るべきものがあるとするならば、それはまさしく倦怠の地獄であらう。もしそういう地獄が実際に存在するものであるならば、このオピタル

大通りの一片はまさにその通路であつたろう。

けれども、夜の幕がおりてくるころになると、明るみが消え去ってゆくころになると、ことに冬には、夕暮れの寒風が楡にれの最後の霜枯れ葉を吹き払うころになると、そしてあるいはやみが深く星の光もない時、あるいは月光と風とが雲のすき間から落ちてくる時、このオピタル大通りはにわかに恐ろしい趣に変わるのであつた。物の直線的な輪郭は、やみのうちに沈み込み姿を隠して、あたかも無限の一片のように思われてくる。そこを通る者は、無数の惨劇の言い伝えを思い出さないわけにはゆかなくなる。多くの犯罪が行なわれたその土地の寂寞せきばくさのうちには、何か恐ろしいものがこもっている。やみの中には係蹄わなが張られてるような感じがする。漠然ばくぜんたる形の物影がみな怪しいように思われる。並み木の間に見える長い四角な空隙くうげきが墓穴のように感ぜられる。昼間は醜く、夕方はものわびしいが、夜は陰惨となる。

夏の夕方などは、楡にれの木の下に、雨に朽ちた腰掛けの上にすわつてゐる婆さんなどがあちこちに見られた。それらの婆さんたちはよく人に施しを求めていた。

なおその一郭は、古く寂れてるといふよりもむしろすた廃れ切つたようなありさまではあつたが、その当時からしだいに面目が変わりつつあつた。既にその頃から、その変化を見ん

とする者は急がなければならなかった。日々に全体のうちのどこかが消滅しつつあった。今日はもとよりもう二十年も前から、オルレアン鉄道の発車場がその古い場末の横に設けられて、そこに働きかけていた。首府のはずれのどこかに、ある鉄道の始点が設けらるる時には、その場末の一区は死滅して一つの市街が生まれるものである。民衆の大中心地たる都市のまわりにおいては、それらの強大なる機械の響きに、石炭を食い火を吐き出すそれらの驚くべき文明の馬の息吹きに、生命の芽に満ちた土地は震え動いて口を開き、人間の古い住居をのみつくし、新しいものを吐き出すがように見える。古い家はくずれ落ち、新しい家がそびえてくる。

オルレアン鉄道の停車場がサルペートリエールの一角に侵入してしまい、サン・ヴィクトルの濠や植物園などに沿っている古い狭い街路は、駅馬車や辻馬車や乗合い馬車などの群れが毎日三、四回激しく往来するために震え動き、いつしか両側の人家は左右に飛ばされてしまった。全く事実でありながら言うだにおかしな事がらが世にはあるものである。大都市においては太陽は南向きの人家を産み出し大きくなしてゆくということが真実であるごとくに、頻^{ひんぱん}繁なる馬車の往来は街路を広くするということも確かな事実である。そしてそこには今や新生命の徴候が明らかに見えている。その田舎^{いなか}ふうな古い一郭のうち

に、最も寂然^{せきぜん}たる片すみに、まだ通行人さえもないような所にさえ、舗石^{しきいし}が見られ、歩道の区画もしだいにはい伸びようとしている。ある朝、一八四五年七月のある記憶すべき朝、瀝青^{チヤン}のいつぱいはいった黒い釜^{かま}がけむつてるのがそこに突然見られた。その日こそ、文明はそのルールシーヌ街に到着し、パリはそのサン・マルソー郭外まではいつてきたと、初めて言うことができたのであった。

二 ふくろうぐいす 梟と鶯との巢

ジャン・ヴァルジャンが足を止めたのはゴルボー屋敷の前であつた。野生の鳥のように、最も寂しい場所を彼は自分の巢に選んだのである。

彼はチョッキの中を探つて、一種の合鍵^{あいかぎ}を取り出し、戸口を開き、中にはいり、それから注意して戸口をしめ、コゼットを負つたまま階段を上つて行つた。

階段を上りきつて、彼はポケットからも一つの鍵を取り出し、それでまた別の扉^{とびら}を開いた。彼がはいつてすぐにまたしめきつたその室^{へや}は、かなり広い一種の屋根部屋^{いす}みたいなありさまをしていて、床に敷かれた一枚のふとんと一つのテーブルと数個の椅子とが備えて

あつた。ストーヴが一つ片すみにあつて、火が燃されて燠おきが見えていた。表通りの街燈が、その貧しい室のうちにぼんやりした明るみを投じていた。奥の方に別室があつて、たたみ寝台が置いてあつた。ジャン・ヴァルジャンは子供をその寝台の上に抱えていつて、目をさまさないようにそつとおろした。

彼は燧ひうちを打ち合わして、蠟燭ろうそくをともした。そういうものはみな前もつてテーブルの上に用意されていたのである。そして彼は前夜のようにコゼットの顔をながめはじめた。その目つきには喜びの情があふれて、親切と情愛との表われは今にもはち切れそうであつた。小娘の方は極端な強さか極端な弱さかにのみ属する心許した静安さをもつて、だれといつしよにいるのかも知らないで熟睡し、どこにいるのかも知らないで眠り続けていた。

ジャン・ヴァルジャンは身をかがめて、子供の手に脣くちびるをあてた。

九カ月前には、永ながの眠りについたその母親の手に彼は脣を当てたのであつた。

その時と同じような悲しい痛切な敬けいけん虔な感情が、今彼の心にいっぱいになった。

彼はコゼットの寝台のそばにひざまずいた。

もうすっかり夜が明け放れても、子供はまだ眠っていた。十二月の太陽の青白い光が、そのわびしい室へやの窓ガラスを通して、影と光との長い筋を天井に落としていた。その時突

然、重く荷を積んだ荷車が大通りのまんなかを通って、その破屋を暴風雨あらしが襲ってきたかのように揺り動かし、土台から屋根まで震動させた。

「はい、お上さん、」とコゼットはびくりと目をさまして叫んだ、「ただいま、ただいま！」

そして彼女は、まだ眠たさに瞼も半ば閉じたまま、寝台から飛びおり、壁のすみの方へ手を差し出した。

「ああ、どうしよう、ほうき箒は！」と彼女は言った。

その時彼女は初めてすっかり目を開いた、そしてジャン・ヴァルジャンの微笑ほほえみで顔を見た。

「ああ、そうだった！」と彼女は言った。「お早う。」

子供は天性、身自ら幸福と喜悦であるから、すぐに親しく喜悦と幸福を受け入れるものである。

コゼットは寝台の下にある人形のカトリヌを見つけ、それを取り上げた。そして遊びながら、ジャン・ヴァルジャンへいろいろなことを尋ねた。——ここはどこであるか？ パリーとは大きな町であるか？ テナルディエの上さんのいる所から遠いのか？ もどつ

てゆかないでもよいのか？　その他いろいろなことを。それからふいに彼女は叫んだ。
「ほんとにここはきれいだこと！」

実は見すばらしい小屋同様であつたが、彼女はそこで身の自由を感じたのだつた。

「掃除そうじをしましょうか。」とついに彼女は言つた。

「お遊び。」とジャン・ヴァルジャンは言つた。

そういうふうにして一日は過ぎた。コゼットは別に何にも詮せんさく索しようともせず、その人形と老人との間にあつてただもう無性にうれしかった。

三 二つの不幸集まつて幸福を作る

翌日の明け方、ジャン・ヴァルジャンはまたコゼットの寝台のそばにいた。彼はそこで身動きもしないで待つていて、コゼットが目をさますのを見守つた。

ある新しいものが彼の魂の中にはいつてきていた。

ジャン・ヴァルジャンはかつて何者をも愛したことがなかった。二十五年前から彼は世に孤立していた。彼はかつて、父たり、愛人たり、夫たり、友たることがなかった。徒刑

場における彼は、陰悪で、陰鬱^{いんうつ}、純潔で、無学で、剽悍^{ひょうかん}であつた。その老囚徒の心は少しもわるずれていなかった。頭に残っている姉と姉の子供たちのことも、漠然^{ばくぜん}として查^{はる}かで、ついには全く消えうせてしまった。彼はその人々を見いださんためにあらゆる手段をつくしたが、どうしても見いだすことができなくて、ついには忘れてしまった。人間の性質というものはそうしたものである。その他の青春時代のやさしい情緒も、もしそういうものがあつたとしても、深淵^{しんえん}のうちに消滅してしまつていた。

しかるに、コゼットを見た時、コゼットを取り上げ連れ出し救い出した時、彼は自分の臟腑^{はらわた}が動き出すのを感じた。彼のうちにあつた情熱と愛情とはすべて目ざめて、その子供の方へ飛びついていった。彼は子供が眠つてゐる寝台の近くに寄つていつて、喜びの情に震えていた。彼は母親のようなある内心の熱望を感じた、そしてそれが何であるかを自ら知らなかつた。愛し初むる心の大なる不思議な動きこそは、きわめて理解し難いまたやさしいものである。

年老いたるあわれな初々^{ういうい}しい心よ！

ただ、彼は五十五歳でありコゼットは八歳であつたから、彼が生涯^{しょうがい}のうちに持ち得たすべての情愛は、一種の言うべからざる輝きのうちに溶け込んでしまつた。

それは彼が出会った第二の白光であつた。あのミリエル司教は彼の心の地平線に徳あけぼのの曙をもたらし、コゼットはそこに愛の曙をもたらした。

初めの数日はその恍惚こうこつのうちに過ぎ去つた。

コゼットの方でもまた、自ら知らずして別人となつてしまつた。あわれなる幼き者よ！

母に別れた時はまだごく小さかつたので、もう母のことは頭に少しも残つていなかった。何にでもからみつく葡萄ぶどうの若芽のような子供の通性として、彼女も愛しようとしたことがあつた。しかしそれはうまくゆかなかつた。皆が彼女を排斥した、テナルディエ夫婦も、その子供たちも、また他の子供たちも。で彼女は犬を愛したが、それも死んでしまつた。それからもう、何物も彼女を好む物はなく、だれも彼女を好む者はいなかつた。語るも悲しいことではあるが、そして前に述べておいたことではあるが、彼女は八歳にして既に冷やかな心を持つていた。それは彼女の罪ではなかつた。彼女に欠けているのは愛の能力では決してなかつた。悲しいかな、それは愛する機会であつた。それゆゑ初めての日からして、彼女のうちのすべての感じと考えると、そのお爺じいさんを愛し初めたのだつた。彼女はかつて知らなかつた氣持を覺えた、花が開くような一種の心地を。

お爺さんはもう彼女には年老いてるとも貧しいとも思えなかつた。彼女の目にはジャン

・ヴァルジャンは美しかった、ちょうどその物置きのような室へやがきれいと思われたように。それは曙あけぼのと幼年と青春と喜悅との作用である。そして新たな土地と生活も多少それを助ける。陋屋ろうおくの上に映ずる美しき幸福の影ほど快いものはない。人はみな楽しい幻の室を生しょうが涯がいに一度は持つものである。

自然は五十年の歳月のへだたりをもつて、ジャン・ヴァルジャンとコゼットとの間に深い溝渠みぞを置いていた。しかし運命はその溝渠を埋めてしまった。年齢において異なり不幸において相似たる二つの根こぎにされた生涯は、運命のためににわかにならぬ一つ所に持ちきたされ、不可抗の力をもつて結合させられた。そして両者は互いに補い合った。コゼットの本能は父をさがし求め、ジャン・ヴァルジャンの本能は一つの子供をさがし求めていた。互いに出会うことは、互いに見いだすことであつた。彼らの二つの手が相触れた神秘な瞬間に、はやその二つは蠅ろうちやく着くしてしまった。それら二つの魂が相見まみえた時、両者は互いに求め合つていたものであることを感じて、互いに堅く抱き合つてしまった。

最も深い絶対的な意味において、言わば墳墓の壁によつてすべてのものからへだてられて、ジャン・ヴァルジャンは鰥夫やもめであり、コゼットは孤児であつた。そしてそういう境きよう涯がいのために、天国的にジャン・ヴァルジャンはコゼットの父となつた。

実際シエルの森の中で、やみの中にジャン・ヴァルジャンの手がコゼットの手を執ったとき、コゼットの受けた神秘的印象は、一つの幻影ではなくて現実であった。その子供の運命のうちにその男がはいってきたことは、神の出現であった。

それにまた、ジャン・ヴァルジャンは隠れ家^がをよく選んでいた。彼はほとんど欠くところなき安全さでそこにいることができた。

彼がコゼットとともに住んだ別室付きの室^{へや}は、大通りに面した窓のついてる室だった。その窓はこの家のただ一つのものだったから、前からも横からも隣人に見らるる恐れは少しもなかった。

この五十・五十二番地の建物の一階は、荒廃した小屋同様で、八百屋^{やおや}などの物置きになつていて、二階とは何らの交渉もなかった。二階と一階とをへだてる床^{ゆか}には、引き戸も階段もなく、その破屋の横隔膜のような観があった。二階には前に言ったとおり、多くの室と数個の屋根部屋とがあつたが、ただその一つに一人の婆さんが住んでるのみだった。その婆さんがジャン・ヴァルジャンにいつさいの用をしてくれた。そのほかにはだれも住んでいなかった。

婆さんは借家主という名義であつたが、実は門番の役目をしてるにすぎなかった。クリ

スマスの日に、ジャン・ヴァルジャンに住居すまいを貸してくれたのはその婆さんだった。まだ年金は持つてゐるが、スペインの公債に手を出して失敗したので、孫娘とともに住みに来るのだと、ジャン・ヴァルジャンは婆さんに言つておいた。彼は六カ月分の前払いをして、前に述べた通りの道具を両室に備えるように婆さんに頼んでおいた。その晩暖炉に火をたき、二人が来る準備をすっかりしてくれたのは、その婆さんだった。

数週間過ぎ去つていった。二人は惨めみじな室へやの中に楽しい生活をしていた。

夜明けごろからもう、コゼットは笑い戯れ歌つていた。子供というものは小鳥と同じく朝の歌を持つてゐる。

時とするとジャン・ヴァルジャンはコゼットの鞭むちのきれたまっかな小さい手を取つて、それに脣くちびるをつけることもあつた。あわれな子供は、いつも打たれることばかりになれていたので、その意味がわからずに、恥ずかしがつて手を引つ込めた。

また時には、コゼットはまじめになつて、自分の小さな黒服をながめることもあつた。彼女はもうぼろではなく、喪服を着ていた。彼女は悲惨から出て普通の生活にはいつていた。

ジャン・ヴァルジャンは彼女に読み方を教え初めた。彼はそうして子供につづりを言わ

せながら、自分が徒刑場で読み方を学んだのは悪事をなささんがための考えからであったことを時々思い出した。その考えは今では子供に読み方を教えることに変わっていた。そしてその老囚徒は天使のような思い沈んだ微笑をもらした。

そこに彼は、天の配慮を感じ、人間以上の何かの意志を感じ、我を忘れて瞑想^{めいそう}にふけるのであった。善き考えも悪き考えと同じく、その深い淵^{ふち}を持っているものである。

コゼットに読み方を教えること、また彼女を遊ばせること、そこにほとんどジャン・ヴアルジャンの全生活があつた。それからまた彼は、母親のことを語ってきかせ、神に祈りをさした。

コゼットは彼をお父さんと呼んでいた。それより他の名を知らなかった。

コゼットが人形に着物をきせたりぬがしたりするのをながめ、また彼女が歌いさぎめくの^なに耳を傾けて、彼は幾時間もじっとしていた。その時からして、人生は興味に満ちたもののように思われ、人間は善良で正しいもののように感ぜられて、もはや心のうちで何^{なに}人をもとがめず、また子供に愛せられてる今となつては、ごく老年になるまで生き長らえるに及ばないという理由は何ら認められなかった。あたかも麗しい光明によって輝かされるがようにコゼットによつて輝かされる未来を、彼は自分に見いだしていた。およそい

かなる善人といえども、全く私心を有しない者はない。彼も時としては、コゼットが美しくはなるまいと考えて一種の満足を感じていた。

これは一個の私見にすぎないが、しかしわれわれは考うるところをすべてここに言ってしまう。すなわちコゼットを愛し初めた頃のジャン・ヴァルジャンの状態を見てみるに、なお正しい道を続けて進むのにその支持者が必要でなかったかどうかは、疑わしいところである。彼は人間の悪意と社会の悲惨とを新たな方面より目に見たのであった。もちろんそれは不完全でただ事実の一面観にすぎないものではあったが。そしてフアンティヌのうちに概略された女の運命と、ジャヴエルのうちに具現された公権とを、目に見たのであった。彼は徒刑場に戻った、それもこのたびは善をなしたがために。彼は新たな苦しみを飲んだ。嫌悪けんおと疲労とにまたとらえられた。司教の記憶さえも、後にまた勝利を得て輝きだしはするが、とにかく一時は曇りかけることもあった。実際その聖ききよ記憶もついに弱くなってきた。恐らくジャン・ヴァルジャンは、落胆して再び墮落せんとする瀬戸ぎわにあつたのかも知れない。しかるに彼は愛を知って、再び強くなった。ああ彼もまたほとんどコゼットと同じくよろめいていたのである。が彼はコゼットを保護するとともに、コゼットは彼を強固にした。彼によつて、彼女は人生のうちに進むことができた。そ

して彼女によつて、彼は徳の道が続けることができた。彼は少女の柱であつた、そして少女は彼の杖であつた。実に運命の均衡の測るべからざる犯すべからざる神秘さよ！

四 借家主の見て取りしもの

ジャン・ヴァルジャンは用心して昼間は決して外へ出なかつた。そして毎日夕方に一、二時間散歩した。時には一人で、多くはコゼットとともに、その大通りの最も寂しい横町を選び、また夜になると教会堂にはいたりして。彼は一番近いサン・メダール会堂によく行つた。コゼットは連れて行かれない時は婆さんといつしよに留守をした。けれども老人といつしよに出かけるのを彼女は喜んでいた。人形のカトリーヌと楽しく差し向かいでいるよりも、老人といつしよに一時間の散歩をする方を好んでいた。老人は彼女の手を引いて、歩きながらいろいろおもしろいことを話してくれた。

コゼットはごく快活な子になつた。

婆さんは部屋を整えたり料理をしたり、食物を買いに行つたりした。

彼らはいつとも少しの火は絶やさなかつたが、ごく困まつてゐる人のように、質素に暮らし

ていた。ジャン・ヴァルジャンは室^{へや}の道具をも初めのままにしておいた。ただコゼットの私室へ行くガラスのはまった扉^{とびら}を、すっかり板の扉に変えたばかりだった。

彼はやはりいつも、黄色いフロックと黒いズボンと古い帽子とを身につけていた。往来では貧乏人としか見えなかった。親切な女たちがふり向いて一スー銅貨をくれることもあった。ジャン・ヴァルジャンはその銅貨を受け取って、低く身をかがめた。また時には、慈悲を求めてる不幸な者に出会うこともあった。そういう時、彼はふり返ってだれか見てる者はないかをながめ、そつとそれに近寄り、その手に貨幣を、たいてい銀貨を、握らしてやって、足早に立ち去った。それは彼に不利なことだった。その一郭では、施しをする乞食という名前で彼は知られるようになった。

借家主の婆さんは、至つて無愛想で、近所の者のことを鵜^うの目鷹^{たか}の目で探り回るような女だったが、ひそかにジャン・ヴァルジャンの様子をも探っていた。少し耳が遠くて、またそのために饒舌^{おしゃべり}だった。齒は抜け落ちてしまつて、ただ上と下とに一本ずつ残っていたが、それを始終かみ合わせていた。彼女はいろんなことをコゼットに尋ねた。しかしコゼットは、モンフェルメイユからきたのだということのほかは、何にも知らず、何にも語るものがなかった。婆さんは氣をつけてると、ある朝ジャン・ヴァルジャンがどうも変な様

子をして家の中の人の住んでいない部屋の一つにはいつていくのを見つけた。彼女は古猫のような足つきであとをつけて行つて、身を隠しながら、向かい合わせの扉のすき間から彼をうかがうことができた。ジャン・ヴァルジャンはもちろん用心に用心をしたゆえか、その扉に背を向けていた。見ていると、彼はポケットの中を探つて小箱と鋏はさみと糸とを取り出し、それからフロックの裾の裏をほどきはじめ、その口から黄色っぽい一片の紙を引き出して、それをひろげた。婆さんはそれが千フランの紙幣であることを認めてぞつとした。千フランの紙幣を見たのはそれが生まれて二度目か三度目だった。彼女は恐れて逃げて行った。

しばらくたつて、ジャン・ヴァルジャンは婆さんの所へ行き、千フランの紙幣を細かいのに換えに行つてくれと頼んだ。そしてこれは昨日受け取つた半期分の年金だといつけ加えた。婆さんは考えた。「どこで受け取つたんだらう。あの人は晩の六時にしか出かけなかった、そして国庫はそんな頃開いてるはずはない。」婆さんは紙幣を両替えに行きながら、種々想像をめぐらした。そうしてその千フランの紙幣は、いろいろな尾鰭おひれをつけられて、ヴィーニユ・サン・マルセル街のお上さんたちの間に、びっくりした盛んな噂うわさをまきちらした。

その後ある日のこと、ジャン・ヴァルジャンはチョッキ一枚になって、廊下で薪まきを鋸のこぎりひきしていた。婆さんは室へやの中で片付けものをしていた。彼女はただ一人だった。コゼットは薪が鋸にひかるのを見とれていた。婆さんは釘くぎに掛かつてるフロックを見て、しらべてみた。裏は元どおり縫いつけられていた。婆さんは注意深くそれに触さわつてみた。そして裾そでと袖付けとの中に、紙の厚みが感ぜられるように思った。きっと千フラン紙幣がたくさんはいっていたのであろう。

婆さんはそのほか、ポケットの中に種々なものはいってるのを認めた。前に見た針や鋏はさみや糸ばかりでなく、大きな紙入れ、非常に大きいナイフ、それから怪しむべきことには、種々な色の多くの鬘かつら、フロックのどのポケットもみな、何か意外のでき事に対する用意の品がいつぱいはいってるようだった。

破屋の人たちは、かくて冬の終わり頃に達した。

五 床に落ちた五フラン銀貨の響き

サン・メダール教会堂の近くに一人の貧しい男がいた。彼はいつもその廃すたれた共同井

戸の縁にうずくまっていたが、ジャン・ヴァルジャンはよく彼に施しをしてやった。その前を通る時は、たいてい幾スーかの金を恵んでいた。時には言葉をかけることもあった。うらやむ者たちはその乞食こじきを警察の者だと言っていた。それはもう七十五歳にもなる年取った寺男で、絶えず口の中で祈祷きとうの文句を繰り返していた。

ある晩、コゼットを連れないうで一人でそこを通った時ジャン・ヴァルジャンは、その乞食がいつもの場所に、今ついたばかりの街燈の下にいるのを認めた。その男は例のとおり、何か祈祷をしているようなふうで身をかがめていた。ジャン・ヴァルジャンはそこに歩み寄って、いつもの施与ほどこしを手握とらしてやった。乞食は突然目を上げて、じっとジャン・ヴァルジャンの顔を見つめ、それから急に頭をたれた。その動作は電光のようだった。ジャン・ヴァルジャンはぞつと身を震わした。街燈の光でちらと見たその顔は、老寺男の平和な信心深い顔ではなくて、恐ろしい見知り越しの顔であるように思えた。突然暗やみの中で虎とらと顔を合わせたような感じがした。彼は思わず縮み上がって石のようになり、息をすることも口をきくこともできず、そこにいることもまた逃げ出すこともできず、その乞食をじつと見守った。乞食はぼろぼろの頭巾ずきんをかぶった頭をたれて、もう彼がそこにいることをも知らないがようだった。その異常な瞬間に、ジャン・ヴァルジャンが一言をも発

しなかったのは、本能のため、おそらく自己防衛の隠れた本能のためだったのであろう。乞^こ食^{じき}はいつもと同じような身体^{からだ}つきをし、同じようなぼろをまとい、同じような様子をしていた。「いやいや……」とジャン・ヴァルジャンは言った、「俺は気が狂ったんだ。夢を見たんだ。あり得べからざることだ！」そして彼はひどく心を乱されて家に帰った。

ちらと見たその顔がジャヴェルの顔であったとは、ほとんど自分自身にさえ彼は言い得なかった。

その夜、彼はそのことを考えふけりながら、今一度顔を上げさせるために男に何か尋ねてみればよかったと思つた。

翌日夕暮れに、彼はまたそこへ行つた。乞食^{こじき}はいつもの所にいた。「どうだね、爺^{じい}さん、」とジャン・ヴァルジャンは彼に銅貨をやりながら思い切つて言つてみた。乞食は顔を上げた、そして悲しい声で答えた。「ありがとうございます、親切な旦那^{だんなさま}様。」それはまさしく老寺男であつた。

ジャン・ヴァルジャンはすっかり安心を覚えた。彼は笑い出した。「ジャヴェルだなんて、何を見違えたんだろう、」と彼は考えた、「俺ももう目がぼけてきたのかな。」そして彼はそのことをもう考えなかった。

それから数日後のこと、晩の八時ごろであつたろう。ジャン・ヴァルジャンは室^{へや}の中にいて、大きな声でコゼットに綴^{つづ}りを讀ましていた。その時彼は、家の戸口があいてまたしまるのを聞いた。それが彼には異様に感ぜられた。彼といつしよにその家に住んでいたただ一人の婆さんは、蠟燭^{ろうそく}を儉約するためにいつも夜になるとすぐに寝るのだつた。ジャン・ヴァルジャンは手まねでコゼットを黙らした。だれかが階段を上ってくる音が聞こえた。あるいは婆さんが加減が悪くて藥屋にでも行つたのかも知れない。ジャン・ヴァルジャンは耳を傾けた。足音は重々しく男のような響きだった。しかし婆さんは大きな靴^{くつ}をはいてるし、年取つた女の足音は男の足音によく似てるものである。それでもジャン・ヴァルジャンは蠟燭^{ろうそく}を吹き消した。

彼は低い声で「そーつと寢床におはいり」とさきやいて、コゼットを寢かしにやつた。そして彼がコゼットの額^{くちびる}に脣^{くちびる}をあてた間に、足音は止まってしまった。ジャン・ヴァルジャンは黙つて身動きもせず、背を扉^{とびら}の方へ向け、そのままじつと椅子^{いす}に腰掛けて、暗やみのうちに息を凝らした。かなりしばらくたつても何の音も聞こえないので、彼は音のしないように向きを変えた。そして室^{へや}の入り口の扉の方へ目を上げると、鍵^{かぎ}穴^{あな}から光が見えた。それが扉と壁とに仕切られた暗黒のうちに、不吉な星のように見えていた。確かにそ

こには、だれかが手に蠟燭を持ち聞き耳を立てているのだった。

数分過ぎて、光は立ち去った。が何の足音も聞こえなかった。それでみると、扉の所へきて立ち聞きしていた男は、靴を脱いでたに違いなかった。

ジャン・ヴァルジャンは着物を着たまま寢床に身を投じた。そして終夜目を閉じることができなかった。

夜明け頃、疲れたのでうとうとしていると、廊下の奥にある屋根部屋の扉が開いて軋きししたので目をさました。それから前夜階段を上ってきたのと同じ男の足音が聞こえた。足音はだんだん近づいてきた。彼は寢室から飛びおりて、鍵穴に目をおし当てた。穴はかなり大きかったので、前夜家の中にはいり込んできて扉の所で立ち聞きした其そいつ奴が通つてゆく所を、見て取つてやろうと思つたのである。果してそれは男であつた。しかしこんどは別に立ち止まりもせずに室の前を通りすぎてしまった。廊下の中はまだ薄暗かったので、その顔はよく見分けられなかった。しかし男が階段の所まで行つた時、外から差し込む一条の光が影絵のようにその姿を浮き出さした。ジャン・ヴァルジャンはそれを後ろからすっかり見て取つた。背の高い男で、長いフロックを着、腕の下には太い杖を持っていた。それはジャヴェルの恐ろしい後ろ姿のようだった。

ジャン・ヴァルジャンは大通りに面する窓からも一度その男を見ることができた。しかしそれには窓を開かなければならなかった。彼はそれをあえてなし得なかった。

明らかにその男は、鍵かぎを持っていて自分の家にでもはいるようにはいってきたのだった。だがその鍵を与えたのであろう？　いったいどういう訳なのであろう？

朝の七時に、婆さんが室へやを片付けにきた時、ジャン・ヴァルジャンは鋭い目つきでじろりと彼女をながめたが、何にも尋ねはしなかった。婆さんはいつものとおりの様子であつた。

掃除そうじをしながら婆さんは彼に言った。

「旦那だんなは大方、夜中にだれかはいってきたのを聞かれたでしょう。」

彼女ほどの老年にとつては、そしてその大通りでは、晩の八時といえbaumうまつくらな夜である。

「なるほど、そうでした。」と彼はきわめて自然らしい調子で答えた。「いったいどうい
う人です。」

「新しく部屋を借りた人ですよ、この家の中に。」と婆さんは言った。

「そして名前は？」

「よくは存じませんが、デュモンとかドーモンとか、何でもそんな名前でしたよ。」

「そしてどういう人です、そのデュモンさんというのは。」

婆さんは鼪いたちのような小さな目で彼を見上げて、そして答えた。

「年金を持つてる方ですよ、旦那だんなのように。」

彼女はたぶん別に何の考えもなくそう言ったのであろうが、ジャン・ヴァルジャンはそれにある意味がこもつてるように感じた。

婆さんが行ってしまった時、彼は引き出しの中に入れていた百フランの貨幣を包み、それをポケットに入れた。そうするのにも金の音が他に聞こえないようにとよほど注意はしたが、五フランの銀貨が一つ手からすべり落ちて、床の上に大きな音を立ててころがった。夕靄ゆうもやのおりる頃、彼はおりていって、大通りを注意深くあちこち見回した。だれも見えなかった。街路には全く人影が絶えてるように思われた。もっとも並み木の後ろに隠れようとすれば隠れることはできたのである。

彼はまた上っていった。

「おいで。」と彼はコゼットに言った。

彼はコゼットの手を取り、そして二人は出て行った。

第五編 暗がりの追跡に無言の一組

一 計略の稲妻形

読者がこれから読まんとするページのために、またずっと後になって読者が出会うページのために、ここにある注意をしておく必要がある。

本書の著者が、心ならずも自分のことをここに言えば、パリィを離れていることすでに数年におよんでいる（訳者注 ユーゴーが国外に亡命してゐることを言う）。そして著者が去つていらひパリィはしだいに趣を変えてきた。著者には多少不明な新しい町になつてきた。けれども著者がパリィを愛することは、ここにわざわざ言うまでもないことである。パリィは著者の精神の故郷である。ただ種々の破壊再築を経たので、著者の青年時代のパリィ、著者が自分の記憶のうちに大切に持つて行つたあのパリィは、今では昔のパリィと

なっている。けれどもどうか、そのパリーが今なお存在するかのようには語することを許していただきたい。著者が読者を導いて、「かくかくの街路にはかくかくの家がある」という所にも、今日ではもはやそういう街路も家もないことがあるかも知れない。もし読者が労をいとわないならば、それを調べてみるるもよいだろう。著者の方では、新しいパリーを知らないのです、眼前に昔のパリーを浮かべつつなつかしい幻のままに筆をすすめてゆくことにする。故国にあつた時に目撃したもののいくらかを後に残すことを思い、すべてが消えうせはしなかったと思うことは、著者にとつてうれしいことである。故国のうちに起^き臥^がしてゐる間は、その街路も自分に無関係なものであり、その窓も屋根も戸口もつまらぬものであり、その壁も没交渉なものであり、その樹木もありふれたものであり、自分がいりもしないその家は何の役にも立たないものであり、踏み歩くその舗^{しきいし}石は単なる石くれである、人は思うものである。けれども後に至つてもはや故国に身を置かない時には、その街路がとうとくなり、その屋根や窓や戸口が惜しくなり、その壁がほしくなり、その樹木がなつかしくなり、はいりもしなかったその家を毎日訪れ、その舗石の中には自分の内臓や血潮や心を残してきたのであることを、人は感ずるものである。もはや見られぬそれらの場合、おそらく永久に再び見ることはないそれらの場所、しかも心のうちにだきし

めているそれらの場所、それは一種のうれわしい魅力を帯び、夢幻の憂愁をもつて浮かんで、目に見得る聖地のごとき趣を呈し、言わばフランスそれ自身の形となるのである。そして人はそれらを愛し、そのあるがままのありしがままの姿を思い浮かべ、それに固執してその何物をも変ずることを欲しない。なぜならば人は、母の面影に対するがごとく祖国の姿に執着するものであるから。

それゆえに、過去のこととして語るのを許していただきたい。それから次に、そのことを注意しておかるるよう読者に願つて、そして物語の筆を続けよう。

さてジャン・ヴァルジャンは、すぐにオピタル大通りを離れて、裏通りのうちに進み入り、できるだけ曲がりくねった方向を取り、追跡されてはいはしないかを確かめるために、時々急にもときた方へ戻つたりした。

そのやり方は、狩り立てられた鹿しかがよくやることである。足跡が残るような場所では、種々の利益があるがなканずく、逆行路によつて狩かり人ゆうどや犬を欺くの利益がある。獵犬をもつてする狩りの方で逆逃げと称するところのものがすなわちそれである。

ちようど満月の夜であつた。しかしジャン・ヴァルジャンはそのためにも少しも困まりはしなかつた。まだ地平線に近い月は、影と光との大きな帯で街路を二つにくぎつていた。

ジャン・ヴァルジャンは人家や壁に沿って影のうちに身を潜め、光の方を透かし見る事ができた。影の方を見ることができなかったことを、彼はあまり念頭に置いていなかったらしい。ポリヴォー街に続く寂しい小路を進みながら、確かにだれも後ろからついて来る者はないと思った。

コゼットは何も尋ねずに歩いていった。世に出て最初からの六年間の苦しみは、彼女の性質のうちにある受動的なものを注ぎ込んでしまっていた。その上、これはわれわれが何度ものこれから認めることであるが、彼女は自分でもよく知らないうちに、数奇な運命とその老人の不思議な様子とになれてしまっていた。それからまた彼女は、その老人といっしょにさえいれば自分は安全だと思っていた。

ジャン・ヴァルジャン自身も、コゼットと同じく、実はどの方面へ今進んでるかを知らなかった。コゼットが彼に身を託しているように、彼は神に身を託していた。彼もまた、自分より偉大な何者かの手にすがつてゐるような気がしていた。だれか目に見えない者が自分を導いてくれるように感じていた。それに彼は、何らはつきりした考えも、何らの計画も考案も持つてはいなかった。あの男がジャヴエルであったかどうかも確かでなければ、またジャヴエルであつたにしろ、自分がジャン・ヴァルジャンであることを知つてた

かどうか、確かでなかった。彼は仮面をかぶっていたのではないか、彼は死んだと信じられていたのではないか。けれども確かに、数日来変なことが起こっていた。彼にはもうそれで十分であつた。もうゴルボー屋敷へは帰るまいと彼は決心していた。あたかも巢窟^{そうくつ}から狩り出された獣のように、永住し得る場所を見いだすまで一時身を隠す穴をさがしていた。

ジャン・ヴアルジャンはムーフタールの一郭のうちにある種々な入り組んだ小路を歩き回った。その辺は中世紀の規律をまだ保つて消燈規定の下にあるかのように、もうすっかり寝静まつてしまっていた。彼は賢い策略をもつて、サンシエ街やコポー街を、バトアール・サン・ヴィクトル街やブユイ・レルミット街を、いろんなふうにあわせ用いた。そのあたりにはいくらか木賃宿もあつたが、適當なのが見当たらないので中にはいつてもみなかった。よしだれか自分の跡をつけていた者があつたにしても、もうその男をまいてしまつたに違いないと信じていた。

サン・テティエンヌ・デュ・モン教会堂で十一時が鳴った時、ポントアーズ街十四番地にある警察派出所の前を彼は通つた。それから間もなく彼は、前に述べたような一種の本能からふり返つてみた。その時、派出所の軒燈のために照らし出された三人の男の姿がは

つきり見えた。彼らはかなり近く彼のあとをつけていて、街路の影の方のその軒燈の下を次々に通つて行つた。その一人は派出所の門のなかへはいつて行つた。けれど先頭に立つてゐる男は明らかに疑わしいと彼には思えた。

「早くおいで。」と彼はコゼツトに言つた。そして急いでポントアーズ街を離れた。

彼は円形を描いて、もう遅いのでしまつてゐるパトリアルシュの通路を回り、エペ・ド・ボア街からアルバレート街へと進み、ポスト街へはいり込んだ。

そこに一つの四つ辻^{つじ}があつた。今日ロラン中学のある所で、ヌーヴ・サント・ジュヌヴィエーヴ街が交差してゐる所である。

(言うまでもなく、このヌーヴ・サント・ジュヌヴィエーヴ街——新サント・ジュヌヴィエーヴ街——は古い街路であつて、またポスト街——郵便街——の方は十年に一度も郵便馬車さえ通つたことのないくらい寂しい街路である。ポスト街は十三世紀に瀬戸物屋などが住んでゐた所で、その本当の名前はポ―街——壺^{つぼ}街^{がい}——というのである。)

月はその四つ辻に強い光を投げてゐた。ジャン・ヴァルジャンはそのある戸口に身を潜めた。もしあの男らが自分のあとをまだつけてゐるのなら、その明るみを通る時にきつとよく見えるに違ひない、と推測したのでつた。

果して、三分とたたないうちに、彼らの姿が現われた。四人になっていた。皆背の高い男で、長い褐色のフロックを着て、丸い帽子をかぶり、手には太い杖を持っていた。その大きな身体と大きな拳こぶしとは、暗やみの中のすごい歩き方とともに気味悪いものであった。四個の怪物が市人に化したようなありさまだった。

彼らは四つ辻のまんなかに立ち止まって、何か相談するように一群になった。決心のつかぬ様子をしていた。彼らの首領とも思える一人の男がふり返って、ジャン・ヴァルジャンがはいりこんだ方向を右手で強くさし示した。も一人の男は頑がんきよう強に反対の方向をさし示したらしかった。第一の男が向き直った瞬間に、月の光がその顔をすっかり照らし出した。ジャン・ヴァルジャンは十分にジャヴェルの顔を認めた。

二 幸運なるオーステルリッツ橋の荷車

ジャン・ヴァルジャンにとっては、もはや疑う余地はなかった。しかし幸いにも四人の男の方にはまだ疑念があった。彼は四人が躊躇ちゆうちよしてゐるのを利用した。彼らには損失の時間だったが、彼には儲けもうの時間だった。彼は潜んでいた戸口から出て、ポスト街を植物

園の方へ進んでいった。コゼットは疲れてきた。彼はコゼットを両腕にとり上げて、抱いて歩いた。一人の通行人もなく、月夜のために街燈もともされていなかった。

彼は足を早めた。

数歩進むと、瀬戸物屋ゴブレの店の所に達した。その家の前面には、次のような古い文句が月の光ではつきり読まれた。

ゴブレ息子むすこの工場はここじや。

甕かめ、壘びん、花瓶かびん、管れんが、煉瓦、

何でも望んでおいでなされ。

お望みしだいに売りますじや。

彼はクレー街を後ろにして、次にサン・ヴィクトルの泉の所を通り、植物園に沿って低い街路を進み、そして川岸まで達した。そこで彼はふり返ってみた。川岸にも街路にも人影はなかった。自分の後ろにはだれもいなかった。彼は息をついた。

彼はオーステルリツツ橋にさしかかった。

当時はなお橋銭の制度があつた。

彼は番人の所へ行つて一スー渡した。

「二スーだよ。」と橋番の老人は言つた。「歩けるくらいの子供を抱いていなさるから、二人分払いなさい。」

彼はそこを通つて手掛かりを残しはすまいかと心配しながら金を払つた。逃げるには潜み行くようにしなければいけないものである。

ちようどその時一台の大きな荷車が、彼と同じくセーヌ川を右岸の方へ渡つていた。それは彼に利益だつた。彼はその荷車の影に隠れて橋を通ることができた。

橋の中ほどにきた時、コゼットは足が麻痺^{しびれ}たから歩きたいと言つた。彼はコゼットを下におろして、またその手を引いた。

橋を渡り終えると、前方に少し右手に当たつて建築材置き場が見えた。彼はそこへ進んで行つた。そこまで行くには、月に照らされたうち開けた場所をかなり歩かねばならなかつた。が彼は躊躇^{ちゆうちよ}しなかつた。追つかけてきてた者らは確かに道を迷つて、自分はどう危険の外に脱していると、彼は信じていた。まださがされてはいるだろうが、もうあとをつけられてはすまい。

小さな街路、シUMAN・ヴェール・サン・タントアーヌ街が、壁に囲まれた二つの建築材置き場の間に通じていた。その街路は狭く薄暗くて、特に彼のために作られてるかのようだった。彼はそれにはいり込みながら、後ろをふり返ってながめた。

そこから彼は、オーステルリッツ橋をすっかり見通すことができた。

四個の人影が橋にさしかかっているとところだった。

それらの人影は植物園を背にして、右岸の方へこようとしていた。

その四つの人影こそ、あの四人の男であつた。

ジャン・ヴァルジャンは再び捕えられた獣のように身を震わした。

ただ一つの希望が残っていた。すなわち自分がコゼットの手を引いて月に照らされた空地あを通つた時には、たぶん四人の男はまだ橋にさしかかつていず、自分の姿を認めなかつたであろう。

果してそうだとすれば、前にある小路にはいり込み、建築材置き場か野菜畑か畑地か建物のない空地かに出て、逃げのびることもできるに違いない。

今はそのひっそりした小路に身を託すことができるように彼には思えた。彼はその中に進んでいった。

三 一七二七年のパリーの地図

三百歩ばかり行つた時、ジャン・ヴァルジャンは街路の分岐点に達した。いずれも斜めに右と左との二筋に分かれていた。彼の前にはちょうどYの二本の枝のような通りがあった。いずれを選ぶべきか？

彼は躊躇ちゆうちよしなかつた、右を選んだ。

なぜか？

左の枝は郭外の方へ、言い換えれば人の住んでる場所の方へ通じていたが、右の枝は田舎の方へ、言い換えれば人のいない場所の方へ通じていたからである。

けれども二人はもう早く歩いてはいなかつた。コゼットの足はジャン・ヴァルジャンの歩みをおくらしていた。

彼はまたコゼットを抱き上げた。コゼットは彼の肩の上に頭をつけて、一言も口をきかなかつた。

彼は時々ふり返つてはながめた。やはり注意して街路の薄暗い方をたどつた。街路は後

ろにまつすぐに見えていた。最初二、三度ふり返った時には何にも見え、ただひっそりとしていたので、少し安心して歩行を続けた。それからまたしばらくしてふり返ってみると、今自分が通ってきたばかりの街路に、遠くやみの中に何か動いてるものが目についたような気がした。

彼はただ前方へ、歩いて行つたというよりむしろ突進して行つた。ある横丁を見付けて、そこから逃げ出し、も一度あとをくまらずつもりだった。

彼は一つの壁に行き当たつた。

けれどもその壁は行き止まりにはなっていなかった。それは、今彼が歩いてきた街路に続いてる横通りの壁だった。

そこでまた彼は心を決めなければならなかった、右へ行くか、左へ行くかに。

彼は右の方をながめた。小路は小屋や物置きなどの建物の間に細長く続いていて、その向こうは行き止まりになっていた。その袋町の底もはつきり見えていた、大きな白い壁が。彼は左の方をながめた。そちらの小路は開けていた。そして約二百歩ばかり向こうには、その小路が通じてる街路が見えていた。安全なのはその方であった。

彼はその小路の向こうに見えてる街路に出ようと思つて、左へ曲がろうとした。その時、

彼が出ようとしてる街路とその小路との落ち合つてゐる角かどの所に、じつとして動かない黒い立像のようなものが見えた。

それはだれか一人の男で、明らかにそこに見張りにやつてきて、通路をふさいで待つていたのである。

ジャン・ヴァルジャンはあとにさがった。

ジャン・ヴァルジャンがいたパリーのその一地点は、サン・タントアーヌ郭外とラーペの一郭との間であつて、その後の工事のために今は全くありさまが変わつてゐる場所の一つである。ある者はそれを醜化だと言ひ、ある者はそれを面目一新だと言うが、とにかく変わつてしまつた。畑地や建築材置き場や古い建物はもうなくなつてしまつてゐる。今日ではそこに、新しい大通りがあり、演芸場や曲芸場や競馬場があり、停車場があり、マザスの監獄がある。その懲罰機関までそなえて、なるほど進歩である。

かんりんいん 翰林院を四国院と呼びオペラ・コミック座をフェードー座と呼び続ける伝統本位の普

通の俗語では、ジャン・ヴァルジャンがたどりつたその場所は、半世紀前まではプティー・ピクプユスと呼ばれてゐた。サン・ジャック門、パリー門、セルジャン門、ポルシユロン、ガリオート、セレスタン、カプユサン、マイユ、ブルブ、アルブル・ド・クラコ

ヴィー、プティート・ポローニユ、プティー・ピクプユス、そういうのが新しいパリーのうちに残ってる古いパリーの名前である。民衆の記憶はそれらの過去の残物の上に漂っている。

それにプティー・ピクプユスは、単に輪郭ばかりでほとんど形をそなえたこともなかった。スペインの町の修道院みたいな面影を持っていた。道路には舗石しきいしもよく敷いてなく、街路には人家もまばらであった。これから述べる二、三の街路を除いては、すべて壁ばかりで寂寞せきぼくたるものだった。商店もなければ、馬も通らなかった。ようやく所々に窓から蠟燭ろうそくの光が見えてるのみで、燈火あかりはすべて十時には消されてしまった。庭園に修道院に建築材置き場に野菜畑、所々には低い家、それから人家と同じ高さの大きな壁。

前世紀におけるその一郭はまずそんなありさまだった。それが革命のために既にひどくそこなわれた。共和政府の市土木課のために、破壊され貫かれ穴をあけられた。塵芥貯蔵所まで設けられていた。そして今から三十年前には、新しい建物のために、その一郭はほとんど塗りつぶされてしまった。今日ではもうまったくその姿がなくなってしまうている。今日ではどの地図にもその跡さえ止めていない。しかしそのプティー・ピクプユスの一郭は、一七二七年の地図にはかなり明らかに示されていた。すなわち、パリーのプラー

トル街と向き合ったサン・ジャック街のドウニー・ティエリー書店と、リオンのプリュダンスのメルシエール街のジャン・ジラン書店と、両方から発売せられた地図にはのっていた。プティー・ピクプユスの一郭のうちでわれわれが街路のY形と呼んだところのものは、シUMAN・ヴェール・サン・タントアーヌ街の二つの枝からできていて、左の方のをピクプユス小路といい、右の方のをポロンソー街と言っていた。Yの二本の枝はその頂がいわば一つの棒で結ばれていた。その棒をドロア・ムユール街と言っていた。ポロンソー街はそこで終わっていたが、ピクプユス小路は先まで通じていて、ルノアール市場の方へ上っていた。セーヌ川からやってきて、ポロンソー街の端まで来ると、ドロア・ムユール街が左手に当たり、それが直角に折れ曲がっているので、その街路の壁がまっ正面に見え、右手には、その街路の一片が延びていて、そこは出口がなく、ジャンロー袋町と呼ばれていた。ジャン・ヴァルジャンがいたのは、その所であった。

前に言ったとおり、ドロア・ムユール街とピクプユス小路との出会った角に見張りをしている黒い人影を認めた時、彼はあとにさがった。何ら疑う余地はなかった。彼はその男から待ち伏せされていたのである。

どうしたらいいか？

もうあとに引き返すだけの時間はなかった。先刻後方遠く影の中に何か動くものが見えたのは、確かにジャヴェルとその手下の者であることは疑いなかった。ジャヴェルはもう既に、ジャン・ヴァルジャンが通りすぎたその街路の入り口にきてるに違いなかった。前後の事情から察してみると、ジャヴェルはその迷宮小路の地理をよく心得ていて、手下の一人を出口の見張りにつかわすだけの注意をとったものと見える。それらの推測は的確な形をとって、突然の風に一握りのほこりがまい上がるように、ジャン・ヴァルジャンの痛ましい脳裏ににわかに渦巻き上がった。彼はジャンロー袋町をのぞいてみた。そこは行き止まりになっている。彼はピクプス小路をのぞいてみた。そこには見張りの男がいる。月の光に白く輝いてる舗道の上に黒く浮き出してるその忌まわしい姿を彼は見た。前に進めば、その男の手に落ちる。後ろに退けば、ジャヴェルの手中に身を投ずることになる。ジャン・ヴァルジャンは徐々にはさまってくる網のうちにとらえられてるような気がした。彼は絶望して天を仰いだ。

四 逃走の暗中模索

次のことをよく理解せんには、ドロア・ムユール街の正確な観念を得ておかなければならぬ、そして特に、ポロンソー街からドロア・ムユール街へはいつてゆく左手の角をよ^{かど}く知つておかなければならぬ。ドロア・ムユールの小路は、ピクプユス小路に出るまで、右側にはほとんどすべて貧しい外見の人家が並んでいた。左側には何軒にも分かれていかめしい線の長屋が建つていて、ピクプユス小路に近づくに従つて一階二階としだいに高くなつていた。それでその長屋は、ピクプユス小路の方ではきわめて高くなつていたが、ポロンソー街の方ではかなり低かつた。そして前に言つたその角の所では、ただ一つの壁だけの高さにまで低まつていた。その壁はきつかり街路に接していなくて、ごく引つ込んだ一断面をなしていたので、ポロンソー街とドロア・ムユール街と両方から見る者があつても、その二つの角にさえぎられて見えないようになっていた。

その切り取られた断面の両方の角から出ると、ポロンソー街の方では、四十九番地という表札のある一軒の人家まで壁が続いており、ドロア・ムユール街の方では、壁はずっと短くて、前に言つた薄暗い長屋の所まで行つていて、その切阿^{きりづま}を切り取り、そうして街路にまた新たな引つ込んだ角をこしらえていた。その切阿は陰気なありさまをしていて、ただ一つの窓、なおよく言えばトタン板を被^きせた二枚の雨戸きりついていないで、それも常

にしめられていた。

われわれがここに描いてるこの場所のありさまは、厳密に正確であつて、この一郭に昔住んだことのある者の頭には、必ずやごくはつきりした記憶を呼び起こすであらう。

壁の切り取られた断面は、その全部が一種の大きな見すばらしい門みたいになっていた。それは縦に多くの板をよせ集めたぶかつこうなもので、上の方の板は下の方のものより広く、皆横に打ちつけた長い鉄の箍たがで止めてあつた。その横の方に、普通の大きさの正門があつて、こしらえられてから明らかに五十年とはたっていないらしかった。

一本の菩提樹ぼだいじゆの木がその切り取られた壁の断面の上から枝をひろげており、またポロソソ街の方では壁の上に蔦つたがいつぱい絡からみついていた。

さし迫つた危険のうちにあることを感じたジャン・ヴァルジャンは、その薄暗い長屋が何となく人気なくひっそりしているのに心ひかれた。彼は急にその長屋を見回した。もしその中にはいることができたならばぶん助かるだろうと思つた。彼はまずそういう考えと希望とを得た。

ドロア・ムニール街に面するその建物の正面の中ほどには、鉛の古い漏斗形ろうとがたの鉢はちがどの階の窓にもついていた。そして中央の管から分かれてその鉢の各へ通じてる種々な管の

枝が、建物の正面に木の枝のように浮き出ていた。そのたくさんの節を持った管の枝は、昔の農家の正面によじれからんでる刈り込まれた古いぶどうの蔓をまねたものであった。

ブリキや鉄などの枝のついたそのおかしな壁果樹が、最初にジャン・ヴァルジャンの目にとまった。彼はコゼットを車除石に背をもたしてすわらせ、黙っているように命じて、それから管が地面についてる所へ走っていった。たぶんそこから登って家の中にはいり込む方法があるだろうと思つたのである。しかし管は古くなつていて役に立たず、ほとんど壁から離れてぐらぐらになつていた。その上静まり返つた建物の窓はどれも皆、屋根裏の窓でさえ、大きな鉄の格子がはまつていた。それからまた、月の光はその正面にいつぱいさしていて、そこを乗り越えようとすれば、街路の端で見張りをしてる男に見付かる恐れがあつた。それからまたコゼットをどうすればいいか？ 四階の高さの家までどうして彼女を引き上げられよう。

彼は管についてよじのぼる考えをやめて、ポロンソー街の方へ戻るために壁に身を寄せてはつてきた。

コゼットを残しておいた壁の断面の所まできた時、そこはだれからも見られないことに彼は気づいた。前に説明したとおり、そこはどちらから見ても見えないようになっていた。

その上そこは影になっていた。そしてそこに二つの門があった。あるいはそれを押しあけられるかも知れなかった。壁の上から菩提樹ぼだいじゆの木と蔦つたとが見えてるところをみると、中は明らかに庭になつてゐるらしかった。樹木にはまだ葉は出ていなかったが、少なくともそこに身を隠して夜が明けるまで潜んでることが出来るかも知れなかった。

時は過ぎ去つてゆく。早くしなければならなかった。

彼は大門にさわつてみた、そしてすぐに、その戸は内外両方からしめ切つてあることを知つた。

彼はなお多くの希望をいだいて、も一つの大きな門に近づいていった。それは恐ろしく老朽たがちていて、大きいのでいつそう弱そうで、板は腐つており、三つしかない鉄の籬さは錆びきつていた。その錆び朽ちた戸を押し破ることはできそうに思えた。

ところがよく見ると、それは実は門ではなかった。肱ひじがね金ちようつがいも蝶かみ番ばんも錠前もまんなかの合わせ目もなかった。鉄の籬は一方から他方へ続けざまにうちつけてあつた。板の裂け

目から彼は、いい加減にセメントで固めた素石や切り石をのぞき見ることができた。今から十年前まではなお、そこを通る者はそれらのものを見ることができたのである。その戸みたいなものはただ壁の上につけられた木の覆おほいにすぎないことを、彼は狼狽ろうばいしながら

も自ら認めざるを得なかった。板を引きはがすことは何でもなかったが、その先には更に壁があるのだった。

五 ガス燈にては不可能のこと

その時調子を取った重い響きが向こうに聞こえてきた。ジャン・ヴァルジャンはその街路のすみから少しのぞき出してみた。七、八人の兵士が列をなして、ポロンソー街に現われてきたところだった。銃剣の光るのが見えた。それが彼の方へやってきつつあった。

その兵士らはジャヴエルの高い姿を先に立てて、徐々に注意して進んできた。しばしば立ち止まった。明らかに彼らは、壁のすみや戸や路地の入り口などをしらべつつやって来るのだった。

それはジャヴエルが道で出会って助力を求めた巡邏じゅんらの兵士らであつたろう。その推測はまちがいなかった。

ジャヴエルの手下の二人が、その列のうちに加わっていた。

彼らの歩調と時々立ち止まる時間とをはかってみると、ジャン・ヴァルジャンがいる所

までやって来るには十五分ばかりはかかりそうだった。それは実に恐ろしい時間であった。三度口を開いた恐ろしい懸崖^{けんがい}からジャン・ヴァルジャンはわずか十数分を距^{へだ}てているのみだった。そしてこんどの徒刑場は単なる徒刑場のみではなく、コゼットをも永久に失うことであつた。すなわち墳墓の中におけるような生活をしなければならなくなるのであつた。

もはや逃げ道はただ一つきりしかなかった。

ジャン・ヴァルジャンはいわば二つの袋を持つてるとも言える特質をそなえていた。一つの袋には聖者の考えがはいつており、も一つの袋には囚徒の恐るべき才能がはいつていた。彼は場合に應じていずれかの袋を探るのであつた。

種々の技能があつたうちでも、特にツーロン徒刑場をしばしば脱走した経験から彼は、読者の記憶するとおり、登攀^{とうはん}の妙技に長じていた。梯子^{はしご}もなく、鎚^{かすがい}もなく、ただ筋力だけで、首と肩と腰と膝^{ひざ}とで身をささえて、石のわずかな突起につかまって、壁のまっすぐな角^{かど}を、場合によつては七階くらいの高さまでもよじのぼることができた。二十年ばかり前、パリーのコンシエルジュリー監獄の中庭の壁のすみを囚徒バトモールが乗り越えて、その壁を有名になし恐ろしくなしたあの技能である。

ジャン・ヴァルジャンは菩提樹ぼだいじゆの枝がさし出てる壁の高さを目分量で計った。約十八尺ばかりの高さだった。その壁が大きな長屋の建物の切阿きりづまと出会ってる角の所には、下の方に三角形の大きな築堀ついでいがついていた。おそらくその至って便利な引込んだ場所に、いわゆる通行人と称する用便人らを立たせないためのものであつたらしい。そういうふうに壁のすみをふさいだものはパリーにいくらもあつた。

その築堀は高さ五尺ばかりだった。その頂から壁の上までよじ上るべき場所は、十四尺に満たないほどだった。

壁の上には平たい石があるのみで、何の覆いおおもついていなかった。

ただ困まるのはコゼットだった。コゼットの方は壁を乗り越すことができなかった。では彼女を捨ててしまうか？ ジャン・ヴァルジャンはそんなことは夢にも考えなかった。といって連れてのぼることは不可能だった。その異常な登攀とうはんをやるには自分一人で全力をつくさなければならなかった。少しの荷があつても、重力の中心を失って下に落ちるにきまつていた。

そこで一筋の縄なわが必要になつてきた。ジャン・ヴァルジャンはそれを持っていなかった。ポロンソー街のそのま夜中に、どこに縄が得られよう。もしその時にジャン・ヴァルジャ

ンが一王国を有していたとしたら、確かに彼はそれをも一条の縄のために惜しみはしなかったろう。

あらゆる危急な場合にはそのひらめきがあるもので、あるいは人を盲目にし、あるいは人の目を開かせる。

ジャン・ヴァルジャンの絶望した目は、ふとジャンロー袋町の街燈の柱に落ちた。

その当時、パリーの街路にはまだガス燈がなかった。夜になるとそここに立てられている反照燈をつけるのであったが、それは町の一方から他方へ引つ張られて柱のほぞあな眼にはめられてる一本の綱で、上げられたりおろされたりするのであった。その綱が巻かれる軸は、ランプの下の小さな鉄の箱の中にはめこんであつて、箱の鍵かぎは点燈夫が持つており、また綱の方はある高さまで金属を被きせてまもつてあつた。

ジャン・ヴァルジャンは命がけの勢いで、街路を一飛びに飛び越し、袋町にはいり、ナイフの先で、小さな箱の門かぬき子こをはずし、そしてすぐにコゼットの所へ戻つてきた。彼は一筋の綱を手にしていた。あらゆる手段を見いだすそれらの陰惨な人々は、運命と争うおり、急速に仕事をやってのけるものである。

前に説明したとおり、その夜街燈はともされていなかった。ジャンロー袋町のランプも

もとよりほかのと同じく消えていた。でそのそばを通っても、ランプが普通の所についていないことに目をとめる者はなかったろう。

そのうちにも、その時と場所と暗やみと、ジャン・ヴァルジャンが夢中になつてること、その異様な態度やあちらこちら飛び回つてることなどは、しだいにコゼットを不安ならしめていた。ほかの子供だつたらもうよほど前から大声に泣き出していたろう。がコゼットはただジャン・ヴァルジャンのフロックの裾につかまっていた。しだいに近づいてくる巡邏じゆんちやうの兵士の足音は、ますますはつきり聞こえていた。

「お父さん、」とコゼットは低く言った、「あたしこわい。向こうから来るのはだれなの？」

「しッ！ テナルディエの上かみさんだよ。」と不幸な男は答えた。

コゼットは身を震わした。彼はつけ加えた。

「黙つておいで。私わたしのするままにしておいで。声を出したり、泣いたりすると、テナルディエの上さんが待ち受けてるよ。お前を取り戻しにきてるんだよ。」

それから、別に急ぎもせず、しかしすべてを一度でやってのけるようにして、しつかりした簡単な正確さで、それも巡邏とジャヴェルとが刻一刻に押し寄せつつある危急なおり

なのでいつそう驚くべきことではあったが、彼は自分のえり飾りをはずし、それをコゼツトのりようわき腋の下に身体を痛めないように注意して結わえ、海員たちがつばめむす燕結びと称する結び方でその襟えりかぎ飾りを綱の一端に結わえ、綱の他の一端を口にくわえ、靴と靴足袋とをぬいで壁の向こうに投げ込み、築ついでい堀の上にのぼり、そして壁と切阿きりづまとの角をよじのぼりはじめたが、あたかも踵かかとと肱ひじとを梯子はしこにかけてるかと思われるほど確實自在なものだった。半分時とたたないうちに彼は壁の上にはい上がった。

コゼツトは呆あつけ氣にとられて一言も口をきかずに彼を見守っていた。ジャン・ヴァルジャンの言いつけと、テナルディエの上さんという名前とが、彼女を氷のように冷たく縮み上がらしていた。

たちまち彼女は、ジャン・ヴァルジャンが声を低めながら自分に呼びかけてるのを聞いた。

「壁に背を向けなさい。」

彼女はそれとおりにした。

「口をきいてはいけないよ、こわがつてはいけないよ。」とジャン・ヴァルジャンはまた言った。

そして彼女は地面から引き上げられるのを感じた。

自ら気がつかないうちに彼女は壁の上に来ていた。

ジャン・ヴァルジャンは彼女をとらえて背にかつき、その小さな両手を左の手で押さえ、腹ばいになって、壁の上を切り取られた断面の所までやって行つた。そこには彼の推察どおり、一つの小屋があつて、木の堀^への上から屋根がさし出て、ゆるやかな勾^{こう}配^{はい}をなして地面に近くたれていて、菩提^{ぼだいじゆ}樹の木とすれすれになっていた。

仕合わせなことだつた。というのは、壁はその内部の方では外の街路の方よりもずっと高くなつていた。ジャン・ヴァルジャンは自分の下の方ごく深くに地面を見とめた。

彼が屋根の斜面の所へ達して、壁の頂から離れようとした時に、激しい音が巡^{じゆんら}邏^らのやつてきたことを示した。ジャヴェルの雷のような声が聞こえた。

「袋町をさがしてみい！ ドロア・ムユール街にもピクプユス小路にも見張りがついてる。きつと袋町のうちにいるに違いない！」

兵士らはジャンロー袋町のうちにはいり込んで行つた。

ジャン・ヴァルジャンはコゼットを負いながら屋根をすべりおり、菩提樹に取りついて地面に飛びおりた。恐怖のためか元氣を出したのか、コゼットは息をも潜めていた。両手

には少し擦過傷すりきずがついていた。

六 謎なぞのはじめ

ジャン・ヴァルジャンがはいった所は、ごく広い異様なありさまをした一種の庭であつた。特に冬にそして夜分にながめるためにこしらえられたかと思われるほど寂しい庭であつた。長方形をなして、奥には大きな白楊樹はこやなぎの並んだ通路があり、すみずみにはかなり高い木立ちがあり、まんなかはうち開けた空地になつていて、一本のごく大きな樹木、大きな藪やぶのように込み合つて曲がりくねつた数本の果樹、四角な野菜畑、月の光に輝いてる瓜畑うりばたけの鐘形しょうけい覆い、古い水溜みずだめなどが、それと見えていた。所々に石の腰掛けがあつたが、苔こけに黒くなつてゐるようだつた。道にはほの暗い小さな灌木かんぼくが立ち並んでまっすぐに通じていた。庭の半ばは雑草が生い茂り、残りは青い苔こけにおおわれていた。

ジャン・ヴァルジャンのそばには、彼が屋根を伝つておりてきた小屋があり、薪まきがつみ重ねてあり、その後ろに壁にくつついて石の立像が一つあつた。石像の欠け損じた顔は変な形の仮面のようになつて、暗やみのうちにぼんやり見えていた。

小屋はもう荒廃してしまっていて、壁の落ちた幾つかの室^{へや}が認められ、その一つはいっぱい物がつまっていて物置きに使われてるらしかった。

ピクプス小路の方まで折れ曲がっているドロア・ムユール街の大きな建物は、直角をなした二つの正面で庭を囲んでいた。その内側の正面は、外部の正面よりいっそう陰気であつた。窓には鉄格子^{てつこうし}がはまっていて、燈火の影さえさしてはいなかった。上方の窓には監獄に見るように目隠しがついていた。その一方の正面の影は他の正面の上に落ち、更に庭に落ちて、広い黒布をひろげたようなありさまをしていた。

そのほかには一軒の家も見当たらなかった。庭の奥は靄^{もや}と夜とのうちに見えなくなっていた。けれども二、三の壁がぼんやり見分けられて、その交錯してる所を見ると向こうにはなお耕作地があるらしく、またポロンソー街の低い屋根並みも見分けられた。

その庭はまったく想像にもおよばないほど荒涼たるものだった。人影一つなかったのは夜ふけのこととて当然ではあるが、しかしまっ昼間でさえ人の歩く所ではなさそうなありさまだった。

ジャン・ヴァルジャンの第一の注意は、靴を拾ってはき、それからコゼットとともに物置きの中にはいりこむことだった。逃走者はいかによく身を隠してもそれで十分とは思わ

ないものである。コゼットの方もテナルデイエの上さんのことをまだ考えていて、彼と同じくできるだけ身を潜めようとしていた。

コゼットは震えながら彼にすがりついていた。聞こえるものとしては、袋町や街路をさがし回つてゐる巡邏じゆんらの騒がしい足音、石にぶつかる銃床尾の音、配置の探偵たんていに呼びかけるジャヴェルの声、よく聞き取れないその言葉ののしり声。

十五分ばかりもたつと、その騒がしい怒号の響きもしだいに遠くなつてゆくように思えた。ジャン・ヴァルジャンは息を凝らしていた。

彼はそつとコゼットの口に手をあてていた。

けれども彼が隠れていたその場所は、不思議なほど寂然せきぜんと静まり返つていて、すぐそばの恐ろしい激しい騒ぎも、何ら不安の影を投じてこなかった。あたかもそれらの壁は、聖書にあるあの聾者ろうしやの石でも造られてゐるかのようであつた。

突然、その深い静謐せいひつのうちに、新しい音響が起こつた。天来の聖い名状きよすべからざる響きで、前の音が恐ろしかったのに比べて実に歓ばしい響きであつた。暗やみのうちから伝わって来る賛美歌で、夜の暗い恐ろしい静寂のうちに於ける祈祷きとうと和声との光耀こうようであつた。女の声、それも童貞女の濁りない音調と少女の無邪気な音調とがいつしよにもつれ

合った声、地上のものとも思われぬ声、赤児の耳になお残っており臨終の人の耳に既に響いているあの声にも似寄ったもの。その歌声は庭にそびえている薄暗い建物からもれて来るのだった。悪魔の騒がしい声が遠ざかつて、天使の合唱が影のうちに近づいてくるかのようだった。

コゼットとジャン・ヴァルジャンとはひざまずいた。

二人はそれが何であるかを知らず、自分らがどこにいるかを知らなかった。しかし彼らは二人とも、その老人も子供も、その改^{かいしゅん}悛^{しや}者も罪なき者も、ひざまずかなければならないように感じたのであった。

それらの声は不思議にも、その建物の寂しさを少しも消さなかった。人なき住^{すまい}居のうちにおける超自然的な歌であった。

それらの声が歌っている間、ジャン・ヴァルジャンはもう何事も考えなかった。彼はもはや暗夜を見ず、青空をながめていた。人のみな心のうちに有しているあの昇天の翼が開くのを、彼ははつきり感ずるような心地がした。

歌はやんだ。おそらくそれは長く続いたのかも知れなかったが、ジャン・ヴァルジャンにはどれくらいだったかわからなかった。恍^{こう}惚^{こつ}たる時間は常に一瞬間としか思えないも

のである。

すべては再び沈黙のうちに返った。もう街路にも庭の中にも、何物もなかった。脅かすものも心を安めるものも、すべて消え失せてしまった。壁の頂にはえてる少しの枯れ草を風が吹いて、静かな悲しげな小さな音を立てていた。

七 謎なぞの続き

夜の北風が吹き初めていた。それでみるともう夜中の一時か二時の頃に違いなかった。かわいそうにコゼットは何とも口をきかなかった。ジャン・ヴァルジャンは彼女がそばの地面にすわって自分の上に頭をもたしているのもう眠ってるのかと思った。彼は身体をかがめてその顔をのぞいた。彼女は目を大きく開いていて何か考えてるようなふうだった。彼は痛ましく感じた。

彼女はまだ震えていた。

「眠くはないかね。」とジャン・ヴァルジャンは言った。

「ひどく寒い。」と彼女は答えた。

それからややあつて彼女は言った。

「まだ向こうにいるの？」

「だれが？」とジャン・ヴァルジャンはきいた。

「テナルディエのお上さんが。」

ジャン・ヴァルジャンはもうコゼットを黙らせるためにとつた手段のことなんか忘れていた。

「ああ、お上さんならもう行つてしまつたよ。」と彼は言った。「もうこわがるものはない。」

子供は重荷が胸から取り去られたようにため息をついた。

地面は湿つていた。物置きは四方が開いていて、寒い風は一刻ごとに鋭くなつていた。

老人は上衣をぬいで、それをコゼットにまとつてやった。

「これで少しは暖いかね。」と彼は言った。

「ええ、お父さん。」

「ではちよつと待つておいで。すぐに戻ってくるから。」

彼はその廃屋から出て、もつといい隠れ場所をさがしながら、大きな建物に沿つて歩き

出した。幾つも戸口はあつたが、どれもしまつていた。一階の窓にはみな格子こうしがついていた。

建物の内側の曲がり角かどを通り過ぎると、アーチ形の窓が幾つもある所に出た。光がさしていた。彼は爪つまさき先で伸び上がつて、一つの窓からのぞいてみた。それらの窓はみなかなり広い一つの広間についていて、広間の中は大きな石が舗しいてあり、迫持せりもちぞろい揃と柱とで仕切られ、ただ一つの小さな光と大きな影とのほか、何も見分けられなかつた。その光は、片すみにともされてる一つの有明ありあけから来るのだつた。広間の中はひっそりとして、何も動くものはなかつた。けれどもじつと見ていると、床石の上に、喪布におおわれた人間の形らしいものが、ぼんやり見えるようだつた。それはうつ向きになつて、床石に顔をつけ、腕を十字に組み、死んだようにじつとして動かなかつた。床の上に引きずつてゐる蛇へびのようなもので、そのすごい形のものには首に縄なわがついてるようにも思われた。

広間のうちは薄ら明りに浮かび上がってくる一種の霧もやが立ちこめて、いつそう恐ろしい趣になつていた。

ジャン・ヴァルジャンがその後しばしば言ったことであるが、彼は生涯しょうがいに幾度か陰惨な光景に出会つたけれども、その薄暗い場所でま夜中にのぞき見た謎なぞのような人の姿が、

何とも言えない不可解な神秘を行なつてゐるありさまほどぞつとする恐ろしいものは、かつて見たことがなかった。それはたぶん死んでゐるのかも知れないと想像するのは恐ろしいことだったが、あるいは生きてゐるのかも知れないと考えるのはなおさら恐ろしいことだった。彼は勇気を鼓して額を窓ガラスに押し当て、それが動きはしないかをうかがつた。だいぶ長い間そうしてうかがつていたが、横たわつてゐるその形は少しも動かなかつた。と突然名状し難い恐怖を感じて、彼は逃げ出した。後ろもふり返り得ないで物置きの方へ駆け出した。もしふり向いたら、後ろにはきつとその形が腕を振りながら大またに追いかけてくるのが見えるに違ひないような気がした。

彼は息を切らして小屋の所へ歸つてきた。足もまつすぐには立てなかつた。腰には冷や汗が流れていた。

いま自分はどこにいたのであろう。パリーのまんなかにこんな墓場のようなものがあるうとは、だれが想像し得られよう。この不思議な家は何だろう。夜の神秘に満ちた建物、天使のような声でやみの中に人の心を招く家、しかも近づいてゆくと突然に現れるその恐るべき光景、輝かしい天国の門が開けるかと思うと、恐ろしい墓場の門が開いてくる。そしてそれはまさしく現実の建物である、街路の方には番地がしるしてある一軒の家であ

る。夢ではないのだ。しかし彼は容易にそう信ずることができなかった。

寒気、心配、不安、その夜の種々な激情、そのために彼は實際熱をも発していた。そしてあらゆる考えが頭のうちには入り乱れていた。

彼はコゼットに近寄った。コゼットは眠っていた。

八 謎なぞはますます深くなる

コゼットは一つの石に頭をもたして、そこに眠ってしまった。

彼はそのそばにすわって、彼女をながめ初めた。そして彼女をながめてるうちにしだいに心が落ち着いてきて、頭の自由を回復した。彼は次の真実を、今後の自分の生活の基をはつきりと認めた、すなわち、コゼットがいる間は、コゼットをそばに有している間は、自分の求むるところのものはすべて彼女のためのみであり、自分の恐れるところのものもすべて彼女のためのみであるということ。彼は彼女に着せるために上衣をぬいていたが、ひどく寒いとも感じてはいなかったのである。

しかるに、そういう瞑想めいそうにふけっているうちに、少し前から変な物音が彼の耳に達し

ていた。ちょうど鈴を振つてゐるような音だった。それが庭の中に聞こえていた。弱くはあるが、はつきりと聞き取れた。夜牧場で家畜の首についてる鈴から起こるかすかな小音楽にも似寄つていた。

その音をきいて、ジャン・ヴァルジャンはふり返つた。

よく見ると、庭の中にだれか人がいた。

一人の男らしい人影が、うりばたけ瓜畑の幾つもの鐘形覆いしょうけいおおの間を、規則正しく立ち上がつたりかがんだり立ち止まつたりして歩いてゐた。ちょうど何かを地面に引きずつてゐるかまたはひろげてゐるようだった。その男は跛者びっこらしかった。

ジャン・ヴァルジャンは身を震わした。不運な者らが絶えずやるような身震いであつた。すべてに敵意がありすべてが疑わしいように彼らは思うものである。人の目につきやすいからといっては昼間をきらい、不意に襲われやすいからといっては夜をきらうのである。ジャン・ヴァルジャンは、先刻は庭に人影のないのを見ておののき、今は庭にだれかいるのを見ておののいた。

彼は夢幻的恐怖から現実的恐怖へと陥つていった。考えてみると、ジャヴエルと探偵たんでいの者らはおそらくまだ立ち去つていないだろう、彼らは必ずや通りに見張りの者を残して

いったらう、あの男が自分を庭のうちに見いだしたら、泥坊と叫んで彼らの手に自分を渡してしまふだろう。彼は眠つてゐるコゼットを静かに腕に抱いて、物置き一番奥のすみに、^{すた}廃れた古い家具の積み重なつてゐる向こうに、そつと連れていった。コゼットは身動きもしなかつた。

そこから彼は、瓜畑の中にゐる男の様子をうかがつた。不思議なことには、鈴の音はその男の動作につれて起こつてゐた。男が近づくと鈴の音も近づき、男が遠くなると鈴の音も遠くなり、男が急な動作をするとそれにつれて顫^{せんおん}音が聞こえ、男が立ち止まると鈴の音もやんだ。明らかに鈴はその男についてゐるらしかつた。してみると、それはいったい何を意味するのであらう。羊か牛でもあるように鈴を下げてゐるその男は、いったい何者であらう。

そんな疑問をくり返しながら、彼はコゼットの手にさわつてみた。その手は冷えきつていた。

「ああこれは！」と彼は言つた。

彼は低い声で呼んだ。

「コゼット！」

コゼットは目を開かなかった。

彼は激しく揺すつてみた。

彼女は目をさまさなかつた。

「死んだのかしら！」と彼は言った。そして頭から足先まで震えながら立ち上がった。

最も恐ろしい考えが混乱して彼の頭を通りすぎた。おぞましい想像が一隊の地獄の神のように襲いきたつて、頭脳の壁に激しく押し寄せることもあるものである。愛する人々の身の上に関する場合には、用心深い人の心もあらゆる狂気じみたことを考え出すものである。睡眠も寒い夜戸外においては生命にかかわることがあるのを彼は思い出した。

コゼットはまっさおになつて、彼の足元の地面にぐったり横たわつて、身動きもしなかつた。

彼は耳をあててその呼吸をきいてみた。

息はまだあつた。しかしそれもきわめてかすかで、すぐにも止まりそうに思えた。

どうして彼女をあたためるか、どうして彼女をさまさせるか？ その一事より以外のことはすべて彼の頭から消えてしまった。彼は我を忘れて小屋の外に飛び出した。

十五分とたたないうちにコゼットを寢床に寝かして火のそばに置いてやることは、是非

ともしなければならぬことだつた。

九 鈴をつけた男

ジャン・ヴァルジャンは庭にいる男の方へまっすぐに進んで行つた。彼はチョツキの隠しにはいつていた貨幣の包みを手に握つていた。

男は顔を下に向けて、彼がやつて来るのを知らなかつた。大股おおまたに飛んで行つてジャン

・ヴァルジャンはすぐ彼の所へ達した。

ジャン・ヴァルジャンはそのそばに行つて叫んだ。

「百フラン！」

男はびっくりとして目を上げた。

「百フランあげる、」とジャン・ヴァルジャンは言つた、「もし今夜私を泊めてくれるなら！」

月の光はジャン・ヴァルジャンの狼狽ろうばいした顔をまともに照らしていた。

「おや、あなたですか、マドレーヌさん！」と男は言つた。

そんな夜ふけに、不思議な場所で、その見も知らぬ男から、マドレーヌという名をふいに言われたので、ジャン・ヴァルジャンは思わずあとにさがった。

彼は何でも予期してはいたが、そのことばかりは全く思いがけないことだった。彼にそう言った男は腰の曲がつた跛の老人で、ほぼ百姓のような着物をきて、左の膝ひざに皮の膝当てをつけ、そこはかなり大きな鈴をぶら下げていた。その顔は影になっていて見分けられなかった。

そのうちに老人は帽子をぬいで、震えながら叫んだ。

「まあ、マドレーヌさん、どうしてここへきなすった？ いったいどこからおはいりなすった？ 天から降ってでもきなすったかね。そうそう、あなたが降ってきなさるなら、天からに違いない。そしてまたその様子は！ 襟えり飾りも、帽子も、上衣も着ていなさらない。知らない人だったら魂消たまげてしまいますよ。まあこの節は聖者たちも何と妙なことをなさることやら。だがまあどうしてここへおはいりなすったかね。」

その言葉は引き続いて出てきた。田舎者いなかものの早口で少しも不安を与うるものではなかった。ただ質朴な正直さと呆然ぼうぜん自失との入り交じった調子だった。

「君はだれですか、そしてこれはどういう家ですか。」とジャン・ヴァルジャンは尋ねた。

「まあ何ということだ！」と老人は叫んだ。「私はあなたからここに入れてもらった男で、この家はあなたが私を入れて下さった所ですよ。ええ私がおわかりになりませんか。」

「わからない。」とジャン・ヴァルジャンは言った。「どうして君は私を知ってるんです。」

「あなたは私の生命いのちを助けて下さった。」と男は言った。

男は向きを変えた。月の光が彼の横顔を照らし出した。そしてジャン・ヴァルジャンはフォーシユルヴァン老人を見て取った。

「ああ、君だったか。」とジャン・ヴァルジャンは言った。「なるほど思い出した。」

「それで安堵あんどしましたよ！」と老人は恨むような調子で言った。

「そしてここで何をしてるんです。」とジャン・ヴァルジャンは尋ねた。

「なあに、瓜うりを囲うってやってるんですよ。」

ジャン・ヴァルジャンが近寄ってきた時、フォーシユルヴァン老人は實際手に防寒ぼうかんこも菰もものはじを持っていて、それを瓜うり畑はたけの上にひろげてる所だった。彼は一時間ばかり前から庭に出ていて、既に多くの菰ももをひろげてしまっていた。ジャン・ヴァルジャンが物置きの中からながめた彼の変な動作は、そういうことをしてるためだった。

彼は続けて言った。

「私は考えたんですよ。月はいいし、霜はおりるだろう、どれひとつ瓜に外套がいうとうをきせてやろうかつて。」そして彼はジャン・ヴァルジャンを見て高く笑いながらつけ加えた。

「あなたにもそうしてあげなければいけませんかな。だがいったいどうしてここにきなすつたかね。」

ジャン・ヴァルジャンは、今自分はこの男から知られている、少なくともマドレーヌという名前で知られている、ということを感じて、こんどは用心してしか話を進めなかった。彼は種々なことを尋ねてみた。不思議にも役割が変わってしまったかのようなだった。今や尋ねかけるのはちんにゆうしや闖入者なる彼の方であつた。

「いったい君が膝ひざにつけてる鈴は何かね。」

「これですか、」とフォーシュルヴァンは答えた、「これは人がよけるようにつけてるんですよ。」

「なんだって、人がよけるように？」
フォーシュルヴァン老人は妙な瞬まばたきをした。

「なにね、この家には女ばかりきりいないんです。大勢の若い娘さんたちですよ。私と顔

を合わすのがけんのん險呑だと見えましてね、鈴で知らしてやるんですよ。私が行くと、皆逃げていきます。」

「これはどういう家かね。」

「ええ！ 御存じでしょうがね。」

「いや、知らないんだ。」

「私をここの庭番に世話して下すつてながら！」

「まあ何にも知らないものとして教えてくれ。」

「それじゃあね、プティー・ピクプスの修道院ですよ。」

ジャン・ヴァルジャンは思い出した。偶然にも、言い換えれば天意によつて、彼はまさしくサン・タントアーヌ街区のその修道院に投げ込まれたのだった。そこには、車から落ちて不具になったフォーシユルヴァン老人が、彼の推薦で二年前から雇われていた。ジャン・ヴァルジャンはひとりごと独語のように繰り返した。

「プティー・ピクプスの修道院！」

「そうですよ。だがいったい、」とフォーシユルヴァンは言った、「マドレーヌさん、あなたは どうしてここにおはいりなすつたかね。あなたは聖者には違いないが、それでも男

なんで、そしてここには男はいつさい入れないんですがね。」

「君もここにいないじゃないか。」

「私だけですよ。」

「それにしても私はここに置いてもらわなければならないんだ。」とジャン・ヴァルジャンは言った。

「それはどうも！」とフォーシユルヴァンは叫んだ。

ジャン・ヴァルジャンは老人に近寄つて、重々しい声で彼に言った。

「フォーシユルヴァン爺さん、私は君の生命を助けたんだ。」

「それはもう私から最初に申したことですよ。」とフォーシユルヴァンは答えた。

「それでは、昔私が君にしてやったとおりのことを、今日は君が私のためにしてくれることができるのだ。」

フォーシユルヴァンはそのしわよつた震える手のうちにジャン・ヴァルジャンの頑がんじよ丈うな両手を握りしめ、口もきけないようにしばらく無言で立っていた。そしてついに叫んだ。

「おう、少しでも御恩報じができれば、それは神様のお引き合わせです。私があなたの生

命を助ける！ ああ市長さん、何なりとこの爺におつしやって下さい！」

美しい喜びが、その老人の姿を一変さしたようだった。その顔からは光がさしてるかのように思われた。

「いったい何をせよとおつしやるんですかね。」と彼は言った。

「それは今に言う。だが君は室^{へや}を持つてゐるかね。」

「向こうに一軒建ての小屋を持っています。こわれた元の修道院の後ろで、だれの目にもかからぬ引つ込んだ所ですよ。室は三つあります。」

なるほどその小屋は、廃屋の後ろに隠れていて、だれの目にもつかないようになっている。で、ジャン・ヴァルジャンは気づかなかつたのである。

「よろしい。」ジャン・ヴァルジャンは言った。「では君に二つの頼みがある。」

「何ですな、市長さん。」

「第一には、君が私の身上について知つてゐることをだれにも言わないということ。第二には、これ以上何も聞きただそうとしないこと。」

「よろしいですとも。私はあなたが決して間違つたことはなさらぬのを知っていますし、あなたはいつも正しい信仰の方だったのを知っています。それからまた、私をここに入れ

て下すつたのもあなたです。あなたのお考えのままです。私は何でもします。」

「それでいい。では私といっしょにきてくれ。子供を連れに行くんだから。」

「へえ、子供がおりますか！」とフォーシウルヴァンは言った。

彼はそれ以上一言も言わなかった。そして犬が主人の後ろに従うようにジャン・ヴァルジャンのあとについていった。

それから三十分とたたないうちに、コゼットは盛んな火に当たってまた血色がよくなり、老庭番の寢床の中に眠っていた。ジャン・ヴァルジャンは元どおり襟えり飾かざりをつけ上衣を着ていた。壁越しに投げ込まれた帽子も見つけて拾ってきた。ジャン・ヴァルジャンが上衣を引つ掛けている間に、フォーシウルヴァンがはずした鈴のついた膝ひざ当ては、もう負いかごのそばの釘くぎに掛けられて壁を飾っていた。二人の男はテーブルに肘ひじをついて火にあたった。テーブルの上にはフォーシウルヴァンの手で、チーズの一切れと黒パンとぶどう酒の一びんとコップ二つとが並べられていた。そして老人はジャン・ヴァルジャンの膝に手を置いて言っていた。

「ああ、マドレーヌさん、あなたは私がすぐにはわかりませんでしたな。あなたは人の生いのち命めいを助けておいて、その人を忘れてしまいなさる。それはよろしくありません。助けられ

た者は皆あなたを覚えています。があなたは、まあ恩知らずですな！」

十 ジャヴエルの失敗の理由

今までいわばその裏面を見てきたとも言える以上のでき事は、きわめて簡単な事情の下に起こったのである。

ジャン・ヴァルジャンが、ファンティーヌの死んでいる寝台のそばでジャヴエルに捕えられたその日の夜、モントルイユ・スュール・メールの市の牢屋ろうやを脱走した時、警察の方では、その脱走囚徒はパリーの方へ走つたに違いないと想像した。パリーは実にすべてをのみつくす大きな渦巻うずまきで、一度そこに陥ればすべてのものが、海の渦巻きに吸われるごとく世の渦巻うずまきの中に姿を消してしまう。いかなる大森林といえども、人を隠すことその大群集に及ぶものはない。各種の逃亡人はそのことを知っている。彼らはあたかも呑嚙どんぜいの淵ふちに身を投ずるがごとくにパリーへ行く。そこには彼らをかばってくれる深淵しんえんがある。警察の方でもそれを知っていて、他で取り逃がした者をいつもパリーでさがすのである。で警察はモントルイユ・スュール・メールの前市長をもそこでさがした。ジャヴエルは

その搜索の便宜のためにパリーへ呼ばれた。果して彼は、ジャン・ヴァルジャンの捕縛に多大の力となった。彼の熱心と知力とはそのおりに、アングレー伯の下に警視總監秘書をしていたシャブーイエ氏の認むるところとなった。その上シャブーイエ氏は前からジャヴェルに目をかけてやっていたので、モントリュユ・スール・メールの警視から彼をパリ―警察付きに**抜擢**^{ばつてき}した。パリーで彼は各方面に働いて、かかる職務について言うのはいささか変ではあるが、はなはだ名誉ある技量を示した。

彼はもうジャン・ヴァルジャンのことは忘れていた。絶えず獲物をあさっているそれらの獵犬は、今日の狼おおかみのために昨日の狼を忘れるものである。ところが一八二三年十二月のある日ジャヴェルは一つの新聞を読んだ。彼は平素は少しも新聞なんか読まなかったのであるが、王党だったので、「総司令官大公」のバイヨンヌへの凱旋がいせんの詳細を知りたいと思ったのである。そしてその記事をおもしろく読み終わった時、ページの下の方にある一つの名前が、ジャン・ヴァルジャンという名前が、彼の注意をひいた。新聞の伝えるところによると、囚徒ジャン・ヴァルジャンは死んだというのであって、しかもその事件は明瞭な文句をもって書かれていたので、ジャヴェルも何ら疑念を起さなかった。彼はただ一言言った、「うまくいった。」それから彼は新聞を投げすてて、再びそのことを念頭に

しなかった。

それからしばらくたつて次のことが起こつた。モンフェルメイユ村において不思議な事情の下に行なわれたという子供誘拐ゆうかいに關し、セーヌ・エ・オアーズ県からパリーの警視庁へ警察事項の報告が到来した。報告によれば、その地のある旅館主へ母親が託していつた七、八歳の少女が、一人の見知らぬ男から盗まれたというのである。少女の呼び名はコゼットといい、ファンティーヌという女の児であつて、ファンティーヌは病院で死んでゐたが、それがいつのことで、どこであつたかは不明だというのである。その報告がジャヴエルの目に触れた。そして彼は考え初めた。

ファンティーヌという名前を彼はよく知つていた。ジャン・ヴァルジャンがその子供を連れ戻しに行くために三日の猶予を乞うて失笑せしめたことを、彼は思い出した。ジャン・ヴァルジャンがパリーでモンフェルメイユ行きの馬車に乗った所を捕えられたことを、彼は思い起こした。またある事情を考え合わせてみると、ジャン・ヴァルジャンがその馬車に乗つたのは二度目のことであつて、既に彼は前日、その村には姿を現わさなかつたが、その付近に、第一回の旅をしたのであることが想像されてゐた。彼はそのモンフェルメイユの田舎に何をしに行つたのか？ それはついに不明に終わつてゐた。しかし今やジャヴ

エルはそれを了解した。ファンティーヌの娘がそこにいたのである。ジャン・ヴァルジャンはその娘をさがしに行つたのである。しかるにこんどはその娘がある見知らぬ男から盗まれたという。いったいその見知らぬ男とはだれだったのか？ ジャン・ヴァルジャンであつたろうか。しかしジャン・ヴァルジャンは死んでいた。——ジャヴェルはだれにも何とも言わずに、プランセツト袋町のプラ・デタンの駅馬車に乗り、モンフェルメイユに行つてみた。

そこで彼は大なる光明を得るつもりだったが、かえつて大なる暗やみを得た。

最初のうちテナルディエ夫婦は、憤慨して盛んにしやべり回つた。アルーエツトがいなくなつたことは村中の評判となつた。すぐに種々な噂が立てられた。そして結局、子供が盗まれたということに帰着した。それでついに警察の報告となつたのである。そのうちに、初めの憤懣の情が過ぎ去ると、テナルディエはそのみごとに本能によつてすぐに目を開いた。検察官をわずらわすのは決して自分の利益にはならない、それからまた、コゼツト誘拐に関する苦情は、その第一の結果として、自分一身と自分の多くの後ろ暗い仕事の上に法官の慧眼を向けさせることになるだろう。梟がきらう第一のことは、蠟燭の光をさしつけられることである。それにまず、受け取つた千五百フランのことをどうして言

い開いたらよいか。で彼はにわかに考え直して、女房の口をもつぐませ、盗まれた子供のことを言われるとびつくりしたような様子をした。自分には何にもわからないのだ。もとより大事な娘があんなに早く「持ってゆかれた」ことを初めは苦情も言った。愛情の上からせめてもう二、三日は引きとどめても置きたかった。けれども娘を連れにきたのは、その「お祖父^{じい}さん」で至って当然なことだった。彼はそのお祖父さんということをつけ加えたので、結果は至ってよかった。ジャヴェルがモンフェルメイユにきてぶつつかったのはそういう話であつた。お祖父さんという一語はジャン・ヴァルジャンなる者を消滅させたのである。

それでもジャヴェルは、測^{おも}深^{もり}錘^りのように二、三の質問をテナルデイエの話のうちに投げ込んでみた。「そのお祖父さんというのはどんな人で、何という名前だったか？」それに対してテナルデイエは無造作に答えた。「金持ちの百姓です。通行券も見ました。何でもギーヨーム・ランベールという名だったと思います。」

ランベールというのは正直者らしい信用できそうな名前だった。ジャヴェルはパリーへ帰ってきた。

「あのジャン・ヴァルジャンはまさしく死んでいる。」と彼は自ら言った。「俺^{おれ}はばかを

みた。」

彼はまたその事がらを忘れ初めた。ところが一八二四年の三月になって、サン・メダール教区内に住んでいて「施しをする乞食こじき」と綽名あだなされてる不思議な男のことを、彼は耳にした。人の話によれば、その男は年金を持つており、本当の名前はだれにもわからず、八歳ばかりの少女と二人きりで暮らしてゐる由で、また少女の方も、モンフェルメイユからきたというだけで、その他は何一つ知つていないそうだった。モンフェルメイユ！ その名がいつも出て来るので、ジャヴェルは耳をそばだてた。そしてまた、その男からいつも施しを受けてゐる元寺男で今は間諜かんちょうになつてゐる乞食こじきの爺さんじいが、更にやや詳しい話をもたらしした。「その年金所有者はきわめて不愛想である、晩にしか外に出ない、だれにも話しかけない、時々貧しい者に言葉をかけるきりである。人を身近によせつけない。なお、きたならしい黄色い古フロックを着ているが、それには紙幣がいっぱい縫い込まれていて数百万の値打ちがある。」その最後の点が強くジャヴェルの好奇心をそそつた。それで、その不思議な年金所有者をひそかに間近く見るために、彼はある日、間諜かんちょうの老寺男が毎晩うずくまつて祈禱きとうの文句を鼻声でくり返しながら人をうかがつてゐる場所と、その古ぼけたぼろとを借りうけた。

果してその「怪しい男」は、姿を変えたジャヴェルの方へやってきて施しをした。その瞬間にジャヴェルは顔を上げた。そして、ジャン・ヴァルジャンがジャヴェルの面影を認めて慄然りっぜんとしたのと同じ気持ちをも、ジャン・ヴァルジャンの面影を認めたジャヴェルも感じた。

けれども暗がりのことではあるし、あるいは見違いかも知れなかった。ジャン・ヴァルジャンの死は公然のこととなっていた。疑問が、重大な疑問が、ジャヴェルの頭に残された。細心なジャヴェルは、疑問のままその男の首に手をかけることをしなかった。

彼はその男のあとをゴルボー屋敷までつけて行って、それから「婆さん」に口を開かせようとした。それは別に困難なことではなかった。婆さんは彼に、百万フランの裏のついたフロツクのことは本当だと断言し、千フラン紙幣の話をした。彼女はそれを実際見たのだ！ 手を触れたのだ！ でジャヴェルは一室を借りた。その晩からすぐにはいり込んだ。彼はその不思議な借家人の声の調子を聞き取ろうと思つて、扉の所で立ち聞きをした。けれどもジャン・ヴァルジャンは鍵穴かぎあなから蠟燭ろうそくの光を見て取つて、口をつぐんで探偵たんていの鋒先ほこさきをくじいた。

翌日ジャン・ヴァルジャンは立ちのいた。しかし彼が床に落とした五フラン銀貨の響き

は婆さんの注意をひいた。婆さんは金の音をきいて、彼がそこを去るつもりでいるんだと考え、急いでジャヴェルに知らせた。夜になってジャン・ヴァルジャンが出かけた時、ジャヴェルは二人の手下とともに大通りの並み木の陰に待ちうけていた。

ジャヴェルは警視庁に助力を求めたのだが、捕縛しようと思ってる男の名前は明かさなかった。彼はそれを自分だけの秘密にしておいた。それには三つの理由があった。第一、少しでも不注意なことをすればジャン・ヴァルジャンに警戒の念を与えるかも知れなかった。第二、死んだと言われている脱走老囚徒、法廷の記録によって最も危険なる種類の悪人と前から定められている罪人、それを取り押さえることは非常な成功であつて、パリ警察の古参の者らがジャヴェルのような新参者にそれを任しておくはずはなく、彼は自分の囚人が他人の手に奪われはしないかを恐れた。第三、ジャヴェルは一人の芸術家で、人に意外の感を与えることを好んだ。前から噂うわさの高い新奇な味を失った成功を彼は好まなかった。暗い所で傑作を仕上げて、それから突然それを明るみに持ち出すことを欲したのである。

ジャヴェルはジャン・ヴァルジャンのあとをつけて、木から木へ、街路のすみからすみを伝つて、瞬時もその姿を見失わなかった。ジャン・ヴァルジャンがもう大丈夫だと思つ

た時でさえ、ジャヴェルの目は彼の上にすえられていた。

なぜジャヴェルはすぐにジャン・ヴァルジャンを取り押さえなかったか？ それはまだ疑問があつたからである。

ここに記憶すべきは、当時警察は意のままの行動を取り得なかったことである。言論の自由のために妨げられていたのである。専断な捕縛は新聞に摘発されて議会の問題とまでなつたことがあるので、警視庁の方では臆病になつていた。個人の自由を害することは重大な問題だつた。警官らは見当を誤ることを恐れていた。総監は責任を彼ら自身に負わしていた。錯誤はすなわち免職をきたすのだつた。次のような小記事が二十種の新聞に掲載されたとしたら、パリーのうちにいかなる反響を起こすだろうかを想像してみるがいい。

「昨日、年金を有する尊重すべき白髪のお紳士が、八歳の孫を連れて散歩しつつあつた際、脱走囚徒として捕縛されて留置場へ収監せられた。」

その上になお繰り返して言えば、ジャヴェルには細心なところがあつた。自分の内心の注意が総監の注意に加えられたわけである。彼は実際疑念をいだいていた。

ジャン・ヴァルジャンは彼の方へ背を向けて、暗やみの中を歩いていった。

悲しみ、不安、心配、落胆、夜中に逃げ出してコゼットと自分との隠れ家をパリーのう

ちに当てもなくさがさねばならないという新たな不幸、子供の歩調に自分の歩調を合わせねばならぬ必要、すべてそれらのことは、知らず知らずジャン・ヴァルジャンの歩き方を变化させ彼の様子に老衰の趣を加えていたので、ジャヴェルのうちに具現していた警察も見当を誤るほどで、また実際見当を誤ったのである。あまりそばに寄ってゆくことのできない事情、亡命老家庭教師のようなその服装、彼を娘の祖父だと断言したテナルディエの言葉、また徒刑場で死んだとされている定説、それらのことはなおいつそうジャヴェルの脳裏の疑念を深めていた。

ある時には、突然出て行つて身元証明の書類を求めてみようかとも彼は考えた。しかし、もしジャン・ヴァルジャンでなかったとしたら、あるいは年金所有の正直な老人でなかったとしたら、おそらくその男は、他の能力を隠すために特に施与をしているのであつて、パリーの種々の隠密な悪事のあやのうちに深く賢く立ち交じっている悪漢であり、危険な仲間の首領であり、^{かんち}奸知にたけた老人であるに違いない。手下や仲間の者があり、予備の住居があり、きつとその中に逃げ込むに違いない。方々の街路をぐるぐる回つてるところを見ても、尋常のじいさんとは思われない。あまり早く手を下すことは、「黄金の卵を生む牝^{めんどり}鶏を殺す」のと同じである。しばらく待つたとて何の不都合があろう。もう取り逃

がすことはないと言はつていた。

それで彼はやや迷つて、その謎の^{なぞ}のような人物に種々の疑問をかけながら、なおあとをつけていった。

ところがかなり時期おくれではあつたが、ポントアーズ街を通りかかった時、ある居酒屋からさしていた明るい光によつて、彼はまさしくジャン・ヴァルジャンの姿を見て取つた。

世には最も深い喜びにおどりがる者が二つある。自分の子にめぐり会つた母親と、餌^え食^{じき}に再会した虎^{とら}とである。ジャヴエルはそういう深い喜びにおどりがつた。

彼は恐るべき囚徒ジャン・ヴァルジャンの姿を確実に見て取るや、自分の方は三人にすぎないことを気づいた。そして、ポントアーズ街の警察派出所に助力を求めた。刺^{とげ}ある棒をつかむ者はまず手袋をはめる。

その間の遅延と、警官らと相談するためにロランの四つ辻^{つじ}に立ち止まつた時間とで、彼は危うく獲物の足跡を見失いかけた。けれども、ジャン・ヴァルジャンは追跡者を川でへだてようとするに違いないと、彼はすぐに推察した。あたかも獵犬が鼻を地につけて道をかぎわけるように、彼は頭を傾けて考えた。そしてまっすぐな本能の力によつて、すぐに

オーステルリッツ橋の方へ行つた。橋番へ一言尋ねてみて事実をとらえた。「小さい娘を連れた男を見なかったか。」「その男に二スー払わしてやりましたよ、」と橋番は答えた。橋の上にさしかかると、ちょうどジャン・ヴァルジャンがコゼットの手を引いて月に照らされた空地あきちを通るのが、川の向こう側に見えた。そしてシユマン・ヴェール・サン・タントアーヌ街へはいつてゆく姿も見えた。彼はそこに罫わなを張ったようになってるあつらえ向きのジャンロー袋町のことを考え、ピクプユス小路へ通ずるドロア・ムユール街のただ一つの出口のことを考えた。獵人らの言うように彼は取り巻いた。その出口を見張るために警官の一人を他の道から急いでつかわした。造兵廠ぞうへいしょうの屯所とんじょにもどる一隊の巡邏兵じゅんらへいが通つたので、それを頼んで引きつれた。そういうカルタ遊びには兵士は切札きりふだなのである。その上、野猪いのししをやつつけるには獵人の知力と獵犬の力とを要するのが原則である。それだけの準備をしておけば、もうジャン・ヴァルジャンも袋の鼠ねずみで、右へ行けばジャンローの行き止まりであり、左へ行けば手下の警官がおり、後ろには自分が控えている、そう思つてジャヴェルはかぎ煙草を一服した。

それから彼は狩り出しにかかった。それは残酷な狂喜の時間であつた。彼は獲物を進むままにさしておいた。もう自分の手中のものであることを知つていた。しかし捕獲の時間

をできるだけ長引かしたかった。自分の捕えたものがなお自由に動き回ってるのを見ることがおもしろかった。巢にかかった蠅はえの飛ぶのを見て喜ぶ蜘蛛くものような目つきで、また捕えた鼠ねずみを走らして喜ぶ猫ねこのような目つきで、彼は獲物をうかがっていた。獲物をつかむ爪そ牙うがは奇怪な快感を持っている。それはつかんだ獲物の盲目的な運動を感じることである。そのなぶり殺しはいかにもおもしろいことであるか！

ジャヴェルは楽しんでいた。網の目は堅固に結んであった。彼は成功を信じていた。今もう手を握りしめることだけであつた。

彼の方には大丈夫な手下がついているので、ジャン・ヴァルジャンがいかに勇氣あり力あり死にもの狂いになったとて、抵抗しようなどとは思ひもよらぬことだった。

ジャヴェルは徐々に進んで行つた。あたかも盗人のポケットを一々探るように、その街路のすみずみを隈なく探りながら進んだ。

ところがその蜘蛛くもの巣のまんなかまで行くと、そこにはもう蠅はえはかかつていなかった。彼の憤激は察するに余りある。

彼はドロア・ムニール街とピクプユス小路との角かどを番していた警官に尋ねてみた。警官は泰然自若としてその場所に立っていたが、あの男が通るのは見かけもしなかったのでは

る。

時としては鹿^{しか}もその包まれた頭をふりもぎることがある、言いかえれば、一群の猟犬に追いつめられても逃げてしまうことがある。そういう時には最も老巧な猟人といえども一言もない。デュヴィヴィエやりニヴィールやデプレスのごとき名人でさえ、いかんともすることができない。そういう失敗のうちにアルトンジュは叫んだのである、「あれは鹿ではない、魔法使いだ。」

ジャヴェルも同様な嘆声をもらしたかも知れない。

彼は落胆の余り一時は絶望と狂暴とに駆られたほどであった。

確かに、ナポレオンはロシアの戦いに違算をし、アレクサンデルはインドの戦いに違算をし、シーザーはアフリカの戦いに違算をし、キルスはシチアの戦いに違算をし、そして、ジャヴェルはこのジャン・ヴァルジャンに対する戦いに違算をした。おそらくその前徒刑囚を認定するに躊躇^{ちゆうちよ}したのが誤りであつたろう。一目見ただけで彼には十分ではなかつたろうか。それからまた、ゴルボー屋敷でごく簡単に捕縛しなかつたのが誤りだつた。ポントアーズ街で確実にそれと認めた時すぐに逮捕しなかつたのが誤りだつた。ロラン四つ辻^{つじ}の月光の中で助力の者らと相談をしたのが誤りだつた。もちろん種々の意見は助けに

なる、そして信用の置ける犬どもの意見を尋ねてそれを知るのはいいことである。しかし狼だの囚人などという落ち着かない動物を狩り立てる場合には、獵人たる者は注意の上にも注意をしなければいけない。ジャヴェルは一群の獵犬に方向を教えることばかり注意して、獲物に様子を気取られ逃げられてしまった。それからことに、オーステルリツ橋で足跡を見いだすや、そういう男を一筋の糸の先につけてばかげた他愛ない戯れなどをしたのが誤りだった。彼は自分の力を過信して、獅子ししに向つて鼠ねずみに対するような戯れをし得ると思つた。同時にまた彼は自分の力をあまり過小視して、援兵を引きつれることが必要だと思つた。その用心こそ破綻はたんの基で、そのために大切な時間を失つたのである。ジャヴェルは以上の種々な違算をした。しかしそれでもなお、世に最も賢明確実な探偵たんていの一人たることを失わない。最も深い意味において彼は、狩獵にいわゆる賢い犬であつた。しかしおよそ完全なるものは何があろうぞ。

偉大なる戰略家といえども策を誤ることがある。

大失策も、大きな綱のように、多くの小片から成り立つてることがしばしばである。錨いかりづなをもこれを一筋一筋の糸に分かち、大事をもこれを小さな成分成分に分かつ時には、その一つ一つを切つてゆくことは容易であつて、なんだこれだけのものか！ という感じ

を与える。しかるにそれを組み合わせ、それをいっしょにねじ合わせると、巨大なものができる。かくして、アツチラは東方マルキアヌス皇帝と西方バレンチニアヌス皇帝との間に躊躇^{ちゆうちよ}し、ハンニバルはカプアに足を止め、ダントンはアルシ・スүүл・オーブに眠ったのである。

それはともかくとして、ジャン・ヴァルジャンが自分の手中からもれたことを知った時にも、ジャヴエルは錯乱しはしなかった。網を破つて逃げたその囚徒はまだ遠くに行つてゐるはずはないと信じて、彼は番人を置き、罫^{わな}と伏兵とを設け、終夜その一郭を狩り立てた。第一に彼の目についたものは、綱を切られて街燈が乱れてることであつた。それは大切な手がかりだつた。しかしそのために彼はかえつて誤られて、すべての搜索をジャンロー袋町の方へそらした。その袋町にはかなり低い壁が幾つもあつて、庭に接しており、庭の囲いは広い荒地に接していた。ジャン・ヴァルジャンは確かにそこから逃げ出したに違いないと思われた。そして実際、彼も少しジャンロー袋町のうちにはいり込んで行つたら、きつとそのとおりにして、ついに捕えられたであらう。ジャヴエルはそれらの庭と荒地とを、針でもさがすように隈なく探索した。

夜が明くるにおよんで、彼は伶俐^{れいり}な二人の手下を残して見張りをさせ、あたかも盗人に

捕えられた
間^{かん}
諜^{ちよう}
の
ように恥じ入って、
警視庁へ引き上げた。

第六編 プテイー・ピクプユス

一 ピクプユス小路六十二番地

ピクプユス小路六十二番地にある正門は、約半世紀以前には最も普通なものであった。その門はいつも人の心を誘うように半ば開かれていて、さほど陰気でない二つのものがそこから見えていた、すなわち、葡萄蔓ぶどうづるのからみついた壁に取り巻かれてる中庭と、ぶらついてる門番の顔とが。奥の壁の上方には大きな樹木が見えていた。太陽の光が中庭を輝やかし、酒の気が門番の顔を輝やかしてゐる時には、このピクプユス小路六十二番地の前を通る者は、快い感銘を受けざるを得なかった。しかもそこは読者が既に瞥見べっけんしたとおり実は陰鬱いんうつな場所であつた。

入り口はほほえんでいた。しかし中は祈つており泣いていた。

うまく策略をめぐらして——それは容易なことではないが——門番の所を通りすぎて——それには例の胡麻よ開け！ の合い言葉（訳者注 アラビアのアリー・ババの物語参照）を知らなければならぬのではとんど不可能のことではあるが——それから、一度に二人とは通れないくらいの壁の間の狭い階段に通じてる右手の小さな玄関にはいり、その階段の暗^{あんかつしよく}褐色の下壁と淡黄色の壁色とを気味悪がらず上ってゆき、階段の広段を二度過ぎると、二階の廊下に出るのであった。そこは黄色い塗り壁と暗^{あんかつしよく}褐色の腰板とで深い静けさを作っていた。階段と廊下とは二つのりっぱな窓から明りがとってあった。廊下は折れ曲がって、先の方は薄暗くなっていた。その角^{かど}を曲がって数歩行くと、一つの扉^{とびら}があった。扉はしめ切つてないだけにいつそう不思議な感を与えていた。扉を押し開いてはいると、約六尺ばかりの四角な小さな室^{へや}に出られた。室には下に石が敷いてあり、よく洗われていて、清潔で、冷ややかで、青花のついた一卷十五スーの南京紙が壁に張ってあった。鈍いほの白い光が左手の大きな窓からはいつていた。窓は室と同じ幅で、小さなガラスがいくつもはまっていた。室の中には見回してもだれもいなかった。耳を澄ましても足音もしなければ人声もしなかった。壁には何も掛かつてはいず、家具も備えてなく、椅子一つさえ置いてなかった。

なおよく見回すと、扉と向き合った壁に一尺ばかりの四角な穴があった。真つ黒な節くれ立って丈夫な鉄の棒が縦横にはまっていて、小さなガラス枠わく、というよりもむしろ対角線の長さ一寸五分ばかりの網目をこしらえていた。壁に張つてある南京紙なんきんしの小さな花模様てつこうしが、その鉄格子に静かに整然と接していたが、それでも花模様てつこうしのなごやかな様子は少しも乱されてはいなかった。鉄格子の目からはどんな小さな生物もあえて出はいりできそうにも思えなかった。何だか物体の出入を許さないような趣があった。しかし目ならば、すなわち精神ならば、自由に出入を許すらしかった。また恐らくそういうつもりでこしらえられたのであろう。鉄格子の少し先にブリキ板が壁にはめ込んであつて、泡匙の穴よりもっと小さな穴が無数にあげられていた。そのブリキ板の下の方には、郵便箱の口にそっくりの穴が開いていた。呼び鈴のついた平ひもが、鉄格子口の右の方に下がっていた。

そのひもを動かすと、鈴が鳴つて、びっくりするほどすぐそばに人の声がする。

「どなたですか？」とその声は尋ねる。

それは静かな女の声で、あまり静かなので悲しげに響くほどだった。

そこでお、魔法的な合言葉の一つ知っていなければならなかった。もしそれを知らない、声は黙つてしまつて、壁の向こうには墓場のすごい暗黒がたたえてるかと思われ

るほどひっそりしてしまふのである。

もしその合い言葉を知っていると、向こうの声が答える。

「右の方へおはいりなさい。」

窓と向い合つて右手の方に、ガラスのはまった天窓がついてる灰色塗りのガラス戸があった。^{かきがね}をあげて扉を開き、中にはいると、まだ格子戸^{こうしど}がおろされず大ランプがともされてない劇場の箱^{はこ}棧敷^{せきじき}にはいったのと同じ印象を受けるのだった。それは実際一種の劇場の棧敷で、ガラス戸から弱い明るみがほのかにさしており、二つの古椅子^{ふるいす}と編み目の解けた一枚の蓆^{こも}とが狭い中に置いてあり、^{ひじ}肱の高さの前の口には黒木の板がついていた。そしてまた格子もあつたが、ただそれだけはオペラ座のように金びかの木の格子ではなく、握^{こぶし}り拳のような漆喰^{しっくい}で壁に止めてある恐ろしい鉄格子だった。

ややあつて、その^{あなぐら}窖のような薄明りに目がなれてきて、格子の向こうを透かして見ようとしても、五、六寸より先は見えなかった。五、六寸先に、茶っぽい黄色に塗られた横木で固められてる黒い板戸の^{かき}垣があつた。薄い長片をなしてるそれらの板戸はきつかり合わさつていて、格子の幅だけを全部おおい隠していた。それはいつも立て切つてあつた。

しばらくすると、その板戸の後ろから呼びかけてくる声が聞こえる。

「私はここにおります。何の御用でございますか。」

それはかわいい女の声、時とすると愛する女の声であつた。けれどもだれの姿も見えなかつた。息の音さえもほとんど聞こえなかつた。墳墓のような仕切りを通して話しかける天の声かとも思われるのだつた。

もし先方の望みどおりの身分の人である時には、そういう身分の人はきわめてまれではあるが、正面に板戸の狭い一枚が開いて、その天啓は本体の出現となるのであつた。格子こうしの向こうに、更に板戸の向こうに、格子の目からようやく一つの顔が見えてくる。それ
もただ脣とくちびるあごとだけで、残りは黒い面紗かおぎぬにおおわれている。それから黒い胸当てと、黒い衣に包まれたぼんやりした姿とが見て取られる。その顔が話しかけてるのであつた。しかしこちらを見もしなければ、また決して微笑ほほえみもしなかつた。

後ろからさして来る明るみは、向こうの姿を白く見せ、こちらの姿を向こうに黒く見せるようにしつらえてあつた。その明るみは一つの象徴シンボルであつた。

そのうちに目は、前に開かれた窓口から、すべての人の目に閉ざされてるその場所の中へ熱心にのぞき込んでゆく。ある朦朧もうろうとした深さが黒服の女の姿を包んでいる。目はその朦朧とした中をさがし求めて、出現した女のまわりにあるものを見きわめようとする。

すると間もなく、実は何も見ていなかったことに気づくのであった。見ていたものは、夜であり、空虚であり、暗黒であり、墓地の空気に交じった冬の靄^{もや}であり、恐るべき一種の平安さであり、何ものをも呼吸^{いきね}の音をさえも聞き得ない静謐^{せいひつ}であり、何物をも幻の姿をさえも見得ない暗黒であつた。

見ていたところのものは、修道院の内部だつたのである。

それは実に、常住礼拝のベルナール派修道女の修道院と言われる陰惨嚴格なる家の内部だつたのである。今いるその室^{へや}は、応接室だつた。先刻初めに話しかけてくれたあの声は、受付の女の声だつた。彼女は壁の向こうに、四角な穴のそばに、二重の面をかぶつたように鉄の格子^{こうし}とたくさんの穴のあるブリキ板とにへだてられて、黙つて身動きもしないでいつもすわつてゐるのだつた。

表の方に窓が一つあつて、修道院の内部の方には窓がなかったので、格子のついたその室は薄暗い後ろ明りだつた。その聖^{きよ}い場所の中にあるものは、何物も俗人の目から見られてはいけなかつた。

けれども、その影の向こうには何かがあつたのである。一つの光明があつたのである。その死の影の中には一つの生命があつたのである。その女修道院は最も世人を避けたもの

ではあつたけれども、われわれはこれからその中にはいり込み、読者をもその中に導いて、まだかつていかなる物語作者も見なかったことのないものを、従つてまだかつて語られたことのないものを、度を越えない範囲において語つてみようと思う。

二 マルタン・ヴェルガの末院

ずっと以前から引き続いて一八二四年までなおピクプス小路にあつたその修道院は、マルタン・ヴェルガの分派であるベルナール派修道女らのものであつた。

従つてそれらのベルナール派修道女らは、ベルナール派修道士らのごとくクレールヴォーへ属してゐるのではなく、ベネディクト派修道士らのごとくシトーに属してゐた。いい換えれば、彼女らは聖ベルナールへではなく、聖ベネディクトへ帰依してゐるのであつた。

少しく古文書を読んだことのある者はだれでも知つてゐるとおり、一四二五年にマルタン・ヴェルガは、ベルナール派修道女とベネディクト派修道女とのために一つの修道会を興し、本院をサラマンカに置き、支院をアルカラに立てた。

その修道会は、欧州の各カトリック教国内に末院を立ててゐた。

かく一派を他派につぎ合わせたものは、ローマ教会においては珍しいものではない。ここに言う聖ベネディクトの一派だけを取ってみても、それに関係のあるものは、マルタン・ヴェルガの分派のほかになお四つの修道会があった。イタリーにモンテ・カシノとパデュアのサンタ・ジオステイナとの二つ、フランスにクリュニーとサン・モールとの二つ。それからまた九つの宗派があった、すなわち、ヴァロンブロザ、グラモン、セレスタン団、カマルデユール団、シャルトルー団、ユミリエ団、オリヴァートル団、シルヴェストラン団、およびシトー。なぜならシトーもまた、他の宗派の基でありながら、聖ベネディクトに対しては一つの分枝にすぎなかったのである。シトー派は、一〇九八年にラングル教区のモレーム修道院長であった聖ロベールから起こったものである。しかるに、あのスビアクの沙漠に隠退していた悪魔が（實際年老いていたので、隠者となつたのかも知れない）古のアポロンの寺院の住居から、当時十七歳の聖ベネディクトに追い払われたのは、五二九年のことであつた。

いつも跣足で歩いて首に柳籠はだしやなぎかごをつけ決してすわることをしないカルメル山の修道女らの規則に次いで、最も厳格な規則は、マルタン・ヴェルガのベルナル・ベネディクト修道女らのそれである。彼女らは黒い着物をつけて、胸当てをしているが、その胸は聖ベ

ネデイクトの特別な命によつて、^{あじ}の所まで上せてある。広袖^{ひろそで}のセルの上衣、毛糸の大きな面紗^{かおぎぬ}、胸の上に四角に截^たたれて、まできてる胸当て、目の所まで下つてる頭被、そういうのが彼女らの服装である。すべて黒であるがただ頭被だけは白である。修練女は同じ着物のまっ白なのをつけている。誓願修道女はなおそのほかに大念珠^{わき}を脇につけている。マルタン・ヴェルガのベルナル・ベネデイクト修道女らは、いわゆるサン・サクルマンの女たちというベネデイクト修道女らのように、常住礼拝を実行するのである。後者は今世紀の初めに、タンブルに一つとヌーヴ・サント・ジュヌヴィエーヴ街に一つとの二つの建物をパリーに持っていた。けれどもここに述べるプティー・ピクプユスのベルナル・ベネデイクトの女たちは、ヌーヴ・サント・ジュヌヴィエーヴ街やタンブルなどの修道院にはいつてゐるサン・サクルマンの女たちとは、全く別な一派であつた。規則にも多くの違いがあり、服装にも多くの違いがあつた。前者は黒い胸当てをつけていた。後者は白の胸当てをつけた上になお、鍍金^{めつき}の銀か鍍金の銅かの高さ三寸ばかりの聖体を胸につけていた。前者はその聖体をつけていなかった。常住礼拝は両者共通であつたが、それでも両者は全く別々のものだつた。サン・サクルマンの女たちとマルタン・ヴェルガの女たちとの間の似たところは、ただ常住礼拝を実行するという点のみだつた。あたかも、フィリッ

プ・ド・ネリによつてフロレンスに建てられたイタリーのオラトアール派と、ピエール・ド・ベリユールによつてパリーに建てられたフランスのオラトアール派とが、イエス・キリストの降誕と生しょうがい涯がいと死と聖母とに關するすべての神秘の研究崇拜において似寄つていながら、なお非常に違つていて、時としては敵とまでなるのと同じであつた。フィリツプ・ド・ネリは一個の聖者のみであり、ベリユールは枢機官であつたから、パリーのオラトアール派はいつも上位を主張していた。

さてマルタン・ヴェルガのスペインふうの嚴重な規則に立ち戻つてみよう。

この分院のベルナール・ベネディクト修道女らは、一年中少しの粗食しか取らず、四旬節および彼女らに特別な他の多くの日に断食をし、毎日寸眠の後に午前の一時から三時まで起き上がつて日課の祈きと禱とう書をよみ朝の祈きと禱とうを歌い、四季ともに藁わらのふとんの上にセルの毛布にくるまつて寝、決して湯にはいらず、決して火をたかず、毎金曜日には苦行をし、沈黙の規定を守り、ごく短い休息の間にしか口をきかず、十字架せんよう擡よう記念日である九月十四日から復活祭まで六カ月の間荒毛のシャツを着る。その六カ月間というのは一つの軽減であつて、規則には一年中となつてゐる。けれども、荒毛のシャツは夏の炎熱にはどうしていたえられないものであつて、熱病や神経痛などを起こすことがあつたので、その使用

に少し制限を加えねばならなかったのである。しかしその軽減をもつてしても、修道女らが九月十四日にそのシャツを着る時には、三、四日は熱を出すのが常である。服従、困窮、貞節、囲壁中の永住、それが彼女らの誓いであつて、またそれは規則によつていつそう重くなされている。

修道院長は、集会で発言権を有するので声の母と言われる長老らによつて、三年間の期限で選挙される。院長は二度の再選を受け得るのみであつて、そのために一院長の最長年限は九年となるのである。

彼女らは決して男の祭司の姿を見ない。男の祭司はいつも、七尺の高さに張られてるセールの幕で隠されている。説教の時に、その礼拝堂の中に男の説教師がいる時には、彼女らは面紗かおぎぬを顔の上に引き下げる。それからいつも低い声で話し、目を伏せ頭をたれて歩かなければならない。その修道院の中に自由にはいり得るただ一人の男性は、教区の長の大司教ばかりである。

否そのほかにも一人いる。すなわち庭番である。けれどもそれは常に老人であつて、また絶えず庭に一人きりであるために、そして修道女らがそれと知つて避けるようにするために、膝ひざに一つの鈴がつけられている。

彼女らは絶対的盲従をもつて院長の命に服する。それはあらゆる克己をもつてする聖典的服従である。すなわち、キリストの声に対するがごとく、その身振りその最初の合い図において、直ちに幸福と堅忍とある盲従とをもつて、職人の手のうちにある鑪ろのごとく、であり、またいかなるものも特別なる許しあるに非ざればこれを読みもしくは書くことを得ざるなり、である。

彼女らは各自順番に、彼女らのいわゆる贖罪をなす。贖罪しよくざいというのは、あらゆる悪、あらゆる過失、あらゆる放肆ほうし、あらゆる違犯、あらゆる不正、あらゆる罪惡、すべて地上において犯さるるものに対する祈りである。午後の四時から午前の四時まで、あるいは午前の四時から午後の四時まで、引き続いて十二時間の間、贖罪を行なう修道女は両手を合わせ、繩を首にかけ、聖体の前に石の上にひざまずいている。疲労にたえなくなる時には、腕を十字に組み顔を床ゆかにつけて、腹ばいに平伏する。それが唯一の緩和である。そういう姿勢で、世のあらゆる罪人のために彼女は祈る。それは実に莊嚴とも言えるほどに偉大である。

かかることが、上に大蠟燭ろうそくの一本ともっている柱の前で行なわれる時、全く区別なくあるいは贖罪をなすとも言われあるいは柱に就つくとも言われる。けれども第二の言い方は、

苦行と卑下との意味を多く含んでいるので、修道女らが謙讓の心からして好んで口にするところのものである。

贖罪をなすことは、全心をこめた一つの勤めである。柱に就いた修道女は、背後に雷が落ちようともふり返りもしない。

そのほかになお、聖体の前には常にひざまずいている修道女が一人いる。その時間は一時間としてある。彼女らは上番する兵士のように規律正しく交代する。そこに常住礼拝がある。

院長や長老たちは、たいていきまって特に重々しい響きの名前を持っている。それは聖者や殉教者らに関連した名前ではないが、イエス・キリストの生しょうがい涯がいの各時期に関連したもので、たとえば、ナティヴィテ長老（降誕）、コンセプション長老（受胎）、プレザンタシオン長老（奉獻）、パッション長老（受難）などのように。けれども、聖者にちなんだ名前も禁じられてるのではない。

修道女らに会う時には、ただその口だけしか見られない。皆黄色い歯をしている。決して楊枝ようじはこの修道院に入れない。歯を磨くことは滅落の淵に臨むことである。

彼女らは何物に対しても私のという言葉を使わない。自分のものというものは何もなく、

また何物にも執着してはいけないのである。彼女らはすべてを私どものという。私どもの面紗、私どもの念珠。自分の着ているシャツのことも私どものシャツと言うに違いない。時としては、祈祷書だの遺物だの聖牌だの何かちよつとしたものに愛着することがある。けれどもそれに愛着し初めたことを気づいた時には、直ちにそれを捨てなければならぬ。彼女らは聖テレサの言葉を記憶していた。ある貴婦人が聖テレサの修道会にはいる時に、「私がごく大事にしています聖書を家に取りにやることを許して下さいませ、」と言った時、聖テレサは答えた。「あああなたは何かを大事にしていらつしやるのですか。それならば私どもの仲間におはいり下さいませな。」

閉じこもること、そして自分の所を持ち自分の室を持つこと、それはすべての者に禁じられている。彼女らはうち開いた分房にはいつている。互いに出会う時には、一人が言う「祭壇の聖体に頌讃しょうさんと礼拝とがありますよう。」すると、も一人は答える、「永遠に。」また一人が他の者の分房を訪れる時にも、同じようなあいさつをする。扉とびらに人の手が触れると、向こうから急いで言われるやさしい声が聞こえる、「永遠に!」。あらゆる実際の仕事と同じく、それも習慣のために機械的になっている。そして一人がかなり長い「祭壇の聖体に頌讃と礼拝とがありますよう」を言ってしまううちに、も一人のが

「永遠に」を言うことも時々ある。

訪問会の修道女の間では、訪れて来る者は「アヴェ・マリア」と言い、訪れを受ける者は「グラティア・ブレナ」と言う（訳者注 両者合して、めでたしマリアよ恵まるる者よ云々の祈祷）。それが彼女らの「今日は」であって、実際「恵まれたる」今日はである。

各時間には、修道院の会堂の時の鐘に加えて三つ補助の鐘が鳴らされる。それを合い図にして、院長も、声の母も、誓願女も、助修道女も、修練女も、志願女も、一様に話をやめ仕事をやめ考えをやめて、皆同時にきまりの祈りを言う。たとえば五時であると「五時にまたそれぞれの時間に、祭壇の聖体に頌讃と礼拝とがありますように！」八時であると「八時にまたそれぞれの時間に云々。」そういうふうに各時間に従って言うのである。

自分の考えをやめて常に神を思わせるのを目的としたこの習慣は、他の多くの修道会にもある。ただその言葉は種々違っている。たとえばアンファン・ゼジュ会では言う、「ただ今の時間にまたそれぞれの時間に、イエスの愛は私の心をあたため下さいますように！」今より五十年前にプティー・ピクプスの修道院にいたマルタン・ヴェルガのベネディクト・ベルナールの修道女らは、重々しい聖詩唱歌の調子で、純粋な平音楽で、そしていつも勤めの間引き続いたいっぱいの声で、すべての祭式を歌っていた。弥撒^{ミサ}の書に星印が

ある所では、ちよつと歌をやめて「イエス・マリア・ヨセフ」と低音に言う。死人の祭式には、女声の最低の音で歌うので、いかにも悲痛な効果をきたす。

プティー・ピクプユスの修道女らは、会員の墓として主祭壇の下に^{あなぐら}窖を持っていた。けれども彼女らのいわゆる政府は、その窖へ^{ひつぎ}柩を入れることを禁じていた。それゆえ死ぬ時には寺から出て行かねばならないので、彼女らはそれを苦にし、罪惡のようにそれを恐れていた。

彼女らは、それもつまらぬ慰安ではあるが、昔彼女らの会の所有地であつた古いヴォージラールの墓地に、一定の時間に一定の片すみに埋められることを許されていた。

木曜日に彼女らは、日曜日と同じに大弥撒や^{ゆうとう}夕^{ゆうとう}祷やいろんな祭式を聞くようになってゐる。なおその他に、教会が昔フランスにふりまき今日でもスペインやイタリーにふりまいてゐるあらゆる小さな祭典で、世間の人のほとんど知らぬようなもので、彼女らは注意深く実行する。また彼女らが礼拝堂に列する間の時間は非常に長いものである。その祈祷の数と時間については、ここに彼女らの一人の無邪気な言葉を引用したら最もよくわかるだろう。「志願女の祈祷は恐ろしいもので、修練女の祈祷はなお大変なもので、誓願女の祈祷はいつそう大変なものです。」

一週に一度集会が催される。院長が会長となり、声の母たちがそれに立ち会う。各修道女は順次に石の上に行つてひざまずき、その週間のうちに犯した過失や罪を皆の前で高い声で懺悔する。各懺悔の後に声の母たちは相談をして、公然と苦業を課する。

少し重い過失は皆それを高声の懺悔に取つておくが、なおそのほかに軽い過失に対しては、彼女らのいわゆる報罪というのがある。報罪をなすには、祭式の間院長の前に腹ばいに平伏して、いつもわれらの母と呼ばれるその院長が、自分の椅子いすの板を軽くたたいて、もう立ち上がった後もよいと知らせるまでそうしていなければならぬ。ごく些細なことに報罪をなすのである。コップをこわしたこと、面紗かおぎぬを破いたこと、ふと祭式に数秒おくれたこと、会堂でちよつと音符をまちがえたことなど、それだけでも報罪をしなければならぬ。報罪は全く自発的のもので罪ある者自ら自分を裁きさば自分にそれを課するのである（報罪の *coupe* と罪ある者の *coupable* は同じ語原である）。祭典の日や日曜には、四人の歌唱の母たちが、四つの譜面台のついで大きな机の前で祭式を歌う。ある日一人の歌唱の長老が、エツケ（ここに）の語で初まつてゐる賛歌を、エツケの代わりにド、シ、ソという三つの音符を大声に言つて、その不注意のために祭式の間じゅう報罪を受けたことがある。その過失を特に大きくしたわけは、会衆がそれを笑つたからであつた。

修道女が応接室に呼ばれる時には、それがたとい院長であろうと、前に述べたとおり、口だけしか見えないようにかおぎぬ面紗を顔の上に引き下げる。

院長だけが他人に言葉を交じうることを許されている。他の者はごく近親の者にしか会うことができなくて、それもまたきわめてまれにしか許されない。もしふいに俗世の者がやってきて、俗世において知り合いであつたかまたは愛したかした一人の修道女に会うことを求める時には種々の交渉が必要である。それが女である場合には、時としては許可されることもある。修道女はやってきて板戸越しに話をする。板戸は母かまたは姉妹にしか開かれない。男には決して面会を許されないのは言うまでもないことである。

上のようなのがすなわち、マルタン・ヴェルガによつていつそうおごそかにされた聖ベネディクトの規則である。

それらの修道女は、他の会派の人たちが往々あるように、快活で健やかで顔色がいいなどということは決してない。彼女らは青白くまた重々しい。一八二五年から一八三〇年までのうちに、狂人になつた者が三人ある。

三 謹厳

この会にはいった女は、少なくとも二年間は、多くは四年間、志願女であつて、それからまた四年間は修練女の地位にとどまる。最後の誓願が、二十三、四年たたないうちになさることはきわめてまれである。マルタン・ヴェルガのベルナル・ベネディクト修道会は、決して寡婦を加入せしめない。

彼女らは各自の分房の中で多くのひそかな苦業を行なう。それは決して人に語つてはいけないものである。

修練女が誓願式を行なう日には、皆で最も美しい服をつけてやり、白薔薇しろばらの帽をかぶらせ、髪をつや出しして束ねてやり、それから彼女は平伏する。皆は彼女の上に大きな黒い面紗かおぎぬを広げて、死者の祭式を歌う。その時修道女らは二列に分かれる。一つの列は彼女のすぐそばを通つて、「われらの姉妹は死せり」と悲しい調子で言い、他の列は激しい声で、「イエス・キリストに生きぬ」と答える。

本書の物語が起こつた頃には、一つの寄宿舎がこの修道院に付属していた。大体金持ちの貴族の若い娘らの寄宿舎であつて、そのうちには、サント・オーレール嬢やベリサン嬢や、タルボーというカトリックで有名な名前を持つてゐるイギリス娘などがいた。それらの

若い娘らは、四方を壁に護^{まも}られて修道女らから育てられ、俗世と時勢とを恐れつつ大きくなっていた。その一人はある日こんなことを言った、「街路の舗石を見ますと、頭から足先まで震えます。」彼女らは青い服をつけ、白い帽子をかぶり、鍍金銀^{めつき}か銅かの聖霊メダルを胸につけていた。大祭典の日には、特に聖マルタの日には、修道女の服装をして、終日聖ベネディクトの祭式と勤^{ごんぎよう}行^{ぎやう}とをなすことが、非常な恩恵としてまた最上の幸福として許されていた。初めのうちは、修道女らがその黒服を彼女らに貸し与えていた。けれどもそれは神を流^{けが}すように思われたので、院長の禁^{きん}ずるところとなった。その貸与は修練女にしか許されなかった。注意すべきことには、それらの仮装は修道院の中でひそかな布教心によつて特に許され奨励されたものであつて、聖衣に対するある予備趣味を娘らに与えるためのものだったが、寄宿生らにとつては現実の幸福であり実際の楽しみであつた。彼女らはごく単純にそれを喜んでいた。それは新奇なものであつて、彼女らの心を変えさせた。子供心のいかにも無邪気な理由ではないか。それにしても、手に灌水^{かんすい}器を持ち、譜面机の前に四人ずつ立つて、数時間歌を歌うという幸福は、われわれ俗人の容易に理解し難いものである。

生徒らは苦業を除いて修道院のすべての勤めを守っていた。中には、世に還^{かえ}つて結婚し

た数年後まで、だれかが扉^{とびら}をたたきつたごとくに急いで「永遠に」と言う習慣を脱し得なかったような、そういう女もいた。修道女らのように、寄宿生らも近親の者に応接室でしか会えなかった。母親でさえ、彼女らを抱擁することは許されなかった。いかに厳格な規律が守られていたかは次のことを見てもわかる。ある日一人の若い寄宿生は、三歳の妹を連れた母親から訪れてこられた。彼女は泣いた。なぜなら、妹を抱擁したくてたまらなかったがそれもできなかったからである。せめて子供に格^{こうし}子から手を出さしてそれに脣^{くちびる}をつけることだけは許してもらえるように願った。がそれもほとんどしかるようにして拒絶された。

四 快活

それらの若い娘らは、それでもなおこの荘重な家のうちに多くのおもしろい思い出を残していった。

ある時には、この修道生活のうちに子供心がほとばしり出ることもあった。休憩の鐘が鳴る。扉^{とびら}はいつぱいに開かれる。鳥は言っている「うれしいこと、娘さんたちが来る！」

喪布のように十字の道がついてるその庭には、突然青春の気が満ちあふれる。輝かしい顔、白い額、楽しい光に満ちた潔い目、あらゆる曙がその暗黒の中にひらめく。賛美歌の後、鐘の鳴った後、鈴の鳴らされた後、喪鐘の後、祭式の後、そこに突然蜜蜂の羽音よりもおやさしい娘らの声がわき上がってくる。喜びの巢は開かれて、各自に蜜をもたらしにくる。嬉し、呼びかわし、いつしよにかたまり、走り出す。きれいなまっ白な小さな歯並みの脣が方々でさえずる。遠くから面紗がそれらの笑いを監視し、影がそれらの輝きをにらんでいるが、それにもかまわず皆輝き皆笑う。四方の陰鬱な壁もしばしは光り輝く。壁はそれら多くの喜悦を反映してほのかに白み、それらのやさしい蜜蜂の群れをながめている。それはあたかも喪中に降り注ぐ薔薇の花である。娘らは修道女の眼前で嬉戲する。森厳なる目つきも無邪気をわずらわすことはできない。それらの娘によっていかめしい時間の間にも無邪気な一瞬が現われる。小さい者は飛び、大きい者は踊る。この修道院のうちにあつては、嬉に天国が交じっている。それらの咲き誇ったみずみずしい魂ほど喜ばしくまた尊いものはない。ホメロスもペローとともにここに微笑むであろう。この暗黒の庭のうちには、あらゆる老婆の顔のしわをも伸ばすまでに青春と健康と騒ぎと叫びと忘我と快活と幸福とがあつて、叙事詩中の老婆も物語中の老婆も、宮廷のそれも茅屋の

それも、ヘクーバからがらようばあ鷺鳥婆さんまで（訳者注　イリヤッドと千一夜物語の中の老婆）をほほえませるものである。

常に多くの優美を持ちうつとりとした微笑を人に起こさせるあの子供の言葉は、おそらく他の所でよりも多くこの家の中で発せられる。この陰気な四壁の中で、五歳の女の児がある日叫んだのである。「お母様、私はもう九年と十月きりここにいないでいいと大きい方がおつしやいましたのよ。ほんとにうれしいこと！」

次の記憶すべき対話が行なわれたのもここである。

声の母——なぜあなたは泣いています。

子供（六歳、泣きながら）——私はアリクスさんにフランスの歴史を知っていると申しましたの。するとアリクスさんは私がそれを知らないとおつしやるんですもの、知っていますのに。

アリクス（大きい児、九歳）——いいえ、お知りになりませんわ。

声の母——なぜです？

アリクス——どこでも御本を開いて、中に書いてあることを尋ねてごらん遊ばせ、答えてあげますから、つておつしやいましたの？

——そして？

——お答えなさらなかったのです。

——であなたは何を尋ねました。

——おつしやつたとおりにある所を開きました。そして目についた第一番目の問いを尋ねました。

——どういう問いでした？

——それからどうなったか、つていうのでした。

また、ある寄宿生の持つてゐる多少美食家の鸚鵡おうむについて、次の深い観察がなされたのもここである。

「かわいいこと！ 大人のようにジャミパンの上皮だけを食べてゐるわ！」

七歳の娘の手で忘れないためにあらかじめ書き止められた次の罪の告白が拾われたのも、この修道院の舗石しきいしの上においてである。

天の父よ、私は貪欲どんよくでありましたことを自ら咎めとがまする。

天の父よ、私は姦淫かんいんでありましたことを自ら咎めとがまする。

天の父よ、私は男の方へ目を上げましたことを自ら咎めする。

四、五歳の青い目の子供が聞いた次の話が、六歳の薔薇色ばらいろの口から即席に作られたもの、この庭の芝生しばふの上においてである。

「三羽の小さな鶏が、花のたくさん咲いた国を持っていました。鶏は花を摘んで隠しに入れました。それから葉を摘んで玩具おもちゃの中に入れました。その国に一匹の狼おおかみがおりました。森がたくさんありました。狼は森の中おおかみにいました。そして狼は小さな鶏たちを食べてしまいました。」

それからなお次のような詩も作られたのである。

棒で一つたたきました。

猫ねこをたたいたのはポリシネルでした。

そのため善いことよは起こらず悪いことが起こりました。

そこで奥様がポリシネルを牢屋ろうやに入れました。

修道院で引き取って慈善のために育てていた一人の捨て児の口から、次のようなやさしいまた痛ましい言葉が発せられたのも、ここにおいてである。彼女は他の子供たちが母親のことを話すのをきいて、片すみでつぶやいたのである。

「私が生まれた時はお母様はいらっしゃらなかった。」

いつも鍵かぎの束を持って廊下を歩き回つてゐる肥った受付の女が一人いた。アガト修道女という名前であつた。十歳から上の大姉さまたちは、彼女のことをアガトクレス（訳者注 シラキユーズの暴君）と呼んでいた。

食堂は長方形の大きな室で、迫持せりもちくりがた形のついた庭と同じ高さの大歩廊から明りがはいるのみで、薄暗くじめじめしていて、子供らが言つてるとおりに、虫がいっぱひいた。周囲から虫が集まつてきていた。それで寄宿生らの間では、そのすみずみに特別なおもしろい名前をつけていた。蜘蛛くもの隅すみ、青虫の隅、草鞋虫わらしむしの隅、蟋蟀こおろぎの隅などがあつた。蟋蟀の隅は料理場のそばで、ごくとうとばれていた。他の隅すみほどそこは寒くなかつた。それらの名前は食堂から寄宿舎の方まで持つてこられて、昔のマザランの四国民大学のように、それで区別されていた。各生徒は食事の時にすわる食堂のすみずみに従つて、四国民の何れか一つに属していた。ある日大司教が巡視にきて、ちょうど見回つていた室へやに、み

ごとな金髪を持った顔色の美しいきれいな小娘がはいつて来るのを見て、自分のそばに
るみずみずしい頬ほおをした美しい褐色かつしよくの髪かみの寄宿生に尋ねた。

「あの子は何ですか。」

「蜘蛛くもでございます。」

「なあに！　ではあちらのは？」

「蟋蟀こおろぎでございます。」

「では向こうのは？」

「青虫でございます。」

「なるほど、そしてお前さんは？」

「私は草鞋虫わらじむしでございます。」

この種の家にはそれぞれ特殊なことがあるものである。十九世紀の初めにはエクーアン
市もまた、ほとんど尊い影のうちに少女らが育つてゆく優しい厳重な場所の一つであつた。
エクーアンでは、聖体祭の行列に並ぶのに、処女派と花派とを区別していた。それからま
た「天蓋派てんがい」と「香炉派」というのもあつて、前者は天蓋のひもを持ち、後者は聖体の
香をたくのだった。花はまさしく花派の受け持ちだった。四人の「処女」が一番先に進ん

だ。その晴れの日の朝になると、しばしば寢室でこんなふうに尋ねる声が聞かれた。

「どなたが処女でございましょう。」

カンパン夫人は七歳の「妹」が十六歳の「姉」に言った次の言葉を引用している。その時妹の方は行列の後ろの方にいたが、姉の方は行列の先頭にいたのである。「あなたは処女でございますわね。私は処女でございせんものよ。」

五 気晴らし

食堂の扉とびらの上の方に、人をまつすぐに天国に導くためのものであつて純白なる主の祈りと称せらるる次の祈きとう祷が、黒い大字で書かれていた。

「いみじき純白なる主の祈り、神自ら作りたまひ、神自ら唱えたまひ、神自ら天国に置きたまひしもの。夕に床に就つかんとする時、三人の天使わが床に寝やすみいたり。一人は裾すそに二人は枕まくら辺べにありて、中央に聖母マリアありぬ。マリアわれに曰のたまいけるは、寝いねよ、ためろうなかれと。恵み深き神はわが父、恵み深き聖母はわが母、三人の使徒はわが兄弟、三人の童貞女おとめはわが姉妹。神の産衣うぶぎにわが身体は包まれてあり、聖マルグリットの十字はわ

が胸に書かれたり。聖母は神を嘆きて野に出で、聖ヨハネに会いぬ。聖ヨハネよいずこよりにきたれるか？ われはアヴェ・サルスよりきたりぬ。さらば爾^{なんじ}は神を見ざりしか？ 神は十字の木の上に居たまいぬ、足をたれ手を釘^つけられ、白き荊棘^{いばら}の小さき冠を頭にかぶりにて居たまいぬ。夕に之を三度唱え朝にこれを三度唱うる者は、終^{つい}に天国に至らん。」

この特殊な祈祷は一八二七年には、三度重ねて塗られた胡粉^{ごこん}のために壁から消えてしまっていた。当時の若い娘らも今はもはや年老いて、それを忘れてしまっていることだろう。

壁に釘^{くぎ}付けにされた大きな十字架像が、食堂の装飾を補っていた。食堂のただ一つの扉^{とびら}は前に述べたと思うが、庭の方に開いていた。木の腰掛けが両側についてる狭いテーブルが二つ、食堂の一方から他の端まで二列の長い平行線に置かれていた。壁は白く、テーブルは黒かった。それらの二つの喪色のみが、修道院に許される唯一の色彩である。食事は粗末なもので、子供の食べるものでさえ嚴重だった。肉と野菜を交ぜたものかまたは塩肴^{さかな}かの一皿、それでさえ御馳走^{ごちそう}だった。そして寄宿生だけのその簡単な常食も、実は例外なものだった。子供らは週番の長老の監視の下に黙って食事をした。もしだれか規則に反して口を開こうものなら、長老は木の書物を開いたり閉じたりして大きな音を立てた。けれどもそういう沈黙は、十字架像の足下に設けてある小さな机の講壇で聖者らの伝記が大声

に読まれることで、いくらか助かるのだった。それを読む者は、その週の当番の大きい生徒であつた。むき出しのテーブルの上に所々陶器の鉢はちが置いてあつて、その中で生徒らは自ら自分の皿や食器を洗つた。時とすると、堅い肉やいたんだ肴など食い残しのものをそれに投げ込むこともあつた。そうするといつも罰せられた。それらの鉢は水盤と言われていた。

沈黙を破つて口をきいた者は「舌の苦業」をなすのであつた。床ゆかになすのであつて、すなわち舗石しきいしをなめるのである。あらゆる喜びの最後のものたる埃ほこりは、薔薇ばらのあわれな小さな花卉さえずにして罫さえずりの罪を犯したものを、懲らしむるの役目を帯びていたのである。

修道院のうちには、ただ一部だけ印刷されていて読むことを禁じられてる書物が一つあつた。それは聖ベネディクトの規則の本である。俗人の目がのぞいてはいけなない奥殿である。われらの規則おきてあるいは制度さだめを他国の人に通ぜんとする者あらざるべし。

寄宿生らはある日ようやくにしてその書物を盗み出した。そして皆で熱心に読み初めた。けれども見つけられることを恐れては急にそれを閉じたりして、何度も途中でとぎらした。生徒らはその非常な冒険からただつまらない楽しみを得たのみだった。若い男の子の罪に關するよく意味のわからない数ページが「一番おもしろかった」くらいのものである。

生徒らはやせた数本の果樹の立ち並んだ庭の道の中で遊んだ。監視がきびしく罰が重かつたにもかかわらず、果樹が風に揺られるような時には、青い林檎りんごや腐った杏子あんずや虫の食った梨なしなどを、ひそかに拾い取ることがあつた。ここに私は、今自分の目の前にある一つの手紙に語らしてみよう。この手紙は、今日ではパリーの最も優美な婦人の一人たる某公爵夫人が、以前その寄宿生であつた時、二十五年前に書いたものである。私は原文どおりに書き写してみよう。――「梨や林檎をできる限り隠しておきます。夕食をする前に面か紗おぎぬを寢床に置きに行く時、枕の下にそつと押し込んでおき、晩になって寢床の中で食べます。もしそれができない時は、廁かわやの中で食べます。」――そういうことが彼女らの最も強い楽しみであつた。

ある時、それもやはり大司教がこの修道院を訪れた時のことであつたが、有名なモンモランシー家に多少縁故のあるブーシャル嬢という若い娘が、一日の休暇を大司教に願つてみるから賭かけをしようと言ひ出した。かくも厳格な会派ではそれは異常なことだつた。賭は成り立つた。そして賭に加わつた者一人として、そんなことができようとは思つていなかった。ところがいいよその時になつて、大司教が寄宿生らの前を通る時に、仲間の者が名状すべからざるほど恐れてるなかをブーシャル嬢は列から離れて、そして言った。

「閣下、一日休みを下さいませ。」ブーシャル嬢は背が高く生々とした姿でこの上もなくかわいい薔薇色の顔つきをしていた。大司教のケラン氏はほほえんで言った。「一日とはまたどうしてです。三日でもいいでしょう。三日休みを上げましょう。」院長も差し出る力はなかった、大司教が言われたことであるから。修道院にとっては困まることであったが、寄宿舎にとっては愉快なことだった。その印象は想像してみてもわかるだろう。

このむずかしい修道院にも、外部の情熱の生活、芝居や小説めいたことまでが、いくらかはいり込むくらいの壁のすき間はあった。それを証明するために、次の確かな事実を一つ持ち出して簡単に述べてみよう。もとよりその事実が、本書の物語とは何らの関係もなく何らの連絡もないものである。それを語るのもただこの修道院のありさまを読者の頭によく映ぜしめんがためにほかならない。

そこで、この時代に、一人の不思議な女が修道院にいた。修道女ではなかったが、皆にごく尊敬されていて、アルベルティーヌ夫人と言われていた。多少気が変であること、世間には死んだことになってること、その二つを除いてはだれも彼女の身の上を知ってる者はなかった。またそれだけの話のうちには、あるりっぱな結婚のために必要な財産を整理するためだという意味があるんだとも、人は言っていた。

彼女は三十歳になるかならずで、髪は褐色^{かつしよく}で、かなりの美貌^{びぼう}で、大きな黒い目でぼんやり物をながめた。そしてほんとに見てるのかどうか疑わしかった。足で歩くというよりもむしろすべり歩いてるといふありさまだった。決して口はきかなかった。息をしてるかさえよくわからなかった。その小鼻は最期の息を引き取ったあとのように狭まって蒼^そ白^{うはく}だった。その手に触れると雪に触れるかのような感じがした。幽霊的な不思議な優美さをそなえていた。彼女がはいつてくると皆寒さを感じた。ある日、彼女が通るのを見て一人の修道女が言った。「あの人は死んでることになってるそうですよ。」すると、も一人のが答えた。「もう本当に死んでるのかも知れませんか。」

アルベルティ―ヌ夫人については、種々な話があった。彼女は寄宿生らの絶えざる好奇心の的であつた。礼拝堂に丸窓と言われる一つの座席があつた。一つの丸い壁口、すなわち一つの丸窓のついたその座席に、いつもアルベルティ―ヌ夫人はすわつて祭式に列した。彼女はたいていそこに一人ですわつていた。なぜなら、二階にあるその座席からは男の説教師や祭司などが見えるからだつた。男の牧師を見ることは修道女らには禁じられていたのである。ある日演壇には、高位の若い牧師が立っていた。それはローアン公爵であつて、貴族院議員であり、またレオン大侯と言つていた一八一五年には近衛騎兵の将校をしてた

ことがあり、後に枢機官となりブザンソンの大司教となつて一八三〇年に死んだ人である。そのローアン氏が初めてプティー・ピクプユスの修道院で説教をした時のことであつた。

アルベルティーヌ夫人は、平素は全く身動きもしないで深い落ち着きをもつて説教や祭式に列するのだつたが、その日ローアン氏を見るや半ば身を起こして、礼拝堂のひっそりした中で大声に言つた「まあ、オーギュスト！」会衆はみな驚いてふり返り、その説教師も目を上げて見た。しかしアルベルティーヌ夫人はもう不動の姿に返つていた。外部の世界の息吹^{いぶ}き、生命の輝き、その一つが一瞬間、火も消えて凍りついてゐる彼女の顔の上を通つたのである、そして次にまたすべては消え失せ、狂女はまた死骸^{しがい}となつてしまつた。

けれども右の二語は、修道院の中で口をきき得るすべての人たちの噂^{うわさ}の種となつた。そのまゝオーギュストという言葉のうちには、いかに多くのことがこもつていたことか、いかに多くの秘密がもらされたことか。ローアン氏の名は実際オーギュストであつた。ローアン氏を知つてるところを見ると、アルベルティーヌ夫人はごく上流の社会からきたに違ひなかつた。かくも高貴な人をあれほど親しく呼ぶところを見ると、彼女もまた上流の社会の高い地位にあつたに違ひなかつた。またローアン氏の「呼び名」を知つてるところを見ると、彼女は彼とある関係が、あるいは親戚関係かも知れないが、しかし確かに密接な

関係があるに違いなかった。

シヨアズールとセランという二人の至つて厳格な公爵夫人が、しばしばこの会を訪れてきた。きつと上流婦人の特権ではいつて来るのであるが、それをまた寄宿舎では非常に恐れていた。二人の老夫人が通る時には、あわれな若い娘らは皆震え上がつて目を伏せていた。

ローアン氏はまた自ら知らずして、寄宿生らの注意的となつていた。その頃彼は、司教職につく前にまず、パリー大司教の大助祭となつていた。そしてプティー・ピクプユスの修道女らの礼拝堂の祭式を唱えにやつて来ることは、彼の仕事のひとつとなつていた。若い幽閉の女らはだれも、セルの幕が掛かつてるために彼の姿を見ることはできなかったけれど、彼はやや細いやさしい声を持つていたので、彼女らはそれをやがて聞き覚えて、他の者の声と聞き分けることができるようになった。彼は近衛^{このえ}にはいつていたことがあるし、それからまた人の言うところによると、非常なおめかしやで、美しい栗色^{くりいろ}の髪を頭のまわりにみごとに縮らしているそうであるし、広い黒いりっぱなバンドをしめており、その教服は世に最も優雅にたたれているそうである。そして彼は十六、七歳の娘のあらゆる想像の的となつていた。

何ら外部の物音は、修道院の中まで達してこなかった。けれどもある年、笛の音が聞こえてきた。それは一事件だった。当時の寄宿生らは今もおそれを思い起こすだろう。

それはだれかが付近で奏する笛の音であった。今日ではもう遠く忘られている一つの歌曲をいつも奏していた。「わがゼチユルベよ、わが魂の上にきたり臨め。」そして日に二三回もそれが聞こえた。

若い娘たちは数時間それに聞きほれてることがあった。声の母たちは狼狽ろうばいした。神経は過敏になって、むやみと罰が課せられた。そういうことが数カ月続いた。寄宿生らは皆多少その見知らぬ音楽家に心を動かしていた。各自に自分をゼチユルベと夢想していた。笛の音はドロア・ムユール街の方から響いていた。笛をあれほど美妙に奏しているその「青年」、自ら気づかずにこれらすべての娘の魂を同時に奏しているその「青年」、彼の姿をたとい一瞬間でもながむることができ、垣間かいま見ることができ、瞥べっけん見することができ、ならば、彼女らはすべてを捨てて顧みず、すべてを冒し、すべてを試みたであろう。中には通用門からぬけ出して、ドロア・ムユール街に臨んだ四階の方まで上ってゆき、高窓からのぞこうとした者もあった。けれども、見ることはできなかった。そのうちの一人は、頭の上に手を差し伸ばして窓の格子こうしから外に出し、白いハンカチを打ち振りまでした。ま

たもつと大胆なまねをした者が二人あつた。彼女らは屋根の上までよじのぼり、危険を冒して、ついに首尾よく「青年」を見ることができた。ところがそれは、零落した盲目の老亡命者であつて、屋根裏の部屋で退屈まぎれに笛を吹いてるのだつた。

六 小修道院

このプティー・ピクプスの構内には、全く異なつた三つの建物があつた。修道女らが住んでゐる大きな修道院、生徒らが泊まつてゐる寄宿舎、それから小修道院と言われているところのもの。小修道院は庭のついた一連の長屋で、各種の会派のあらゆる老修道女がいつしよに住んでいて、革命のために破壊された修道生活の名残りなごりのものであつた。黒や灰色や白やあらゆる色の混合であつて、あらゆる組合あらゆる種類のものの会合であつた。もしこういう言葉の組み合わせが許されるならば、雑色修道院とも呼び得べきものであつた。

既に帝政の頃から、革命のために散乱して途方にくれてゐるあわれな修道女らは、ベネデクト・ベルナル派の建物のうちに身を置くことを許されたのである。政府は彼女らに

も少しの年金を与えた。プティー・ピクプユスの女たちは前から年金を喜んで受けていたのである。それは実におかしな混合体で、各自に自派の規則を守っていた。時とすると寄宿舎の生徒らは、大休みとして、彼女らを訪問することが許された。若い生徒らが、サン・バジル長老やサント・スコラスティック長老やジャコブ長老などのことを特に覚えていたのは、この訪問の結果である。

それらの避難修道女のうちの一人は、ほとんど自分の家に帰ってきたような観があった。それはサント・オール派の修道女で、その一派からただ一人生き残っていた者である。サント・オール派の昔の修道院は、十八世紀の初めには、後にマルタン・ヴェルガのベネディクト修道女らのものとなったプティー・ピクプユスの家にあつたのである。この聖き童貞女はごく貧しくて、自派のりっぱな服、緋色の肩衣のついた白の長衣を、ふだんに着られなかつたので、それを大事そうに小さな像に着せておいた。彼女はその像を慇懃に人に見せていたが、死ぬ時にそれを建物に遺贈した。かくて一八二四年には、このサント・オール派のものは一人の修道女きり残っていなかったが、今日ではもう一つの人形きり残っていない。

それらのりっぱな長老たちのほかに、たとえばアルベルティーヌ夫人のような世俗の老

女も数人、小修道院に隠退することを院長から許されていた。その中には、ボーフォール・ドーブル夫人だの、デュフレーヌ侯爵夫人などもいた。また一人の女は、身分が少しもわからなくて、鼻をかむ時に恐ろしい音を立てることだけ知られていた。寄宿舎の生徒らは彼女をヴァカルミニ夫人（訳者注　とどろき夫人の意）と呼んでいた。

一八二〇年か二一年ごろ、アントレピードという小さな定期編纂物^{へんさんぶつ}を当時編集していたジャンリー夫人が、プティー・ピクプユスの修道院の一室にはいりたいと願ってきた。オルレアン公の推薦があった。蜂^{はち}の巣をつついたような騒ぎになった。声の母たちは震え上がった。ジャンリー夫人は小説を書いたことがあったのである。けれども、自分はいれよりも小説をきらう者であると彼女は公言した。そしてまた自分は熱烈な信仰の境地に到達したのだと言った。神の助けと、またオルレアン公の助けとによって、彼女はそこにはいることができた。ところが七、八カ月たつと、庭に木陰がないという理由で出て行ってしまった。修道女らは大喜びをした。老年ではあったが彼女は、なお豎琴^{ハープ}をいつも弾じていて、それもきわめて巧みに弾じた。

出て行く時彼女は自分の分房に痕^{あと}を残していった。ジャンリー夫人は迷信家でまたラテン語学者であった。その二つのことは彼女の人がらにかなりいい趣を添えた。彼女が金銭

や宝石などを入れていた分房の小さな引き出しの内部に、次の五行のラテン語の詩がはりつけてあるのが今から数年前まで残っていた。それは黄色い紙に赤インキで彼女が自らしたためたもので、彼女に言わせると盗人を恐がらせる威力を持つてゐるものだそうである。

値異なる三つの身体、十字架の枝にかかる、

デイスマス、ジェスマス、中央にイエス・キリスト。

デイスマスは高きを求め、あわれジェスマスは低きを求む。

願わくは神よ、われらの生命いのちと財とを護まもりたまえ。

この詩を誦しょうする者は、その財を盗まるることなからむ。

六世紀頃のラテン語のその詩は、あのカルヴェールの丘でキリストとともに十字架につけられた二人の盗賊の名が、一般に信ぜられてるようにデイスマスおよびジェスタスと言うのであるか、あるいはこの詩のとおりにデイスマスおよびジェスマスというのであるかについて、問題をひき起こした。この詩の方の名前は、十八世紀にジェスタス子爵が自分はある悪党の後裔こうえいであると言った主張を裏切るものだった。それからまたこの詩にあるとせ

られた有利なまじないの威力は、オスピタリエ派の女らの信仰の一個条となっている。

この会堂は、大きい方の修道院と寄宿舎とを切り離すようなふうに建てられていたが、もとより寄宿舎と大きい修道院と小修道院とに共通のものであった。それからまた、街路に開いている検疫所みたいな一種の入り口から、一般の人もはいることが許されていた。けれども修道院の中に住んでる人たちには、決して外部の人の顔が見えないようにしつらえてあった。その会堂の歌唱の間^まは、ある大きな手につかまれてるようで、普通の会堂に見るように祭壇の続きとはなっていないで、祭司の右手の方に一種の広間あるいは一種の薄暗い窖^{あなぐら}をなすようなふうに折れ曲がっていた。またその広間は、前に述べたとおり高さ七尺の幕で閉ざされていた。幕の陰に木の椅子^{いす}の上に、歌唱の修道女らは左に寄宿生らは右に、助修道女や修練女らは奥に控えていた。それだけのことを想像しても、聖務に列するプティ・ピクプスの修道女らのありさまは多少わかるであろう。歌唱の間と呼ばれるその窖は、一つの廊下で修道院に通じていた。会堂内の明りは庭から採られていた。規則上沈黙を守らなければならないような祭式に修道女らが列する時は、立てたりねかしたりする椅子の腰木がぶつかる音で、一般の人はようやく彼女らの列席を知るのであった。

七 影の中の数人の映像

一八一九年から二五年まで六年の間、プティー・ピクプユスの修道院長は、教名をイノサント長老というブルムール嬢であった。聖ベネディクト会の聖者伝の著者であるマルグリット・ド・ブルムールの家の出であった。院長に再選されたのである。六十歳ばかりの背の低いふとった女で、前に引用した一寄宿生の手紙の言葉によれば「破甕やれがめのような声を出す」女だった。けれどすぐれた婦人で、修道院中でただ一人快活な女であって、そのために人から敬愛されていた。

イノサント長老は、会の大立者だった先祖のマルグリットの気質を受け継いでいた。文才があり、博識で、学者で、鑑識家で、歴史を愛好し、ラテン語を学んでおり、ギリシャ語をつめ込んでおり、ヘブライ語に達者で、ベネディクト修道女というよりもむしろベネディクト修道士と言ったふうな型タイプだった。

副修道院長は、シヌレス長老と言つて、ほとんど盲目的なスペイン人の老修道女だった。声の母たちのうちで重立つたのは次のような人たちだった。会計係りのサント・オノリーヌ長老、修練女長のサント・ジェルトリユード長老、副長のサント・アンジュ長老、御

納室係りのアンノンシアシオン長老、修道院中でただ一人の意地悪で看護係りのサン・ト
ーギュスタン長老、なお次には、みごとな声を持ったまだ若いサント・メチルド長老（ゴ
ーヴアン嬢）、フィーユ・デュー修道院やジゾールとマンニーとの間にあるトレゾール
修道院にいたことのあるデ・ザンジュ長老（ド・ルーエ嬢）、サン・ジョゼフ長老（ド・
コゴリユード嬢）、サント・アデライド長老（ド・ヴエルネ嬢）、ミゼリコルド長老
（苦業にたえ得なかったシフアント嬢）、コンパツシオン長老（規則に反して六十歳では
いつてきたきわめて金持ちのド・ラ・ミルティエール嬢）、プロヴィダンス長老（ド・ロ
ーディニエール嬢）、一八四七年に院長になったプレザンタシオン長老（ド・シガンザ嬢
）、それからまた、^{きちが}気狂いになったサント・セリーニユ長老（彫刻家セラツキの妹）、気
狂いになったサント・シャンタル長老（ド・スューゾン嬢）。

それからなお、最も美しい人たちの一人には、二十三歳の美人があつた。ブルボン島
の生まれで、ローズ騎士の^{こうえい}後裔で、俗世ではローズ嬢と言われ、修道院ではアツソンプ
シオン長老と言われていた。

サント・メチルド長老は、歌と歌唱隊とを統べる役目を持っていて、好んで寄宿生を採
用した。採用される者は、普通は一音階すなわち七人であつて、声と身体とのよく整った

十歳から十六歳までの者で、小さい者から大きい者と年齢の順に並べられて、立ちながら歌わせられた。それを見ると、若い娘らでできた野笛のようなありさまで、パン神の天使らでできてる生きた笛のような観があつた。

寄宿生らに最も好かれていた助修道女には次のような人々がいた。サント・ウーフラジ姉^し、サント・マルグリット姉、まだ幼いサント・マルト姉、いつも皆を笑わせる長い鼻を持ったサン・ミシエル姉。

修道女らは皆幼い生徒らにやさしかった。彼女らが嚴格であるのは、ただ自分自身に對してのみだった。火がたかれるのはただ寄宿舎の方だけだった。それから食物も、修道院の方に比べると寄宿舎の方が上等だった。その上に生徒らは種々な世話を受けた。ただ、生徒が修道女のそばを通つて話しかけてみても、修道女は決して返事をしなかつた。

そういう沈黙の規律は次のような結果をきたしていた。すなわち、修道院中において、言葉は人間から奪われて無生物に与えられていた。あるいは会堂の鐘が口をきき、あるいは庭番の鈴が口をきいた。受付の女のそばに置かれていて家中に響き渡る大きな音の出る鐘は、その種々の音で、一種の音響電信のような仕方だ、しなければならぬ實際的の仕事を知らせたり、必要に応じて某々の人を応接室に呼んだりした。各人および各仕事は、

皆それぞれきまつた音を持っていた。修道院長は一つと一つ、副院長は一つと二つ。六つと五つは課業。それで生徒らは決して教室にはいるということを言わないで、六つと五つに行くと言っていた。四つと四つはジャンリー夫人の音であった。その音はごくしばしば聞かれた。好意を持たない者らはそれを四つの悪魔と言っていた（訳者注 四つの悪魔とは大騒ぎという意味にもなる）。十と九つは大事件の合い図だった。大事件というのは壁の門の開くことであつて、その鉦のいっばいいた恐ろしい鉄の扉は大司教の前にしか決して開かれなかつたのである。

大司教と庭番とのほかは、前に言つたとおり、男はだれも修道院の内部にははいられなかつた。けれど寄宿生らはその他に二人の男を見たことがあつた。一人はバネス師という年老いた醜い教誨師であつて、それを皆は会堂の歌唱の間で格子越しに見ることを許されていた。も一人は図画の教師のアンシオー氏で、前に数行引用した一寄宿生の手紙の中ではアンシオ氏と呼ばれていて、恐ろしい佝僂の老人だと書かれている。

男の人選がすべていかにうまく行なわれてるかは、これでわかるであろう。そういうのがこの不思議な家のありさまであつた。

八 心の次に石

精神的の方面を大略述べた後に、その物質的^{すがた}の方面の象を少しく指摘することはむだではないだろう。また既に読者にはそれが多少わかつてるはずである。

プティー・ピクプユス・サン・タントアーンの修道院は、ポロンソー街とドロア・ムール街とピクプユス小路と、今はつぶれているが古い地図にはオーマレー街とのつていた小路とが、互いに交差して切り取った広い四角形のほとんど全部を占めていた。四つの街路はその四角形を溝^{みぞ}のように取り巻いていた。修道院は数個の建物と一つの庭とから成っていた。中心の建物はこれを全体として見れば、雑多な様式をつみ重ねたもので、上から見おろせば、地上に倒した絞首台とほとんど同じ形になっていた。絞首台の大柱は、ピクプユス小路とポロンソー街との中に含まるるドロア・ムール街の辺全体を占めており、その腕木は、鉄格子^{てつこうし}のある灰色の高いいかめしい正面であつて、ピクプユス小路を見おろしていた。六十二番地という標札のある正門はその端になっていた。この正面の約中央に、ほこりと灰とに白くなつた穹^{きゆう}窿^{りゆう}形の低い古門があつて、蜘蛛^{くも}が巣を張つており、開かれるのはただ日曜日ごとに一、二時間と、修道女の柩^{ひつぎ}が修道院から出るまれな場合だけ

だった。それが会堂への一般人の入り口であつた。絞首台の^{ひじ}肱に当たる所に、祭式の行なわれる四角な広間があつて、それを修道女らは特別室と呼んでいた。大柱に当たる所に、長老やその他の修道女の分房と修練女の室とがあつた。腕木に当たる所に、料理場と食堂とがあつて、それと背中合わせに大歩廊と会堂とがあつた。六十二番地の門をはいると、閉ざされてるオーマレー小路の^{かど}角に寄宿舎があつて、それは外からは見えなかった。四角形の残りの部分は庭になつていて、庭の地面にポロンソー街の地面よりもずっと低かつた。そのために壁は外部よりも内側の方がはるかに高かつた。庭は軽く中高になつていて、中央に一つの^{つきやま}築山があり、その上に円錐形をなして^{こずえ}梢のとがたりつばな^{もみ}樅の木が一本あつて、ちようど円^{まるたて}楯の^{やりう}槍受けの丸い中心から^{みぞ}溝が出てるように、そこから四つの大径が出ていた。そして八つの小径が各大径の間に二つずつ通つていた。それで庭がもし円形だつたら、道の幾何学的配置の図形は、ちようど輪の上に十字形が置かれたようなありさまになつたに違いない。道はみな庭の不規則な壁の所まで達しているので、その長さは一樣でなかつた。道の両側にはすぐりの木が立ち並んでいた。庭の奥には、大きな白楊樹の並んだ一筋の道が、ドロア・ムユール街の角にある古い修道院の廃屋から、オーマレー小路の^{かど}角にある小修道院まで通じていた。小修道院の前方には、小庭と言われてるものがあつ

た。それらの全体に加うるに、一つの中庭、中部の住家がこしらえてる種々な角、監獄の壁、ポロンソー街の向こう側にあつて近くにずっと見渡せる黒い長い屋根並みの一列、などをもつてする時には、今から四十五年前のプティー・ピクプユスのベルナル修道女らの住居のありさまが、だいたいわかるであろう。この聖^{きよ}い住居はまさしく、十四世紀から十六世紀へかけて有名だった一万一千の悪魔の庭球場と呼ばれるテニスコートの跡に、建てられていたのである。

なおそれらの街路は、パリーのうちでは最も古いものだった。ドロア・ムユールとかオームレーとかいう名前はきわめて古いものである。がそういう名前を持つてゐる街路はなおよつと古いものである。オームレー小路はもとモーグー小路と言われていた。そしてドロア・ムユール街（訳者注 垂直壁街の意）はエグランティエ街（訳者注 野薔薇街の意）と言われていた、それは人が石を切る前に神は花を咲かせられたからである。

九 僧衣に包まれし一世紀

われわれはプティー・ピクプユスの古^{いにしえ}のありさまを詳しく述べているのであるから、そ

して既にこの秘密な隠れ家の窓を一つ開いて中をのぞいたことであるから、なおここにも一つ枝葉の点を述べることを許していただきたい。これは本書の内容とは没交渉のものであるけれども、この修道院が独特な点を有することを了解せんがためには、きわめて特異な有効なものである。

小修道院に、フォントヴローの修道院からやってきた百歳ばかりの女が一人いた。彼女は革命以前には上流社会の人だった。ルイ十四世の下に掌璽官しょうじかんだったミロメニル氏のことや、親しく知っていたというあるデュプラーという議長夫人のことなどを、いつもよく話していた。あらゆる場合に右の二つの名前を持ち出すことは、彼女の楽しみでもあり見栄えでもあった。またフォントヴローの修道院に関して種々大げさなことを話していた、フォントヴローは大都市であるとか、修道院の中に多くの街路があるとかいうようなことを。彼女にはピカルデーのなまりがあった。寄宿生らはそれをおもしろがっていた。毎年彼女はおごそかに誓願をくり返した。そして誓言をなす時にはいつも牧師にこう言った。「サン・フランソア閣下はそれをサン・ジュリアン閣下にささげたまい、サン・ジュリアン閣下はそれをサン・ウーゼーブ閣下にささげたまい、サン・ウーゼーブ閣下はそれをサン・プロコープ閣下にささげたまい、云々云々、そして私はそれを、わが父よ、なんじに

ささげまする。」それで寄宿生らは、頭巾ずきんの下で（訳者注 ひそかに）ではないが、面紗ぬめの下で笑うのであった。かわいひい小さな忍び笑いであって、いつも声の母たちの眉まゆをしかめさした。

またある時は、この百歳の女は種々な話をしてきかした。私が若い頃にはベルナル修道士たちは近衛兵にも決してひけを取らなかった、というようなことを言った。そういう口をきくのは一世紀で、しかも十八世紀だったのである。またシャンパーニュとブルゴーニュとの四つの葡萄酒ぶどうしゅの風習のことも話した。革命以前には、ある高貴の人、たとえばフランス元帥だの、大侯だの、枢密院公爵だの、そういう人々がシャンパーニュやブルゴーニュのある町を通らるる時には、その町の団体の者がごきげん伺いにまかり出て、四種の葡萄酒をついだ四つの銀の盞さかずきを献ずるのであった。第一の盞には猿さるの葡萄酒という銘が刻んであり、第二のには獅子ししの葡萄酒、第三のには羊の葡萄酒、第四のには豚の葡萄酒という銘が刻んであった。その四つの銘は醪酏めいていの四段階を示したものであった。第一段の醪酏は人を愉快になし、第二段は人を怒りっぽくなし、第三段は人を遅鈍になし、第四段は人を愚昧ぐまいにする。

彼女は何か一つの秘密な物を引き出しの中に入れて、鍵かぎをかってごく大事にしまってい

た。フオートヴローの規則はそういうことを禁じなかったのである。彼女はその品をだれにも見せようとしなかった。自分でそれをながめようとする時には、室^{へや}に閉じこもって、それも規則に許されていたので、そして人の目にふれないようにした。もし廊下に足音が聞こえると、その年取った手でできるだけ大急ぎで引き出しをしめた。そのことを言い出そうものなら、ごくおしやべりな彼女も口をつぐんでしまった。いかにものずきな者も彼女の沈黙にはどうすることもできず、いかに執^{しつ}拗^{よう}な者も彼女の頑固^{がんこ}にはどうすることもできなかった。かくてその不思議な品物は、修道院中のひまで退屈しきつてゐる人たちの問題の的となった。百歳の老婆の宝となつてゐるそのとうとい秘密な物は、いったいどういうものだろう。きつと何かの聖書かも知れない、またとない何かの念珠かも知れない。折り紙のついた何かの遺品かも知れない。人々はあれかこれかと推測に迷つた。そのあわれな老婆が死ぬと、人々はあられもなく大急ぎで引き出しの所にかけて、それを開いてみた。するとその品物は、祭典の聖皿のように三重の布^{きれ}に包まれていた。大きな注射器を持った薬局生たちに追われて飛び去つてゆく愛の神たちの絵があるファエンツアの皿であつた。追跡者の方は種々な洗面をしたり種々なおかしな姿勢をしていた。かわいい小さな愛の神たちの一人は、既に注射器で貫かれていた。彼は身をもがき小さな翼を動かしてなお

飛ばうとしていたが、道化者の方は悪魔のような笑いを浮かべていた。絵の意味は、腹痛にうち負けた愛というのである。その皿は至つて珍しいもので、たぶんモリエールにあの喜劇の思いつきを一つ与えるの光榮を有したことであろう。一八四五年の九月にはなお残つていた。ボーマルシェー大通りのある古物商の店に売り物に出ていた。

このお婆さんは、外部からの訪問を受けるのを好まなかった。応接室があまり陰気だから、と彼女は言つていた。

十 常住礼拝の起原

おおよそのありさまを前に述べておいたこの墓場のような応接室は、全く独特なもので、他の修道院においてもこれほど嚴重には作られていなかった。実際これとは別な会派に属するものであるが、タンブル街の修道院においては特に、黒い板戸はかつしよく褐色の幕に代えられていた。そして床には木がゆか舗いてあつた。窓わくには白モスリンの布がやさしくかぶせてあり、壁には種々な額縁がかかつていて、面紗かおぎぬをかぶらないベネディクト修道女の肖像が一つ、花束の絵が数個、それからまたトルコ人の顔までがあつた。

タンブル街の修道院の庭には、有名な七葉樹があつた。それはフランス第一の美しい大きなものとされていた。十八世紀の人たちは、王国のすべての七葉樹の父であると言つて評判していた。

前に言つたとおりこのタンブルの修道院には、シトーから出てきたベネディクト修道女とは全く別なものではあるが、やはり常住礼拝をしているベネディクト修道女らがいた。この常住礼拝の一派はそう古いものではなく、二百年以上にさかのぼるものではない。一六四九年に、パリーの二つの会堂サン・スルピスとサン・ジャン・アン・グレーヴとで、数日へだてて、聖サクラメントがけがされた。あまり例のない恐ろしい冒^{ぼう}流^{りゅう}で、全市をわき立たせたものだつた。サン・ジェルマン・デ・プレの修道院長大助祭はその全聖職者に命じて莊嚴な行列をなさしめ、そこで法王の特使が祭式を上げた。けれどもその贖^{しよくぎ}罪^いの祭式をも、二人のりっぱな婦人、ブーク侯爵夫人であるクールタン夫人とシャトーヴィユー伯爵夫人とは、なお足りないように思った。「祭壇のきわめておごそかなる秘蹟」に對してなされた冒流は、たとい一時的ものではあつたとしても、二人の聖^{きよ}い魂^{たま}から去らないで、ある童貞女らの修道院において「常住礼拝」をしなければ贖^{あがな}われるものではないように思われた。それで一人は一六五二年に、一人は一六五三年に、ベネディクト修道

女でサン・サクルマンという教名を持つてゐるカトリヌ・ド・バル長老に莫^{ばくだい}大な金額を寄贈して、その敬^{けいけん}虔な目的のために聖ベネディクト派の一修道院を設立させようとした。その設立に対する第一の許可は、サン・ジェルマンの修道院長メース氏によつてカトリヌ・ド・バル長老へ交付された。「現金六千フランにして年三百フランの定期納金を有せざる娘は入会せしめざるの規約において」であつた。サン・ジェルマンの修道院長の後に、国王は特許の宸^{しんかん}翰を下した。そして修道院長の許可状と国王の宸翰との全体は会計院と議政府とにおいて一六五四年に認可された。

以上が、パリーのサン・サクルマンの常任礼拝ベネディクト修道女会が設立された起原であり、また法律上に認可された経過である。その最初の修道院は、カセツト街に、ブークおよびシャトーヴィユー両夫人の金によつて「新しく建て」られた。

この会派はかくのごとくして、いわゆるシトーのベネディクト修道女会とは別なものであつた。これはサン・ジェルマン・デ・プレの修道院長から起こつたもので、サクレ・クールの修道女会がセジュー派の管長から起こされ、シャリテの修道女会がラザール派の管長から起こされたのと同じである。

われわれがその内部を述べてきたあのプティー・ピクプユスのベルナル修道女会も同

じく、このサン・サクルマン派とは全く別なものであった。一六五七年に、法王アレキサンドル七世は特別の宸しんかん翰をもつて、サン・サクルマンのベネディクト修道女らのように常住礼拝を行なうことを、プティー・ピクプユスのベルナール修道女らにも許可した。しかし両派は依然として別なものであった。

十一 プティー・ピクプユスの終わり

王政復古の初め頃から、プティー・ピクプユスの修道院は衰微してきた。十八世紀の後には、すべての宗教的団体とともに一般に秩序の終滅をきたしたのであって、これもその一部分にすぎなかった。静観は祈きじう禱とともに人間に必要なものの一つである。しかし革命の手に触れられたすべてのものと同じく、静観もやがてその形を変じて、社会の進歩をばむことから脱して、かえってそれを助けるものとなるだろう。

プティー・ピクプユスの家に住む者は、にわかにその数を減じてきた。一八四〇年には、小修道院はなくなり、寄宿舎もなくなっていた。年老いた女らも、若い娘らも、もはやそこになかった。老いたる者は死に、若き者は立ちのいていた。彼女らは飛び去りぬ。

常住礼拝の規則は、人に怖氣おしけを震わせるほど苛酷かこくなものである。帰依する者は少なくなり、新たにはいつて来る者はなくなつた。一八四五年には、なお多少の助修道女らが散在していた。しかし歌唱の修道女はもはや一人もいなかった。今から四十年前には、修道女の数は約百人ばかりだった。十五年前には、もはや二十八人に過ぎなかった。そして今日は幾人になつてゐることであろう？ 一八四七年には、院長はまだ若い人だった。これは選挙の範囲がせばまつたしである。院長は四十歳にもなつていなかった。また人員の減少につれて労苦は増してくる。各人の仕事はますます激しいものとなつてくる。聖ベネデイクトの重い規則をになうべき肩も、やがては前にかがんだ痛ましいもののみ十指を屈するにすぎなくなることが見えていた。しかもその重荷は絶対的のものであつて、それをになうべき人員の多少にかかわらず常に同一なのである。それは人を圧迫し人を押しつぶす。かくて修道女らは死んでいった。本書の著者がなおパリにいた頃、死んだ者が二人まである。一人は二十五歳で、一人は二十三歳だった。二十三歳の彼女は、おそらくユリア・アルピヌラのようにこう言つたであろう。「二十三年を生きて今妾わらわここに横たわる。」修道院が若い娘の教育をよしたのも、かかる衰微のゆえにである。

この異常な未知の薄暗い家の前を通るや、われわれはその中にはいつてみざるを得なか

つたのである。あるいは何人^{なにびと}かのためになるべきを思つてわれわれがジャン・ヴァルジヤンの憂うつな物語をなすのに耳を傾けてくれる人々、われわれのあとに従つてきてくれる人々を、その中に導かざるを得なかつたのである。今日ではいかにも新奇に見える古い常習に満ちたこの修道院の内部に、われわれは既に一瞥^{いちべつ}を与えた。それは実に閉ざされたる庭である。禁園である。この不思議な場所のことを、詳細にしかも敬意をもつて、少なくとも敬意と詳細とが相一致し得る限りにおいて、われわれは述べきつた。われわれはその全部を理解することはできないが、しかしその何物をも軽侮しはしない。死刑執行人を神聖視するまでに至つたジョゼフ・ド・メーストルの賛嘆と、十字架像をあざ笑うまでに至つたヴォルテールの冷笑と、両者からわれわれは同じ距離に立つ者である。

ヴォルテールの没論理、という一語をついでに加えよう。なぜならば、ヴォルテールはカラス（訳者注 十八世紀フランスの商人で冤罪を受けて残酷な死刑に処せられた人、ヴォルテールは彼を熱心に弁護したのである）を弁護したと同様に、キリストをも弁護すべきはつたからである。超人間的な化身説を否定する人々の前にも、十字架像は何を示すのであるか。殺害された賢者の姿ではないか。

十九世紀において、宗教的觀念は危機を閲している。人はある種のことを学んでいない。

けれども、一を学ばずとも他を学びさえするならば、それも別にさしつかえはない。ただ人の心のうちに空虚を存してはいけない。またある種の破壊がなされている。ただ、破壊の後に建設がきさえするならば、それも至極いいことである。

まずそれまでは、もはや存在しない事物をも研究しようではないか。それを知ることが必要である、それを避けんがためにでも。過去の偽物は偽名を取って好んで未来と自称する。この幽霊は、過去は、しばしばその通行券を偽造する。われわれはその詭計きけいを見破ろうではないか。疑念をはさもうではないか。過去は迷信という顔を持ち、虚偽という仮面をかぶる。その顔を摘発し、その仮面を引きはごうではないか。

修道院については、複雑なる問題が起こってくる。文明の問題は修道院をしりぞけ、自由の問題は修道院を保護する。

第七編 余談

一 抽象的観念としての修道院

本書は一つのドラマであつて、その第一の人物は無窮なる者である。

人間は第二の人物である。

かかるがゆえに、途中に一修道院を見いだすや、吾人はその中にはいつてみざるを得なかつた。何ゆえかなれば、修道院というものは、東洋と西洋とを問わず、古代と近代とを問わず、偶像教と仏教とマホメット教とキリスト教とを問わず、皆それに固有のものである。人間によつて無窮なるものの上に適用された幻燈器械の一つだからである。

今はある何かの観念を過度に敷衍^{ふえん}すべき折りではない。けれども、絶対に遠慮と制限とを守り、かつ憤懣^{ふんまん}の情を覚えながらも、吾人は一言せざるを得ない。すなわち、人間の

うちに無窮なるものを見いだす時は、たといそれが正当につかまれていると否とを問わず、吾人は常に尊敬の念に打たれる。ユダヤの会堂やマホメットの教堂やインドの寺院や黒人の聖堂などのうちにも、擯^{ひん}斥^{せき}すべき醜惡なる一面と贊嘆すべき莊嚴なる一面とが存する。人間という壁の上への神の反映こそ、いかに人を静觀せしめ、いかに深き夢想のうちに陥らしむることか！

二 歴史的事実としての修道院

歴史、理性、および真理の見地よりすれば、修道院制はしりぞけらるべきものである。

一国のうちに数多の修道院がある時には、それは交通の障害となり、邪魔な建物となり、活動の中心たるべき所に怠惰の中心を出現するに至る。修道組合が大なる社会組織に対する関係は、あたかも寄生木^{やどりぎ}の櫟^{かし}の木におけるがごとく、疣^{いぼ}の人体におけるがごときものである。その繁榮と肥満とは、国の衰弱となる。修道院の制度は、文明の初期においては有益であつて、精神的のものによつて獸性を減殺するに役立つのであるが、しかし民衆の活動力には悪い結果を及ぼすものである。なおまた、その制度が弛緩^{しかん}して退廢期に入る時に

は、それでもやはり範例となるがゆえに、その純潔なる時代において有益であつたと同じ理由によつて、かえつて有害なるものとなる。

修道院内にこもるには、特殊な時期があつた。修道院生活は、近代文明の初期の教育には有効であつたが、文明の成長には妨げとなつたし、その発展には有害なものとなつていく。制度としてまた人間に対する教養の方式として修道院は、十世紀には有益なものであつたが、十五世紀には問題にすべきものとなつたし、十九世紀には排斥すべきものとなつていく。修道院制の病根は、二つのみごとなる国民、数世紀の間欧州の光明たりしイタリアとその光輝たりしスペインとを、ほとんどその骨までしゃぶりつくした。そして現代においてこの二国民がようやくその病根から平癒し初めたのは一七八九年（訳者注 フランス大革命）の勇健なる衛生法のお陰によつてである。

なお十九世紀の初めにイタリアやオーストリアやスペインなどに残つていた修道院は、ことに古い女修道院は、中世の最も薄暗い投影の一つである。その内部は、それらの修道院の内部は、あらゆる恐怖すべきものの交差点である。本来のカトリックの修道院内部は、死の暗黒なる輝きに充ち満ちて^みいる。

スペインの修道院は特に陰惨である。そこでは、暗黒のうちにつつ立^{もや}つて、霧のこめた

きゆうりゆう

穹窿の下に、影のためにおぼろな丸天井の下に、大会堂のように高く、バベルの塔の

ようにおごそかな祭壇がそびえている。大きな白い十字架像がやみのうちに鎖に下がって

いる。黒檀こくたんの台の上に大きな象牙のキリスト像が裸のまま並んでいる。血にまみれてる

というよりも血を流してるような趣である。恐ろしいがしかし莊嚴な趣である。両肱りようひじ

は骨立ち、両膝りようひざは皮膜があらわで、傷口からは肉が見えており、銀の荊棘いばらの冠をかぶ

り、金の釘くぎでつけられ、額には紅玉ルビーの血がしたたり、目には金剛石ダイヤモンドの涙が宿っている。そ

の金剛石と紅玉とはぬれてるようで、その下の影の中に面紗かおぎぬをかぶった人たちを泣かせ

る。彼女らは鉄のついた鞭むちと毛帯とで脇腹を傷つけ、柳やなぎ蓆こもで胸を押しつぶし、祈祷の

ために膝の皮をすりむいている。めとりし者と自らを想像してる女ども、天使と自らを想

像してる幽霊ども。それらの女は考えているのか、否。欲しているのか、否。愛している

のか、否。生きているのか、否。その神経は骨となり、その骨は石となっている。その面

紗は編まれたる暗夜である。面紗の下でのその呼吸は、言い知れぬ悲壮なる死の息にも似寄

っている。一個の悪鬼たる院長が、彼女らをきよめ彼女らを恐怖むさしている。生々しい無

垢くがそこにある。かくのごときすなわちスペインの古い修道院のありさまである。恐るべ

き帰依きういの巢窟そうくつ、童貞女らの洞穴どうけつ、残忍の場所である。

カトリック教のスペインは、ローマ自身よりもっとローマ的であつた。スペインの修道院は、特にカトリック教的なものであつた。そしてあたかもトルコ宮殿のごときものであつた。大司教すなわち天のキスラル・アガは、神にささげられた魂の宮殿を閉鎖し監視していた。修道女は宮女であり、牧師は宦官^{かんがん}であつた。信仰熱き女らは、夢のうちに選まれてキリストを所有している。夜になると、その裸体の美しい青年は十字架からおりてきて、分房の歓喜の的となつた。十字架につけられし彼^サを皇帝として守っている奥深い皇^{ルタナ}后は、あらゆる現世の楽しみから高い壁でへだてられていた。外界に向ける一瞥^{いちべつ}も既に不貞となるのであつた。寂滅牢（訳者注 修道院において罪人を死に至るまで幽閉する地牢）は皮の袋の代わりとなつていた。東方において海に投ずるところのものを、西洋にては地下に投じていた。しかしいづれにおいても、投ぜられた女らは腕をねじ合はして苦しんだ。一方には波濤^{はとう}があり、一方には墓穴があつた。一つは溺死^{できし}、一つは埋没。おぞましき類似である。

今日、過去に味方する者らは、これらのことを否定し得ずして、それを微笑にまぎらさんとつとめた。歴史の摘発を止め、哲学の注釈を弱め、あらゆる不利な事実やいやな問題を省略せんがために、不思議な便利な方法を流行さした。大言壮語の題目だと巧みなる者

らはいう。大言壮語だとその尻馬しりうまに乗った者らは繰り返す。かくて、ジャン・ジャック・ルーソーも壮語家となり、デイドローも壮語家となり、カラスやラバールやシルヴァン（訳者注 皆冤罪のために極刑に処せられし人）などを弁護するヴォルテールも壮語家となる。また最近だれかがかかることまで言った、タキツスは一つの壮語家であり、ネロ皇帝はその犠牲である、そして「このあわれなるホロフェルネス」（ネロ）こそまさしく同情すべきであると。

しかしながら事實は曲げ難いものであり、頑強がんきょうなるものである。ブラッセルから八里ばかりの所、だれにもわかる中世のひな形のある所、すなわちヴィレルの修道院において、その中庭の牧場の中央に終身囚の穴と、ディール川の岸に半ばは地下に半ばは水の下になつて四つの石牢ろうとを、本書の著者は親しく見たのである。それこそまさしく寂滅牢の跡である。それらの地牢ろうの各には、一つの鉄の扉とびらのなごりと、一つの厠かわやと、格子こうしのはまつた一つの軒窓とが残っている。その軒窓は、外部では川の水面上二尺の所になつており、内部では地上六尺の所になつてゐる。四尺の厚さの川水が壁の外を流れているわけである。地面はいつも湿っている。寂滅牢にはいった者は、その湿った地面の上に寝ていたのである。地牢のうちの一つには、壁にはめ込んである鉄鎖の一片が残っている。またあるもの

の中には、四枚の花崗岩^{かこうがん}でできてゐる四角な箱のようなものが見られる。それは中に寝るにはあまりに短く、中に立つにはあまりに低い。昔その中に人を入れて上から石の蓋^{ふた}をしたものである。それが残つてゐる。目で見、手でさわることができる。それらの寂滅牢、それらの地牢、それらの鉄の扉^{ひじがね}の肱^{ひじがね}金、それらの鉄鎖、川の水がすれすれに流されてゐるその高い軒窓、墓穴のように花崗岩の蓋がされて中の者に死者と生者との違いがあるのみのその石の箱、泥深いその地面、その厠^{かわや}の穴、水のしたたるその壁、それらを云々することが何で大言壮語家であるか！

三 いかなる条件にて過去を尊重すべきか

スペインまたはチベットにあつたような修道院制度は、文明にとっては一種の結核である。それは生命の根を断つ。一言にして言えば人口を減ずる。閉居であり、去勢である。ヨーロッパにおいては天の罰であつた。それに加うるに、しばしば人の本心に対してなされた暴行、強制的な加入、修道院生活に立脚する封建制、家庭の冗員を修道院のうちに送り込む父兄、前に述べたような残虐、寂滅牢、緘黙^{かんもく}、閉鎖されたる頭脳、永久誓願の牢

獄に入れられたる多くの不幸なる知力、僧服の着用、魂の生きながらの埋没。かくて、国民的衰退に加うるに個人の苦悩。それを思う時にはいかなる人も、人間の発明になった二つの経帷子^{きようかたびら}たるその道服と面紗^{かおぎぬ}との前に、必ずや戦慄^{せんりつ}を覚ゆるであらう。

けれども、ある方面にはそしてある場所には、哲学や世の進歩にかかわらず、修道院的精神は十九世紀のさなかに残存している、そして禁慾主義のおかしな再興が今や文明社会を驚かしている。古き制度のなお永続せんとする頑固^{がんこ}さは、臭き油のなお人の頭髮につけられんことを求むる頑強さにも似、腐った魚肉のなお食せられんことを求むる主張にも似、子供の衣服のなお大人にまとわれんことを求むる執拗^{しつよう}さにも似、埋もれる死骸^{しがい}のなお生きたる人々を抱擁しに戻りきたらんとする情愛にも似ている。

恩知らずめ、天氣の悪い時には汝を保護してやったではないか、それなのになぜもうわれを欲しないのか、と衣服は言う。われは海の底からやってきたのだ、と魚肉は言う。かつてわれは薔薇^{ばら}だったのだ、と香油は言う。われは汝を愛したのだ、と死骸は言う。そしてわれは汝を文明に導いてやったのだ、と修道院は言う。

それらに対してはただ一つの答えがあるばかりである、なるほど昔は、と。

死亡したる事物の無限の延長を夢想し、木乃伊^{ミイラ}によって人類の統治せらるるを夢想する

こと、退廃したる信条を復興すること、遺物櫃ひつに再び金箔きんぱくをきせること、修道院を再び塗り立てること、遺骨匣ばこを再び祝福すること、迷信を再び興すこと、狂言を再び盛んにすること、灌水器かんすいきと剣とに再び柄を上げること、修道院制と軍国主義とを再び建てること、寄食者の増加によつて社会の幸福を信ずること、現在に過去を押し付けること、それは実に常規を逸したことと思われないか。けれど世にはかかる理論を主張する者がある。それらの理論家は、もとより才人であつて、きわめて簡単な方法を持つていて、社会の秩序、天の正義、道德、家庭、祖先崇拜、古き權威、神聖なる伝統、正法、宗教、などと彼らが称するところの塗料を過去の上に塗る。そして彼らは叫び回る。「いざ、善良なる人々よ、これを執れ。」そういう理論は、古人の間によく知られたものであつた。ローマの卜占者ぼくせんしやらはそれを実行していた。彼らは黒牛に白聖はくあを塗りつけて言った、「この牛は白である。」それこそ白塗りの牛である。

吾人は、過去がただ死者たることを自認しさえするならば、過去をも部分的にはこれを尊び全体としてはこれをいたわつてやるであらう。しかしもし生者たることを欲するならば、これを攻撃しこれを殺さんとつとむるであらう。

迷信、頑迷がんめい、欺瞞ぎまん、偏見など、それらの悪霊は、悪霊でありながらもなお生命に執着

し、その妖氣ようきの中に齒と爪とを持っている。それらに対して白兵戦を演じ、戦闘を開き、しかも間断なき戦闘をなさなければならない。なぜならば、亡霊らと絶えざる戦いをなすことは、定められたる人類の運命の一つだからである。しかしながら影は、その喉のどをつかみ難くうち倒し難いものである。

十九世紀のさなかに、フランスに、一修道院があるとすれば、それは日に向かつてふくろう梟ふくろうの学校に過ぎない。一七八九年と一八三〇年と一八四八年との三度の革命を経た都市の中央に禁慾主義を実行しながら、パリーのうちにローマを建てながら、一修道生活があるとすれば、それは時代錯誤である。普通の時にあつては、時代錯誤を解放させ消滅さすには、それができ上がった年号を呼ばすればそれで足りる。しかしながら今は普通の時ではない。

戦おうではないか。

戦おうではないか、しかしまた敵をよく弁別しようではないか。真理の特性は、決して過度ならずということである。真理は何ら誇張の必要を持っていない。破壊すべきものもあり、また単に光に照らして研究すべきものもある。好意あるまじめなる審査、それはいかに力強いことであるか。光の十分にある所には、炎を持ち行くことをやめようではない

か。

ゆえに、十九世紀の世にあつて吾人は、一般的问题として、またあらゆる民衆のうちにおいて、アジアとヨーロッパとを問わず、インドとトルコとを問わず、禁慾的閉居に反対する者である。修道院を説くは沼沢を説くに等しい。その腐敗性は明らかであり、その^{よど}澱みは不健全であり、その毒気は民衆に熱を病ましめ民衆を衰弱せしむる。その数が増せばやがてエジプトの災厄となる。インド^{たくはっそう}托鉢僧、仏教僧、マホメット教行者、ギリシャ修道者、マホメット教隠者、シャム仏僧、マホメット教僧侶、彼らが増加して蛆虫^{うじむし}のごとく群が^つつてる国を考える時、吾人は身震いせざるを得ない。

かく言つても、宗教的問題はなお残っている。その問題は、神秘的なほとんど恐るべき方面を有している。ここに吾人をしてそれを凝視することを許していただきたい。

四 原則の見地より見たる修道院

多くの人が相集まつて共同の家に住む。それはいかなる権利によつてであるか？ 団結の権利によつてである。

彼らはその家に閉じこもる。いかなる権利によつてか？ おのれの戸を開きもしくは閉ざすは各人の任意であるという権利によつて。

彼らは外出をしない。いかなる権利によつてか？ 自家にこもるのを権利をも含みたる行ききするの権利によつて。

そこで、家の中で、彼らは何をなすか？

彼らは低い声で話している。目を伏せている。働いている。世間を、町を、肉欲を、快楽を、虚榮を、傲慢ごうまんを、利益を、すべて見捨てている。荒い毛か麻かの着物をつけている。一人としていかなるものをも所有権によつて所有していない。そこにはいれば、富んでいた者も貧しくなる。おのれの持つているものは、これを皆の者に与える。貴族と言われ紳士と言われ王侯と言われていた者も、百姓であつた者と同等になる。分房はだれのものである。皆同じ剃髪ていはつ式を受け、同じ道服をつけ、同じ黒パンを食し、同じ藁わらの寢床の上に眠り、同じ灰の上に死んでゆく。同じ行衣を背につけ、同じ繩なわを腰にしめている。もしはだしで歩くことが規則ならば、みなはだしで歩く。もしそこに一人の王侯がいるとしても、もはや他の者らと等しく一つの影にすぎない。もはや何らの称号もない。姓さえも消えてしまっている。彼らは呼び名だけしか持つていない。皆平等な洗礼名の下に頭を

たれている。彼らは肉親の家庭を解除して、その会派のうちに精神的の家庭を立てている。彼らの親戚はただすべての人である。彼らは貧しい人々を助け、病める人々を看護する。彼らはおのれが服従すべき人を自ら選ぶ。互いに彼らは「わが兄弟姉妹」と呼ぶ。

かく言えば人は私をさえぎって叫ぶであろう、「しかしそれは理想の修道院だ！」しかしそれを考察するには、ただそれがあり得べきものでさえあればいい。

かくて私は前編において、一つの修道院のことを敬意をこめた調子で語ったのである。そして中世を外にし、アジアを外にし、歴史的的政治的問題を差し控え、純然たる哲学的見地に立ち、攻撃的論議の道具を捨てて、修道生活は絶対に自発的なもので同意をしか含んでいないという条件において、注意深い真剣さとする点に関しては謙遜なる真剣さをもつて、修道会をなお続けて考察していつてみよう。一つの組合がある所には自治区があり、一の自治区がある所には権利がある。修道院も平等と友愛という規範から生じたものである。ああいかに自由とは大なるものであるか、そしていかに光輝ある変容であることか！修道院を共和国に変容せしむるためには、ただ自由ということだけで足りる。

なお言葉を進めてみよう。

あの四方の壁の背後にいるそれらの男や女は、荒布をまとい、みな平等で、互いに兄弟

姉妹と呼んでいる。それはよろしい。しかし彼らはなお他の事をもなすか？
しかり。

何を？

彼らは影を見つめ、ひざまずき、手を合わしている。
それはいったいいかなる意味であるか？

五 祈祷きとう

彼らは祈る。

だれを？

神を。

神を祈る、この語は何を意味するか？

われわれの外部にある無窮なるものがあるのではあるまいか？ その無窮なるものは、
単一のものであり恒久不易なるものではあるまいか。無窮なるがゆえに、また、もし実体
が欠くればその点で限られたるものとなるがゆえに、それは必然に実体的ものではある

まいか、そして、無窮なるがゆえに、また、もし靈が欠くればその点で限られたるものとなるがゆえに、それは必然に靈的のものではあるまいか。われわれは自身に存在の觀念しか与え得ないが、その無窮なるものはわれわれのうちに本質の觀念を覺^{さま}させるのではあるまいか。言葉を換えて言えば、それはわれわれの対称たる絶対ではないだろうか。

われわれの外部に無窮なるものがあると同時に、われわれの内部にも無窮なるものがないだろうか。その二つの無窮なるものが（何という恐るべき複数であるか！）互いに重なり合つてゐるのではないだろうか。第二の無窮なるものは、いわば第一のものの下層ではないだろうか。それは第一のものの鏡であり、反映であり、反響であり、第一の深淵^{しんえん}と中心の深淵ではないだろうか。この第二の無窮なるものもまた靈的のものではあるまいか。それは考え愛し意欲するのではあるまいか。もし二つの無窮なるものが靈的のものであるならば、その各は一つの意欲の本体を有し、そして上なるものに一つの自我があるとともに、下なるものにも一つの自我があるに違いない。この下なる自我がすなわち人の魂であり、上なる自我がすなわち神である。

思念によつて、下なる無窮のものを上なる無窮のものと接触させること、それを称して祈るといふ。

人の精神から何物をも取り去らないようにしようではないか。除去することは悪いことである。ただ改革し進化させなければいけない。人間のある種の能力は、未知なるものの方へ向けられている、すなわち、思想と夢想と祈禱きとうとが。未知なるものは一つの大洋である。人の本心とは何か？ それは未知なるものに対する羅針盤らしんばんである。思想、夢想、祈禱、そこにこそ大なる神秘的光輝がある。それらを尊敬しようではないか。人の魂のおごり、そかなるそれらの発光はどこへ向かつて進むか。それは影へ向かつてである。換言すれば光明へ向かつてである。

民主主義の偉大さは、何物をも否定しないことであり、人類の何物をも否認しないことである。人間の権利の側に、少なくともその横手に、魂の権利がある。

狂言を押しつぶし、無窮なるものを跪拝きはいすること、それが法則である。創造の木の下にひれ伏し星せいしん辰しんに満ちたその広大なる枝葉をうち眺めることのみに、止まらないようにしようではないか。われわれは一つの義務を持つている。人の魂を培つちかい、奇蹟に対抗して神秘を護まもり、不可解を尊んで不条理を排し、説明し難いものについてはただ必要なるもののみを許容し、信仰を健全にし、宗教の上より迷信を除くこと、すなわち神より害虫を駆除することである。

六 祈祷きとうの絶対善

祈祷の方法は、ただそれがまじめでさえあるならばすべてよろしい。汝の書物を伏せよ、そして無窮なるもののうちにあれ。

吾人の知るところによれば、無窮なるものを否定する一つの哲学がある。また病理学上一つの哲学となし得るもので太陽を否定するのがある。その哲学を盲目と称する。

われわれに欠けたる一知覚を真理の基となすことは、盲者の虚勢である。

おもしろいことには、神を見る哲学に対して、その手探りの哲学は、優者らしいあわれむような尊大な態度を取る。あたかも土竜もぐらもちが叫ぶがような声を出す、「奴らやつの太陽ときたら気の毒なものだ！」

吾人の知るところによれば、有名な強力な無神論者らが世にはいる。彼らは自分自らの力によつて真の方へつれ戻されて、根本では確かな無神論者ではない。彼らにとつてはただ定義の問題だけである。そして彼らは偉大なる精神の者らであるから神を信じはしないにしても、多くの場合にかえつて神を証明している。

吾人は彼らの哲学を厳正に弁別しながらも、彼らの精神のうちに哲学者があることを慶するものである。

なお言を進めよう。

同じくみごととなる一事は、言葉をもつて満足するの容易さである。多少濃霧に感染している北方の一形而上学派は、力という語を意志という語で置き換えて、それで人間の悟性のうちに一革命をきたすものと信じた。

植物は生長する、と言う代わりに、植物は意欲する、と言うことも、万有は意欲するということとをそれにつけ加えるならばなるほど意味深いことであろう。なぜならばそれから次のことが出て来るであろうから。すなわち、植物は意欲す、ゆえに植物は一つの自我を有す、万有は意欲す、ゆえに万有は一つの神を有す。

この学派と反対であつて、何物をも先入主的にしりぞけない吾人に言わしむれば、この派の容認する植物のうちにある意志は、この派の否定する万有のうちにある意志よりも、いつそう容認し難いもののように思われる。

無窮なるものの意志を、換言すれば神を否定することは、無窮なるものを否定するののでなければでき得ないことである。これは前に論証したところである。

無窮なるものの否定は、直ちに虚無主義に陥ってゆく。すべては「人の精神の一概念」となってしまう。

虚無主義に対しては議論は不可能である。なぜなれば、合理的な虚無主義者は、相手の者が存在しているかを疑い、また自分自身が存在していることをも確信してはいないからである。

彼の見地よりすれば、彼自身も彼自身に対しては「自分の精神の一概念」にすぎない、ということになり得る。

ただ彼は一事を気づかないでいる、精神という言葉を発することによって、否定したすべてのものを一括して自ら肯定しているということを。

要するに、否という一語にすべてを到達せしむる哲学によっては、何らの思索の道も開かれない。

「否」という一語に対しては、ただ「しかり」という一つの答えがあるのみである。

虚無主義は領域を有しない。

虚無なるものは存しない。零^{ゼロ}は存しない。すべては何かである。無は何物でもない。

人はパンによってよりもなお多く肯定によって生きている。

見ることと示すこと、それだけでも十分ではない。哲学は一つのエネルギーでなければならない。人間を進化せしむることをその目的とし結果として有しなければならない。ソクラテスはアダムのうちにはいつてマルクス・アウレリウスを製造しなければならない。換言すれば、至福の人間から知恵の人間を生まれさせなければならない。エデンの園をリセオムの園に変えなければならない。学問は一つの興奮剤でなければならない。享樂するということ、それはいかにつまらない目的であり、いかに弱々しい野心であるか。禽きんじゆ獣うのみが享樂する。思考すること、そこにこそ人の魂の眞の勝利がある。人々の飢渴に

思想を差し出し、すべての者に強壯剤として神の觀念を与え、彼らのうちに本心と学問とを親和せしめ、その神秘なる面接によつて彼らを正しき人たらしむること、それが眞の哲学の使命である。倫理は多くの眞理の開花である。静觀することはやがて行動することになる。絶対的なものは實際的なものでなければならない。理想なるものは、人の精神にとつては呼吸し飲み食し得るものでなければならない。「取れよ、これこそわが肉、これこそわが血なり、」というの權利を有するものは、実に理想である。知恵は一つの神聖なる聖体コンミユニオン拝受である。かかる条件においてこそ、知恵は単に無益なる好學心たることを止めて、人類組合の唯一にして最高なる方法とはなるのである。そしてかかる条件におい

てこそ、知恵は哲学より宗教へまで上りゆくのである。

哲学というものは、神秘を自由にながめんがために、そして好奇心を満足させるに便利などというだけの、あの神秘の上に建てられたる単なる張り出し建築のみであつてはならない。

吾人は、おのれの思想の詳説はこれを他の機会に譲つて、ここにはただ一言を述べるに止めよう。すなわち、信仰と愛という原動力たる二つの力なしには、人間を出発点として考えることもできず、進歩を目的として考えることもできないと。

進歩は目的である。理想はその典型である。

理想とは何であるか。それは神である。

理想、絶対、完全、無窮、皆同一意義の言葉である。

七 非難のうちになすべき注意

歴史と哲学とは、永久のそしてまた同時に単純なる義務を有している。すなわち、司教カイアファス、法官ドラコ、立法者トリマルキオン、皇帝チベリウス、などと戦うことで

ある（訳者注 キリストを定罪せしめしユダヤの僧侶、酷薄なるアテネの法官、苛酷なるローマの立法官、残忍なるローマ皇帝）。それは明瞭めいりょうで直截ちよくせつで公明であつて、何らの疑雲をも起こさせないことである。しかしながら、隔離生活の権利は、その障害と弊害をもつてしてもなお、確認され許容されんことを欲するものである。修道生活は人間の一大問題である。

修道院、その誤謬ごびゅうのしかも無垢むくの場所、謬迷びゅうめいのしかも善良なる意志の場所、無知のしかも献身の場所、苦難のしかも殉教の場所、それについて語る時には、ほとんど常に然りしかと否とを言わざるを得ない。

修道院、それは一つの矛盾である。その目的は至福、その方法は犠牲。修道院は実に、結果として極度の自己棄却を持つ極度の自我主義である。

君臨せんがために王位を捨つる、それが修道院制の箴言しんげんであるように思われる。

修道院のうちに於いては、人は享樂せんがために苦業する。死を書き入れた手形を振り出す。天の光明を地上のやみに振り換える。修道院のうちに於いては、天国を相続するの前身として地獄が受け入れられている。

面紗かおぎぬや道服などの着用は、永遠をもつて報いられる自殺である。

かくのごとき問題を取り扱うには、嘲笑^{ちようしやう}はその場所を得ないように吾人には思われる。善も悪も、すべてが真剣なのである。

正しき人も眉^{まゆ}をしかめることはある、しかし決して悪意ある微笑はもらさない。吾人は憤怒を知っている、しかし悪念を知らないものである。

八 信仰、法則

なお数言を試みたい。

教会が策略に満たさるる時、吾人はそれを非難し、求道者が利欲^{どんらん}に貪婪^{ぐんぱん}なる時、吾人はそれを侮蔑^{ぶべつ}する。しかし吾人は常に考える人を皆尊敬する。

吾人はひざまずく者を祝する。

一つの信仰、それこそ人間にとって必要なものである。何をも信ぜざる者は不幸なるかな！

人は沈思しているゆえに無為であるとは言えない。目に見ゆる労役があり、また目に見えぬ労役がある。

静観することは耕作することであり、思考することは行動することである。組み合わせたる両腕も働き、合掌したる両手も仕事をなす。目を天に向けることも一つの仕事である。

タレスは四年間静坐していた。そして彼は哲学を築いた。

吾人に言わしむれば、修道者も閑人ではなく、隠遁者も無為の人ではない。影を思うことは、一つのまじめなる仕事である。

墳墓に対する絶えざる思念は生ける者に適したものであることを、前に述べた事ごとと撞どうちやく着なしに吾人は信ずるのである。この点については、牧師と哲学者とは一致する。死ななければならぬ。トラップの修道院長は、ホラチウスに言葉を合わせる。

自己の生活に墳墓の現前を多少交じえること、それは賢者の法則である、そしてまた苦行者の法則である。この関係においては、苦行者と賢者とは一堂に会する。

物質的の生成がある。吾人はそれを欲する。また精神的の偉大さがある。吾人はそれに執着する。

考えなき躁そうきゆう急な精神は言う。

「神秘の傍に並んで動かないそれらの人々が何になるか。何の役に立つか。いったい何を為しているのか？」

悲しいかな、吾人を取り巻き吾人を待ち受けている暗黒の前において、広大なる寂滅の手が吾人をいかなすかを知らないで、吾人はただ答えよう。「それらの人々の魂がなす仕事ほど崇高なものはおそらくないであろう。」そしてなお吾人はつけ加えよう。「おそらくそれ以上に有益なる仕事はないであろう。」

決して祈^{きとう}祷をしない人々のために、常に祈^{きとう}祷をする人がまさしく必要である。

吾人の見るところでは、すべて問題は、祈^{きとう}祷に交じえられたる思想の量にある。

祈^{きとう}祷するライブニッツ、それこそ偉大なものである。礼拝するヴォルテール、それこそみごとなものである。ヴォルテールは（訳者補 この堂を）神に建てぬ。

吾人はもろもろの宗教には反対であるが、真の一つの宗教の味方である。

吾人は説教の惨^{みじ}めさを信ずるものであり、祈^{きとう}祷の崇^{あが}敬さを信ずるものである。

その上、今吾人が過ぎつつあるこの瞬間において、仕合わせにも十九世紀に跡を印しないであろうこの瞬間において、また、多くの現代人が享樂的な道德を奉じ一時的な不完全な物質的事物をのみ念頭にしている中であつて、なお多くの人は下げた額と高くもたげぬ魂とを持つているこの時において、自ら俗世をのがれる者は皆吾人には尊むべき者のように思われる。修道院生活は一つの脱俗である。犠牲は誤った道を進もうともやはり犠牲た

ることは一である。厳酷なる誤謬を義務として取ること、そこには一種の偉大さがある。

それ自身について言えば、理想的に言えば、そしてすべての外部を公平に見きわめるまで真理のまわりを回らんがために言えば、修道院は、ことに女の修道院は——なぜならば、現社会において最も苦しむものは女であり、そしてこの修道院への遁世とんせいのうちには一の抗議が潜んでいるからして——女の修道院は、確かにある莊嚴さを有している。

前に多少の輪郭を示しておいた嚴格陰鬱いんうつなる修道生活、それは生命ではない、なぜならば自由ではないから。それは墳墓ではない、なぜならば完成ではないから。それは不思議なる一つの場所である。高山の頂から見るように人はそこから、一方には現世の深淵しんえんをながめ、他方には彼世の深淵をながめる。それは二つの世界を分かつてる狭い霧深い一つの境界で、両世界のために明るくされるときにもまた暗くされ、生の弱い光と死の茫ぼう漠たる光とが入り交じっている。それは墳墓の薄明である。

それらの女の信ずるところを信じてはいないがしかし彼女らのごとく信仰によつて生きている吾人をして言わしむれば、吾人は一種の宗教的なやさしい恐怖の情なしには、羨せん望ぼうの念に満ちた一種の憐憫れんぴんの情なしには、彼女らをながむることができないのである。震え戦おのきながらしかも信じ切っているそれらの身をささげたる女性、謙遜なるしかも尊大

なるそれらの魂、既に閉ざされたる現世と未だ開かれざる天との間に待ちながら、あえて神秘の縁に住み、目に見えざる光明の方へ顔を向け、唯一の幸福としてはその光明のある場所を知っていると考えることであり、深淵と未知とを待ち望み、揺るぎなき暗黒の上に目を定め、ひざまずき、我を忘れ、震え戦き、永遠の深き息吹^{いぶ}きによつて時々^{たす}に半ば援け起こされるそれらの女性よ。

第八編 墓地は与えらるるものを受納す

一 修道院へはいる手段

ジャン・ヴァルジャンがフォーシユルヴァンのいわゆる「天から落ち」こんできたのは、前述のような家の中へであつた。

彼はポロンソー街の角をなして庭の壁を乗り越えたのだつた。ま夜中に彼が聞いた天使たちの賛美歌は、修道女らが歌う朝の祈りであつた。彼が暗闇くらやみのうちにのぞき見た広間は、礼拝堂であつた。彼が床ゆかの上に横たわつてゐるのを見た幽霊は、贖罪しよくざいをなしてゐる修道女であつた。彼がいぶかり驚いた音をたてた鈴は、フォーシユルヴァン爺じいさんの膝についてゐる庭番の鈴であつた。

コゼットを寝かすと、前に言つたとおりジャン・ヴァルジャンとフォーシユルヴァンと

は、一杯の葡萄酒ぶどうしゅと一片のチーズとを、よく燃える薪まきの火にあたりながら味わった。それから、その小屋の中にあるただ一つの寝台にはコゼットが寝ていたので、彼らはそれぞれ藁束わらたばの上に横になった。目をふさぐ前にジャン・ヴァルジャンは言った、「これから私はここに置いてもらわなくてはならない。」その言葉が、終夜フォーシユルヴァンの頭の中から去らなかつた。

実を言えば、二人とも眠れはしなかつたのである。

ジャン・ヴァルジャンは、見破られてジャヴェルから跡をつけられてることを感じていて、もしパリーの中へ出ていったら自分とコゼットとの破滅をきたすということがわかつていた。新たに吹きつけてきた一陣の風によつてその修道院に投げ込まれたことであるから、もはやそこに止まろうという一つの考えしか持つていなかった。しかるに、彼のような地位にある不幸な者にとつては、その修道院は同時に最も危険なまた最も安全な場所だった。最も危険だというのは、いかなる男もそこへはいることができないので、もし見付かったら現行犯となり、しかもジャン・ヴァルジャンにとつてはその修道院から牢獄まではただ一步を余すのみだったからである。最も安全だというのは、もしそこに許されて止まることができたら、だれからもさがしにこられる憂いがなかつたからである。不可能

の場所に住むこと、それが安全の策であった。

フォーシユルヴァンの方では、しきりに頭を悩ましていた。彼はまず、少しも訳がわからぬことを自ら認めた。あの高い壁にかこまれているのに、どうしてマドレーヌ氏がはいってきたのだろう。この修道院の壁は乗り越せるものではない。それにどうして子供を連れてはいってきたのだろう。腕に子供をかかえてつき立った壁を攀登^{よじ}れるものではない。またあの子供は何者だろう。二人はいつたいどこからきたのだろう。フォーシユルヴァンはその修道院にはいつていらい、モントリュユ・スユール・メールのことについては何の噂^{うわさ}も聞かず、そこに起こったことを少しも知っていなかった。と言って、マドレーヌ氏の様子は事情を尋ねるのも気の毒なほどだった。その上フォーシユルヴァンは自ら言った、「聖者に何かと尋ねるものではない。」マドレーヌ氏は彼の目から見れば、まだりっぱな人であった。ただ、ジャン・ヴァルジャンの口からもれた数語によって、庭番は次のことが推察できるように思った。すなわち、マドレーヌ氏はおそらくこの困難な時勢のために破産に陥ったのであろう、そして債権者どもから追い回されてるのであろう、あるいはまた、何か政治上の事件に関係して、身を隠そうとしてるのかも知れない。そしてこの考えはフォーシユルヴァンの気に入った。彼は北方の多くの農民と同じく、古くからのボナパ

ルト派だったからである。身を隠そうとして、マドレーヌ氏はこの修道院を避難所と定めたのであろう、そして彼がここにとどまりたいというのは当然なことである。けれども、フォーシユルヴァンが絶えず思い出して頭を悩ました不可解なことは、マドレーヌ氏が庭の中にいたこと、しかも子供といっしょにいたことであつた。フォーシユルヴァンは二人を目で見、二人を手でさわり、二人に話しかけたのだが、それでもなお夢のような気がしていた。その不可解事は、今や彼の小屋の中まではいり込んできた。彼は種々想像をめぐらしてみた。そしてただ「マドレーヌ氏は自分の生命の親である」ということきり何もはつきりしたことはわからなかつた。けれどもその確かな一事で十分だつた。それで彼は心を定めた。彼はひそかに考えた、「こんどは自分の番だ。」そして心のうちでつけ加えた、「私を引き出すため車の下にはいり込むのにマドレーヌ氏は種々考えてみはしなかつたんだ。」彼はマドレーヌ氏を助けようと決心した。

それでもなお彼は、いろいろと自問自答した。「私にあれだけのことをしてくれたが、もし盗人だつたとしても助けるべきものだろうか？ やはり同じことだ。もし人殺しだつたとしても助けるべきものだろうか？ やはり同じことだ。聖者だからというので助けるべきだろうか？ やはり同じことだ。」

しかし彼を修道院にとどめるといふのは、いかに困難な問題であつたか！ それでもほとんど夢にみるようなその仕事の前にも、フォーシウルヴァンはたじろぎはしなかった。

ピカルデーのあわれな一百姓である彼は、献身と善意とまたこんどは任にんきよう 侠はしごな目的のためにめぐらされる古い田舎者いなかものの多少の知恵とのほか、何らの梯子も持たずに、修道院の難関と聖ベネディクトの規則の荒い懸崖けんがいとを、乗り越してみようと企てたのである。

フォーシウルヴァン爺じいさんは生涯しょうがいの間利己主義者であつたが、晩年になると跛者はつしやになるし身体はきかなくなるし、もう世間に何の興味もなくなり、恩を感じることが楽しくなり、また何かいい行ないをなすべき場合に会々と、あたかも、かつて味わつたこともない上等の一杯の葡萄酒ぶどうしゅに死ぬ間ぎわになつて手を触れて、それを貪り飲むさばむ人のように、そこに飛びついてゆくのであつた。その上、修道院の中で既に数年間呼吸してきた空気は、彼の個性を滅却めつじやくさして、ついに何らかのいい行ないをせざるを得ないようにしてしまつたのである。

で彼は決心をした、マドレーヌ氏に身をささげようと。

われわれは今彼をピカルデーのあわれな百姓と呼んだ。この形容詞は正当なものではあるが、しかしそれだけでは不十分である。この物語もここまで進んでくると、フォーシ

ユルヴァン爺さんの人がらを少しく述べることも有益になってくる。いったい彼は百姓であつたが、公証人書記をしていたことがあつた。そのために、彼の知恵には多少の訴訟癖が加わり、彼の素朴さには多少の洞察力どうさつりよくが加わつた。ところが種々な理由で仕事に失敗して、公証人書記から荷車屋となり人夫とまでなり下がつた。けれども、必要だと思えば馬をののしつたり鞭むちを食わしたりしてはいたものの、なお彼のうちには公証人書記の性質が残つていた。彼は生まれながらの機知を持つていた。仮名づかいをも知つていた。田舎には珍しいほど話も上手だつた。他の百姓どもは彼のことを、「あの男は旦那方のような言葉つきをする」と言つていた。フォーシユルヴァンは実際、十八世紀の煩はんざつ雑ざつ輕薄な言葉でいわゆる半都会人半田舎者というあの階級、お邸やしきから百姓家の方までひろがついて平民どもの取つて置きのとえ言葉となつてゐるものでいわゆる半平民半市民、胡椒こしょうと塩というあの階級、それに属していたのである。彼は運命にひどく苦しめられ弱らされておゐり、すり切れたあわれな老耄おいぼれの魂とはなつていたけれども、まだやはりきびきびした自発的な人間であつた。これは人を決して悪人となさない尊い性質である。彼は欠点や悪徳も持つてはいたが、それは表面的なものだつた。要するに彼の人相は、よく見るとはなはだ愛すべきものであつた。その年老いた顔には、悪質か愚昧ぐまいかを示すあの上額のいや

な皺しわは少しもついていなかった。

夜明け頃に、フォーシウルヴァンは途方もない夢をみて目をさました。見ると、マドレーヌ氏は藁束わらたばの上にすわって、眠つてゐるコゼットをながめていた。フォーシウルヴァンは半身を起こして言った。

「さて、あなたは今ここにいなさるが、どうして改めてはいる工夫をしたものでしょうかな。」

その言葉は一言にして事情を言い尽したもので、ジャン・ヴァルジャンを夢想から呼びさました。

二人の老人は相談をはじめた。

「まず、」とフォーシウルヴァンは言った、「この室から外に出ないようにしなければいけません。子供もあなたも二人とも。一足でも庭に出たら、もうおしまいです。」

「なるほど。」

「マドレーヌさん、」とフォーシウルヴァンはまた言った、「あなたはいい時に、というのは悪い時においででした。一人の修道女がひどく病氣なんです。それでこちらはあまり注意されていませんでしょう。もう死にかかつてるのかもわかりません。四十時間の祈祷きとう

がされています。家中が大騒ぎをしています。皆その方に気を取られています。死にかかっている人は聖者なんです。いや実はここではみな聖者です。あの人たちと私の違いと言えばただ、あの人たちは私どもの部屋と言うのに、私は私の小屋と言うくらいのもんです。死にかかると祈禱がありますし、死ぬとまた祈禱があるんです。で今日^{きょう}だけはまずここにいて安心でしょうが、明日^{あす}のところはわかりませんよ。」

「だが、」とジャン・ヴァルジャンは注意した、「この小屋は壁の陰になつてゐるし、あの^{すた}廃れた家に隠されてゐるし、木立ちもあるので、修道院から見えはすまい。」

「そのうえ修道女たちはここへは決してやってきません。」

「それで？」とジャン・ヴァルジャンは言った。

それで？ というその疑問の調子は、「ここに隠れていることができるだろう」という意味だった。フォーシュルヴァンはその疑問の調子に答えた。

「それでも娘たちがいます。」

「娘たちというのは？」とジャン・ヴァルジャンは尋ねた。

フォーシュルヴァンがそれを説明するために口を開いた時に、鐘が一つ鳴った。

「修道女が死にました。」と彼は言った。「あれが喪の鐘です。」

そして彼はジャン・ヴァルジャンに耳を澄ますように合い図をした。

鐘はまた一つ鳴った。

「マドレーヌさん、喪の鐘です。一分おきに鳴つて、身体が会堂から運び出されるまで二十四時間続きます。……ところで、それが遊戯をします。休みの間に毬まりでも一つころがつてこようなものなら、禁じられてはいますが、皆ここへやってきます。この辺をやたらにさがし回るんです。その天の使いたちは、それはいたずらな悪魔ですよ。」

「だれのことだ？」とジャン・ヴァルジャンは尋ねた。

「娘たちですよ。あなたはすぐに見つかるでしょうよ。娘たちは大きな声を出します、まあ男の人が！　つて。ですが今日は大丈夫です。今日は休みがありません。一日中祈禱きとうがあるはずです。鐘が聞こえるでしょう。私が申したとおり一分に一つずつです。喪の鐘です。」

「わかった、フォーシユルヴァンさん。寄宿者の生徒たちがいるんだね。」

そしてジャン・ヴァルジャンはひそかに考えた。

「コゼットの教育もこれでできるだろう。」

フォーシユルヴァンは力をこめて言った。

「そうです、娘たちがいるんですよ。あなたのまわりに騒ぎ出します。駆けていきます。ここでは、男がいることは疫病神やくびょうがみがいるようなものです。ごらんのとおり、猛獣かなんぞのように私の膝ひざにもこうして鈴をつけておくんです。」

ジャン・ヴァルジャンはますます深く考え込んだ。「この修道院のおかげでわれわれは助かるだろう」とつぶやいた。それから彼は声をあげた。

「そうだ、困難なのはここにとどまることだ。」

「いえ、」とフォーシユルヴァンは言った、「出ることが困難なんです。」

ジャン・ヴァルジャンは全身の血が心臓に集まってくるように感じた。

「出るのが？」

「そうですよ、マドレーヌさん、ここにはいるにはまず出なければなりません。」

そして、喪の鐘がまた一つ鳴るのを待つて、フォーシユルヴァンは続けた。

「こんなふうでここにいてはいいきません。どこからきなすったかというのが問題になりますよ。私はあなたを知ってますから、天から落ちてきたでよろしいですが、修道女たちにとつては、門からはいつてこなければいけませんからな。」

その時突然、別な鐘のかなり複雑な音が聞こえた。

「あああれは、」とフォーシルヴァンは言った、「声の母たちを呼ぶ鐘です。集会へ行くんです。だれかが死ぬと、いつも集会があります。今の人は夜明けに死にました。死ぬのはたいい夜明けなんです。がとにかくあなたは、はいつてきた所から出て行くわけにはいきませんか。これはこと更お尋ねするわけではありませんよ、ただはいつてきた所から出て行くわけには？」

ジャン・ヴァルジャンは青くなつた。あの恐ろしい街路へまた出て行くことは、考えただけでもぞつとした。虎がいつぱいいる森から出て、やつと外にのがれたかと思うと、またそこにはいつてゆけと勧められたようなものだった。まだその一郭には警察の者らがうようよしている、警官は見張りをしているし、番兵は至る所に立っているし、恐ろしい拳は彼の襟首をねらっているし、ジャヴェルもおそらく四つ辻の片すみに待ち受けているだろう、そうジャン・ヴァルジャンは想像していた。

「それはできない！」と彼は言った。「フォーシルヴァン爺さん、まあ私は天から落ちてきたとしておいてもらいたい。」

「ええ私はそう思つてます、そう思つてますとも。」とフォーシルヴァンは言った。

「そんなことはおつしやらなくともよろしいですよ。神様はあなたをそばでよく見ようと

思つて手に取り上げて、それからまた下へおろされたのでしょうか。ただあなたを男の修道院の中へおろそうとして、まちがえられたんです。それ、また鐘が鳴ります。門番へ合い図の鐘です。門番は役所へ行つて、検死の医者をよこすように頼むんです。それは人が死んだ時にきまつてやることです。修道女たちは医者が来るのをあまり好き^すきません。医者という者は少しも信仰のないものですから。医者は面^{かお}紗^{ぎぬ}をはずしたり、時とすると他の所までめくりまゐります。それにしてもこんどは大変早く医者を呼びますが、どうしたんでしょう。あああなたのお兄さんはまだ眠つていますね。何とおつしやるんですか。」

「コゼット。」

「あなたの娘さんですか。まあ言わば、あなたはその祖父^{おじい}さんとも？」

「そうだ。」

「娘さんの方は、ここから出るのはわけはありません。中庭に私の通用門があるんです。たたけば門番があけてくれます。負いかごを背負つて娘さんの中に入れて、そして出ます。フォーシユルヴァン^{じい}爺さんが負いかごをかついで出かける、ちつとも不思議なことじやありません。娘さんには静かにしてるように言つといて下さればよろしいです。上に覆^{おお}いをしておきます。シユマン・ヴェール街に果^{くだもの}物屋^やをしてる婆^{おば}さんで私がよく知つてる者が

ありますから、いつでもそこに預けることにしましょう。聲でして、小さな寢床も一つあります。私の姪^{めい}だが、明日^{あした}まで預つていてくれ、と耳にどなってやりましょう。そしてまた娘さんはあなたといつしよにここにはいつてくるようにしたらいでしょうか。私はあなたがここにはいれるように工夫します。ぜひともそうします。ですが、どうしてまずあなたは出たものでしょう。」

ジャン・ヴァルジャンは頭を振った。

「私は人に見られてはいけないのだ。それが一番大事な点だ、フォーシユルヴァンさん。コゼットのようにかごにはいつて覆^{おほ}いをして出られる方法はないものだろうか。」

フォーシユルヴァンは左手の中指で耳^{みみたぶ}をかいだ。非常に困まったことを示す動作だった。

その時第三の鐘が鳴つて頭を他に向けさせた。

「あれは検死の医者をいよいよ迎いにゆく合図です。」とフォーシユルヴァンは言った。「医者は死人を見てから、死んでいる、よろしい、と言うんです。天国への通行券に医者が署名しますと、葬儀屋が棺をよこします。長老だと長老たちが、普通の修道女だと修道女たちが、死体を棺に納めます。それから私が釘^{くぎ}を打つんです。それは庭番の仕事の一つ

になっています。庭番は墓掘り人の用までするんです。棺は会堂の低い室に入られます。室は、往來に続いていまして、検死の医者のほかはだれも男ははいることができません。もつとも人夫どもだの私などは人数のうちにははいりませんからな。私が棺に釘を打つのはその室の中です。そして人夫どもが棺を取りにきて、馬に鞭むちをあてて行つてしまします。そういうふうにして天国に行くんですよ、空からの箱を持ってきて、それに何かを入れて持つて行くんです。そういうのが葬式です。デ・プロフォンデイスです。」（訳者注 深き淵よりわれは主よなんじを呼ばわりぬ、という死者の祈りの句）

ま横から低くさしてくる太陽の光が、コゼットの顔に当たっていた。眠っている彼女は、ぼんやりと口を少し開いていて、光を吸つてゐる天使のようだった。ジャン・ヴァルジャンはその顔をながめはじめていた。彼はもうフォーシユルヴァンの言うことに耳を傾けていなかった。

耳を傾けられていないことは口をつぐむ理由とはならない。善良な老庭番は、静かにくどくどと話を続けた。

「墓穴はヴォージラールの墓地に掘るんです。何でもその墓地はまもなく廃止になるということです。古い墓地でして、規定外のものだとか、規則に合わないとかで、取り払われ

るんだそうです。困ったものですよ。至って便利ですがね。そこには私の知つてゐる者が一人います。メティエン又爺さんじいと言つて、墓掘りです。ここの修道女たちは特別に許されていまして、夜になつてからその墓地に運ばれるんです。彼女たちのために特別な市庁の許可があるんです。ですがまあ昨日から何といるなことが起こつたことでしよう！クリュシフィクシオン長老は死なれるし、それにマドレーヌさんまでが……。」

「葬られたのだね。」とジャン・ヴァルジャンは悲しげにほほえんで言つた。

フォーシユルヴァンはその言葉じりを取り上げた。

「なるほど、すっかりここにはいつてしまわれたら、全く葬られたことになりすな。」

四番目の鐘の音が響いてきた。フォーシユルヴァンは急に鈴のついた膝当ひざあてを釘から取りおろして、それを膝ひざにはめた。

「こんどは私の番です。院長さんが私を呼んでいます。どれ一走り行つてきます。マドレーヌさん、ここを動いてはいけませんよ。待つていて下さい。何かまた工夫もつきましようから。腹がすきましたら、あすここに葡萄酒ぶどうしゅもパンもチーズもありますよ。」

そして彼は小屋を出ながら言つた、「ただ今参ります、ただ今！」

ジャン・ヴァルジャンは彼の姿を見送つた。彼はその跛の足でできる限り急いで、横目

で瓜^{うり}畑^{ばたけ}の方を見ながら庭を横ぎつて行つた。

それから十分とたたないうちに、フォーシユルヴァン爺^{じい}さんは鈴の音で修道女らを追い散らしながら進んでいつて、一つの扉^{とびら}を軽くたたいた。静かな声の中から答えた、「永遠に、永遠に、」すなわち「おはいり」と。

その扉は、用のある時庭番を呼ぶことになつてゐる応接室の扉だった。その応接室は集会の室^{へや}に続いてゐた。修道院長は室の中にあるただ一つの椅子^{いす}に腰掛けて、フォーシユルヴァンを待つてゐた。

二 難局に立てるフォーシユルヴァン

急迫した場合にいらだつたしかも沈痛な様子をするのは、ある種の性格の人やある種の職業の人には常のことであるが、ことに牧師や修道者にはそうである。フォーシユルヴァンがはいつてきた時、そういう二種の懸念の様子は院長の顔つきの上に現われてゐた。普通ならば、その学者であつて愛^{あい}嬌^{きやう}のあるブルムール嬢すなわちイノサント長老は、至つて快活な人だったのである。

庭番はおずおずしたおじぎをして、室の入り口に立ち止まった。院長はその大念珠を爪繰まぐつていたが、目を上げて言つた。

「ああフォーヴァン爺さんですか。」

その省略名が修道院でも使われていた。

フォーシユルヴァンはまたおじぎをした。

「フォーヴァン爺じいさん、お前を呼んだのは私わたしですよ。」

「それで私は参りました。」

「お前に話があります。」

「私の方でもちようど、」とフォーシユルヴァンは内心に恐れながらも思い切つて言つた、
「長老様に少々申し上げたいことがございます。」

院長は彼をじつと見た。

「ああ何か私の耳に入りたいことがあるんですか。」

「お願いがございますので。」

「では、話してごらんなさい。」

もと公証人書記をやった朴訥ぼくとつなフォーシユルヴァンは、物に動じない百姓とでも言う

べき人物だった。一種の巧妙な無知というものは一つの力である。だれもそれに用心をしないで、かえってそれにいたされる。修道院に住むようになってから二年以上の間、フォーシウルヴァンは会衆の間にはなほだうまく立ちまわった。いつも一人で、庭の仕事を片付けながら、彼はただ好奇の目を見張ることばかりをしていた。行き来する面紗かおぎぬをかけた女たちから遠くに離れていたので、彼はほとんど自分の前には影が動き回るのを見るだけだった。けれども注意と炯けい眼がんとをもつて、彼はついにそれらの幽霊に肉を与え、それらの生きながらの死人をよみがえらすに至った。彼はあたかも、聾のために目が鋭くなった人のようだし、また盲目のために耳が鋭くなった人のようだった。彼は種々な鐘の音の意味を解くにつとめて、それに成功し、そしてついにその謎なぞのような沈黙の修道院の内部をことごとく知ってしまった。スフィンクスはそのあらゆる秘密を彼の耳にしゃべってしまった。ところがフォーシウルヴァンはすべてを知りながら、すべてを隠していた。そこに彼の技巧があった。修道院の者はみな彼をばかだと思っていた。それは宗教においては大きな価値となる。声の母たちはフォーシウルヴァンを重宝がった。彼は珍しいほど無口だった。それで人々の信用を得た。その上彼はきちょうめんであつて、また果樹や野菜などのためのはつきりした用事のほかは外出しなかった。そういう慎重な行ないが彼のため

になった。それでも彼は二人の男にいろいろなことをしやべらした。修道院では門番に、そして彼は応接室の種々なことを知った。墓地では墓掘り人に、そして彼は墓場の種々なことを知った。そのようにして彼は、修道女たちのことに關して二重の知識を得た、一つはその生について、一つはその死について。しかし彼は何一つ利用しなかった。会衆は彼を大事にした。年取つて、跛者で、何事にも盲目で、また耳も少し遠いらしいので、これ以上都合のいいことはなかった。彼に代わるべき者はほとんどないと皆思つていた。

爺^{じい}さんは、自分がよく思われてることを知つてるので安心して、修道院長様の面前で、かなりごたごたしたしきもきわめて意味の深いおしやべりを田舎言葉^{いなかことば}でやり出した。彼はくどくどと、老年であること、身体がよくきかないこと、以前より二倍も骨が折れること、仕事もしだいに多くなること、庭の広いこと、たとえば昨夜のように月のいい晩には瓜^{うりば}畑^{たけ}の上に蓆^{こも}をかぶせてやらなければならなかったりして夜明かしをすること、いろいろ並べ立ててからついに言い出した。自分には一人の弟がある——（院長はちよつと身を動かした）——けれども年取つている（院長はまた身を動かしたが、それは安心の身振りだった）——もし許されるなら、弟にきてもらつていっしょに住んで助けてもらいたい。弟はすぐれた園丁である。弟は自分よりはるかに会衆の役に立つに違いない。——もし

また、弟が許されないようなことになる、それより年上である自分の方は、全く弱り切つてしまつてるので、仕事にたえられなくて、非常に残念ではあるが、暇を頂かなければならないかも知れない。――弟には小さな娘が一人あるので、それを連れて来るだろう。そしたらここで神様のもとに育てられて、あるいは後に一人の修道女とならないとも限らない。

彼がそういう話をしてしまつた時に、院長は大念珠を爪繰つまぐるのをやめて、そして言つた。

「今から晩までのうちに、丈夫な鉄の棒を一本手にいれることができるでしょうか。」

「なにになさるのでございますか。」

「物を持ち上げるためです。」

「承知いたしました、長老様。」とフォーシユルヴァンは答えた。

院長はその他には一言も言わずに、立ち上がつて、隣の室にはいつて行つた。そこは集会へやの室で、たぶん声の母たちが集まつていたのであろう。フォーシユルヴァンは一人取り残された。

三 イノサント長老

約十五分ばかり過ぎた。修道院長は戻ってきて、椅子にまた腰掛けた。

二人とも何かに頭を満たされてるようだった。今ここに、二人の間にかわされた対話ができる限りそのまま速記してみよう。

「フォーヴァン爺さん。」

「長老様。」

「お前は礼拝堂を知っていますね。」

「礼拝堂に私は、弥撒や祭式を聞きます自分の小さな席を持っております。」

「それから用のために歌唱の間へはいったこともありますね。」

「二、三度ございます。」

「あそこの石を一枚上げるのです。」

「あの重い石でございすか。」

「祭壇のわきにある舗石です。」

「窄あなぐらをふさいでるあの石でございすか。」

「そう。」

「そういうことをいたすにも、二人いた方が便利でございますよ。」

「男のように強いあのアッサンシオン長老がお前に手伝つて下さるでしょう」

「女の方かたと男とは別でございます。」

「お前の手助けといつては、ここには女一人きりおりません。だれでもできる限りのことをするよりほかはありません。マビヨン師は聖ベルナルの四百十七篇を書かれ、メルロヌス・ホルステイウスはその三百六十七篇しか書かれなかったからといって、私はメルロヌス・ホルステイウスを輕蔑しはしません。」

「さようでございますとも。」

「自分自分の力に依じて働くことが尊いのです。修道院は工場ではありません。」

「そして女は男ではございません。私の弟は強い男でございます。」

「それから槓てこ桿を一つ用意しておきますように。」

「あのような扉とびらに合う鍵かぎといつては槓てこ桿のほかにはありません。」

「石には鉄の輪がついています。」

「槓桿てこをそれに通しましょう。」

「そして石は軸の上に回るようにしてあります。」

「それはけっこうでございます。^{あなぐら} 窖を開きましょう。」

「そして四人の歌唱の長老たちが立会つて下されます。」

「そして窖をあけてからには？」

「またしめなければなりません。」

「それだけでございますか。」

「いいえ。」

「何でもお言いつけ下さい、長老様。」

「フォーヴァンや、私たちはお前を信用しています。」

「私は何でもいたします。」

「そして何事も黙っていますね。」

「はい、長老様。」

「窖をあけましたらね……。」

「またしめます。」

「でもその前に……。」

「何でございますか、長老様。」

「その中に何か入れるのです。」

ちよつと沈黙が続いた。院長は躊躇するようにな、唇をとがらしたが、やがて言い出した。

「フォーヴァン爺さん。」

「長老様？」

「お前は今朝一人の長老が亡くなられたのを知っていましたよね。」

「存じません。」

「では鐘を聞きませんでしたか。」

「庭の奥までは何にも聞こえません。」

「ほんとうに？」

「自分の鐘の音もよく聞こえないくらいでございますから。」

「長老は夜の明け方に亡くなりました。」

「それに今朝は、風の向きが私の方へではございませんでしたから。」

「クリュシフィクション長老です。聖いお方でした。」

院長は口をつぐんで、心のうちで祈禱をとなえるかのようにちよつと唇を動かした。そ

してまた言った。

「三年前ですが、クリュシフィクション長老の祈っていられる所を見たばかりで、一人のジャンセニスト派の人が、ベテューヌ夫人が、正教徒になられたことがあります。」

「ああ長老様、今初めて私は喪の鐘が耳にはいりました。」

「長老たちが、会堂に続いている死人の室へ運ばれたのです。」

「わかりました。」

「お前のほかにはだれも男はその室にはいることはできませんし、はいってはいけませんのです。よく考えてごらん。ありがたいことです、死人の室へ男がはいるのは。」

「もつとたびく！」

「なに？」

「もつとたびく！」

「何を言うのです。」

「もつとたびくと申すのでございます。」

「何よりももつとたびくというのです？」

「長老様、何かよりももつとたびくと申すのではございません。ただもつとたびくと

申すのでございます。」

「お前の言うことはわかりませんね。なぜもつとたびくと言うのですか。」

「長老様のように申そうと思つてでございます。」

「けれど私はもつとたびくなどとは言いませんでしたよ。」

「おつしやりはしませんでした。けれども私は、長老様のおつしやるとおりに申そうと思つて、そう申したのでございます。」

その時九時の鐘が鳴った。

「朝の九時にまたそれぞれの時間に、祭壇の聖体にしょうさん頌讃と礼拝とがありますよう。」
と院長は唱えた。

「アーメン。」とフォーシウルヴァンは言った。

ちようどよく時間が鳴ったのである。それは「もつとたびく」を短く切り上げてくれた。もしその鐘が鳴らなかつたら、おそらくいつまでたつても、院長とフォーシウルヴァンとはその迷語をかたづけることができなかつたであらう。

フォーシウルヴァンは額をふいた。

院長はまた、何かきとう祈禱らしいことを心の中でちよつとつぶやいて、それから口を開いた。

「クリュシフィクション長老は、生前多くの人を本当の信仰に導かれました。亡くなられてからは、きつと奇蹟を行なわれるでしょう。」

「行なわれるでございましょうと！」とフォーシユルヴァンは言葉を合わせて、再び失策をすまいとつとめながら答えた。

「フォーヴァン爺さん、この組合の人たちは皆クリュシフィクション長老において祝福されました。もとより、ベリユール枢機官のように聖弥撒を唱えながら死に、または、いまこの供物をいたしますと唱えながら神様のもとへ魂をお返しすることは、だれにでも許されていることではありません。けれども、それほどの幸福にまでは達せられなくとも、クリュシフィクション長老は、いたって尊い臨終をなされました。最期まで気を失わないでいられました。初めは私たちに話しかけていられましたが、後には天使たちに話しかけていられました。そして私たちに最後の希望を申されました。お前も、いま少し信仰があつて、あの方の部屋にはいることができていたら、お前の足に触れてそれをおなおし下すつたろうものにね。あの方はほえまれました。神様のうちによりみがえられたのだと、みな思いました。御臨終は、まったく天国へでも行かれるようでありましたよ。」

フォーシユルヴァンはそれが祭文が終わったのだと思つて言つた。

「アーメン。」

「フォーヴァン爺さん、死んだ方のお望みは果してあげなければいけません。」

院長は念珠を少し爪繰った。フォーシユルヴァンは黙っていた。院長は言い進んだ。

「私はこのことについて、教えの道に身をささげてりっぱな効果を上げられている多くの聖職の方々に相談したのです。」

「長老様、庭の中よりここの方がよく喪の鐘が聞こえます。」

「その上、あの方はただ亡くなった人というよりも、聖者と申し上げたいお方です。」

「あなた様のように、長老様。」

「あの方はこの二十年というもの柩の中におやすみになりました、私どもの聖なる父ピウス七世の特別のお許しで。」

「あの冠を授けられた方でございましょう、皇……ブオナパルトに。」

フォーシユルヴァンのような、りこうな者としては、そういう思い出はまずいことだった。ただ仕合わせにも院長は自分の考えばかりに没頭して、それを耳にしなかった。彼女は続けて言った。

「フォーヴァン爺さん。」

「長老様？」

「カパドキアの大司教ディオドロス聖者は、地の虫けらという意味のアカロスという、ただ一字を墓石に彫るようと望まれました、そしてそのとおりにされました。そうではありませんか。」

「はい、長老様。」

「アクイラの修道院長メツオーカネ上人は、絞首台の下に埋めらるるように望まれました。そして、それもそのとおりにされました。」

「さようでございます。」

「チベル河口にあるポールの司教テレンチウス聖者は、通る人々が墓に唾つばをかけて行くようにと、親殺しの墓につける標しるしを自分の墓石にも彫るように望まれました。そしてそれもそのとおりにされました。死んだ方のお望みには従わなければなりません。」

「さようになりますように。」

「フランスのローシュ・アベイユの近くでお生まれなされたベルナル・ギドニスは、スペインのチュイの司教であられましたけれど、またカステイユの王様のおぼしめしもありましたけれど、その身体はお望みどおりにフランスのリモージュのドミニック派の会堂

に運ばれました。それは嘘うそだとは申せないでしょう。」

「申せませんとも、長老様。」

「その事実はプランタヴィ・ド・ラ・フォスによつて証明されています。」

また沈黙のうちに念珠が少し爪繰つまぐられた。院長は言った。

「フォーヴァン爺じいさん、クリュシフィクシオン長老は、二十年の間寝ていられた柩ひつぎの中に葬られなければなりません。」

「当然のことでございます。」

「それはただお眠りを続けられることです。」

「それで私はそのお柩くぐに釘くぎを打つのでございましょう？」

「ええ。」

「そして葬儀屋の棺はやめにするのでございましょう？」

「そのとおりです。」

「私は組合の方々かたがたの御命令どおりに何でもいたします。」

「四人の歌唱の長老たちがお手伝いして下されます。」

「柩に釘を打つのにでございますか。お手伝いはいりません。」

「いいえ。柩をおろすのに。」

「どこへおろします？」

あなぐら

「窖の中へです。」

「どの窖でございますか。」

「祭壇の下。」

フォーシユルヴァンはぞつとした。

「祭壇の下の窖。」

「祭壇の下。」

「けれども……。」

「鉄の棒があるでしょう。」

「ございます。けれども……。」

「お前は鉄の輪に棒を差し入れてその石を起こすのです。」

「けれども……。」

「死んだ方のお望みには従わなければなりません。礼拝堂の祭壇の下あなぐらの窖の中へ葬られること、汚れた土地の中へ行かないこと、生きてる間祈りをしていた場所に死んでもとどま

りたいこと、それがクリュシフィクシオン長老の最後の御希望でありました。あの方はそれを私どもに願われました、云いかえれば、おいいつけなさいました。」

「けれども、それは禁じられてあります。」

「人間によつて禁じられていますが、神によつて命ぜられているのです。」

「もし知れましたら？」

「私たちはお前を信じています。」

「おお私は、この壁の石と同様口外はいたしません。」

「集会が催されています。私は声の母たちになお相談したのですが、皆評議の上で、クリュシフィクシオン長老は御希望どおりにその柩ひつぎに納めて祭壇の下に葬ることに、きまつたのです。まあ考えてごらん、もしここで奇蹟が行なわれたらどうでしょう！ 組合のものにとつては何という神の栄光でしょう！ 奇蹟というものは墓から現われて来るものです。」

「けれども、長老様、もし衛生係りの役人が……。」

「聖ベネディクト二世は、墓の事でコンスタンチヌス・ポゴナチウス皇帝と争われました。」

「それでも警察の人が……。」

「コンスタンス皇帝の時に、ゴールにはいつてこられた七人のドイツの王様の一人であったコノデメールは、宗門の規定で葬られること、すなわち祭壇の下に葬られることを、修道士たちの権利として特に認可されました。」

「けれども警視庁の検察官が……。」

「世俗のことは十字架に対しては何でもありません。シャルトルーズ派の十一番目の会長であったマルタンは次の箴言しんげんをその派に与えられました。世の変転を通じて十字架は立つなり。」

「アーメン。」とフォーシウルヴァンは終わりのラテン語に対して言った。彼はラテン語を聞くごとに、いつもそうしてごまかすのだった。

長く沈黙を守っていた者にとつては、だれか一人聞き手があればそれで足りるものである。ある時、ジムナストラスという修辞学の教師が牢獄から出たが、多くの両刀論法や三段論法などが全身にいつぱいつまっていた、立ち木に出会うとたちまちその前に立ち止まり、それに弁論をしかけ、それを説服するために大変な努力をしたという話がある。修道院長は、平素は厳格な緘黙かんもくの規則に縛られていたので、言葉の袋がはちきれそうにいつ

ばいふくらんでいた。それで立ち上がって、水門を切って放ったがように滔々^{とうとう}と弁じ立てた。

「私は右にベネディクトと左にベルナルとを味方に持っています。ベルナルといえば、クレールヴォーの最初の修道院長でありました。ブルゴーニユのフォンテーヌは、彼を生んだ祝福された土地です。父をテスランといい、母をアレートと申しました。彼はクレールヴォーに至るまでにまずシトーに止まっていました。シャーロン・スүүл・ソーヌの司教ギーヨーム・ド・シャンポーから修道院長の位を授かりました。彼に導かれた修練士が七百人ありまして、彼の建てた修道院が百六十あります。一一四〇年にはサンスの会議でアベラールを説き伏せ、また、ピエール・ド・ブリユイやその弟子のアンリや、その他アポストリックといわれていた邪教徒の一種を説き伏せました。それから、アルノー・ド・ブレスをうちひしぎ、ユダヤ人殺戮者^{さつりくしゃ}のラウール修道士をうち破り、一一四八年にはランスの会議を続べ、ポアティエの司教ジルベール・ド・ラ・ポレーを罪し、エオン・ド・レトアールを罪し、諸侯の軋轢^{あつれき}をやめさせ、ルイ・ル・ジューヌ王の目を開かせ、法王ウーゼニウス三世に助言し、タンブル騎士団を整え、十字軍を説き回り、生涯^{しょうがい}に二百五十の奇蹟を行ない、一日に三十九の奇蹟を行なったこともあります。それからベネ

デイクトと言えば、モンテ・カシノの総主教であり、神聖修道院の基を定めた第二の人であり、西方のバジリオスであります（訳者注 四世紀ギリシャ教会の神父にしてキリスト教修道院の創設者）。彼の派からは、四十人の法王がいで、二百人の枢機官がいで、五十人の総主教と、千六百人の大司教と、四千六百人の司教と、四人の皇帝と、十二人の皇后と、四十六人の国王と、四十一人の王妃と、三千六百人の列聖者とが出ました。一四〇〇年来、連綿と続いています。一方に聖ベルナル、他方に衛生の役人、一方に聖ベネディクト、他方に風紀監督官！ 国家や、風紀や、葬儀や、規則や、行政や、そんなものを私たちは一々知ってるものですか。まあどんなふうに私たちが扱われてるかを見たら、だれだって憤慨するでしょう。私たちには、自分の塵（ちり）をイエス・キリストにささげるの権利さえも許されていません。衛生などは革命が発明したものです。神が警察に属するようになったのです。そういうのが今の時代です。おだまりなさい、フォーヴァン！」

フォーシルヴァンはその折檻（せつかん）の下にあつて、気が気でなかった。修道院長は続けた。「埋葬地に対する修道院の権利は、だれにもわかりきったことです。それを否定するのは、狂信者か迷いの者かばかりです。私たちは今恐ろしい混乱の時代に生きています。人は皆、知るべきことを知らず、知るべからざることを知っています。皆汚れており、信仰を失つ

ています。至大なる聖ベルナルと、十三世紀のある坊さんで、いわゆるポーヴル・カトリックのベルナルといわれた人とを、皆混同してしまつてゐるような時代です。また、ルイ十六世の断頭台とイエス・キリストの十字架とをいっしょにするほど神を恐れない者もいます。ルイ十六世は一人の国王にすぎなかつたのです。ただ神にのみ心を向くべきです。そうすればもはや、正しい人も不正な人もなくなりません。今の人はヴォルテールという名前を知つて、セザール・ド・ブユスという名前を知りません。けれどもセザール・ド・ブユスは至福を得た人で、ヴォルテールは不幸な人です。この前の大司教ペリゴール枢機官は、シャール・ド・ゴンドランがベリユールのあとを継ぎ、フランソア・ブールゴアンがゴンドランのあとを継ぎ、ジャン・フランソア・スノールがブールゴアンのあとを継ぎ、サント・マルト長老がジャン・フランソア・スノールのあとを継いだこと、そういうことも知らなかつたのです。人がコトン長老の名前を知つてゐるのは、オラトール派の創立に力を尽した三人のうちの一人であつたからではなく、新教派の国王アンリ四世のために自分の名を提供して誓言の材料に供したからです。サン・フランソア・ド・サールが世俗の人に好まれるのは、カルタ遊びにごまかしをしたからです。それにまた人は宗教を攻撃します。それもただ、悪い牧師たちがいたからです。ガプの司教サジテールがアンブロン

司教サローヌの兄弟であり、二人ともモンモルの衣鉢いはつを継いだからです。しかし、そういうことも結局どれだけの影響がありましよう。そういうことがあってもやはり、マルタン・ド・トゥールは聖者でありまして、自分のマントの半分を貧しい人に与えたではありませんか。人は聖者たちを迫害します。人は真実に対しては目をふさぎます。暗黒が普通のこととなっています。が、盲目な獣こそ最も猛悪な獣です。だれもまじめに地獄のことを考えていないのです。何という恥知らずの人民どもでしょう！ 国王の名によってということは今日、革命の名によってという意味になっています。もう人は、生者に負うところのものも知らず、死者に負うところのものも知りません。聖者のように死ぬことは禁じられています。墳墓は俗事となっています。これは恐ろしいことです。法王聖レオ二世は、特別な宸翰しんかんを二つ書かれました、一つはピエール・ノテールに、一つはヴィジゴートの王に。それは、死者に関する問題について、太守の権力と皇帝の主権とに反抗し、それをしりぞけたためのものでした。シャールンの司教ゴーティエは、その問題についてブルゴーニュ公オトンに対抗されました。昔の役人はその点については同意しました。昔は私たちは、世事に関しても勢力を持っていました。この会派の会長シトーの修道院長は、ブルゴーニュの議会の世襲の評議員でありました。私たちは私たちの死者について欲する

とおりに行なうのです。聖ベネディクトは五四三年三月二十一日土曜日にイタリアのモンテ・カシノで死なれましたが、そのお身体は、フランスのサン・ブノア・スユール・ロアルといわれるフルーリー修道院にあるではありませんか。これは確かな事実です。私は邪道の聖歌者を忌み、修道院長をきらい、信徒を憎むのですが、だれでも私が言ったことに反対を唱える者をなおいっそう軽蔑するでしょう。アルヌール・ヴィオンやガブリエル・ブスランやトリチームやモーロリキユスやリユク・ダシュリー師などの書いたものを読めばわかることです。」

院長は息をついた。それからフォーシユルヴァンの方へ向いて言った。

「フォーヴァン爺さん^{じい}、わかりましたか。」

「わかりました、長老様。」

「お前をあてにしてよいでしょうね。」

「御命令どおりにいたします。」

「そうです。」

「私はこの修道院に身をささげています。」

「ではそうきめます。お前は柩^{ひつぎ}の蓋^{ふた}をしますのです。修道女たちがそれを礼拝堂に持ってゆ

きます。死の祭式を唱えます。それからみな修道院の方へ帰ります。夜の十一時から十二時までの間に、お前は鉄の棒を持って来るのですよ。万事ごく秘密に行なうのです。礼拝堂の中には四人の歌唱の長老とアッサンシオン長老とお前とのほかはだれもいませんでしょう。」

「それと柱に就^つかれてる修道女が。」

「それは決してふり向きません。」

「けれども音は聞くでございましょう。」

「いいえ聞こうとはしますまい。それに、修道院の中で知れることも、世間には知れません。」

またちよつと言葉がとぎれた。院長は続けた。

「お前はその鈴をはずすがよい。柱に就^ついてる修道女にお前のきたことを知らせるには及ばないから。」

「長老様。」

「なに？ フォーヴァン^{じい}爺さん。」

「検死のお医者様はもうこられましたか。」

「今日の四時にこられるでしょう。お医者様を呼びにゆく鐘はもう鳴らされました。お前はそれを少しもききませんでしたか。」

「自分の鐘の音ばかりにしか注意しておりませんので。」

「それでよいのです、フォーヴァン爺さん。」

「長老様、少なくとも六尺くらいの槓桿てこがいりますでしょう。」

「どこから持ってきます?」

「鉄格子てつこうしのある所には必ず鉄の棒がございます。庭のすみにも鉄の切れが山ほどございます。」

「十二時より四五十分前がよい。忘れてはなりませんよ。」

「長老様?」

「何です?」

「まだほかにこんな御用がございましたら、ちょうど私の弟が強い力を持っておりますので。トルコ人のように強うございます。」

「できるだけ早くやらなければいけませんよ。」

「そう早くはできませんのです。私は身体がよくききません。それで一人の手助けがいる

のでございます。第一跛者でございます。」

「跛者なのは罪ではありません。天のお恵みかも知れません。にせの法王グレゴリウスと戦つてベネディクト八世を立てられた皇帝ハインリツヒ二世も、聖者と跛者という二つの^{あだな}綽名を持つていられます。」

「二つの^{がいとう}外套は悪くはございません。」とフォーシルヴァンはつぶやいた。彼の耳は実際にくらか聞き違いをすることがあつた。

「フォーヴァン^{じい}爺さん、一時間くらいはかかるつもりでいます。それくらいはみておかなければなりませんまい。十一時には鉄の棒を持つて、主祭壇の所へきますようにね。十二時には祭式が初まります。それより十五分くらい前にはすっかり済ましておかなければなりません。」

「何事でも組合の方々のためには一生懸命にいたします。確かにいたします。私は^{ひつぎくぎ}柩に釘を打ちます。十一時きつかりに礼拝堂へ参ります。歌唱の長老たちとアブサンシオン長老とがきていられるのでございますな。なるべくなら男二人の方がよろしゅうございますが、なにかまいません。槓^{てこ}を持つて参ります。^{あなぐら}窖を開きまして、柩をおろしまして、そしてまた窖を閉じます。そういったせば何の跡も残りますまい。政府も気づきはしますまい。長

老様、それですっかりよろしいんでございますな。」

「いいえ。」

「まだ何かございますか。」

「空の棺が残っています。」

それでちよつと行き止まった。フォーシユルヴァンは考え込んだ。院長も考え込んだ。

「フォーヴァン爺さん、棺をどうしたらいいでしょうかね。」

「それは地の中へ埋めましょう。」

「空^{から}のままです？」

また沈黙が落ちてきた。フォーシユルヴァンは左の手で、困難な問題を解決したかのような身振りをした。

「長老様、私が会堂の低い室^{へや}で棺に釘^{くぎ}を打つのでございます。そして私のほかにはだれもそこへはいれません。そして私が棺に喪布を掛けるのでございましょう。」

「そうです。けれども人夫たちは、それを車にのせ、そしてまた墓穴の中にそれをおろすので、中に何もはいつていないことに気づくでしょう。」

「なるほど、畜……」とフォーシユルヴァンは叫んだ。

院長は十字を切つて、じつと庭番の顔をながめた。生しょうという、あとの一語は彼の喉のどにつかえて出なかつた。

彼は急いで、その悪い言葉を忘れさすために一つの方法を考えついた。

「長老様、私は棺の中に土を入れて置きましょう。そういったせば人がはいつているようになりますでしょう。」

「なるほどね。土は人間と同じものです。ではそうしてお前はからの棺を処分してくれませぬ。」

「お引き受けいたします。」

その時まで心配そうで曇っていた修道院長の顔は、再び晴れ晴れとなった。彼女は庭番に、上役が下級の者をさがらする時のような合い図をした。フォーシユルヴァンは扉とびらの方へさがって行つた。彼がまさに出ようとする時、院長は静かに声を高めて言った。

「フォーヴァン爺じいさん、私はお前を満足に思いますよ。あした葬式がすんだら、お前の弟を連れておいでなさい。そして、その娘も連れて来るように言っておやりなさい。」

四 ジャン・ヴァルジャンとアウスティン・カステイーレホー

の記事

跛者の急ぎ足は片目の者の色目と同じで、中々目的物に届かないものである。その上、フォーシウルヴァンはまったく途方にくれていた。彼は庭のすみの小屋に帰りつくまでに、かれこれ十五分もかかった。コゼットはもう目をさましていた。ジャン・ヴァルジャンは彼女を火のそばにすわらしていた。フォーシウルヴァンがはいってきた時、ジャン・ヴァルジャンは壁にかかっている庭番の負^おい籠^{かご}をコゼットに示しながら言っていた。

「よく私の言うことをお聞き、コゼット。私たちはこの家から出なければなりません。けれどもまた帰ってきて、楽しく暮らせるんです。ここのお爺^{じい}さんが、お前をあの中に入れてかついで行ってくれます。そしてあるお上^{かみ}さんの家で私を待っているんですよ。私がすぐに連れにやってきます。とりわけ、テナルデイエの上^{かみ}さんにつかまりたくないから、よく言うことを聞いて、何にも言つてはいけませんよ。」

コゼットはまじめな様子でうなずいた。

フォーシウルヴァンが扉^{とびら}を開く音に、ジャン・ヴァルジャンはふり返った。

「どうだったね？」

「すっかりうまくいきました、もう何も残っていません。」とフォーシユルヴァンは言った。「私はあなたがはいるように許可を受けてきました。しかしあなたを入れる前に、あなたを出さなければなりません。困まるのはそのことです。娘さんの方はわけはありません。」

「お前さんが連れ出してくれるんだね。」

「黙っていてくれましょうね。」

「それは受け合うよ。」

「ですがあなたの方は？ マドレーヌさん。」

そして心配しきつてちよつと口をつぐんだ後、フォーシユルヴァンは叫んだ。

「どうか、はいつてこられた所から出ていつて下さい。」

ジャン・ヴァルジャンは最初そう言われた時と同じように、ただ一言答えた。「できない。」

フォーシユルヴァンはジャン・ヴァルジャンに向かってというより、むしろ独語するようにつぶやいた。

「も一つ困まったことがある。土を入れるとは言ったが、ただ身体の代わりに土を入れた

んでは、どうも本物と思えないだろう。うまくはゆくまい。ぐらぐらして、動くだろう。人夫どもは感づくだろう。ねえマドレーヌさん、政府に気づかれるでしょうな。」

ジャン・ヴァルジャンは彼の顔をまともにじつとながめた、そして気でも狂ったんではないかと思った。

フォーシユルヴァンはまた言った。

「どうして畜……あなたは出られますか。明日までにはやってしまわなければなりません。明日あなたを連れてくることになっています。院長さんはあなたを待っているんです。」

その時フォーシユルヴァンは、ジャン・ヴァルジャンがはいることを許されたのは、自分が組合のために尽す仕事の報酬であることを、説明してきかした。葬儀に参与するのは自分の職務の一つであること、自分は棺に釘を打ち墓地で墓掘り人に立ち会わねばならぬこと。今朝死んだ修道女は、長い間寢床にしていた柩に納めてもらいたいと願い、礼拝堂の祭壇の下にある窖のうちに葬ってもらいたいと願ったこと。それは警察の規則で禁じられてることだが、何事もこばめないほどの聖い修道女の願いであったこと。修道院長と声の母たちとは相談して、死者の希望どおりにしてやろうときめたこと。政府に対しては済まないが仕方ないこと。自分が室の中で柩に釘を打ち、礼拝堂の中で石の蓋を起こし、窖

の中に死人をおろすのであること。そしてそのお礼として、弟を庭番に姪めいを寄宿生に、二人とも家に入れることを院長が許したこと。弟というのはマドレーヌ氏であり姪というのはコゼットであること。明晩墓地で表面上の埋葬をした後、弟をつれて来るようにと、院長が彼に言ったこと。しかしマドレーヌ氏は外に出ていなければ、外から連れ込むことができないこと。そこに第一の困難があること。それからまた第二の困難があること、すなわち空棺が。

「その空棺とは何かね。」とジャン・ヴァルジャンは尋ねた。

フォーシユルヴァンは答えた。

「役所の棺ですよ。」

「どういう棺で、またどういう役所かね。」

「修道女が死にますと、役所の医者がきて、修道女が死んだと言います。すると政府から棺を送ってきます。そして翌日、その棺を墓地に運ぶために、車と人夫とをよこします。ところが人夫がやってきて棺を持ち上げてみると、中には何もはいっていないということになるんです。」

「何か入れたらいいだろう。」

「死人をですか。そんなものではありません。」

「いいや。」

「では何を入れます。」

「生きた人をさ。」

「どんな人をですか。」

「私をさ。」とジャン・ヴァルジャンは言った。

腰掛けていたフォーシユルヴァンは、自分の椅子いすの下に爆烈弾が破裂したかのように飛び上がった。

「あなたを！」

「なぜいけないんだ。」

ジャン・ヴァルジャンは冬空の中の光のように珍しくほほえんだ。

「ねえ、クリュシフィクシオン長老が死なれたとお前さんが言った時、私はつけ加えて言ったではないか、そしてマドレーヌさんも葬られたと。それはこのことなんだよ。」

「あああなたは笑っていらつしやる。本気でおつしやつてはいなさらないんですね。」

「本気だとも、ここから出なければならぬだろう。」

「そうですよ。」

「私にもまた負い籠かごと覆いとを見つけてくれと、言つたじゃないか。」

「それで？」

「その籠かごは樅もみの板でできていて、覆おおいは黒いラシャなんだ。」

「いや第一それは白いラシャですよ。修道女たちは白くして葬られるんです。」

「では白いラシャにするさ。」

「あなたは、マドレーヌさん、ほんとに変わった人です。」

まるで徒刑場の荒々しい大胆な策略でもあるようなそんな考案が、あたりの平穩な事物から浮かんできて、彼のいわゆる「修道院の杓しゃく子定規じようぎ」の中に入り込んでくるのを見ることは、フォーシュルヴァンにとってはいかにも意外で、サン・ドウニ街の溝みぞの中に鷗かもめが魚をあさつてゐるのを見つけた通行人にも似た驚きの情を、感じたのである。

ジャン・ヴァルジャンは続けて言つた。

「人に見つからずにここから出ることが要件なんだ。その一つの方法さ。しかしまず私に様子を知らしてくれ。いったいどういふぐあいになるのかね。その棺はどこにあるのかね。」

「空^{から}の方ですか。」

「そうだ。」

「死人の室^{へや}と呼ばれてます下の室です。二つの台の上のついでまして、とむらいのラシヤがかぶせてあります。」

「棺の長さはどれくらいある？」

「六尺ばかりです。」

「その死人の室^{へや}というのはどういふ所だ？」

「一階にある室^{へや}で、庭の方に格子^{こうしまと}窓がありますが、それは外から板戸でしめてあります。戸口が二つありまして、一つは修道院に、一つは会堂に続いています。」

「会堂というのは？」

「表に続いてる会堂で、だれでもはいれる会堂です。」

「君はその死人の室の二つの戸口の鍵^{かぎ}を持ってるかね。」

「いいえ。私はただ修道院へ続いてる戸口の鍵きり持っていないません。会堂へ続いてる方の鍵は門番が持っています。」

「門番はいつその戸口を開くのかね。」

「棺を取りにきた人夫どもを通させる時だけしか開きません。棺が出てゆくと、戸はまたしまるんです。」

「棺に釘くぎを打つのはだれだね。」

「私です。」

「棺にラシャをかけるのは？」

「私です。」

「君一人だけで？」

「警察の医者のほかは、だれも死人の室にはいることはできません。壁にもちゃんと書いてあります。」

「今晚、修道院の人たちが寝静まったところ、私をその室に隠してもらえまいかね。」

「それはできません。けれどその死人の室に続いてる小さな暗い物置きにならあなたを隠しておけます。そこは私の埋葬の道具を入れて置く所で、私がその番人で鍵かぎを持っています。」

「明日何時ごろ棺車は棺を迎えに来るのかね。」

「午後の三時ごろです。埋葬はヴォージラールの墓地で行なわれますが、日が暮れる少し

前です。すぐ近くじやありません。」

「では私は君の道具部屋に、夜と朝の間隠れていよう。それから食物は？　腹がすくだろう。」

「私が何か持つていつてあげましょう。」

「君は二時には、私を棺の中に釘づけにしにやって来るんだね。」

フォーシユルヴァンはしり込みして、指の節を鳴らした。

「それはどうも、できません。」

「なに、金槌^{かなづち}を取つて板に四五本釘を打つだけだ。」

繰り返して言うが、フォーシユルヴァンにとつて異常なことも、ジャン・ヴァルジャンにとつては何でもないことだった。ジャン・ヴァルジャンは最も危険な瀬戸ぎわをも幾度か通つてきたのである。だれでも監獄にはいったことのある者は、脱走の場所の広狭に応じて身を縮めるの術を知っている。病人が生きるか死ぬかの危機にとらわれてるように、囚人も逃走の念にとらわれている。脱走は回復である。回復せんがためには人は何事をも辞せない。行李^{こうり}のような四角なものの中に釘づけにされて運び出され、長い間箱の中に生きており、空気もない所に空気を見い出し、幾時間もの間呼吸を儉約し、死なないくらい

に息をつめる、そんなことはジャン・ヴァルジャンの恐ろしい能力の一つだった。

そのうえ、棺の中に生きた人間を入れること、囚徒のやるようなその手段は、また皇帝の手段だった。アウステイン・カステイーレホーという牧師の書いたものによれば、それはカール大帝の用いた方法だった。彼は退位の後、最後に、も一度ブロンベスという婦人に会わんために、棺の中に彼女を入れて、自分のはいってるユステの修道院を出入さしたということである。

フォーシユルヴァンは少し心を落ち着けて叫んだ。

「それでも、どうして息ができませんよう。」

「息はできるだろう。」

「あの箱の中で！ 私なんか思っただけで息がつまるようです。」

「きりがあるだろう。口のあたりに方々小さな穴をあけておいてくれ、そしてまた上の板も、あまりきつかりしまらないように釘くぎを打ってもらおう。」

「よろしうござんす。そしてもし咳せきが出たり、嘔くしゃみが出たりしましたら。」

「一心に逃げようとする者は、咳や嘔はしないものだ。」

そしてジャン・ヴァルジャンはつけ加えた。

「フォーシユルヴァンさん、決心しなければならんだ、ここでつかまるか、棺車が出るか、二つに一つを。」

少し開きかけてる扉とびらの間に猫ねこが止まって躊躇ちゆうちよする癖のあるのを、だれでも認めることがあるだろう。早くおはいりよ！ とだれでも言わない者はあるまい。それと同じく人間のうちにも、前に一事件が半ば口を開いている時、運命のため突然その口が閉ざされて身をつぶされる危険をも顧みずに、二つの決断の間に迷ってたたずむ傾向を持った人がいるものである。あまりに用心深い者は、猫のようであるにかかわらず、また猫のようであるがために、時とすると大胆な者よりかえって多くの危険に身をさらすに至る。フォーシユルヴァンはそういう狐疑こぎてき的な性質であつた。けれどもジャン・ヴァルジャンの冷静は、ついに彼を納得させた。彼はつぶやいた。

「実のところ、ほかに方法ありませんからな。」

ジャン・ヴァルジャンは言つた。

「ただ心配なのは、墓地でどういうことになるかだ。」

「そのことなら私が心得ています。」とフォーシユルヴァンは叫んだ。「棺から出ることをあなたが受け合いなさるなら、あなたを墓穴から引き出すことは私が受け合います。墓

掘りの男は、私の知ってる者のうちでの大酒飲みです。メティエン又爺さんじいといって、もう老耄おいぼれです。その墓掘りは墓穴の中に死人を入れますが、私は彼を自分のポケットの中にもるめ込んでやります。こういうふうにいたしましょう。薄暗くなる前に、墓地の門がしまる四五十分前に、向こうに行きつくでしょう。棺車は墓穴の所まで進んでゆきます。私がついてゆきます。私の仕事ですから、ポケットの中に金槌かなづちと鑿たがねと釘抜きくぎぬを入れて置きます。棺車が止まって、人夫どもがあなたの棺を縄でゆわえて、穴におろします。牧師が祈禱きとうをとなえ、十字を切り、聖水をまき、そして行ってしまいます。私はメティエン又爺さんと二人きりになります。まったく私とは懇意なんです。彼は酔っぱらってるか、いないか、どちらかです。もし酔っぱらっていなかったら、言ってやりましょう、ボン・コアンの家がしまらないうちに一杯引つけてこようや。私は彼を引っ張っていつて酔っぱらわせます。メティエン又爺さんを酔っぱらわすには造作はありません。いつでもいいかげん酔っていますから。私は彼をテーブルの下に寝かし、墓地にはいる札を取り上げてしまつて、一人で帰ってきます。そうすればもう私一人きりいないというわけになるんです。もし彼が初めから酔っぱらっていたら言ってやります。もう帰っていいや、私がお前の分もしてやるから。そう言えば彼は帰っていきます。そして私はあなたを穴から引き出

してあげましょう。」

ジャン・ヴァルジャンは彼に手を差し出した。フォーシユルヴァンはいかにも質朴な田舎者の感動をもつて急いでそれを握りしめた。

「それできまった、フォーシユルヴァンさん。万事うまくゆくだろう。」

「何かくい違いさえしなければ。」とフォーシユルヴァンは考えた。「もし大変なことにでもなったら！」

五 大酒のみにては不死の靈藥たらず

翌日太陽が西に傾いたころ、メーヌ大通りのまばらな行ききの者は、頭蓋骨や脛骨や涙などの描いてある古風な棺車の通行に対して、みな帽子をぬいだ。棺車の中には、白いうらしゃに覆われたひつぎ柩があつて、両腕をひろげた大きな死人のような黒い太い十字架が上に横たえてあつた。喪布を張った幌馬車ほろばしやが一つそのあとに続いて、白い法衣を着た一人の牧師と、赤い帽子をかぶった歌唱の一人の子供とが乗つてるのが見えた。黒い袖口そでぐちのついた鼠色ねずみいろの制服を着ている二人の葬儀人夫が、棺車の左右に従つていた。その後ろ

に、労働者のような服装をした跛者の老人がついていた。その行列はヴォージラールの墓地の方へ進んでいった。

老人のポケットから、金槌かなづちの柄や鋭利な鑿たがねの刃や釘くぎ抜きぬきの二つの角などがはみ出た。

ヴォージラールの墓地は、パリーの墓地のうちで例外のものとなっていた。それは特別の用に供されていて、したがって正門と中門とがあり、その一郭で古い言葉を守つてゐる老人どもはそれを、騎馬門かちもんと徒歩門と呼んでいた。前に述べたとおり、プティー・ピクプユスのベルナール・ベネディクト修道女らは、昔彼女らの組合の所有地だったその墓地の特別な片隅かたすみに夕方埋葬さるることが許されていた。それで墓掘り人らは、夏には日暮れに冬には夜に墓地の仕事を持っていたので、特殊な規則が設けられていた。パリーの墓地の門は、当時、日没と共にとざされることになっていて、それが市の制度の一つとなつたので、ヴォージラールの墓地もそれに従つていた。騎馬門と徒歩門とはその鉄格子てつこうしが続いていて、そばに一つの小屋があつた。ペロンネという建築者が建てたもので、墓地の門番が住んでいた。でそれらの鉄格子の門は、癪兵院の丸屋根の向こうに太陽が沈む時に必ずしめられた。もしその時墓地の中におくれた墓掘り人がいても、葬儀係りの役人から交

付された墓掘り人の札によって出ることができた。郵便箱のようなものが、門番の窓の板戸の中についていた。墓掘り人がその箱の中に自分の札を投げ込むと、門番はその音をきいて、綱を引き、徒歩門を開いてくれた。もし札を持っていない時には、墓掘り人は自分の名を名乗ると、もう床^{とこ}について眠^かつてることがよくある。門番は、起きてきて、顔をよく見定めて、それから鍵^{かぎ}で門を開いてくれた。そして墓掘り人は出られたが、十五フランの罰金を払わねばならなかった。

このヴォージラールの墓地は、規則外のその特殊な点で、取り締まり上の統一を乱していた。そして一八三〇年後、間もなく廃せられてしまった。東の墓地といわれるモンパルナスの墓地がそのあとを継いで、それからまたその墓地に半ば属していた有名な居酒屋をも承^うけ継いだ。その居酒屋の上には木瓜^{ぼけ}の実を描いた板が出ていて、ボン・コアン屋（上等木瓜屋）という看板で、酒場の食卓と墓石との間を仕切っていた。

ヴォージラールの墓地は、しおれた墓地ともいえるような趣があつて、もう衰微していた。苔^{こけ}がいつぱいはえて、花はなくなっていた。中流人はそこに埋めらるることをあまり好まなかった。貧民のような気がしたからである。パール・ラシエーズの墓地の方は上等だった。パール・ラシエーズに埋まることは、マホガニーの道具を備えるようなもので、

高雅に思われたのである。ヴォージラールの墓地はものさびた場所で、フランス式の古い庭園のようなふうに木が植わっていた。まつすぐな道、黄楊樹、柏かしわいらぎ、柊いちい、水松の古木の下
 の古墳、高い雑草。夕方などはいかにも物寂しく、きわめてわびしい物の輪郭が見られた。
 白いラシャと黒い十字架との棺車がヴォージラールの墓地の並み木道にさしかかつてきた時、太陽はまだ没していなかった。棺車の後に従つてる跛者の老人は、フォーシユルヴァンにほかならなかった。

祭壇の下あなぐらの窖へクリュシフィクション長老を葬ること、コゼットを連れ出すこと、ジャン・ヴァルジャンを死人の室へやに導くこと、それらはみな無事に行なわれて、何の故障も起こらなかった。

ついでに一言するが、修道院の祭壇の下にクリュシフィクション長老を葬ったことは、われわれに言わすればきわめて軽微な罪にすぎない。それは一種の務めともいうべきたぐいの過ちである。修道女らは何らの不安なしにばかりでなく、また本心の満足をもつてそれを行なつたのである。修道院にとつては、「政府」と称するところのものは權威に対する一干渉にすぎず、常に議論の余地ある干渉にすぎない。第一は教規である。法典などはどうでもよい。人間よ、欲するままに法律を定むるがよい、しかしそれは汝ら自身の

ためにのみとどめよ。シーザーへの貢物^{みつぎもの}は、常に神への貢物の残りに過ぎない。王侯といえども教義の前には何らの力をも持たないのである。

フォーシユルヴァンは跛を引きながら、いたって満足げに棺車のあとについていった。

彼の二つの秘密、彼の二重の策略、一つは修道女らとはかったこと、他はマドレーヌ氏とはかったこと、一つは修道院のためのもの、他は修道院に反するもの、その二つは同時に成功したのである。ジャン・ヴァルジャンの落ち着きは、周囲の者をも巻き込むほど力強いものだった。フォーシユルヴァンはもう成功を疑わなかった。残りの仕事は何でもないものだった。人のいい肥^{ふと}つ面^{つら}の墓掘り爺^{じい}メティエンヌを、彼はこの二年ばかりの間に十ぺんくらいは酔っぱらわしたことがあった。彼はメティエンヌをもてあそび、掌中にまるめこみ、自分の欲するままに取り扱った。メティエンヌの頭はいつもフォーシユルヴァンのかぶせる帽子のとおりになった。それで今フォーシユルヴァンはまったく安心しきっていた。

墓地へ通ずる並み木道に行列がさしかかった時、うれしげなフォーシユルヴァンは棺車をながめ、大きな両手をもみ合わせながら半ば口の中で言った。

「なんという狂言だ！」

突然棺車は止まった。門のところについたのである。埋葬認可書を示さなければならなかった。葬儀人は墓地の門番に会った。その相談はたいてい一、二分の手間をとるのだったが、その間に、一人の見なれない男がやってきて、棺車のうしろにフォーシウルヴァンと並んだ。労働者らしい男で、大きなポケットのついた上衣を着て、小脇こわきに鶴嘴つるはしを持っていた。

フォーシウルヴァンはその見知らぬ男をながめた。

「お前さんは何だね。」と彼は尋ねた。

男は答えた。

「墓掘りだよ。」

胸のまんなかを大砲の弾たまで貫かれてなお生きてる者があるとしたら、おそらくその時のフォーシウルヴァンのような顔つきをするだろう。

「墓掘り人だと！」

「そうだ。」

「お前さんが！」

「俺おれだよ。」

「墓掘り人はメティエンヌ爺さんだ。」

「そうだった。」

「なに、そうだったって？」

「爺さんは死んだよ。」

フォーシユルヴァンは何でも期待してはいたが、これはまた意外で、墓掘り人が死のうなどとは思ひもよらなかった。しかしそれはほんとうである。墓掘り人だからとて死なないとは限らない。他人の墓穴を掘ることによって人はまた自分の墓穴をも掘る。

フォーシユルヴァンはぼかんとしてしまった。ようやくにして、これだけのことを口ごもった。

「そんなことがあるだろうか。」

「そうなんだよ。」

「だが、」と彼は弱々しく言った、「墓掘り人はメティエンヌ爺さんだがな。」

「ナポレオンの後にはルイ十八世が出で、メティエンヌの後にはグリビエが出る。おい、俺の名はグリビエというんだ。」

フォーシユルヴァンはまっさおになつて、そのグリビエをながめた。

背の高いやせた色の青い男で、まったく葬儀にふさわしい男だった。あたかも医者に失敗して墓掘り人となった形だった。

フォーシユルヴァンは笑い出した。

「ああ、何て変なことが起こるもんかな！ メティエンヌ爺さんが死んだって！ メティエンヌじいさんは死んだが、小ちやなルノアール爺さんは生きてる。お前さんは小ちやなルノアール爺さんを知ってるかね。一杯六スーのまっかな葡萄酒（やっつ）がはいってる（びん）壇だよ。スユレーヌの壇だ。ほんとうによ、パリーの本物のスユレーヌだ。ああメティエンヌ爺さんが死んだって。かわいそうなことをした。おもしろい爺さんだったよ。だがお前さんも、おもしろい人だね。おいそうじやないかい。一杯飲みによこうじやないかね、これからすぐ。」

男は答えた。「俺は学問をしたんだ。第四級まで卒（お）えたんだ。酒は飲まない。」
棺車は動き出して、墓地の大きな道を進んでいった。

フォーシユルヴァンは足をゆるめた。その跛は、今では不具のためよりも心配のための方が多かった。

墓掘り人は彼の先に立って歩いていた。

フォーシユルヴァンは、も一度その待ち設けないグリビエの様子をながめた。若いが非常に老けて見え、やせてはいるがごく強い、そういう種類の男だった。

「おい。」とフォーシユルヴァンは叫んだ。

男はふり返った。

「私は修道院の墓掘り人だよ。」

「仲間だね。」と男は言った。

学問はないがごく機敏なフォーシユルヴァンは、話の上手な恐るべき相手であることを見てとった。

彼はつぶやいた。

「それではメティエンヌ爺さんは死んだんだね。」

男は答えた。

「そうだとも。神様はその満期の手帳をくつてみられたんだ。するとメティエンヌ爺さんの番だった。で爺さんは死んだのさ。」

フォーシユルヴァンは機械的にくり返した。

「神様が……。」

「神様だ。」と男はきっぱり言い放った。「哲学者に言わせると永劫えいこうの父で、ジャコバン党に言わせると最高の存在だ。」

「ひとつ近づきになろうじやないかね。」とフォールシルヴァンはつぶやいた。

「もう近づきになつてよ。君は田舎者いなかもので、俺おれはパリーっ児だ。」

「だがいっしょに酌くみかわさないうちはへだてが取れないからな。杯をあける者は心を打ち明けるといふものだ。いっしょに飲みいっしょににこないかね。断わるもんじやないよ。」

「仕事が先だ。」

これはとうていだめだ、とフォールシルヴァンは考えた。

修道女らの埋まる片すみにゆく小道にはいるには、もう数回車輪が回るだけだった。

墓掘り人は言つた。

「おい君、俺おれは七人の子供を養わなけりやならないんだ。奴らやつが食わなけりやならないからして、俺は酒を飲んじやおれないんだ。」

そして彼は、まじめな男が名句を吐く時のような満足さでつけ加えた。

「子供らの空腹は俺の渴かわきの敵さ。」

棺車是一群の糸杉の木立ちを回つて、大きな道を去り、小道をたどり、荒地にはいり、

茂みの中に進んでいった。それはもうすぐに埋葬地に着くことを示すものだった。フォーシウルヴァンは足をゆるめた。しかし棺車の進みを遅らすことはできなかった。幸いにも地面は柔らかで、かつ冬の雨にぬれていたもので、車の輪にからんでその進みを重くした。

彼は墓掘り人に近寄った。

「アルジャントウイユの素敵な酒があるんだがな。」とフォーシウルヴァンはつぶやいた。「君、」と男は言った、「俺はいつたい墓掘り人なんかになる身分ではないんだ。親父おやじは幼年学校の門衛だった。そして俺に文学をやらせようとした。ところが運が悪かった。親父は相場で損をした。そこで俺は文人たることをやめなければならなかったんだ。それでもまだ代書人はしてるよ。」

「ではお前さんは墓掘り人ではないんだね。」とフォーシウルヴァンは言った。弱くはあったがその一枝を頼りとしてつかまえたのである。

「両方でできないことはないさ。兼任してるんだ。」

フォーシウルヴァンはその終わりの一語がわからなかった。

「飲みによこうじゃないか。」と彼は言った。

ここに一言注意しておく必要がある。フォーシウルヴァンは気が気ではなかったが、と

にかく酒を飲もうと言ひ出したのである。しかしだれが金を払うかという一点については、はつきりさしてはいなかった。いつもはフォーシウルヴァンが言ひ出して、メティエンヌ爺さんじいが金を払った。一杯やろうという提議は、新しい墓掘り人がきたという新たな事情から自然に出て来ることで、当然のことではあつたが、しかし老庭番は、下したところ心なしにでもなかつたが、いわゆるラブレの十五分間（訳者注 飲食の払いをしなければならぬ不愉快な時）をあいまいにしておいた。ひどく心配はしていたが、進んで金を払おうという気にはなつていなかった。

墓掘り人は優者らしい微笑を浮かべながら言ひ進んだ。

「食わなければならぬからね。それで俺はメティエンヌ爺さんのあとを引き受けたのさ。まあ一通り学問をすれば、もう哲学者だ。手の働きをしてる上に俺は頭の働きをもしてるんだ。セーヴル街の市場に代書人の店を持っている。君はパラプリユイの市場を知ってるかね。クロア・ルージュの料理女どもは皆俺の所へ頼みに来る。俺はその色男どもへ贈る手紙を書いてやるんだ。朝にはやさしい恋文を書き、夕になれば墓穴を掘る。ねえ、そういうのが世の中さ。」

棺車は進んでいた。フォーシウルヴァンは心痛の頂上に達して四方を見回した。汗の大

きな玉が額から流れた。

「だが、」と墓掘り人はなお続けた、「二人の主人には仕えることができないものだ。俺^{おれ}もペンと鶴^{つる}嘴^{はし}といずれかを選ぶべきだ。鶴嘴は物を書く手を痛めるからね。」

棺車は止まった。

歌唱の子供が喪の馬車からおり、次に牧師もおりた。

棺車の小さな前の車輪の一つは、うずたかい土の上に少し上がっていた。その向こうに口を開いてる墓穴が見えていた。

「なんて狂言だ！」とフォーシルヴァンは啞然^{あぜん}としてくり返した。

六 四枚の板の中

棺の中にいたのはだれであるか？ 読者の知るとおり、ジャン・ヴァルジャンであった。ジャン・ヴァルジャンはその中で生きておれるだけの準備をしておいた、そしてわずかに呼吸をしていた。

本心の安静がいかにその他のいつさいのものの安静をもたらすかは、実に不思議なほど

である。ジャン・ヴァルジャンが考えた計画は、前日来着々としてつごうよく進んでいた。そして彼はフォーシユルヴァンと同じくメティエン又爺さんじいさんを当あてにしていた。彼は最後の成功を疑わなかった。これほど危険な状態でしかもこれほど完全な安心は、かつて見られないことだった。

ひつぎ
柩の四方の板からは、恐ろしい平安の気が発していた。死人の休息に似たある物が、ジャン・ヴァルジャンの落ち着きのうちにはいつて来るかのようにだった。

棺の底から彼は、死と戯れてる恐るべき芝居の各部分をたどることができ、また実際にどつていた。

フォーシユルヴァンが上の板に釘くぎを打ち終わってから間もなく、ジャン・ヴァルジャンは持ち出されるのを感じ、次に馬車で運ばれるのを感じた。動揺の少なくなったことで、舗石しきいしから堅い地面へ出たことを、すなわち街路を通りすぎて大通りにさしかかったことを感じた。重々しい響きで、オーステルリツツ橋を渡ったことを察した。初めちよつと止まったことで、墓地にはいったことを知った。二度目に止まった時、もう墓穴だなど彼は思った。

突然人の手が棺をとらえたことを彼は感じた。それから棺板の上をこするがさがさした

音を感じた。棺を穴の中におろすためにまわりを縄でゆわえてるのだと彼は察した。

それから彼は目が廻るような気がした。

たぶん人夫どもと墓掘り人とが棺をぐらつかして足より頭を先にしておろしたのである。そして程なくまた水平になって動かなくなった時、彼は初めてすっかり我に返ることができた。穴の底に達したのである。

彼はさすがに一種の戦慄を覚えた。

冷ややかでおごそかな一つの声が上の方で起こった。自分にわからないラテン語の言葉が、その一語一語とらえらるくらいゆっくりと響いて来るのを彼は聞いた。

「塵のうちに眠る者ら、やがて目ざむるに至らん、ある者は永遠の生命に、またある者は汚辱に。常に（訳者補 まことを）見んがためなればなり。」

一つの子供の声と言った。

「深き淵より。（訳者補 主よ我は爾を呼ばわりぬ）」

重々しい声がまた初めた。

「主よ彼に永遠の休息を与えたまえ。」

子供の声が答えた。

「恒^{つね}なる光は彼に輝かんことを。」

その時彼は身をおおうている板の上に、雨だれのような静かな音を聞いた。たぶんそれは聖水だったのだろう。

彼は考えた。「もうすぐに終わるだろう。少しの辛抱だ。牧師が立ち去る、フォーシユルヴァンはメティエンヌを飲みにつ張つてゆく、自分は一人になる。それからフォーシユルヴァンが一人で帰ってくる。そして自分は穴から出る。少しの間だ。」

重々しい声が言つた。

「安らかに憩^{いこ}わんことを。」

そして子供の声が言つた。

「アーメン。」

ジャン・ヴァルジャンは耳をそばだてながら、人の足音らしいものが遠ざかつてゆくのを知つた。

「皆立ち去つてゆくのだな。」と彼は考えた。「もう自分一人だ。」

するとたちまち頭の上に、雷が落ちたかと思われるような音が聞こえた。

それは一すくい土が棺の上に落ちた音だった。

次にまた一すくいの土が落ちてきた。

彼が息をしていた穴の一つは、そのためにふさがってしまった。

第三の土が落ちてきた。

次に第四の土が。

いかに強い男にとっても、それはあまりにもひどすぎた。ジャン・ヴァルジャンは氣を失った。

七 札をなくすなという言葉の起原

ジャン・ヴァルジャンがはいっていた棺の上の方では次のようなことが起こったのである。

棺車が立ち去った時、そして牧師と歌唱の子供とがまた馬車に乗って帰って行った時、墓掘り人から目を離さなかったフォーシユルヴァンは、墓掘り人が身をかがめて、うずたかい土の中にまっすぐにつきさしてある^{くわ}を手に取るのを見た。

その時フォーシユルヴァンは最後の決心をした。

彼は墓穴と墓掘り人との間につつ立ち、両腕を組んで、そして言った。

「金は私^{わし}が払う。」

墓掘り人は驚いて彼をながめ、そして答えた。

「何のことだよ？」

フォーシウルヴァンは繰り返した。

「金は私が払う。」

「何さ？」

「酒だよ。」

「何の酒だ？」

「アルジャントウイユだ。」

「アルジャントウイユってどこにあるんだ。」

「ボン・コアンの家^{うち}にある。」

「なんだばかにするな！」と墓掘り人は言った。

そして彼は一すくい of 土を棺の上にほうり込んだ。

棺はうつろな音を返した。フォーシウルヴァンはよろめいて、自分も墓穴の中にくろげ

落ちそうな気がした。喉をしめられたようなしわがれ声を交じえて彼は叫んだ。

「おい、ボン・コアンの戸がしまらないうちにさ！」

墓掘り人はまたで土をすくった。フォーシユルヴァンは言い続けた。

「私が払う。」

そして彼は墓掘り人の腕をつかんだ。

「まあきいてくれ。私は修道院の墓掘りだ。お前さんの手助けにきてるんだ。仕事は晩にすればいい。まあ一杯飲みに行つてからにしようじゃないか。」

そう言いながらも、絶望的にしつこく言い張りながらも、彼は悲しい考えを心のうちに浮かべていた。「そして酒は飲むとしても、果して酔つ払うかしら？」

「なあに、」と墓掘り人は言った、「どうしても飲むというんなら、飲んでもいいさ。飲もうよ。だが仕事のあとだ、前はいけない。」

そして彼はを動かした。フォーシユルヴァンはそれを引き止めた。

「六スーのアルジャントウユだよ。」

「またか、」と墓掘り人は言った、「鐘撞きみたいな奴だな。いつも同じことばかりぐずつてやがる。いいかげんにしろよ。」

そして彼は第二の一すくいをほうり込んだ。

フォーシユルヴァンはもう自分で自分の言っていることがわからないほどになっていた。

「まあ一杯やりにこいつたら、」と彼は叫んだ、「金は私が払うんだから。」

「赤ん坊を寝かしてからさ。」と墓掘り人は言った。

彼は第三の一すくいをほうり込んだ。

それから彼はまた　を土の中に突き入れてつけ加えた。

「おい今夜は冷えるぞ。何もかぶせないでゆくと、死骸が泣き出して追っかけて来るぜ。」

その時墓掘り人は　で土をすくいながら身をかがめた、そして上衣のポケットの口が大きく開いた。

フォーシユルヴァンの茫然^{ぼうぜん}とした目つきは機械的にその中に止まって、そこにすえられた。

太陽はまだ地平線の向こうに落ちていなかった。そしてまだかなり明るかったので、その口を開いたポケットの底に何やら白いものが見て取られた。

ピカルデーの田舎^{いなかもの}者の目が有し得るすべての輝きが、フォーシユルヴァンの瞳^{ひとみ}をよぎった。ある考えが彼に浮かんできたのである。

墓掘り人が^{くわ}で土をすくうのに一心になつて気づかないうちに、彼はうしろからそのポケットの中に手を差し入れて、底にある白いものを引き出した。

墓掘り人は第四の一すくいの土を墓穴の中に送った。

彼が第五にまた一すくいするためふり返った時、フォーシユルヴァンは落ち着き払つてその顔をながめ、そして言つた。

「時にお前さんは、札を持つてゐるかね。」

墓掘り人はちよつと手を休めた。

「何の札だ？」

「日が入りかかつてるよ。」

「いいさ、おはいんなさいとして置くさ。」

「墓地の門がしまるよ。」

「だから？」

「札は持つてゐるかと言ふんだ。」

「ああ俺^{おれ}の札か！」と墓掘り人は言つた。

そしてポケットをさぐつた。

一つのポケットをさぐって、またも一つのをさぐった。それからズボンの内隠しを、一方をさがし一方を裏返した。

「ないぞ。」と彼は言った。「札がない。忘れてきたのかな。」

「十五フランの罰金だ。」とフォーシウルヴァンは言った。

墓掘り人は草色になった。青白い男が更に青くなると、草色になるものだ。

「何ということだ！」と彼は叫んだ。「十五フランの罰金！」

「五フラン銀貨三つだ。」とフォーシウルヴァンは言った。

墓掘り人は^{くわ}を取り落とした。

こんどこそはフォーシウルヴァンの番になった。

「なにお前さん、」とフォーシウルヴァンは言った、「そう心配することはないさ。首でもくくって墓を肥やそうというわけじゃあるまいしね。十五フランは十五フランだ。それにまた払わないですむ方法もあるさ。お前さんは新参だが、私は^{ふるだぬき}古狸だ。何もかもよく承知してるよ。うまいことを教えてやろう。ただこれだけはどうにもならない、日が入りかかっていることだけは。向こうの丸屋根に落ちかかっている。もう五分とたたないうちに墓地はしまるだろう。」

「そうだ。」と墓掘り人は答えた。

「これから五分間では、この墓穴をいっぱいにするだけの時間はない、ずいぶん深い穴だからな。そして門がしまらないうちに出るだけの時間はない。」

「そのとおりだ。」

「そうすれば十五フランの罰金だ。」

「十五フラン。」

「だがまだ時間はある……。いったいお前さんはどこに住んでるんだ。」

「市門のすぐそばだ。ここから十五分ぐらいかかる。ヴォージラル街八十九番地だ。」

「急げばすぐに門を出るだけの時間はある。」

「そうだ。」

「門を出たら、家に駆けて行って、札を持って帰って来るさ。墓地の門番があげてくれる。札さえあれば、一文も払わなくてすむ。そして死骸しがいを埋めればいいわけだ。死骸が逃げ出さないように、その間私が番をしていてあげよう。」

「それで俺おれは助かる。」

「早く行けよ。」とフォーシユルヴァンは言った。

墓掘り人は夢中に感謝して、彼の手を取って振り動かし、そして駆け出していった。

墓掘り人が茂みの中に見えなくなると、フォーシウルヴァンはその足音が聞こえなくなるまで耳をすまし、それから墓穴の方へ身をかがめて、低い声で言った。

「マドレーヌさん！」

何の答えもなかった。

フォーシウルヴァンはぞっとした。彼は墓穴の中におりるというよりも、むしろころげ込んで、棺の頭の方に身をなげかけ、そして叫んだ。

「そこにおいでですか。」

棺の中はひっそりとしていた。

フォーシウルヴァンは震え上がって息もつけなかったが、それでも鋭利な鑿たがねと金槌かなづちとを取って、上の板をはねのけた。ジャン・ヴァルジャンの顔がほの暗い中に見えたが、目は閉じ、色は青ざめていた。

フォーシウルヴァンの髪の毛は逆立った。彼はまっすぐに立ち上がり、それから穴の壁にもたれかかり、気を失って棺の上に倒れんばかりになった。彼はじっとジャン・ヴァルジャンをながめた。

ジャン・ヴァルジャンは色を失って身動きもしないで、そこに横たわっていた。

フォーシユルヴァンは息ばかりのような弱い声でつぶやいた。

「死んでいなさる！」

それから立ち直って、両の拳が肩に激しくぶつかったほど急に両腕を組んで、叫んだ。
「助けてあげたのがこんなことに！」

そしてあわれな老人はむせび泣きながら、独語をはじめた。独語は自然のうちにないものだと思うのは誤りである、心の激しい動乱はしばしば高い声で語り出す。

「メティエンヌ爺さんが悪いんだ。あの爺め、なぜ死んだんだ。思いも寄らない時にくたばるなんてことがあるものか。マドレーヌさんを殺したのは奴だ。マドレーヌさん！ ああ棺の中にはいつていなさる。もう逝ってしまわれた。もうだめだ。——いったいこれは何て訳のわからないことだ。ああ、どうしよう！ 死んでしまわれた！ ところであの娘さん、あれをどうしたもんだらう。果物屋の上さんは何と言うだらう。こんな方がこんなふうになれる、そんなことがあるもんだらうか。私の車の下に身を投げ入れて下さった時のことを思うと！ マドレーヌさん、マドレーヌさん！ 息がつまったんだ。私の言ったとおりだ。私の言うことを聞きなさらなかったからだ。まあ何という悪戯だ！ 死

になすつた、あのりっぱな方が、善人のうちでも一番善人の方が！　そしてあの娘さん！

第一私はもうあそこへは帰られん。ここにこのままいよう。こんなことをしでかしてさ！　年寄りが二人いてこんなばかをやるつて法があるもんか。だが第一、あの方はどうして修道院の中へはいりなすつたんだろう。それがそもそも事の初まりだ。あんなことはするもんじやない。マドレーヌさん、マドレーヌさん、マドレーヌさん、マドレーヌ、マドレーヌ様、市長様！　私の言うことも聞こえないんだ。さあ何とかして下さらなけりや！」

そして彼は髪の毛をかきむしつた。

遠く木立ちの中に、物のきしる鋭い音が聞こえた。墓地の鉄門がしまる音だった。

フォーシユルヴァンはジャン・ヴァルジャンの上に身をかがめた。そして突然、彼ははね上がつて、墓穴の中でできるだけあとにしぎつた。ジャン・ヴァルジャンは目を開いて、彼をじつと見つめていた。

死を見るのは恐ろしいことであるが、蘇生を見るのも同じくらい恐ろしいことである。

フォーシユルヴァンはその極度の感動に、度を失い、荒々しくなり、まっさおになり、石のようになつて、生者に対してなのか死人に対してなのかも自らわからず、自分の方を見つめてるジャン・ヴァルジャンの顔を見入つた。

「私は眠ってしまった。」とジャン・ヴァルジャンは言った。

そして彼は半身を起こした。

フォーシユルヴァンはひざまずいた。

「あああ！ほんとにたまげてしまった。」

それから彼は立ち上がって叫んだ。

「ありがたい！マドレーヌさん。」

ジャン・ヴァルジャンは気絶していたにすぎなかった。外の空気が彼をさましたのである。

喜悦は恐怖の裏である。フォーシユルヴァンはジャン・ヴァルジャンと同じくらいに我に返るのには骨が折れた。

「死になすったのではなかったんだな！ほんとにあなたは人が悪い。生き返ってきなさるようにどんなにか呼んだんですよ。あなたが目を閉じていなさるのを見て、ああ息がまつたんだなと思いましたよ。私はほんとに気が気でなかった。まったくの気違いになりそうでしたよ。ビセートルの癲狂院^{てんきやういん}にでも入れられたかも知れませんか。あなたが死なれたら、私はどうなると思います？そしてあなたの娘さんは！果物屋^{くだものや}の上さんは

訳がわからなくなるでしょう。子供を預けておいて、そして祖父^{おじい}さんが死んでしまう。まあなんて話なんでしょう。ほんとになんてことでしょう。ああ、あなたは生きていなさる！ほんとにありがたいことだ。」

「私は寒い。」とジャン・ヴァルジャンは言った。

その一言でフォーシウルヴァンはすっかり現実呼び戻された。事情は切迫していた。二人の者は我に返ってから、なぜともわからず心が乱れていた。そして彼らのうちには、その陰惨な場所のためにある言い知れぬ感情が起こっていた。

「早くここを出しましょう。」とフォーシウルヴァンは叫んだ。

彼はポケットの中をさぐって、用意していた^{びん}壺を取り出した。

「だがまあ一口おやりなさい。」と彼は言った。

外気に次いでその^{びん}壺がすべてをよくなした。ジャン・ヴァルジャンは火酒を一口のんで、すっかり元気になった。

彼は棺から出た。そしてフォーシウルヴァンに手伝って再びその蓋^{ふた}を打ちつけた。

二、三分後には、二人とも墓穴の外に出ていた。

それにまたフォーシウルヴァンも落ち着いていた。彼はゆっくり構えた。墓地はしまっ

ている。墓掘り人グリビエが来る気づきはない。その「新参者」は家にいて札をさがし回ってる。そして札はフォーシユルヴァンのポケットの中にあるから、家で見つかるわけではない。札がなければ墓地の中に戻って来ることはできないのだ。

フォーシユルヴァンは^{くわ}を取り、ジャン・ヴァルジャンは^{つるはし}鶴嘴を取り、二人して空棺を埋めた。

墓穴がいつぱいになった時、フォーシユルヴァンはジャン・ヴァルジャンに言った。

「さあ行きましょう。私は を持ちますから、あなたは鶴嘴をお持ちなさい。」

日は暮れていた。

ジャン・ヴァルジャンは動き回ったり歩いたりするのに少し苦しかった。棺の中で彼は身体を硬^{こわ}ばらし、いくらか死体のようになっていた。その四枚の板の中で、死の関節不随にとらわれていた。いわば墓の中から脱け出さなければならなかった。

「あなたはしびれていなさる。」とフォーシユルヴァンは言った。「それに私まで跛者ときています。そうでないやもつと早く歩けますがな。」

「なあに、」とジャン・ヴァルジャンは答えた、「少しゆけば私の足はよくなるよ。」

彼らは棺車の通った道から立ち去っていった。しまった鉄門と門番の小屋との前までき

た時、墓掘り人の札を手にとっていたフォーシユルヴァンは、その札を箱の中に投げ込んだ。すると門番は綱を引き、門が開き、二人は外に出た。

「すつかりうまくいった！」とフォーシユルヴァンは言った。「あなたの考えは実にえらいもんだ、マドレーヌさん。」

彼らはヴォージラールの市門を、ごく平気で通りすぎた。墓地の付近では、^{くわ}と鶴嘴^{つるはし}とはいずれも通行券と同様である。

ヴォージラール街には人影もなかった。

「マドレーヌさん、」とフォーシユルヴァンは歩きながら人家の方を見上げて言った、

「あなたは私より目がいい。八十七番地というのを見て下さい。」

「ちようどこがそうだよ。」とジャン・ヴァルジャンは言った。

「往来にはだれもいません。」とフォーシユルヴァンは言った。「鶴嘴を私に下さい、そしてちよつと待っていて下さい。」

フォーシユルヴァンは八十七番地の家にはいつてゆき、いつも貧乏のために屋根裏にばかり行く本能から、ずつと上まで上っていつて、ある屋根部屋の^{とびら}扉を^{くらやみ}暗闇の中にたたいた。中からだれか答えた。

「おはいり。」

それはグリビエの声だった。

フォーシウルヴァンは扉を押し開いた。墓掘り人の住居は、あわれな人たちの住居にいつも見るように、道具がなくてしかも取り散らかした屋根裏だった。荷造り用の箱みたいなものが――おそらく棺かも知れないが――戸棚とだなの代わりになっており、バタの壺つぼが水桶みずおの代わりとなり、一枚の藁蒲団わらぶとんが寝床となり、床板ゆかいたがそのまま椅子いすともテーブルともなっていた。片すみには、古い一片の絨毯じゅうたんのぼろの上に、やせた一人の女と大勢の子供とが一かたまりになっていた。そのあわれな部屋の中には、すべてかき回された跡が残っていて、一挙に地震でもきたようなありさまだった。物の蓋ふたは取りのけられ、ぼろはまき散らされ、壇びんはこわされ、母親は泣いた様子であり、子供らはたぶんなぐられたのであろう。すべて、いら立ち熱中した穿鑿せんさくの跡が見えていた。言うまでもなく、墓掘り人は狂気のようになって札をさがし回り、そして女房から壇に至るまで室の中のあらゆるものに紛失の責を負わしたのである。彼はもう自暴自棄の様子をしていた。

しかしフォーシウルヴァンは早く事件の結末ばかりを急いでいて、成功のその悲しい半面を目にも止めなかった。

彼は中にはいつて言った。

「お前さんの鶴つるはし嘴くわと、を持ってきたよ。」

グリビエは呆然ぼうぜんとして彼をながめた。

「ああ君か。」

「そして明日あすの朝、墓地の門番の所へ行つてみなさい、お前さんの札があるから。」

彼は と鶴嘴とを下に置いた。

「いったいどうしたと言うんだ。」とグリビエは尋ねた。

「なあに、お前さんはポケットから札を落としたのさ。お前さんが行つてしまつてから、地面に落ちてゐるのを私は見つけたんだ。死骸しかいは埋めるし、墓穴はいっぱいにするし、お前さんの仕事はすっかりしておいた。札は門番が返してくれるだろう。十五フラン払わんでもいいよ。わかつたかね。」

「そいつありがたい！」とおどりがつてグリビエは叫んだ。「こんどは、俺おれが酒の代を払うよ。」（訳者注 章題の札をなくすなどは狼狽するなという意味にもなる）

八 審問の及第

それから一時間の後、まっくらな夜の中を、二人の男と一人の子供とが、ピクプス小路の六十二番地に現われた。年取った方の男が槌つちを取り上げて、呼鐘をたたいた。

その三人は、フォーシユルヴァンとジャン・ヴァルジャンとコゼットであつた。

二人の老人は、前日フォーシユルヴァンがコゼットを預けておいたシユマン・ヴェール街の果物屋くだものやへ行つて、コゼットを連れてきたのである。その二十四時間の間を、コゼットは訳がわからず、黙つて震えながら過ごした。恐れおののいて、涙さえも出なかつた。物も食ふなければ、眠りもしなかつた。正直なお上さんはいろいろ尋ねてみたが、ただいつも同じような陰鬱いんうつな目つきで見返されるだけで、何の答えも得られなかつた。コゼットは二日間に見たり聞いたりしたことについては、何一つもらさなかつた。今は大事な場合であることを彼女は察していた。「おとなしくして」いなければならぬと深く感じていた。恐怖に駆られている小さい者の耳に、一種特別の調子で言われた「何にも言つてはいけない」という短い言葉の絶大な力は、だれしもみな経験したところであろう。恐怖は一つの沈黙である。その上、子供ほどよく秘密を守る者はない。

けれどもただ、その悲しい二十四時間がすぎ去つて、再びジャン・ヴァルジャンの姿を

見た時、彼女は非常な喜びの声を上げたので、もし考え深い者がそれを聞いたら、ある深^し淵^{んえん}から出てきたものであることを察知したかも知れない。

フォーシウルヴァンは修道院の者で、通行の合い言葉を知っていた。それによつてどの扉^{とびら}も開かれた。

そういうふうにして、出てまたはいるという二重の困難な問題は解決された。

前から旨を含められていた門番は、中庭から外庭に通ずる小さな通用門をあけてくれた。その門は今から二十年前までなお、正門と向かい合つた中庭の奥の壁の中に、街路から見えていた。門番は三人をその門から導き入れた。そこから彼らは、前日フォーシウルヴァンが院長の命令を受けた特別の中庭の応接室にはいつていった。

院長は手に大念珠を持つて、彼らを待つていた。一人の声の母が、面^{かおぎぬ}紗^しを深く引き下げて、そのそばに立つていた。かすかな蠟燭^{ろうそく}の火が一つともつていて、ほとんど申しわけだけに応接室を照らしていた。

修道院長はジャン・ヴァルジャンの様子を檢閲した。目を伏せて見調べるくらいよくわかることはないとみえる。

それから彼女は彼に尋ねた。

「弟というのはお前ですか。」

「はい長老様。」とフォーシユルヴァンが答えた。

「何という名前ですか。」

フォーシユルヴァンが答えた。

「ユルティム・フォーシユルヴァンと申します。」

彼は実際、既に死んではいたがユルティムという弟を持っていた。

「生まれはどこですか。」

フォーシユルヴァンが答えた。

「アミアンの近くのピキニーでございます。」

「年は？」

フォーシユルヴァンが答えた。

「五十歳でございます。」

「職業は？」

フォーシユルヴァンが答えた。

「園丁でございます。」

「りっぱなキリスト信者ですか。」

フォーシユルヴァンが答えた。

「家族の者残らずがそうでございます。」

「この娘はお前のですか。」

フォーシユルヴァンが答えた。

「はい長老様。」

「お前がその父親ですか。」

フォーシユルヴァンが答えた。

「祖父でございます。」

声の母は院長に低い声で言つた。

「りっぱに答えますね。」

ジャン・ヴァルジャンはひとことも口をきかなかつたのである。

院長は注意深くコゼットをながめた。そして声の母に低い声で言つた。

「醜い娘になるでしょう。」

二人の長老は、応接室の隅でしばらくごく低い声で話し合つた。それから院長はふり向

いて言つた。

「フオーヴァン爺さん、鈴のついた膝当をも一つこしらえなさい。これから二ついりますからね。」

果してその翌日、庭には二つの鈴の音が聞こえた。修道女たちは我慢しきれないで、面紗おぎぬの一端を上げてみた。見ると庭の奥の木立ちの下に、フオーシルヴァンとも一人、二人の男が並んで地を耘うなつていた。一大事件だった。緘黙かんもくの規則も破られて、互いにさやきかわした。「庭番の手伝いですよ。」

声の母たちは言い添えた。「フオーヴァン爺さんの弟です。」

実際ジャン・ヴァルジャンは正規に任用されたのである。彼は皮の膝当と鈴とをつけていた。それいらい彼は公の身となった。名をユルティム・フオーシルヴァンと言つていた。

そういうふうにはいることを許さるるに至った最も有力な決定的な原因は、「醜い娘になるでしょう」というコゼットに対する院長の観察だった。

そういう予言をした院長は、すぐにコゼットを好きになって、給費生として彼女を寄宿舎に入れてくれた。

これはいかにも当然なことである。修道院では鏡は決して用いられないとは言え、女は自分の顔について自覚を持つてゐるものである。ところで、自分をきれいだと思つてゐる娘は、容易に修道女などになるものではない。帰依の心は多くは美貌と反比例するものであるから、美しい娘よりも醜い娘の方が望ましい。したがつて醜い娘が非常に好まれるに至るのである。

さてこの事件は善良なフォーシウルヴァン老人の男を上げた。彼は三重の成功を博した。ジャン・ヴァルジャンに対しては、救つてかくまつてやり、墓掘り人グリビエに対しては、罰金を免れさしてもらつたと思わせ、修道院に対しては、祭壇の下にクリュシフィクシオン長老の柩ひつぎを納めて、シーザーの目をくぐり神を満足さしてやつた。プティー・ピクプウスには死体のはいつた棺があり、ヴォージラールの墓地には空の棺からがあることになった。公規はそのためにはなはだしく乱されたには相違ないが、それに気づきはしなかった。修道院の方では、フォーシウルヴァンに対する感謝の念は大なるものだつた。フォーシウルヴァンは最良の下僕しもべとなり、最も大切な庭番となつた。大司教が次回にやつてきた時、院長は少しの懺悔ざんげとまた少しの自慢とをもつて、閣下になつた。修道院を出る時大司教は、王弟の聴罪師であつて後にランスの大司教となり枢機官となつたド・ラティ

ル氏に、ないしよで感心の調子でそのことをささやいた。フォーシユルヴァンに対する称賛はしだいに広まっていつて、ついにローマにまで伝わった。われわれも実際一つの書簡を見たことがある。それは当時位に上っていた法王レオ十二世が、親戚の者でパリーの特派公使閣下で彼と同じくデルラ・ジェンガという名前の者に送ったものである。その中には次の数行があった。「パリーのある修道院にすぐれた庭番がいるらしい。実に聖者であつて、名をフォーシユルヴァンというそうである。」「けれどもそういう成功は、小屋の中のフォーシユルヴァンの耳にはまったく達しなかった。彼は相変わらず接木つぎぎをしたり、草を取つたり、うりばたけ瓜畑おほに覆いをしてやつたりして、自分のすぐれたことや聖いきよことは少しも知らなかった。彼は自分の光榮については夢にも気づかなかった。あたかもダーハムやサレーの牛が、絵入りロンドン・ニュースに写真を掲げられ、有角家畜共進会において賞金を得たる牛と記入されながら、それを少しも知らないのと同じだった。

九 隠棲いんせい

コゼットは修道院でもなお沈黙を守っていた。

コゼットはごく自然に、自分をジャン・ヴァルジャンの娘であると思ひ込んでいた。その上彼女は何事も知らないので何も言うことはできなかった。またよし知っていたところで、おそらく何も言わなかったであろう。前に注意しておいたとおり、不幸ほど子供を無口になすものはない。コゼットは非常に苦しんできたので、何事でも恐れていた、口をきくことや息をすることさえも恐れていた。一言口をきいたために自分の上に恐ろしい雪崩なだれを招いたこともしばしばあった。そしてジャン・ヴァルジャンに引き取られてからようやく安心しだしたに過ぎなかった。彼女はじきに修道院になれてきた。ただ人形のカトリーヌを惜しんだが、あえて口に出しては言わなかった。けれども、一度彼女はジャン・ヴァルジャンに言った。「お父さん、こうなるとわかつてたら、あれを持って来るんだった。」

コゼットは修道院の寄宿生になるについて、その生徒服を着なければならなかった。ジャン・ヴァルジャンは彼女が脱ぎ捨てた着物をもらうことができた。それはテナルディエの飲食店を出る時彼が着せてやったあの喪服だった。まだそういったんではいかなかった。ジャン・ヴァルジャンはその着物や毛糸の靴下や靴にまで、たくさんの樟しょうのう脳かぼんや修道院にいくらかある各種の香料などをふりかけて、どうにか手に入れた小さな靴かばんの中に納めた。そしてそれを寝台のそばの椅子いすの上に置いて、いつもその鍵かぎを身につけていた。コゼット

はある日彼に尋ねた。「お父さん、あんなにいいにおいのするあの箱は、ほんとに何なの？」

フォーシウルヴァン爺^{じい}さんは、前に述べてきたとおりの自ら知らない光栄のほかに、なおいろいろその善行の報いを得た。第一には、心に喜びを感じていた。次には、仕事が二つに分けられるのでよほど楽になった。最後に、彼は非常に煙草^{たばこ}が好きだったが、マドレーヌ氏がいるために、以前よりは三倍も多く吸うことができ、しかもマドレーヌ氏が金を払ってくれるので非常にうまく味わうことができた。

修道女らは少しもユルティムという名前を使わず、ジャン・ヴァルジャンをいつも一人のフォーヴァンと呼んでいた。

もしその聖^{きよ}い処女たちが、多少なりとジャヴェルのような目を持っていたならば、何か庭の手入れのために用達にゆくような場合に外に出かけるのは、年取って身体がきかなくて跛者である兄のフォーシウルヴァンの方であつて、決して弟の方でないことを、ついには気づくに至つたであろう。しかし、あるいは絶えず神の方へばかり目を向けていて、他のことをさぐる暇がなかったのか、あるいはお互いの身の上にのみ目をつけることに特に忙しかったのか、いずれにしても彼女らはそのことに何らの注意も払わなかった。

その上、いつも黙っていて引つ込んでいたことは、ジャン・ヴァルジャンにはいいことだった。ジャヴェルはその一郭を一カ月以上も見張っていたのである。

その修道院は、ジャン・ヴァルジャンにとっては深淵しんえんにとりまかれた小島のようなものだった。その四壁の中だけが以後彼の世界だった。そこで彼は、気をさわやかにするくらいにはじゅうぶん空を見ることができ、心を楽しませるくらいにはじゅうぶんコゼットを見ることができた。

きわめて穏やかな生活が再び彼に初まった。

彼はフォーシユルヴァン老人とともに庭の奥の小屋に住んでいた。その陋屋ろうおくは土蔵造りであつて、一八四五年にはなお残っていたが、読者の既に知るとおり、三つの室へやから成つていて、どの室もみな裸のままの露わな壁あらがあるばかりだった。その一番いい室は、ジャン・ヴァルジャンがこばむにもかかわらず、マドレーヌ氏としてフォーシユルヴァンがむりに与えてしまった。その室の壁には、膝当ひざあてと負籠おいかごとをかける二つの釘くぎのほかに、飾りとして一七九三年の王家の紙幣が、暖炉の上の方に壁にはつてあつた。その模写は次のとおりである。（訳者注 図中の文字も念のために訳出す）

国王の名において

十リーヴル兌換券

軍需品代として交付す

平和確立とともに償還す

第三部 第一〇三九〇号

ストフレー

正教王党軍（欄外に）

このヴァンデアン党（訳者注 王党の一派にしてストフレーはその將軍）の紙幣は、この前の庭番が壁に鋌^{びよう}で留めたものだ。彼はもと王党のものであつて、修道院で死に、その後にはフォーシユルヴァンがきたのだ。

ジャン・ヴァルジャンは毎日庭で働き、大変役に立つた。彼は昔枝切り人だったので、今また喜んで園丁になつたのである。読者はたぶん思い起こすであろうが、彼は栽培に関するあらゆる方法と奥義とに通じていた。彼はそれを役立たした。果樹園のほとんどすべての樹木は野生のままだったが、彼はそれに接芽^{つぎめ}してりっぱな果実をならした。

コゼットは毎日一時間ずつ彼のそばで過ごすことを許されていた。修道女らは陰気であり、彼は親切であつたから、子供の彼女は両方を比べてみて彼をなつかしんでいた。きま

というのは、今ではもうコゼットも笑い戯れるようになっていた。

コゼットはやはりまだきれいではなかったが、それでもきわめてかわいくなってきた。

そのやさしい幼い声でもっともらしい口をきいていた。

休憩が終わって、コゼットがまた向こうにはいつてゆく時、ジャン・ヴァルジャンはその教室の窓をながめ、また夜になると、立ち上がってその寢室の窓をながめた。

もとより神は自己の道を進む。修道院はコゼツトがしたように、ジャン・ヴァルジャン

のうちにまかれたミリエル司教の仕事を維持し完成していった。およそ徳の一面が傲慢に接することは確かである。そこに悪魔の渡した橋がある。ジャン・ヴァルジャンはおそらく自ら知らずしてその方面に、その橋に、かなり近づいていた。その時天は彼をプティー・ピクプスの修道院に投じたのである。自分を司教にだけ比較していた間は、彼は自分の足りないのを知って謙譲であつた。しかし最近になって、彼は自分を一般の人に比べはじめ、傲慢の念がきざしかかつていた。おそらくついには、漸次と人を憎む心に戻つてしまふかも知らなかったのである。

しかるに修道院はその坂の上に彼を引き止めた。

修道院は彼が見た第二の幽囚の場所であつた。青年時代に、彼にとっては人生の初めに当たる時代に、そしてその後またつい最近に、彼はも一つの幽囚の場所を見たのだつた。

恐るべき場所、戦慄すべき場所であつた。そしてその苛酷さは、裁判の不正と法律の罪悪とであるようにいつも彼には思えたのである。ところが今や彼は、徒刑場の次に修道院を見た。そしてかつては徒刑場の中にあつたことを思い、今はいわば修道院の傍観者であることを思つて、その両者を頭のうちで不安ながらも対照さしてみた。

時としては耒の柄を杖にたのみながら、底なき夢想の螺旋を徐々に下つてゆくこともあ

った。

彼は昔の仲間を思い起こした。彼らはいかにみじめな者らであつたか。夜明けに起き上がつて夜まで働いていた。眠ることもろくろくできなかった。置寝台たみねだいの上に寝かされ、許されてるものはただ厚さ二寸のふとんだけで、室は大寒の候にだけしかあたためられていなかった。恐ろしい赤い獄衣を着ていた。ただ恩典としては、酷暑の折りに麻のズボンをつけ、酷寒の折りに毛織の短衣を背中に引つ掛けることだけだった。「労役」に行く時のほかは、酒も飲めず肉も食えなかった。もはや名前も持たず、ただ番号でばかり呼ばれ、言わば数字に化せられてしまつて、目を伏せ、声を低め、髪を短く刈られ、棍棒こんぼうの下に、汚辱のうちに、彼らは生きていたのである。

それから彼の考えは、眼前の人々の上に戻ってきた。

それらの人々もまた、髪を短く刈られ、目を伏せ、声を低め、汚辱のうちにではないが、世間の嘲笑ちやうしょうのうちに、背中を棍棒によつて傷つけらるることはないが、肩を苦業のために引き裂いて、生きていたのである。彼らに取つてもまた、世俗の名前はなくなつていた。おごそかな呼び名の下にしか彼らはもはや存在していなかった。決して肉を食わず、決して酒を飲まなかった。晩まで食物を取らないでいることもしばしばだった。赤い上衣

は着ていないが、毛織の黒い法衣をつけ、夏は重く冬は軽いその着のままで、何物をも脱ぎ何物をも重ねることができなかった。季節によってあるいは麻の服を着、あるいは毛のがいとう外套をまとう手段はもとよりなかった。毎年六カ月の間セルのシャツを着て、熱を出す者もあった。酷寒の候のみあたためる広間にはないが、決して火をたくことのない分房に住んでいた。厚さ二寸のふとんにはないが、藁わらの蒲団ふとんに寝ていた。それからよく眠ることもできなかった。毎夜、終日の労苦の後、まだ疲労の休まらぬうちに、眠ってまだ身体もよくあたたまらない頃に、目をさまし、起き上がり、凍るような暗い礼拝堂に行つて、石の上にりようひざ両膝をついて祈きとう祷するのであった。

またある日には、それらの人々は各自順番に、十二時間引き続いて、床ゆかいし石の上にひざまずき、あるいは顔を床につけ腕を十字に組んで平伏しなければならなかった。

あちら彼方は男たちであつた。こちら此方は女たちであつた。

その男らは何をしてきたのであつたか？ 窃盗を働き、暴行を行ない、略奪し、殺害し、謀殺したのである。盗賊、詐欺師、毒殺者、放火人、殺害者、大逆人らであつた。そしてその女らは何をしてきたのであつたか？ 何もしたのではなかった。

一方には、強盗、密売、詐欺、暴行、猥褻わいせつ、殺人、あらゆる種類の冒瀆ぼうとく、あらゆる

種類の加害。そして他方には、潔白のただ一事。

完全なる潔白！ 徳によつてなお地上に結ばれ、聖きよさによつて既に天に結ばれて、ほとんどある神秘なる昇天の域にまで高められたるもの。

一方においては、声を潜めて互いに罪惡を語り合い、他方においては、高い声で過失を懺悔ざんげする。そしてしかも、いかなる罪惡であり、またいかなる過失であることか！

一方には毒氣、他方には言うべからざる香氣。一方には、世の視線をへだてられ大砲の下に閉じこめられて徐々に患者を食い荒しつある精神的疫病。他方には、同じ竈かまどの中すべての魂の清浄なる焰。彼方には暗黒、此方には影。しかも明るみに満ちた影であり、光輝に満ちた明るみである。

いずれも奴隸制度どれいせいどの場所。しかし前者には、解放の可能、常に見えている法律上の限界、そしてまた脱走。後者には、終身。そして唯一の希望としては、未来の遠き末端にあつて、人が死と称するあの自由の輝き。

前者にあつては、人々は鎖によつてつながれてるのみであり、後者にあつては、人々はこの信仰によつてつながれている。

前者から出て来るものは何であるか？ 大なる呪詛じゆそ、切齒、憎惡、自暴自棄の惡念、人

類の団結に対する憤怒の叫び、天に対する嘲笑。

後者からは何が出て来るか？ 天の恵みと愛。

しかも、かくも似寄りまたかくも異なれるそれら二つの場所において、かくも相違せる二種の人々は、同じ一事をなしているのである、すなわち贖しよくざい罪を。

ジャン・ヴァルジャンは、第一の人々の贖罪、個人的贖罪、自分自身のための贖罪を、よく了解していた。しかし第二の人々の贖罪、何らの難点もなく何らの汚点もない婦人らの贖罪を、了解しなかった。そして彼は一種の戦慄せんりつをもって自ら尋ねた。「何についての贖罪であるか？ いかなる贖罪であるか？」

一つの声が彼の内心で答えた。「人間の仁慈のうちで最も神聖なるもの、すなわち他人のための贖罪である。」

ここにはすべて私見的理論を差し控えよう。われわれはただ叙述者に過ぎない。われわれはジャン・ヴァルジャンの立脚地に身を置き、彼の印象を紹介するに止めよう。

自我脱却の崇高なる頂、およそあり得べき最高なる徳の峰を、彼は眼前にながめた。人々にその罪を許し彼らに代わってそれを贖あがなうの潔白。自ら罪を犯さない魂によって、つまずける魂を罪より免れしめんがために、甘んじて受けられたる奉仕と呵責かしゃくと苦業。神に

対する愛のうちに巻き込まれたる人類愛、しかも明らかに区別されて常に哀願せる人類愛。罰せられたる者のごとき惨め^{みじ}さと報いられたる者のごときほほえみとを持てるやさしき弱き女性ら。

そして彼は、自らあえて不平をいだいたことがあったのを思い出した。

しばしば真夜中に起き上がって彼は、苛酷なる重荷を負える潔白なる婦人らの感謝の歌に耳を傾けた。そして、正当に罰せられたる人々が天に向かつて声を上ぐるのはただ呪^{のろ}わんがためのみであつたことを思い、惨め^{みじ}にも自分もまた神に対してこぶしを差し向けたことを思つて、全身の血が凍る思いをした。

特に心を刺す一事で、あたかも親しく天のささやく告戒を聞いたかのように彼を深く夢想に沈めさした一事があつた。すなわち、壁を乗り越したこと、墻^{しょうへき}壁を脱したこと、生命をもとして冒険を演じたこと、困難な苦しい登攀^{とはん}をやつたこと、かつて他の贖罪^{しよくざい}の場所から脱せんがためになしたのと同様なあらゆる努力、それを彼はこの贖罪の場所にはいらんがためになしたのであつた。それは彼の運命の象徴であつたのであろうか。

この家もまた一つの牢獄であつた。そして彼がのがれてきたも一つの住居と痛ましくもごく似寄つていた。それでも彼は両者同じようだとは決して思わなかつた。

彼は再び鉄門かんぬきと門かどと鉄格子とを見た。しかもそれらはだれを守衛するためであつたか？

天使たちをであつた。

かつて虎とらのまわりにめぐらされてるのを見た高い壁が、今は羊のまわりにめぐらされてるのを、彼は再び見た。

それは贖罪の場所であつて、懲罰の場所ではなかつた。でもその場所は、より厳格であり、より陰鬱いんうつであり、より無慈悲であつた。童貞女らは囚人らよりもいつそうひどく身をかがめていた。寒いきびしい風、彼の青春の時代を凍らしてしまつたあの風は、鉄格てつこう子と手錠とで禿鷹はげたかの幽閉されてる墓穴はとの中を吹き過ぎていたが、なおいつそう酷烈悲壮なる朔風きたかぜは、これらの鳩はとのはいつてるかごの中を吹いていた。

何ゆえに？

それらのことを考える時に、彼のうちにあつたすべてのものは、その崇嚴なる神秘の前に消散してしまつた。

かかる冥想めいそうのうちに、傲慢ごうまんの念は消えうせた。彼はあらゆる方面から自分を檢覈けんかくして見た。彼は身の微弱なるを感じて、幾度か涙を流した。最近六カ月の間に彼の生しょうが涯いはのうちに入りきたつたすべてのものは、あの司教の聖なる命令の方へ彼を導いていつ

た、コゼットは愛によつて、修道院は謙讓によつて。

時として夕方、薄暮のころ、庭に人影もなくなつたおり、礼拝堂に沿つてゐる道のまんなかに、はいつてきたあの夜にのぞき込んだ窓の前に、贖しよくざい罪をなしてゐるあの修道女が平伏し祈きと禱してゐた覚えの場所の方へ向いて、じつとひざまずいてゐる彼の姿が見られた。そのようにしてあの修道女の前にひざまずきながら、彼は祈念をこらしてゐたのである。

彼は直接に神の前には、あえてひざまずき得なかつたかのである。

彼を取り巻いていたいっさいのもの、その平和なる庭、そのかおり高い草花、楽しい叫び声を上げるその子供ら、まじめな単純なその婦人ら、黙々たるその修道院、それらは徐々に彼のうちにしみ込んできた。そしてしだいに、その修道院のような沈黙と、その花のような香りと、その庭のような平和と、その婦人らのような単純さと、その子供らのような喜悅とで、彼の心は作らるるに至つた。それからまた彼は、生涯の二つの危機に際して相次いで自分を迎え取つてくれたものは、二つの神の住居であつたことを考えた。第一のものは、すべての戸がとぎされ人間社会から拒まれた時に彼を迎えてくれ、第二のものは、人間社会から再び追跡され徒刑場が再び口を開いた時に彼を迎えてくれた。第一のものがなかつたならば、彼は再び罪惡のうちに陥つていたであらう。また第二のものがなかつた

ならば、彼は再び苦難のうちに陥っていたであろう。

彼の全心は感謝のうちに溶け去り、そして彼はますます愛の念を深くした。幾年かがかくして過ぎ去った。コゼットもしだいに生長していた。

青空文庫情報

底本：「レ・ミゼラブル（一）」岩波文庫、岩波書店

1987（昭和62）年4月16日改版第1刷発行

「レ・ミゼラブル（二）」岩波文庫、岩波書店

1987（昭和62）年4月16日改版第1刷発行

※誤植の確認に「レ・ミゼラブル（二）」岩波文庫、岩波書店1960（昭和35）年12月20日第15刷、「レ・ミゼラブル（三）」岩波文庫、岩波書店1959（昭和34）年12月10日第14刷を用いました。

入力：tatsuki

校正：門田裕志、小林繁雄

2007年1月15日作成

2013年4月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

レ・ミゼラブル

LES MISERABLES

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 第二部 コゼット

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>